

筑波大学博士（文学）学位請求論文

北インド・ブンドェルカンド地方における
家族と異ジャーティ結婚の人類学的研究

岡田 朋子

2015 年度

目次

第1章 序論—「人の種類」とつながり	1
1.1 問題の所在	1
1.2 ジャーティ	2
1.3 婚姻	8
1.4 異ジャーティ結婚の先行研究	9
1.5 つながり研究	12
1.6 ジャーティ以外のまとめ	14
1.6.1 家族	14
1.6.2 サマージ	17
1.7 本論文の枠組み	18
1.8 本論文の構成	19
第2章 社会上昇を願う人々—調査地について	20
2.1 ブンデルカンド地方	20
2.2 調査対象地、A村とB村	23
2.3 ヴィシュワカルマ (Vishwakarma)、ロハール (<i>luhār</i>)	33
2.4 D家の移住の軌跡	34
2.5 インドの新経済政策	38
2.6 兄弟間、家族間、世代間の再生産戦略の違い	40
2.6.1 機会へのアクセスと可能性の拡大	40
2.6.2 家族内の再生産戦略の違い	42
2.7 それを見ている末の妹	46
2.8 女性の持つ資本	47
2.8.1 女性たちの条件の違い	48
2.8.2 夫が存命の幸福を表す装い	50
第3章 差異とつながり—結婚に向けての努力と希望の事例から	56
3.1 はじめに	56
3.2 異ジャーティ間の差異の作られ方	58
3.3 同ジャーティ内の差異の作られ方	60
3.3.1 上昇婚とダヘージ	60
3.3.2 結婚できる範囲	61
3.3.3 立場の差異を作る行為	63
3.4 別の種類の違いと、同じような人を求める結婚相手探し	69
3.4.1 子供の婚姻を考え始める	70

3.4.2	実際に訪ねる	73
3.4.3	結婚相手に求めるもの	74
3.4.4	学歴の重要視	76
3.4.5	ママとプーパー	77
3.5	未来への希望と不安—D家の物語	79
3.5.1	関係の回復への努力	79
3.5.2	希望と不安	81
3.5.3	他人の結婚を見て自分の結婚を想う	84
第4章	戦略・サマージ・愛情 —異ジャーティ結婚と浄化儀礼の事例から	88
4.1	はじめに	88
4.2	恋愛結婚としての異ジャーティ結婚	89
4.2.1	真実の愛	90
4.2.2	類似性	92
4.3	新しい「家族」の形成	94
4.3.1	婚姻儀礼	95
4.3.2	つながりの停止	97
4.3.3	アーカースとナミータとD家の関係	99
4.4	浄化儀礼と受け入れの形成	102
4.4.1	プランの日程	104
4.4.2	アーカースとナミータの問題の話し合い	110
4.5	異ジャーティ女性を家族にする方法	115
4.5.1	アーカースの苦境の始まり	116
4.5.2	助けることをめぐる駆け引き	117
第5章	儀礼と家族の形成—同ジャーティ結婚の事例から	124
5.1	はじめに	124
5.2	婚姻儀礼	125
5.2.1	結婚話がどのように起こったか	125
5.2.2	婚姻の約束を確定させる交換	128
5.2.3	婚姻儀礼の過程	132
5.2.4	反省会	154
5.3	過去に作られた関係を大事にしようとする動き	156
5.3.1	儀礼に関わる人の分類	156
5.3.2	A村行き	158
5.3.3	親戚たちとの付き合い	162
5.3.4	露呈したつながり	166
5.4	未来の家族を作っていこうとする動き	167

5.4.1 互いを知り合っていく過程—嫁と家族のつながりの形成	167
5.4.2 婚姻儀礼後の反省と批判—新しい姻族とのつながり方	170
第6章 結論—姿をあらわす家族	177
6.1 はじめに	177
6.2 結婚する相手を選ぶ、つながりの断ち結び	177
6.3 家族を作る、つながりの断ち結び	180
参考文献	183
付録 1～11.....	191～209

図表目次

図 2-1	ブンデルカンド地方の位置	21
図 2-2	登場人物の親族関係	24
図 2-3	町村の位置関係の概念図	35
図 5-1	花婿と花嫁の既にあった関係	126
図 5-2	オーリー、パッキヤート、エンゲージメントに参加した男の子側の親戚 ..	128
図 5-3	父系リネージの女性であるアニータとの関係	135
表 2-1	登場人物一覧	24
表 3-1	足を触る挨拶（配偶者の家族）	64
表 3-2	足を触る挨拶（子供の配偶者）	64
表 3-3	足を触る挨拶（子供の配偶者の親）	65
表 3-4	足を触る挨拶（エゴが男性の場合の姉妹の家族）	65
表 3-5	足を触る挨拶（母方オジとその妻）	65
表 3-6	呼称	67
表 5-1	諸儀礼への参加者	156
写真 2-1, 2-2	ヴィシュワカルマ神	53
写真 2-3, 2-4	足首輪と足指輪	53
写真 2-5	腰輪	53
写真 2-6, 2-7	腕輪	54
写真 2-8, 2-9	シンドゥール	54
写真 2-10	マンガルスートラ	54
写真 2-11	耳飾り	55
写真 2-12	色とりどりのサリーを着たヒンドゥー既婚女性たち	55
写真 4-1	カラスヤトラ	123
写真 4-2, 4-3	プラーンの会場	123
写真 4-4	舞台上に座るカジョールとガネーシュの夫婦	123
写真 5-1	オーリー	174
写真 5-2	メールバツバ	174
写真 5-3	チュイマーティーで取ってきた土で竈や皿作り	174
写真 5-4	マンダップ	175
写真 5-5	メール作り	175
写真 5-6, 5-7	マリッジハウスのステージ	175

写真 5-8	ムーンディカーイー	176
写真 5-9	メール・メ・パートナー	176
写真 5-10	ゲーム	176

第1章 序論—「人の種類」とつながり

1.1 問題の所在

本論文は、現代インド社会において、人々がどのように婚姻を結び家族を作っていくかという問題について、特に異ジャーティ (*jāti*) 結婚に注目しながら論じることを目的とする。具体的には、日常の些細な出来事やつながり、人々の微細な行為に注目し、それらを時系列に沿って記述し積み上げていくことによって本論文の対象となる家族の姿が明らかになっていくように、そのように実際の家族もつながりを紡いで姿を現すということを明らかにしていく。

従来、インド社会を対象とする人類学・社会学的研究においては、人の集団としてのジャーティが中心的なテーマのひとつとして扱われてきた (Srinivas 1966, Marriott 1976, Raheja 1988, デュモン 2001)。そのなかで婚姻はジャーティおよび親族集団の再生産のための根本的な手段として位置づけられてきたため、異ジャーティ結婚は、あくまで婚姻の中の例外、規範に違反した行為として、周縁的に扱われてきた。それに対して本論文が異ジャーティ結婚を主題化する理由は、それがむしろ人々が常に行っている実践——多様なつながりの論理に拠って、積極的にせよ消極的にせよ決断とその修正を繰り返しながら、時に能動的に、それ以前とは違う関係を結び、断ち切り、あるいは紡ぎなおしているということ——をより鮮明な形で浮かび上がらせるものだと考えるからである。その意味では、異ジャーティ結婚は例外ではない。後述するように、同ジャーティ結婚においても、異ジャーティ結婚においても、あるいは異ジャーティ結婚が起きてしまった家族における次の結婚においても、人生をともにしこれから家族をともに築いていくための婚姻相手探しや、また婚姻や結婚生活に関わる儀礼や日常的な行為を通じて、婚姻相手を家族の一員にしているという過程が、それぞれの仕方で行われているのである。異ジャーティ結婚を中心的な事例として扱うにもかかわらず、本論文が家族に注目した理由は、ジャーティに焦点を当てたままでは取り上げることのできない異なる2つの問題を議論するためである。1つ目は人々の戦略的な社会上昇の試み、消費能力や文化資本・象徴資本の向上の試み、互いにかかけあう愛情に基づく行為、そのような行為を婚姻に関連して人々が行っているという問題であり、2つ目はジャーティも含めて婚姻に関係する人々の集団は境界が定まっているのではなく、揺らいでいるという問題である。こうした視点にもとづき、本論文では、異ジャーティ間での関係や、ジャーティとは違う論理でつながる人の集団にまで視野を広げ、当人たちにとどまらない多様な人々の生の網の目の中に異ジャーティ結婚の事例を位置づ

けることを試みる。

以上の問題意識を出発点に、本論文では、北インド中央部、ウッタル・プラデシュ (Uttar Pradesh、以下 UP と省略) 州とマディヤ・プラデシュ (Madhya Pradesh、以下 MP と省略) 州にまたがるブンデルカンド (Bundelkhand) 地方の事例をとりあげる。ブンデルカンド地方村落部の低ジャーティ・ヒンドゥーは、一般的には父系親族を形成し、夫方居住を行い、そしてジャーティ内婚、村外婚、上昇婚といった婚姻規則に則って婚姻関係を結んでいる。特徴的なのは、人々が、食物や飲み水のやり取りの忌避などを通じてジャーティ間に差異を作りジャーティ内での同一性を表しつつも、同ジャーティ内でも日々の挨拶の仕方や呼称といった行為によって立場の上下の違いを作っている点である。婚姻関係を結ぶ相手は、同ジャーティの中でも違う立場の人々の中から選ばれるが、しかしここでは戦略や愛情に基づいた別の種類の関係が希求されてもいる。本論文では、そうした社会における恋愛と婚姻にまつわる諸実践を説明したうえで、そこで暮らすある家族に起こった異ジャーティ結婚を取り上げ、そのなかで、多様なつながりの断ち結びを経験しながら、外部の女性を最も親密な家族の一員として変えていく (あるいは変えられない) 仕組みを、婚姻にまつわる諸実践に着目しながら描き出す。

1.2 ジャーティ

本論文では、すでに何度も「家族」という言葉を使っているが、この言葉遣いはインド社会を扱った研究の流れから見ると唐突に見えるかもしれない。以下では、まずジャーティについて説明したうえで、インドの婚姻研究を概観し、そこに「家族」を位置づける。あらかじめ言っておくと、私が家族に注目する理由は、現地で家族が非常に大事にされており、そしてその結びつきは、拡大家族や世帯、親族、父系リネージなどといった概念には還元できない、と考えるからである。

現代インドの生活の場において、「ジャーティ」という言葉は、いわゆるカーストや民族、宗教カテゴリーなどを含む人々の集団単位を指して使われる。古典的な民族誌研究においてジャーティは、固定的で静的な人間区分であるとみなされてきた一方 (Miller 1954)、歴史学的な研究においては、常に分裂や再統合をくりかえす変動の大きな集団関係であったことが指摘されている (小谷 1994)。ジャーティ・システムの動態性の問題に関しては、ムスリム王朝下の改宗や、イギリスの植民地支配における理念・政策とそれに直面したインド人側の主体的対応などを含んだ歴史的構築性 (小谷 1994、1996)、ジャーティの地位上昇を含めた地位の交渉をめぐるポリティクスの問題 (Searle-Chatterjee and Sharma 1994)、交換やネットワークを通して築かれる生きられたジャーティ (杉本 2006) などが指摘されてきた。

歴史的な構築性について、例えば小谷汪之は、

ジャーティは決して固定された閉鎖的な集団ではなく、つねに分裂や再統合をくりかえす変動の大きな集団関係であった。ジャーティ変動の契機としては、農民層の分解による在地小領主的階層〔例えばマハラージュトラにおけるマラーター〕や有力農民層〔例えば、グジャラートのパティダール〕の形成、社会的分業の発展にともなう新しい職業集団の形成〔例えば、マハラージュトラにおけるマーリー・カースト〕、ヒンドゥー教の内部における新しい宗派の成立〔例えば、リンガーヤト派〕などを挙げるができる。(小谷 1994:19-20)

と述べている。また、日々構築されるジャーティについて、例えば杉本星子は「インドの村落社会のカーストと親族」を、「人々が日常生活のさまざまなコンテクストで親族あるいはカーストの成員として行動することによって社会的ネットワークを作り出すという動的なシステム」(杉本 2006:32)と捉えてその過程を描き出した。それらは、ジャーティの固定性を前提とする研究に対して、ジャーティの構築性を明らかにする研究であったといえよう。このように、現代の研究においては、ジャーティの歴史的構築性と同時に、それと表裏一体のものとして日々生きられ再帰的に更新されるジャーティという認識が打ち出されていることがわかる。

その一方で、私のいう「ジャーティ」は、上に引用した杉本の議論では「カースト」となっていることからわかるように、様々な呼び名を持つ。インド国外で最も広まっているのはポルトガル語由来の「カースト」(caste)であろう。カーストという言葉は、一般的にはバラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラの4種姓からなるヴァルナを指すことが多く¹、その場合、そのなかの下位分類は、「サブカースト」と呼ばれることになる²。

「カースト」と「ジャーティ」の関係で言えば、例えば先ほどの小谷は、

さまざまな契機によって形成された、多種多様な現実的人間集団としてのジャーティ〔語義的にいえば、「生まれを共にする人々」〕で、カーストという言葉は本来このジャーティに対応している。人はその社会的生活を再生産していく過程で、さ

¹ 小谷は、中世インドのカースト制を、ヴァルナ制と在地の実体的社会集団の慣習法的序列を組み合わせることによって形成された身分的社会関係として捉え、それをヴァルナ・ジャーティ制と名付け、イギリス植民地の時代に大きく変容した今日のカースト制度と区別している(小谷 1996:8-10、杉本 2006:40)。

² 山崎利男は、「一般的にカーストとはジャーティのことを指すが、イギリス植民地期におけるヒンドゥー法ではヴァルナのことをカーストと呼んだため、ジャーティのことはサブカーストと呼ばれた」(山崎 1994:43)と説明し、「ヴァルナとカーストとは原理的に相異なったものであり、ヴァルナの枠ですべてのカーストを秩序づけることは、19世紀後半には難しくなっていた」(山崎 1994:49)と述べている。

まざまな人と人との関係に入っていくのであるが、そこに形成される多様な集団関係がインド社会においては一般にジャーティという言葉で表現される。(小谷 1994:19)。

と説明する。また杉本は、

サンスクリットで「色」を意味するヴァルナと「生まれを同じくする集団」を意味するジャーティは、内婚規制をもつこと、特定の職掌と結びついていること、上下貴賤の秩序が存在することなど共通した性格が見られる。しかし、ヴァルナは古代国家の身分制度であるとともに再生族・一生族といった宗教イデオロギーと結びついた人間分類であり、社会的調和や宇宙論的な安定を作り出す社会（世界）の構成単位としての職掌と結びついた固定的な身分概念である。これに対して、ジャーティは地域の日常的な社会生活のなかで具体的な機能を果たしている多様な社会集団である。カーストという外来語の導入によるヴァルナとジャーティの結合は、植民地統治下のインドに近代的なカースト制度を作り出すことになった。(杉本 2006:26)

と述べている。さらに岩谷彩子は、

言語、結婚、食事、職業に関する集団の枠組みであるジャーティが、インドではコミュニティの単位として用いられる。日本でいういわゆるカーストは、インド古来の 4 つの階層を指すヴァルナを指すことが多い。ジャーティはカーストが参照する土着の集団単位である。(岩谷 2009:39)

と述べている。つまり、ジャーティという言葉は現地の人々が多種多様な人の集団の種類のことを呼ぶときに使うものだが、外来語のカーストという言葉は時代や状況、語り手や特に聴き手の知識によって、ジャーティやヴァルナあるいはジャーティとヴァルナが結合したもののことを指して呼んでいる、ということがわかる³。以前から公的な場においても用法の混乱は見られたようで、小谷は「カーストという言葉は植民地行政文書において、ヴァルナの意味でも、ジャーティの意味でも使用され、誤解や混乱を生み出しやすい」(小谷 1994:28) と指摘している⁴。

³ 他にも、村落のジャーティ組成の説明やインデックスにおいて、caste (*jāti, jāti*)と書いたり (Raheja 1988, Gold 1988)、人々の持つ社会関係に言及して *jati* (subcaste)と書いたり (Freed and Freed 1993) する例が見られる。

⁴ 例えばマイソール・シュリニヴァス (Mysore Srinivas) は、「個別のカーストのランキングに関する意見の相違が、ジャーティ・システムのダイナミクスの一部となっている。ヴァルナにおいて表現されるような階段風のヒエラルキーとしてカーストを見る視点が、基本

生活の場における実践的編成と論理に着眼してスリランカのジャーティヤ（ジャーティ）を描き出した鈴木晋介によれば、現地の人々に地元のジャーティの数を聞くと、「カーストやら民族やら宗教やら、実にぐちゃぐちゃな形で調査者の前に並べられる」（鈴木 2013:17）という。そして鈴木は、例えばそのリストに「ムスリム」が入っているとして、では「ムスリム」とは「少数民族」なのか「カースト」なのか「宗教的カテゴリー」なのか、これを決定づけるような体系的な分割を現地のジャーティヤ概念は全く持っていない、と指摘している（鈴木 2013:18）。彼は、ジャーティヤとは、端的に言えば、スリランカ社会に存在する「ひとの種類」のことである（鈴木 2013:16）として、それ以外に表現のしようがないジャーティヤの実態を説明している。さらに、それを「カースト」や「民族」に置換することなく（すなわち体系的な分類骨子を投げかけることなく）検討しなければならない、とも述べる（鈴木 2013:19）。

実は私も、調査地のジャーティの全体像を把握しようと考えて、調査地の人々にリストを作ってもらったことがある。しかし確かに鈴木の手摘みにあるように、リストに書かれた項目は分類の基準がばらばらだった。以下がそのとき書いてもらったリスト⁵である。

表 1.1 調査地の人々が書いた「ジャーティおよびバルナ」のリスト

	ジャーティ	バルナ
1	ブラフマン <i>brāhmṇa</i>	ティワーリー、ドゥヴェー、チャトゥルヴェデー、トリベデー、サー ストリー、パータク、ナーヤク、ディクシト
2	クシャトリア <i>kṣatrīya</i>	チャンドル、ラージプート、チョーハン、パルマール、ブンデラー、ゴー ル、シク
3	カーシュト <i>kāṣṭ</i>	カレー、グプタ、アグラワール、カトレ
4	シュードラ <i>śūdra</i>	バソール、メヘタル、チャマール、ドービー
5	ピチュラーヴァルグ <i>pichṛāvarg</i>	クスワーハー、ヤーダオ、ロハール、バライー、ディーマル、クムハール、 コーリー、ゴーシー、ナイ、シヴァハレ、ローディー、ニシャード
6	ムサルマーン <i>muśalmān</i>	パターン、カーン、サイヤド、ファキール
7	イサーイー	イサーイー

的にローカルなものであるジャーティの理解を妨げている」と言う（Srinivas 1976:170）。またパルタ・チャタジー（Partha Chatterjee）は、「複数の別個のジャーティがある同じ階級に属するという認識が、それらをカーストであると認識させている」と指摘している（Chatterjee 1993:179）。

⁵ 調査地のジャーティがすべて網羅されているわけではない。彼らは「あまりにも数が多く、ここには書ききれない」と言って打ち切った。

	<i>isāī</i>	
8	アーディーヴァーシー <i>ādivāsī</i>	ジャングルの人々

このリストに関していくつかの点が指摘できる。まず、リストはヒンディー語を表記するデヴァナーガリー文字で書かれたものであるが、「ヴァルナ」(*varṇa*) とあるべきところが「バルナ」(*barṇa*) となっている。さらに、ヴァルナとジャーティの位置関係が、あえて言うならば逆になっている。「あえて言うならば」と保留したのは、このリストの左列には、ブラフマン、クシャトリヤ、カーシュト（おそらくヴァイシヤ）、そしてシュードラといったヴァルナをあらわす項目の他に、ピチュラーヴァルグ（後進階級）とアーディーヴァーシー（インド憲法に定められている指定部族 **Scheduled Tribes, ST**）という行政区分、そしてムサルマーン（ムスリム）とイサーイー（クリスチャン）という宗教区分が混ざり合っているからである。また、このリストは4人の男性（内2人は若者、さらにその内の1人はムスリム）が協力して作ってくれたものだが、ヴァルナとジャーティの位置が逆であること、性質の異なる項目が混ざっていることを指摘した者は誰一人としていなかった。

宗教区分に関してみると、身近な存在であるムスリムに関してはジャーティの内訳がある程度詳細に書かれているが、リスト作成者たちがよく知らないクリスチャンに関しては下位区分は行なわれず、一つのジャーティを形成していると見なされている。また、シク教徒⁶はクシャトリヤの一グループと見なされている。

さらにこのリストで興味深い点が、4番目のシュードラと5番目の後進階級の項目である。シュードラとはヴァルナ制度の最下位、第4種姓の隷民階級のことである。後進階級とは、被抑圧諸階級に属する人々のうち、「カースト」外に位置づけられる「指定カースト」(**Scheduled Caste, SC**) と社会的・地理的に排斥されてきた先住民族を含む部族集団の「指定部族」(**Scheduled Tribes, ST**) を除いた、社会的に弱者層と判断される「後進諸階級」(**Other Backward Classes, OBC**) のことを指す（落合 1964:36-37）。後進階級の認定は連邦や各州レベルによって異なり、すべてがジャーティに基づいて決定されるわけではないが（小原 2008:346-349）、ヴァルナ制度におけるシュードラ階級と重なる部分も多い。

調査地の人々に書いてもらったこの「ジャーティおよびバルナ」のリストでは、シュードラの下に後進階級の項目が設けられ、シュードラの欄には **SC** のジャーティが、そして後進階級の欄にはシュードラヴァルナに分類されるジャーティが書かれている。しかし、このリストを作った男性たちがヴァルナに関して「誤った」知識を持っているとはいえない。彼らはムスリムの1人を除いてシュードラヴァルナでなかつ **OBC** に所属する人々なのである。彼らの項目分類からは、自分たちをシュードラすなわち奴隷と呼ぶと誇りを傷つけられる、という自負が垣間見える。シュードラの項目を書くとき、彼らは「我々は今や中

⁶ シク教とは、インドでグル・ナーナク（1469~1538）が興した宗教である。唯一永遠の神を説き、偶像崇拜や階級区分などを否認した（山下 2011b:77）。

流的な生活を送っているから、もはやシュードラとはいえない」と言ったうえで、そこに自分たちより下位の SC の諸ジャーティの名前を書き込んだのだ。さらにその場にいた一人による「ピチュラー [後進] という言葉がどうにもいやだ」という発言は、ジャーティが生きられるシステムとして人々にアイデンティティを付与するものでありながら、やはり差別のシステムでもあるということを示唆する⁷。つまり、彼らのリスト作りにはいくつかの操作が積み重なっているのである。彼らはヴァルナの知識を持ってはいる。だが、現在の経済状況やライフスタイルによってそれを変えろのだという認識を、(このリストを作る以前から持っていた、あるいは信じていたというよりも) 今この時から信じていきたい、と思っているのだ⁸。リスト作りは結果として、ジャーティに関する未来でのありようの彼らなりの提案を、調査者である私が受け取った形となってしまった。私は調査地の村の「正確な」ジャーティ組成を聞くのを諦め、そのリストをそっとしまった⁹。

では、調査地ではジャーティはどのように言及されているのだろうか。まずなんといっても、ジャーティは苗字のようにして名前に用いられている。つまり、名刺や SNS などの署名、公的書類を見るとジャーティは一目瞭然なのである。現地調査を始めたばかりのころ、名前をフルネームで答える人とファーストネームだけ答える人がいたのを私は不思議に感じていた。だが、やがて、上位ジャーティの人がフルネームで答え、下位ジャーティの人がファーストネームだけを名乗る傾向にあるということがわかってきた¹⁰。また、初対面の会話で、直接「あなたのジャーティは何?」と聞かれることもある¹¹。そのとき答えるジャーティは、名字として使うジャーティ名とは異なるレベルのときもある。例えば a ジャーティの中の下位区分として b、c、d ジャーティがあるとして、b の人は自分のジャーティを時と場合によって「a」といったり「b」といったり「a、b」といったりする。または a に

⁷ 18 世紀以降、ヒンドゥー社会内部でも多くの進歩的思想家や社会運動家がジャーティ制やそれに伴う社会悪を糾弾し、ヒンドゥーの近代化を唱え実践するようになった一方で、ジャーティの紐帯を維持・強化し、ジャーティの地位上昇を図ろうとする動きも各地で顕在化した(山下 2011a:55)。

⁸ それは、「知識とその対象物との時間的ずれを照らし出し、知識を未来へと根底的に方向転換する作業」(宮崎 2009:229) だったのかもしれない。

⁹ リストの作成をブラフマンなどの上位ジャーティに頼んでいれば、ある程度の全体像が見えた可能性はある。しかし、後述するように本論文の調査地では人の移住が頻繁に起こっており、また本節で述べるようにジャーティは幾層にも重なり合って存在しているので、やはり範囲を定めないままでは、「正確な」ジャーティリストを作ることは不可能であったと考える。

¹⁰ 興味深いことに、私がインドの首都の国立大学に留学していた時には、ファーストネームのみを名乗る上位ジャーティの人や、ファーストネームに加えジャーティがわからないセカンドネームのみを使う人など、別の傾向が見られた。そのような名乗り方がリベラルな大学の雰囲気とふさわしいと考えられているためであろう。

¹¹ 私がこの質問を受けたとき、はじめは「私の国にはジャーティはない」などと言っていたが、そのうち「ジャパーニー (*japānī*, 日本人)」と答えるようになった。調査地の人々は、別の地域には自分たちが知らないジャーティが存在するということはある程度知っているのに、日本という国を知らない人でも、この答えで納得することが多かった。

e という別名があるときは「e」と言うこともある。そしていずれかを苗字として用いている。つまり、ジャーティは垂直にも水平にも多層化されているのである¹²。

このように、ジャーティは単一の構造を持ったシステムではない。むしろそれは、ジャーティを生きる人を中心とした相互作用的で複合的なシステムであり、ほかの何かに還元できるような分類概念ではない。とはいえ、ジャーティには少なくとも名前があるし、人々を括る機能を持っていることもまた事実である。事実、失敗したものの、ジャーティ名を一つ一つ挙げるリスト作りを試みることはできたのだ。ジャーティが固定的で静態的な身分制度であることは否定できるが、しかしジャーティの構築性だけを強調しても、ジャーティの括る力学を過小評価することになってしまう。

「カースト」という言葉には、どこか明確な実態があるかのようなイメージがある。しかし実際には、この言葉では、インドをはじめとする南アジアで観察される何を言わんとしているのかがはっきりしない。そこで本論文では、人々を括り、縛り、アイデンティティや誇りを与え、しかしその帰属を変える方法もなくはない、現地の人々が言及する名前のある人間集団を「ジャーティ」と呼ぶことにする。先行研究を直接引用するときのみに「カースト」および「サブカースト」の語を用いるが、いずれも生活の場ではジャーティであるということを念頭に置いて用いる。

1.3 婚姻

本節では、インドにおける婚姻についての研究を概観する。インドにおける初期の婚姻研究では、婚姻規則や婚姻の類型、親族構造に関する研究が中心であった。例えば、北インドにおける上昇婚の慣習とそれに関わる贈与について論じたデイヴィッド・ポコック (David Pocock)、汎インド的に婚姻の類型について取り上げたカナイヤラール・カパディア (Kanaiyalal Kapadia)、北インド・カシミールのブラフマンの間で行われる婚姻を、妻の与え手と受け手に注目して、その構造的意味を明らかにしたトリロキ・マダン (Triloki Madan) などの研究を挙げることができる (Pocock 1954、カパディア 1969、Madan 1975)。

一方、女性研究者たちは、婚姻における女性の行為や役割に注目した。例えば UP 州東部の農村で調査を行った八木祐子は、婚姻儀礼を含めた通過儀礼に関わる職能者や女性の役割を、吉性と凶性という属性に注目して分析した (八木 1991)。またリナ・フルツェッティ (Lina Fruzzetti) は、ベンガルの女性の行為への着目を通して婚姻の象徴的意味を明らかにする研究を行った (Fruzzetti 1994)。

¹² アンドレ・ベテイユ (André Béteille) は、ジャーティは分節的システムであり、あるレベルは結婚に、あるレベルは宗教や宗派の所属に、あるレベルは政治的目的に関連するといった状況が見られることを指摘している (Béteille 1971:77)。

婚姻において女性と共に移動する財へ関心を向ける研究もある。そのような研究としては、ダウリ（持参財）に対してそれぞれの立場に関心を抱き、立場の変化によってダウリとの関わり方に違いをみせる女性の姿を描いたアーシュラ・シャルマ（Ursula Sharma）、南インドのタミルナドゥにおける花嫁持参財やインドの各宗教集団におけるダウリを巡る社会問題について論じた西村祐子、北インドのムスリム社会の婚姻儀礼における婚姻規則や贈与交換の流れをヒンドゥー社会との比較から分析した小牧幸代の研究などが挙げられる（Sharma 1984、西村 1994、2005、小牧 1997）。

このように、インド社会学において婚姻研究には長く分厚い蓄積があり、その対象は婚姻にまつわるさまざまな事物に及んでいる。だが、北西インド・ラジャスタンを調査したヘレン・ランバート（Helen Lambert）は、従来の研究には暗黙の前提が存在すると指摘した。1つ目は、親族はあくまでもジャーティ内の存在であり、ジャーティの外延が親族の外延の限界であるという前提（Lambert 2000:73）。だからこそ、異ジャーティ結婚は問題孕みなものとして扱われてきたのである。2つ目は、インド社会学においては、家族よりも親族、親族よりもジャーティが重要視される傾向があり、そこでは、家族はあくまで副次的に扱われてきたという前提である（Lambert 2000:73-74）。後に詳述するが、異ジャーティ結婚に関する研究においても、ジャーティが問題となっている一方で、当該男女の個人的選択に視点が跳躍してしまい、そこには「家族」という視点はほとんど見出されない。

1.4 異ジャーティ結婚の先行研究

では、異ジャーティ結婚は先行研究においてどのように扱われてきたのだろうか。ここでは異ジャーティ結婚に言及する先行研究を4つのグループに分けて、それぞれの傾向を見ていく。

1つ目のグループでは、古い経典や法典、伝説の中に出てくる異ジャーティ結婚の原則への言及、すなわち上昇婚などの定められた組み合わせ¹³以外の婚姻は罰せられ、またそれらの婚姻から生まれた子孫はヒエラルキーの中に位置づけられ新たなジャーティ集団を作っていく、といったことが詳細に説明される（カパディア 1969、Nicholas 1995、Chakraborti 1999）。それらを見ると、異ジャーティ結婚は昔から起こることが想定されていたということがわかる。

2つ目のグループは、1つ目のグループと重なるところもあるが、異ジャーティ結婚に関

¹³ 『マヌ法典』第3章には、愛欲から行動するものは異ヴァルナ間の上昇婚をしてもよいと書かれている。ただし3.14以下には、「ブラーフマナとクシャトリアの両者に対しては、窮迫時においてすら」そのような関係を持つべきではないとも書かれている（渡瀬訳 1991:81）。

して原理原則のみを説明する婚姻研究やフィールド調査を伴った人類学的研究である。それらの研究でもやはり、本人たちによって行われる「恋愛結婚」は逸脱であり危険であると考えられている (Harlan and Courtright 1995) という指摘がなされるのみである。ベンガル地方で調査を行ったフルツェッティは恋愛結婚について、「一般的に、階層的で分節的なカースト社会のすべての点において混乱を引き起こすが、それがカーストと親族の原理を破るため、特に当該夫婦の世帯や親族成員に影響を及ぼす」(Fruzzetti 1994:10) と述べている。家族や親族は近所の人々や近隣のジャーティ成員に、当該カップルとのすべての関係を断ち切るようにとの圧力をかけられる。また、兄弟姉妹はもはや「良い家族」とは結婚できず、2 人の間に生まれる子供のジャーティ所属は宙に浮くこととなる¹⁴ (Fruzzetti 1994:11)。これは一般的な異ジャーティ結婚の説明でもある。フルツェッティは実際に異ジャーティ結婚をした男女の短い事例を挟んでもいるが、そこでも双方のジャーティからの断絶を述べただけで、その結婚の詳しい事情までは説明していない。

以上の 2 つのグループでは、異ジャーティ結婚は、インドにおける婚姻規範に違反した形態であり、例外的だが起こりうる事象として、周縁的に扱われている。それに対して以下の 2 つのグループは、これまでは内婚単位と言われていたコミュニティを超えて行われる結婚 (異ジャーティ結婚を含む) を、現代インドの社会変化や社会問題などをあぶり出す事象として中心的に捉えており、それだけ記述や分析は厚いといえる。

異ジャーティ結婚を扱う研究の 3 つ目のグループとして、主にインドの研究者たちによる、異ジャーティ結婚忌避の因習を、社会問題あるいは社会悪という視点からとらえる論が挙げられる (Kaur 2004, Kalpagam 2008)。例えばプレーム・チョウドリー (Prem Chowdhry) は、国家が裁判や法の執行を通して、家父長制の女性への支配や、婚姻に影響を与えるジャーティ・親族の論理をむしろ維持していると述べる (Chowdhry 2004)。それらの研究では、異ジャーティ結婚の結果として起こる、当事者やその家族、所属ジャーティの成員への地域コミュニティからの制裁や暴力が、事例報告に基づいて比較的詳細に描かれている (Chowdhry 2009)。

以上の 3 つのグループの研究では、ジャーティ区分を一方的に受け入れるだけの人々による、積極的な切り離しの事例が挙げられていると言えるだろう。だが、それらの研究では、異ジャーティ結婚において具体的に何が起こるのか、何が問題なのか、断絶が起こるとすればどのように起こるのか、そこからの回復の手段はないのか、手段があったとして人々はどう行為するのか、そして、そのことと家族の未来との関係は、といったことはほとんど描かれない。そこで見過ごされてきたものは、規範にたがう異ジャーティ結婚は、単なる社会の安定性を脅かす行為、あるいは現代に残る因習的社会悪であるだけでなく、人々が生きていく中で紡がれている複雑な事象でもある、ということであった。それに対して 4 つ目のグループでは、ジャーティではない基準によって婚姻相手を選ぶ人々が描か

¹⁴ ジョナサン・パリー (Jonathan Parry) の調査したチャッティースガル (Chhattisgarh) では、ジャーティ所属は父親から伝達されると、人々は語るといふ (Parry 2001:805)。

れている。

最後のグループとして挙げるのは、異ジャーティ結婚を産業化や都市化、教育と職業の重視、新しい時代の価値観と結びついた現象としてとらえる研究である。例えば西ベンガル州の小さな都市で調査をしたローレン・コーウィン (Lauren Corwin) は、結婚の法的登録が、若者が親の同意を得ずに結婚するときの法的武器となることを指摘する。また、雇用の流動性の増加や、家族成員の居住の離散の傾向が、そのような恋愛結婚に対する制裁を減少させる原因となっているともいう。そして、都市に住むエリートはもはや異カースト結婚を不可能なことだと考えてはいない、と結論付ける (Corwin 1977)。シルパ・テンフネン (Sirpa Tenhunen) は、コルカタ近郊において、ジャーティ内婚にこだわらず、ジャーティ外でも階級が同じ家族とアレンジ結婚をする人々の姿を描いている (Tenhunen 1999)。パリーはチャッティースガル州の調査地における低ジャーティの人々の間で、初婚以外の関係においてジャーティの境界を超える事例が多く見られるということや、産業化された状況においては、インフォーマルセクターの産業従事者とパブリックセクター雇用者の間で婚姻にまつわる諸実践の二極化が進んでいるということを指摘している。具体的には、前者で離婚や異ジャーティ間の再婚がより一般的になっているのに対して、後者では離婚や異ジャーティ間の結婚が減少し、男女間の不平等が増大しているという。そして、減少の要因として国家や企業による方針の影響が指摘されている (Parry 2001)。デリーとバンガロールという2つの大都市で調査をしたベアトリス・ハウレギ (Beatrice Jauregui) とタラ・マクギネス (Tara McGuinness) は、異ジャーティ間を含むコミュニティ間の結婚は、「伝統的」と「都市的」な価値や実践の混成によってなされ、異なる文化や儀礼の混ざり合いといった、ユニークな混交を生み出しているということを指摘している (Jauregui and McGuinness 2003)。また樋口里華は、大都市ムンバイに居住する中下層の人々を対象に、配偶者選択の変化とその背景にある社会経済変容について調査した。それによると、親の世代ではカーストや宗教、言語 (出身地域) に基づく内婚が重視されていたが、現在では、高学歴者や中間層の間での同類結婚や、さらには経済状況が異なる人々間での結婚など、本人の意思や家族観の共有を尊重した恋愛結婚が徐々に増加しているという (樋口 2012)。

こうした最後のグループの研究では、異ジャーティ結婚がそれほど珍しくはない地域や人々の事例が数多く描かれる傾向にある。しかしこれらの研究は、「異ジャーティ間の恋愛結婚をした若者は、何も新しいことをしたわけではない」という調査地の人々の語りを汲み取っているわけではない。そこでは新しい価値観が強調されるあまり、その戦略性やロマンチック・ラブに焦点が当てられ、当事者たちが規則に縛られながら、複数の価値や志向性、そして行為と可能性の中で葛藤する様子が看過されてきた。

また、ここまで概観したような先行研究は、周縁的な事象として扱うにせよ、中心的なテーマとして扱うにせよ、異ジャーティ結婚という出来事だけを取り出して描く傾向にあった。そこでは、異ジャーティ結婚が連綿とした過程の中で起こっているという事実が見落とされていた。確かに異ジャーティ結婚が出来事として当人やその家族に及ぼすインパ

クトは大きい、当然のことながらその予兆は以前からあったものであるし、影響といってもその場限りのものではなく、後々にまで波及的に続いていく。また、影響を受ける周囲の人々を見ても、立場によって受け止め方は様々であるし、一人の人間の中にも複雑な感情が入り混じっている。これまでの研究では、異ジャーティ結婚という出来事がおかれた状況やその前に起こっていたこと、その後が起こったこと、関わる人々の広がりまでも含めた記述・考察がなされてこなかったのである。

本論文では、今までの異ジャーティ結婚の研究の限界を超えるために、異ジャーティ結婚の過程をその始まりも終わりもはっきり定まらないものとして捉え、それに対する人々の受け止め方もその及ぼす範囲も様々であるような事象として設定する。その上で、ある異ジャーティ結婚を行った男女の出会いと、特に男性側の家族のおかれていた状況を、人と人、物、神々、場所のつながりの網の目に注目して、詳細な記述を行うという手法をとる。

1.5 つながり研究

こうした詳細な記述を行ううえで、本論文では人類学における親族研究の新しい潮流である「つながり (relatedness)」研究 (Carsten 2000、Gillespie 2000、Bamford and Leach 2009、速水 2009、高谷・沼崎 2012、信田・小池 2013、鈴木 2013 など) を参照する。

これらのつながり研究は、親族研究に限らず、西洋が前提としてきた「自然」および知の実践に対して生じた疑義という近年の人類学における傾向と無縁ではない。つながり研究のジャネット・カーステン (Janet Carsten) らは、「親族」と言った時にその名のもとに何が含められているのかを想像するより広い視野を、個別な文化的文脈に関係付けられた民族誌の記述を通して獲得することを目指した (Carsten 2000:4)。つまり、伝統的な人類学的親族概念に潜む欧米的な暗黙の前提に縛られることなく、個別社会の成員が何につながりを見出し、どのようにつながりを紡ぎだしているかを、文化内在的な視点から明らかにすることを目的としていた (高谷・沼崎 2012:30)。

「つながり」への注目は、ある前提を取りやめ、異なる方法で問題を組み立てることを可能にしたが、その分、カーステン自身も言っているように、分析上空虚になる危険のある言葉でもあった (Carsten 2000:5)。その点で、分析の射程を具体的に示した以下に述べる鈴木議論は注目に値する。

シンハラとスリランカ・タミルの暴力的衝突そして内戦状況の中、シンハラ村落に囲まれたエステート・タミルの住むプランテーションで調査した鈴木は、アイデンティティ・ポリティクスで用いられる提喩の論理で同定される所属に対して、生活の場で人々は徹底してその論理に抵抗し、括りを突破するつながりを紡ぐように行っているということを、

詳細な民族誌的データをもとに明らかにした（鈴木 2013）。ここで言う提喩の論理とは、個のアイデンティティが、生物分類的な「種—類」関係のように、抽象的全体カテゴリーとの直接的・無媒介的關係によって同定される、そのような論理である（鈴木 2013:8）。鈴木の実例は、民族の同定が生と死を左右するような内戦下のスリランカにおいて、「違いなどない。でも違う」（鈴木 2013:15, 241, 297-299）と語る調査地の人々の生き方をジャーティヤを通して示した点で、アイデンティティ・ポリティクスとジャーティヤという対立軸が明確であり、私の調査地の事情とは大きく異なる。しかしここでは、私の調査地の人々が「私は何々ジャーティである。したがって同じジャーティの人と結婚しなければならない」と語り、問題化するにもかかわらず、その問題の解決が実はジャーティとは異なるレベルに求められているということを理解するために、鈴木と言うつながり方の論理とその中身を援用したい。

鈴木は、スリランカのジャーティヤ（ジャーティ）を、生活の場におけるその実践的編成と論理に着眼して描き出す中で、3種類の比喩表現形式にみる、喩えるものと喩えられるものとの間に介在する関係性の論理を用いて、アイデンティティ・ポリティクスとジャーティヤの組成を明らかにしていった。それは、提喩的同一性（あるものが何者であるかの定まりが、類・全体一種・部分の関係性の論理に拠っているもの）、換喩的同一性（あるものが何者であるかの定まりが、隣接性という関係性の論理に拠っているもの）、隠喩的同一性（あるものが何者であるかの定まりが、類似性という関係性の論理に拠っているもの）である（鈴木 2013:27）。提喩的同一性は排他的差異化によって人々を括るが、隣接性と類似性によるつながりによってもたらされる差異は対他的差異である。それは互いに他を前提として構成しあうつながり、そして生活と乖離し具体的な下支えを失ったものではなく、生活に根ざしたつながりの潜在性を秘めた形での差異化である（鈴木 2013:314-324）。

つまり鈴木は、括りと排他的同定に対しての、隣接性と類似性によるつながり方とまとまり方を提示したのである。この隣接性と類似性に関して、鈴木は例えば双方向的に辿られる親族の網目としての親族集団は換喩的隣接性によるまとまりであり、境遇の隠喩的類似性をつたって構成される集団もまたまとまりである、と述べている（鈴木 2013:28）。しかしこれら2つは別個に発生するものではなく、隣接して関係づけられた生活が類似性の確認の場となり、または類似性を頼った想像力から実践的な換喩的つながりが結ばれ始める、そのような関係にあるものである（鈴木 2013:320-321）。

本論文においては現地の事例を分析する際に、この鈴木の整理した類似性と隣接性によるつながりを参照する。研究者が異ジャーティ結婚の事例で「A ジャーティに属している男性と B ジャーティに属している女性が」と言うとき、あるいは調査地の人々が「私は C ジャーティだ、だから C 以外とは結婚してはならない」と語りのレベルで言う時、それはジャーティの括りの相で語っているといえる。しかし問題解決のレベルで大事にされているのは、類似性と隣接性によるつながりとまとまりである。したがって本論文では、問題化される際の原則的な語りを鈴木の言うところの括りの論理に基づいた同定と捉え、それに

対して、問題解決がなされる際に大事にされるまとまりを、類似性と隣接性に基づいたつながりの論理によるものと捉える。ただしつながりというときに、どうしてもそこには、既につながったものという、過去に生じたつながり、既に存在しているつながりを対象にしている傾向がある。それに対して本論文では、可能性にとどまり達成されなかったつながりや、これから希望されるつながりまで含めて記述してみたい。

1.6 ジャーティ以外のまとまり

異ジャーティ結婚において交錯する複雑なつながりの拡がりについて議論を進めていくために、ジャーティとは異なった現地の論理によってつながるまとまりに注目する必要がある。それが家族とサマージである。

1.6.1 家族

本論文では、従来のインド社会学において重視されてこなかった「家族」に、以下の 3 つの理由から注目する。

1 つ目は、現地において、拡大や再生産の単位として家族が意識されているということである。このことを理解するうえで手がかりとなるのは、フランスの農民を分析したピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu) の『結婚戦略』である。彼はそのなかで、フランスの農民が同じ階級や同じ地域の人々全体の再生産よりも、各家族の再生産を重視していることを指摘する。そこには家族の物質的・象徴的利益を最大化することを狙い、過度に不釣り合いな家族間での結婚を排除する傾向があるのだ (2007:209)。だが、彼らが息子の結婚相手に求める条件と娘の結婚相手に求める条件が違うため (2007:42)、女性たちは外へと出ていってしまう (2007:78)。全体よりも各家族の再生産を重視するこの姿勢は、本論文の対象であるブンデルカンド地方の低位ジャーティ・ヒンドゥーの間にも認められるものである。現在のフィールドの状況を見ると、人々はジャーティや村落共同体あるいは親族よりも、むしろ自らの家族に愛情を抱き、家族がどう社会上昇するか、どう威信を獲得するか、どう美しくなっていくかということに関心を持ち、そのために行為しているとみなすほうが適切だと考えられる。

その背景にあるのは、いわゆる「近代化」に伴うインド社会の変化である。そしてこれが、家族に注目する 2 つ目の理由である。メアリー・サール=チャタジー (Mary Searle-Chatterjee) とアーシュラ・シャルマ (Ursula Sharma) はベティユの論を引いて、近年ではインドの人々にとって家族がジャーティよりも重要になってきたことを指摘している。

彼女たちによれば、ジャーティの意味は以前とは様変わりして、あたかも家族と国家をつなぐ中間項としてのエスニックグループ的なものになっているという。また、2人は、浄・不浄に基づいたジャーティのヒエラルキーが持つ重要性が低下していることを説明するために、相対的に重要性を増してきたものとして「家族」という言葉を使っている (Searle-Chatterjee and Sharma 1994:17-20)。

ジャーティに比して重要性が増してきているものとして家族に言及するのはベティユも同じである。さらに彼の場合、重要性の増減は、専門職や管理職、行政職などにつくミドルクラスの人々に限られた現象だと述べている。ベティユは、文献や先行研究では家族への言及が少なくその内容も不十分であるが、現実には人々は家族に非常に献身し、関わって生きているということを指摘している。そして、ジャーティへの関わりが薄まっていくのに比して、家族への関わりは今後ますます強まっていくだろうと予想している (Béteille 1992:16-18)。

ベティユの語る家族は、親から子へ文化・社会資本を伝えるものとしてあり、ミドルクラスの生活をしている親自身が享受しているアドバンテージを子供に伝え、さらに子供たちが親よりもさらに進歩的な生活ができるようにと願っている。そして、家族はジャーティと同じように不平等を再生産しており、また人々は家族の幸福のために個人を犠牲にしているにもかかわらず、ジャーティ・システムは平等の名の下に非難されるが、人々が家族というものを攻撃することはないと指摘している。ただ、ベティユ自身が吐露するように、彼は家族に定義を与えておらず、その成員に道徳的要求をする組織であるとだけ示唆している (Béteille 1992:16-18)。

現代インドにおけるジャーティの存在感・重要性の減少についてここでは論じないが、家族の存在感の増加や、ベティユが指摘する家族の定義の困難さは示唆的である。

ブルデューとベティユが家族の持つ戦略性に注目したのに対し、南インド・タミルナードゥ (Tamil Nadu) 州のある家族を調査したマーガレット・トローウィック (Margaret Trawick) が提示したのは「愛情」(love) である。そして、この情緒的な関係の影響する領域としての重要性が、本論文で家族という言葉を用いる 3 つ目の理由である。トローウィックはドラヴィダの親族を、「南インドの生活に深く関係した人々によって無数の方法で演じられる、世帯内の、婚姻、子供の養育、感情的編成と、親類内の政治的編成の、相互補完的なパターン」(Trawick 1992:247) であると説明し、タミルの親族関係のエートスとしての「愛情」が人々の生に強く表出していることを描き出した。トローウィックは親族 (kinship) という言葉も使うが、その著書のタイトルにあるのは家族 (family) である。トローウィックの調査地は南インドで、私の調査地は北インドであるという違いはあるが、親族名称によって規定された人のカテゴリーを生きつつも、戦略的に、かつ愛情を持ちながら生きている人々、そしてそのような人々によって生きられるものとしての家族という着眼点は共通する。

以上、本論文において家族に着目する理由を踏まえて、では調査地において家族がどのような言葉で語られるのかを説明する。

まず、父系リネージをさすものとして、ワンス (*wans*)、メール (*maer*)、クル (*kul*) が挙げられる。このまともりは儀礼の場面で重要となる。もちろん成員全員がどこかで把握されているわけではなく、同じジャーティの男性などに会ったときに、相手の父の名前や父方祖父の名前を聞くことによって少しずつ知っていったり、あるいは逆に忘れていったりもする。これらの成員権は出自と婚姻によってのみ得られ、境界をまたぐこともそれらのみによってなされる。行為の上ではともかく、戦略的に、あるいは愛情に基づいて境界を変えることはできないとされている。

それに対して調査地で、上記の意味での「家族」と近い意味で使われるのがパリワール (*parivār*) である。また、ガハル (*ghar*) という言葉も使われる。これは「家」という意味だが、ただの建物ではなく「家族が住んでいる家」というニュアンスを持ち、そこに住む家族を表すこともある。さらに、再帰代名詞のアープ (*āp*) が、主にその斜格や所有格のアプナ (*apnā*) の形をとって、「自分たち」や「自分たちの身内・家族」という意味で使われることも多い。一人称複数を表すハム・ログ (*ham log*) も、「私たち」「自分たち」という意味で家族を指す時に用いられることがある。これらの言葉はいずれも自分とその周りの親密な人々という意味で用いられるが、理念的には、上述の父系リネージとは違い、その対象範囲を明確に定めないまま、曖昧さを伴って使われうるものである。

ある家での共住に基づきつつ、理念上は範囲を柔軟に拡張しうる「家族」という点はきわめて重要である。というのも、原理や規則の明確なジャーティや父系リネージには入らない人であっても、家族とみなされたり、家族になったりする余地 (ないし可能性) があるからである。本論文の議論を先取りするならば、無数の行為、言葉、食物や境遇の共有、身体的接触、壁の建設、つながりの断ち切りと紡ぎなおしなどの日常的で微細な実践の積み重ねは、あらかじめ決められた家族という枠組みのなかで行われるわけではない。そうではなく、それらの諸実践を通してはじめて家族というまとまりが浮かび上がり、また家族が人々に意識されるなかで、それに沿った実践が生み出されるというダイナミズムが見いだせるのである。

ここで一つの事例を挙げたい。2013年元旦、本論文で取り上げる家族D家は、ブンデルカンド地方東部の巡礼地チットラクート (*Chitrakoot*) へと旅行に出かけた。8人乗りのスズキのワゴン車に乗り込んだのは、父、母、甥 (父の兄の息子)、次男と三男と四男、末の妹、そして私だった。異ジャーティ結婚をした長男は当時彼らとは別に暮らしていた。甥が運転席に、父が助手席に座り、計8人が8人乗りの車に乗り込んだとき、みなが口々に、「すごい、8人乗りにぴったり8人だ、家族 (パリワール) がぴったり8人だ」と言った。チットラクートに到着し、とある昔なじみのグル (*guru*, 師) を訪ねた時、D家の父は私を紹介して「私は子供を1人失いましたが、こうして1人得ました」と言った。またそのグルは甥を紹介され、「君だけ他の男の子たちとは違うと思ったんだ」と言った。

この事例から私が言いたいことは、この8人が「家族」だということではない。そうではなく、ちょうど8人だったという事実、それを口に出して言うこと、2枚の毛布をみなで

被って狭い車内で寝たこと、旅行が楽しかったということ、それでも甥だけが他の兄弟とは違う雰囲気を持っていると指摘されたということ、そのような小さなことがいくつも重なって、家族が輪郭をあらわすということである。本論文の事例部分で見ていくのは、こうした「小さなこと」の積み重ねである。

1.6.2 サマージ

もう一つ、ジャーティとは異なる論理によって構成されている人の集団として、調査地の人々がしばしば触れ、大切にしている「サマージ」(*samāj*)について説明する。

辞書的には、この言葉は「集まり」や「集団」、「社会」や「世間」、「社交場」などを意味する(古賀・高橋 2006:1316)。また、前述したフルツェッティの著書 *The gift of a Virgin* には、異ジャーティ結婚をした男女に制裁を与える存在として「ベンガルのカースト社会(サマージ)」が挙げられていた(Fruzzetti 1982:10-11,177)。ここでサマージは「社会(society)」あるいは「カースト社会(caste society)」と訳されている。「アーリヤ・サマージ」などの組織名で用いられる時は「アーリヤ協会」と日本語訳されることもある。また「社会主義」、「社会学」は、ヒンディー語ではそれぞれ「サマージワードゥ(*samājwād*)」、「サマージシャーストラ(*samājsāstra*)」あるいは「サマージヴィッギヤーン(*samājvijñān*)」となる。スワループ・グプタ(Swarupa Gupta)は、イギリス植民地期のベンガル地方の知識人たちがサマージのイメージを拡大してインド固有の国家像を描いていたことを指摘している。その際サマージは、ヒンドゥーの道徳やエリート的な視点を含みつつ、オープンエンドなインド固有の家族像を反映したものであったという(Gupta 2006)。ここでは多義的な意味を持つサマージを、調査地の人々の日常の用法、特にそのつながり方の論理に即して説明したい。

サマージはジャーティと同じような意味に使われることもあるが、そのような場合でも、厳密に注意してみると、ジャーティとは異なる論理でつながる人々の集団について言及されていることがわかる。

例えば、過去にある結婚が問題になったとき、私は「サマージの人々が集まって話し合いをした」という語りを聞いた。詳しく聞いてみると、その場に集まっていたのは、遠方に住んでいた親戚(当事者のFBS、FBWBなど)、近隣の同じジャーティの人々、それに加えて同じ村に住んでいた他のジャーティの人々だった。

出自や婚姻でつながっている遠方の親戚、近隣つながりのジャーティの人々、そして同じ村というつながりの他ジャーティの人々——こうした人々が集まって、当の男性の家族を囲み、サマージが形成されている。この事例において、つながりの基点となっているのは、男性個人ではなく家族である。このように、サマージはその名によって同定されるジャーティとは異なり対面的なつながりを伝って形成される人間の集団なのである。

以上の検討に基づき、本論文では、調査地の人々が関わる人と人とのつながり、つまり対面的でコンテキスト依存的であり、括る力学は持ってはいないが、人々がその中で生きていると宣言し、やはり人々を縛るものとして言及される人間の集団をサマージと呼ぶことにする。そしてサマージは、家族を基点として、そこから対面的に隣接性と類似性に基づいたつながりが結ばれることによって、形成される。本論文のトピックである結婚に関して言えば、ジャーティ、村、ゴートラ (*gotra*、父系クラン) といった排他的な人の集団に基づいて相手を選ばなければならない、あるいは選んでいる、と人々は言うが、実際には具体的なつながりを持った人々、すなわちサマージの中から相手は選ばれる。つまりジャーティ内婚によって括られつつも、隣接と類似によるつながりの論理からすれば、結婚相手となりうる範囲は潜在的に常に開いていると言い換えることができる。婚姻の承認に関しても、ジャーティが異なることが問題だとされながらも、実際には対面的なつながりを持つ人々のまとまりであるサマージに認められることが重要となるのである。

1.7 本論文の枠組み

以上の議論を踏まえて、本節では全体の枠組みを述べる。本論文では、人々がどのように婚姻を結び、家族を作っていくかという問題を検討する。この問題を扱うにあたり、家族の境界、そしてジャーティやサマージという人の集団の境界が大きな問題となってくる異ジャーティ結婚の事例を用いる。そのために、人々の集団の境界を所与のものとしてせず、現地におけるつながりを追っていくという方法をとる。

本論文では、隣接性と類似性に基づいたつながりの追跡・記述にあたって、家族の項で述べたつながり方の3つの動機を意識していく。1つ目は規則である。上述のジャーティも含め、調査地には多種多様な内婚・外婚単位があり、それに応じて人々の立場は定まっている。この点において、差異と同一性に基づいてつながるべき人とつながるべきではない人が明確に分けられている。そして、この規則を守るのが良いこと、守らないのが悪いことだと判断される。2つ目は、つながり方の規則が守られる範囲内や範囲外でつながりたいか否かという志向あるいは戦略である。このレベルでは、つながりや切断をめぐって、似たような人々、近隣の人々の中で駆け引きや競争が行われる。そして3つ目は、許されなくてもつながり続ける愛情、あるいはつながりが要請されるにもかかわらずそれを避けようとする嫌悪の情である。

本論文では、人々が演じる、規則に基づいた役割、戦略、愛情に基づいたつながりをまとめて捉えるために「家族」という言葉を使う。ここでは家族は語りとしての出発点であると同時に（つまり「家族だから」という語り）、その結果としてのさまざまなつながりを紡いだあとで家族という存在が輪郭をあらわす。本論文では、そのようなものとして家族

を設定する。

こうした家族を捉えるために、本論文では主に一つの家族に注目し、その主体の中に深く切り込んでいくという方法をとる。それによって、異ジャーティ結婚の前からその後まで、予兆や不安、影響や結果の無視、回収されきっていない過去の伏線、可能性に留まり達成されなかった未来や心に秘めた希望などを含めて記述していくことが可能となる。

1.8 本論文の構成

本論文は6章から構成される。第1章（本章）では本論文全体に関わる問題の提示と先行研究への位置づけを行ってきた。続く第2章が調査地と研究対象の概要である。第3、4、5章が、本論文の中心的テーマである婚姻に関する民族誌的記述である。第3章が調査地の婚姻相手探しの過程、第4章が異ジャーティ結婚とその後起こった浄化儀礼、第5章が同ジャーティ結婚の婚姻儀礼の民族誌である。第6章が考察および結論である。

本論文のデータは、2008～2014年の間の計24ヶ月間にわたり、北インドUP州とMP州にまたがるブンデルカンド地方の2ヶ所の村落（A村とB村と呼ぶ。A村が主要な調査地である）で行った現地調査に基づく。

2008年11月、生まれてはじめてインドの地に降り立った私が、最初にたどり着いたのがB村だった。その地でD家の人々と出会い、親しくなり、初めてそのふるさとのA村に滞在したのは、2009年の2月のことだった。A村が実はD家の出身村ではないということがわかったのは、まだいぶ時間が経過してからのことである。以来、長くて数ヶ月、短くて数日、A村とB村の間をD家の人々とともに移動しながら生活した。D家の男性が運転するバイクの後部座席に座って幾度となく眺めたブンデルカンド地方の田園風景は忘れられない。調査での使用言語は、現地のヒンドゥーの間で話されているヒンディー語の方言である。

本章にも既にジャーティ、サマージなどいくつかの現地語を出したが、それらの表記に関しては、カナ表記については調査地での発音に近いものを採用し、原語が復元できるように初出時に翻字をイタリックで併記した。また本論文中に掲載した写真はすべて私が撮影したものである。

第2章 社会上昇を願う人々―調査地について

2.1 ブンデルカンド地方

1872年に発表されたジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』は、交通機関の発達によって世界が狭くなったことをモチーフにした小説である。ロンドンのクラブの仲間と80日間で世界を一周できるかどうかの賭けをした英国紳士フィリアス・フォッグが主人公である。彼は、スエズ運河を抜けてインド西部の港町ボンベイ（ムンバイ）へ降り立ち、インド亜大陸を横断して香港行きの船に乗るため、インド東部の港町カルカッタ（コルカタ）¹⁵へと汽車で向かう。しかし途中でまだ線路の未開通区間があることがわかり、一行は列車を降りて、案内人を雇い象の背に乗り、次の駅へと向かうことになる。そこで通り過ぎるのが、北インドのちょうど真ん中に当たるブンデルカンド地方である。

正午になると案内人は出発を告げた。ほどなくしてあたりは野性の相貌を帯びてきた。広々とした森林のあとにタマリンドや背の低い椰子の林が続いた。それから、まばらな灌木の林がそそり立つ、大きな閃長岩の塊が点在する広大な荒野が現れた。旅人もほとんど訪れることのないこのブンデルカンド高地地方には、ヒンズー教の中でも最も恐ろしい宗教慣習をかたくなに維持しつづけている狂信的な一群が住んでいた。ヴィンディヤ山地中の人を寄せつけぬ山奥に住む藩王たちとの接触は困難をきわめ、これら藩王たちの影響下に置かれている地方については、いまだ英国の支配は正式には確立されていなかったのである。（ヴェルヌ 2001:121-123、原文ママ）

そこでフォッグの一行は、死亡したマハラジャの若き寡婦アウダをサティ（*satī*、夫に殉死する寡婦）に処すための恐ろしいヒンドゥー僧侶の行列と出会う。同行のイギリス軍人が説明する。

インドのほとんど全ての領域にあってはこうした犠牲はもはや行われていません。しかし我々も、この未開の地域までは影響を与えられません。とりわけこのブンデ

¹⁵ インドでは植民地時代の英語風の読み方から漸次地名を現地語風の読み方に改めている。1995年にはボンベイがムンバイに、2001年にはカルカッタがコルカタに変更された。

ールカンドの領域についてはそうです。ヴィンディヤ山地の北側一帯は、絶えざる殺戮と略奪の舞台になっているのです。(ヴェルヌ 2001:130、原文ママ)

結局フォッグの一行は召使のパスパルトゥーの機転によりアウダを助け出すことに成功する。そして、ボンベイの裕福なパールシー一族出身であり、高等教育を受けて完璧な英語を話し、ヨーロッパ人のように肌が白いアウダは、英国紳士のフォッグと結婚するのだ。ヴェルヌが「未開の地域」、「絶えざる殺戮と略奪の舞台」と呼んだブンデルカンド地方が私の調査地であり、その地における現代の婚姻と家族が本論文の主題である。対象とするのは、低位ジャーティ・ヒンドゥーの人々である。

ブンデルカンド地方は、インドの首都デリーから南南東へ約 500km の位置にある。この地方は UP 州と MP 州にまたがっているが、両州から分離して一つの州となるようとする動きもある¹⁶。また、人々は自分たちが話す言葉をブンデルカンディー (*bundelkhandī*) であると語る。本論文ではこの地方を一つのまとまった地域としてとらえ、ブンデルカンド地方と呼ぶ。

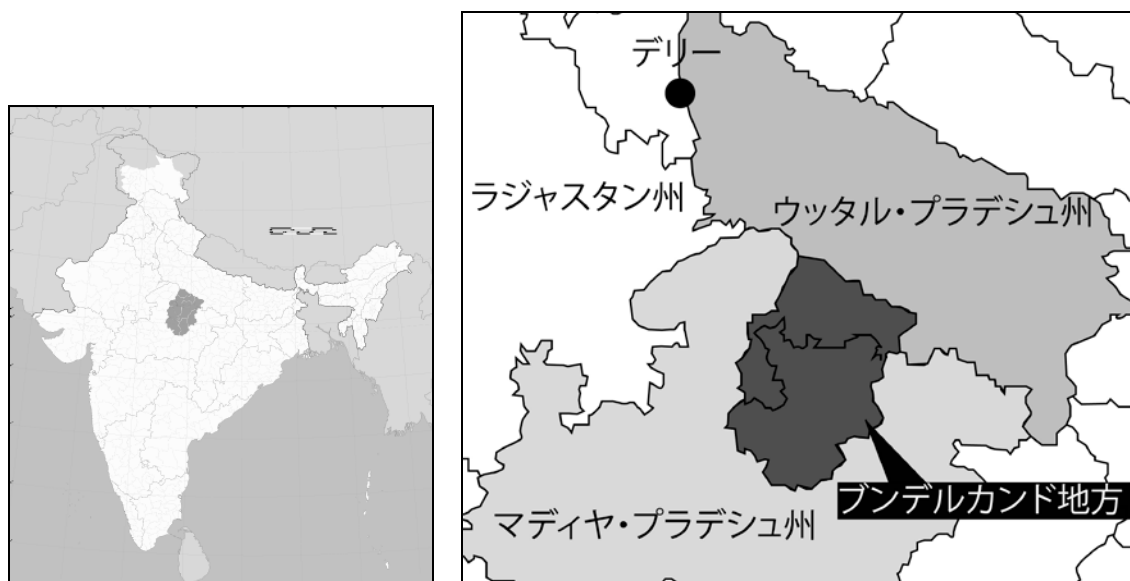


図 2-1 ブンデルカンド地方の位置

左図 : [File:India Bundelkhand locator map.svg](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/3/3b/India_Bundelkhand_locator_map.svg/530px-India_Bundelkhand_locator_map.svg.png)https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/3/3b/India_Bundelkhand_locator_map.svg/530px-India_Bundelkhand_locator_map.svg.png、2015 年 11 月 10 日取得。右図 : www.bundelkhand.in、http://cms.outlookindia.com/Uploads/outlookindia/2009/200910/bundelkhand_map_20091005.jpg、2015 年 11 月 10 日取得をもとに筆者作成。

¹⁶ UP 州のジャンシー (Jhansi)、ラリトプール (Lalitpur)、ジャローン (Jalaun)、ハミルプール (Hamirpur)、マホバ (Mahoba)、バンダ (Banda)、チャトラクート (Chitrakoot) と、MP 州のダイタ (Daita)、ティカンガル (Tikamgarh)、チャタルプール (Chhatarpur)、パンナ (Panna)、サーガル (Sagar)、ダモー (Damoh) の計 13 県が「ブンデルカンド地方」に含まれる。ここでは、そのまとまりの正統性や、人々の想像する領域の境界線については議論しない。ただ調査地の所在を説明するためにのみ、ブンデルカンド地方という言葉を使う。

ブンデルカンド地方は北インドのほぼ中央に位置する。私が調査したのは、カシミールからカニャクマリ¹⁷までを「ヒンドゥスターン」と呼び、自らをヒンドゥスターンに住むヒンディー語を話すヒンドゥーとして認識する人々である。冬季の低湿度と時に0℃まで下がる低温、夏季の低湿度と50℃近くまで上がる超高温、そしてモンスーンの雨季という3つの季節があるが、いずれにしても過酷な自然状況がこの地方を含めた北インド内陸部の特徴として挙げられる。

ヴェルヌの記述にも出てきたとおり、1948年から漸次インド連邦に統合されるまでの約300年間、ブンデルカンド地方の大部分は藩王国によって統治されていた。単一の支配者の下でブンデルカンド地方が最大の版図を有したのは、パンナ王国のチャトラサル(Chhatrasal)王の時代であった。チャトラサルは1731年に死去する前、彼の領土の3分の1(ジャンシーとジャローン)をマラータ王国¹⁸に割譲し、残りを彼の後継者たちに相続させた。チャトラサルの死後数十年の間に、ブンデルカンド地方の諸王たちとマラータ王国、そしてムスリムのナワーブ(nawāb)¹⁹たちとの間に複雑な同盟関係が結ばれ、またこの時期に、ブンデルカンド地方の一部は小さな諸藩王国に分かれた。

しかしフォッグに同行するイギリス軍人が語ったように、ブンデルカンド地方の諸藩王国が完全にイギリスの影響から逃れていたわけではない。その後1802年のバセイン条約²⁰に基づき、ブンデルカンド地方のマラータ王国支配地域はほぼすべて漸次イギリスの支配下に入ることとなり、ブリティッシュ・ブンデルカンドと呼ばれるようになった。また、ブンデルカンド地方のマラータ王国の領土以外の地域も、この時期、民政を導入するという目的の下、イギリス植民地官僚の権限下に置かれた。この取り決めはインド総督の政府機関がブリティッシュ・ブンデルカンドのバンダに置かれた1811年に正式に執行された。1854年、この地方の藩王国との政治的関係をより深めるために、中央インド庁(Central India Agency)が創設された。藩王国に対する中央の影響力を強めようという試みはその後、独立後のインド連邦にこれらの藩王国が併合されるまで100年近く継続することとなる(Jain 1979:947)。

独立インドに併合後、ブンデルカンド地方の大部分は隣接するバゲルカンド(Bagelkhand)地方と共にヴィンディヤ・プラデシュ(Vindhya Pradesh)州となったが、その後この州は解体され、MP州とUP州に分かれた。

ブンデルカンド地方の属するUP州とMP州はまた、BIMARU(ヒンディー語で「病気」という意味)Statesにも含まれている。BIMARU Statesとは、ビハール(Bihar)、マディヤ・プラデシュ(Madhya Pradesh)、ラジャスタン(Rajasthan)、ウッタル・プラデシュ(Uttar

¹⁷ インド洋に突き出すインド最南端の岬。ヒンドゥーの聖地でもある。

¹⁸ 17世紀から19世紀までデカン高原に存在したヒンドゥー王朝。イギリスと三次にわたるマラータ戦争を戦った。

¹⁹ ムスリム領主、藩王の称号。

²⁰ イギリス東インド会社とマラータ王国の宰相バージー・ラーオ2世の間で締結された条約。この条約によりマラータ王国領の一部がイギリスに割譲された。

Pradesh)の4州の頭文字を取ったもので、1980年代、人口統計学者のアシシュ・ボーズ(Ashish Bose)によって作られた言葉である。もとは人口統計上の指標からみてインド全体の発展を妨げる地域を括ったものであるが、経済的な後進地域である北インド諸州の呼び名として用いられるようになった(Kawadia and Philips 2014)²¹。北インド内陸のこのヒンディー・ベルトと呼ばれる地域は、南インド諸州と比べても低開発地域であるとされている(岡橋 2009:54)。

以下では、ブンドルカンド地方における具体的な調査地の概要を述べるとともに、人々がいかに環境や条件、人の種類に規定されて行為しているのか、その中でいかにより良い未来を志向し、互いに愛情をかけ合っているのかを記述、分析していくことを通して、結婚や家族、家族の中の個人、そして家族を超えた集団の存在などといった、本論文全体に関わるテーマを明らかにしていく。

2.2 調査対象地、A村とB村

私の調査地は、ブンドルカンド地方のUP州W県A村とMP州X県B村である。人口規模としてはA村のほうが大きい。A村は郡(*tahsil*)²²都である。2011年のセンサスによると、A村の総人口は27,760人、うちヒンドゥーが78.26%、ムスリムが21.34%で、その他クリスチャン、シク教徒、ジャイナ教徒などが少数居住している。またB村は総人口が24,481人で、ヒンドゥーが92.23%、ムスリムが6.47%で、その他クリスチャン、シク教徒、仏教徒、ジャイナ教徒などが少数居住している(census2011、<http://www.census2011.co.in/>、2015年11月25日閲覧)。

私は、調査地ではある家族(以下D家)とともに住んでいた。D家は、普段はA村からバスで4時間ほどのB村に住んでいた。A村の家は父の実家であり、仕事のためにB村の借家に住んでいるのである。D家がB村に住んでもう30年近くになるという。一番上の子以外はみなB村で生まれた。下の表は、本論文の民族誌における中心的な登場人物の親族図である。以下、それぞれに当てた名前(すべて仮名)を用いて記述していく。

²¹ 近年では、これら4州を弁別するBIMARUという呼称はもはや実態に即していないとも言われている(Chauhan 2010)。

²² 州の下県の下の行政区分。

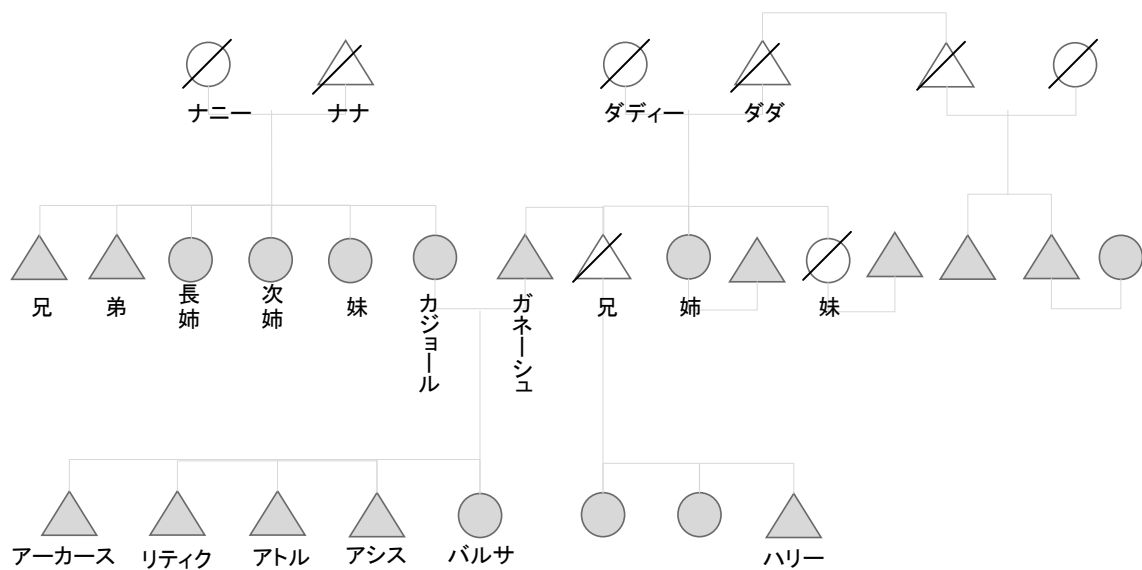


図 2-2 登場人物の親族関係
(聞き取りをもとに筆者作成)

表 2-1 登場人物一覧

ガネーシュ	(父)	およそ 50 歳	職人
カジョール	(母)	およそ 47 歳	専業主婦
アーカース	(長男)	30 歳	慈善活動として運営される私立学校の校長。異ジャージーティ結婚をして現在別居中
ハリー	(男イトコ)	29 歳	職人
リテイク	(次男)	27 歳	私立学校の教師と家庭教師の掛け持ち
アトル	(三男)	24 歳	職人
アシス	(四男)	21 歳	学生から会社勤めのエンジニアとなったが、次兄の婚姻儀礼のため退職
バルサ	(末の妹)	17 歳	学生
ナミータ	(アーカースの妻)	33~39 歳 ²³	公立学校(高校相当)の英語教師

²³ ナミータの年齢は夫のアーカースも知らない。当初はアーカースより 2 歳くらい年上だと説明していたらしいが、ある時アーカースが見た書類には自分より 9 歳年上の年齢が記されていたという。しかし調査地では、公的書類に記された生年月日が正しいとは限らない。その後アーカースが聞いたときには、アーカースより 3~4 歳年上だと説明されたらしい。見た目から判断すると、アーカースより 9 歳も年上だとは思えない。おそらく 4~5 歳上といったところだろう。

ニートウ	(リティクの妻)	21 歳	カレッジの 2 年生
ラクシュマン	(同ジャーティのガネーシュの友人)		職人

(聞き取りをもとに筆者作成。年齢は 2014 年 3 月現在)

A 村の家には、3 年前に死んだダディーがずっと住んでいたほか、4 年前に死んだガネーシュの兄も最期の数年間は住んでいた。その死んだ兄の息子ハリーも、父親の死後は A 村の家を拠点に暮らしている。B 村に住む家族も、家のプージャ (*ghar kā pūjā*)²⁴やディパヴァリーの時期²⁵、暑季休暇の時²⁶、また家の様子を見に行く時など、度々 A 村を訪れている。これは A 村の家を荒廃させないためでもあるが、B 村の賃貸の家とは違い、A 村の家は何よりも「自分たちの家」だということ、定期的に訪れる必要があったのだ。

A 村と B 村の関係をもう少し詳しく述べる。B 村はより発展していると考えられており、A 村は発展していないと考えられている。調査地の人々はその差を、例えば停電の頻度、店に並んでいる品物の流行度、近所の人々の互いの生活への干渉度²⁷、女性や女の子たちの服装²⁸などから認識する。D 家の人々にとって最も大きな差は、2 つの村の家の設備の違いだ

²⁴ プージャは、ヒンドゥーの神像礼拝の様式に則って行われる礼拝儀礼のことである。神像に水、花、香、灯明などを供えるなど、多数の儀礼を伴う。家のプージャは、父系リネージの成員だけで行われるプージャで、年に 1 回行われる。日程はその家族によって決まっており、「自分たちの家」の、家族の神がいる部屋で行われる。

²⁵ カーティク月の黒分 15 日 (日本の旧暦で 9 月 30 日) に行われる。灯明を家の周囲に点し、富の神ラクシュミ女神を祭る、ヒンドゥー最大の祭りである。

²⁶ 調査地の学校の長期休暇。

²⁷ 例えば A 村の家では、近所の子供たちやガネーシュの友人の男性たち、近所の女性たち、村の寺院の修行者たちなどが勝手に門を越えて中庭にまで入ってきて長時間滞在し、お茶を飲み、煙草を吸い、時に食事までして行く。部屋の中まではめったに入っていないが、中庭を囲んで部屋や便所、台所などが配置されているので、生活スペースには常に家族外の人がいる状態である。一方、B 村の家ではガネーシュや息子たちは主に家以外の場所、例えば市場の店などで友人たちと会い、近所の女性たちもカジョールと家の扉の外で短時間喋るだけのことが多い。

²⁸ 一般的に調査地の女性や少女の服装は、サリー (*sārī*)、スーツ (*sūt*)、クルティー (*kurtī*) とレギ (*leggings*)、ジーンズと T シャツという 4 種類に分けられる。調査地のヒンドゥーの人々の感覚では、最初のほうほどフォーマル度が高いが、最後のほうほどモダンで都市的な服装である。また最初の 3 つはインドの「伝統的」な服装の範疇に含まれる。サリーは、短い丈のブラウスとペチコートの上に一枚布を下半身と上半身にドレープを作って巻きつけた装いである。スーツとは、サルワールカミーズ (*śalvār kamīz*) あるいはパンジャービー (*panjābī*) ドレスと呼ばれる、ワンピースとズボンとスカーフの 3 点セットの女性の装いである。カジョールが子供のころは、調査地ではスーツがムスリム女性の装いとされていたそうだが、現在ではその機能性から、インド各地でヒンドゥー既婚女性を含めた多くの女性や女の子たちが着用している。クルティーはワンピース状の服で、その下にはレギと呼ばれるレギンスのボトムスやジーンズが配される。A 村ではほとんどのヒンドゥー既婚女性がサリーを着ており、少女たちもスーツを着ることが多いが、B 村では大人の女性でもスーツを着ることがあり、また少女たちもクルティーとレギやジーンズにティーシャツを着ている割合が高い。

った。D家のA村の家は土でできていて、B村の家はコンクリートでできている²⁹。A村の家では料理は土のかまど(チューラー*cūlhā*)を使うが³⁰、B村ではガスレンジを使う³¹。A村の家では井戸から水を汲まなければならないが、B村の家には水道がある³²。これらはすべて、A村では家事労働の負担が増えることを意味する。A村の家にはテレビがないが、B村の家には昔からテレビがある³³。A村はUP州にあり、頻繁に停電が起こるが、B村はMP州にあり、停電は比較的少ない。カジョールとリティクとバルサは暗闇が大の苦手である。またA村の家には広い中庭があり部屋も広く、各部屋の間には距離があるが、B村は賃貸で庭などはなく、隣接した小部屋があるだけである。しかし1人でいることが苦手な彼らにとっては、そのA村の家の田舎特有の広さが怖く、苦手なのだという。

私が調査地として住んでいたのは主にA村だった。私がB村に調査の拠点を置かなかったのは、B村が住みづらかったからだ。家族は私に協力してくれ、常に数人が、時には全員

²⁹ A村の家は改築を重ねている。元々は土でできた2階建てと1階建ての2棟の建物があった。私が最初に訪れた際は、それに加えて、壁と屋根がレンガで床が土の建物が建っていた。ある年の雨季に洪水が起こり、部屋が浸水してしまったため、1人で住んでいたダディーが寝る場所を失い、ガネーシュが急造でレンガの家を建てさせたのだという。その後、私の滞在中に隣の家が土の家を全部壊してレンガの家を建てるとき、その家との間で土地の交換を行った。D家は道路に面する入り口を広げなかったのだ。その交換の際に、400年は経っているとガネーシュが語る1階建ての土の家が壊された。その後、雨季の時に、夜中、全く維持管理をしていなかった2階建てのほうの土の家が崩れた。そこでその土の家を完全に壊し、残土を中庭の盛り土にした。また、5章で記述するプラーン儀礼の前に、D家は大改築を行った。レンガの建物の壁と床をコンクリートで固め、間に仕切りを作って2部屋にし、テンポラルな半外の部屋を3部屋増築したのである。そのうちの一部屋は台所になった。一方、D家はB村でも引越しを繰り返している。

³⁰ 後にA村で過ごす時間が長くなると、A村でもガスレンジを使うようになった。ガスレンジは、モダンで都市的なライフスタイルの影響によって普及が進んでいる。

³¹ 2008年から2009年にかけて滞在していた時、B村でもD家ではガスレンジを床に置いて使っていた。当時、B村の家のキッチンにはガスレンジを置くための石の台があったが、カジョールは幼い頃から床に座っての炊事作業に慣れていた。

³² A村に水道がなかったわけではなく、D家の家の近くまでは水道が通っていなかった。私が最初に訪れたときには、A村の家では近くの井戸から水を汲むことが毎朝一番の仕事だった。後に水道が通り、やがて電動ポンプを使って水道から水を取ることができるようになった(たとえ水道があっても、水の圧力が弱い為、ポンプがなければ簡単には水を汲めない)。しかし水道から水が出る時間帯は朝のわずか1時間程度であり、その間に一日の必要分を容器に溜めなければならない。一方、当時B村でD家が住んでいた家では、水道事情はもっと悪かった。数日に一回、当時D家が住んでいた建物の裏手の外にある水道から水が出ると、四男のアシスが大きなバケツに水を汲んで2階にある部屋まで運んでいった。そのため、長男のアーカースなどはジーンズなどの洗濯を勤め先の学校でしていたほどである。また、アシスの腕が長くなったのは水を運びすぎたからだと言われている。2011年の再訪から現在にいたるまで住んでいる家は、部屋の中に蛇口があり、屋上に大きなタンクを備えているので、いつでも水が汲める。飲み水だけは屋上のタンクに入る前の水を汲まなければならないので、屋上から1階の部屋までやはりアシスが運んでくる。

³³ A村の家にも後にテレビを置くことになった。またB村の家には今は壁掛け薄型テレビを置いている。

が、A村で私と一緒に暮らしてくれた。それが可能だったのは、ガネーシュと三男アトル、そしてハリーが家具と室内装飾の職人で、自分の裁量で仕事ができ、また仕事の範囲がB村周辺に限らなかったからである。必要なときは私がB村の家へ行って住んだ。

人口規模から見てもわかるとおり、A村は大きな村だ。市場があり、裁判所があり、大学、病院、警察署があり、周辺の小さな村々から人々が売買や通学³⁴や様々な用事で通ってくる。それでも人々は、ここを「村（ガンウ *gano*）」と呼び、経済的発展から取り残されていると思っている。D家の父ガネーシュも含め、多くの人が村の外へ移住している。実情はともかく、「ここには仕事がない」とは多くの村人の口にする言葉である。

しかし一方で、周辺の小さな村からA村に移住してくる人も多くいる。ガネーシュの父ダダもその1人だった。「ガンウ」という言葉は、一般的な村をさす場合と出身地をさす場合、ルーツの土地をさす場合とがある。A村の周辺の小さな村から移住してきた人々は、それらの小さな村を自分の「ガンウ」と呼ぶ。A村に移住してきた人の中には、「ガンウ」に畑や家畜など生活の基盤を残している人も多い。一方A村から外へ移住した人々も、A村を自分の「ガンウ」と呼ぶ。大きな村であるA村からの移住先は「都市（シャハル *śahar*）」である。シャハルにはガンウに比べて物質的豊かさがあり、生活の便利さがあり、進歩的な考え方があり、教育や職業の機会へのアクセスがあるとされている。村の外へ出ていくことは時に、「（村から）逃げ出す（*bhāgnā*）」という言葉を使って表現される。

人々がどのくらい移住しているのか、どのような事情で移住しているのかを知るために、A村のある地区の27軒を切り取って移住状況を調べたところ、この土地に「元々住んでいた家族だ（ここの人だ、*yahān kā*）」と言われているのは7軒、同じ村の中の別の地区から移住してきたのが8軒、周辺小村から移ってきたのが11軒、その他1軒（私立学校）であった。当然、新しい家族が移住してくる前に住んでいた家族はまた別のところへ移住しているわけで、成員固定的な農村というイメージは当てはまらないだろう。移住の経緯もそれぞれユニークなものであった。27軒の家族について、その移住状況を以下に表で示して概観する。ちなみにD家はこの図においては4番の家族である。

表 2-2 A村のある地区のジャーティ、移住事情、居住形態

	ジャーティ/ 伝統的職業	移住状況	家族構成	備考	移住元/ 移住時期
1	ターコル <i>ṭhākūr</i> 戦士	「ここの人」	E、W、D、 S		在地

³⁴ A村にある公立初級学校以外の学校は、付録1参照。

2	ゴース <i>ghoṣ</i> 牛飼い	4の母の実家だったが、23の親戚に売った。持ち主は町へ出ていき、今は荒れ果てているが、一応近所に住む親戚が見張っている。		空き地	同地区 3,4年前
3	パンディット <i>paṇḍit</i> 僧侶	45年ほど前に、ここに住んでいた年寄りパンディットが死に、遠い親戚が、地域のパンディットに800ルピーで売った。10年後、8000ルピーで村のターコルに売った。その後、17が賃貸で住んだ。その後、近隣小村のパンディットが買って、現在改築中。		改築中	近隣の村 1年前
4	ロハール <i>luhār</i> 鉄鍛冶	元々母の実家が2だった。4の家には身寄りのいない同ジャーティの老人が住んでいて、軍隊勤めの父と母が老人の面倒を死ぬまで見る代わりに、土地家屋と財産を相続した。	E、W、BS、 S3、D1	空き家だが、いずれは帰ってくる予定	近隣の村 70年前
5	テーリー <i>telī</i> 油絞り	元々は1の土地だったが、60~70年前に今の持ち主の父に売った。父が買った屋敷を、今は息子兄弟2人之间に壁を作り分けて住んでいる。兄の部分が5。彼にはさらに2人の息子がいるため、4から少し土地を買って家を広げた。	E、W、S2、 SW2、C	空き家だが、家族で帰ってくる予定	近隣の村 60~70年前
6	ローディー <i>lodhī</i> 農業	近隣の小村から移住。18の一族の娘婿から10年前に16,000ルピーで買った。エゴの家族だけで住んでいたが、最近エゴのBSが通学のために一緒に住むようになった。	W、S、BS	Egoは近隣小村の家に住んでいる。	近隣の村 10年前
7	ヤーダオ <i>yādav</i> 牛飼い	「ここの人」。広くも狭くもなっていない。	E、S、SW、 SS2、SD1		在地
8	ヤーダオ <i>yādav</i> 牛飼い	妻の実家。妻は一人娘だった。今は3つに分けて、3人の息子がそれぞれの家族と住んでいる。	E、S3、 SW3、SC3		妻が在地
9	クスワーハー <i>kuśvāhā</i> 野菜作り	妻の実家が10である。1985年、結婚時に17,000ルピーでパライー (<i>barhāī</i>) から買った。	E、W、S、 D		妻が別地区 28年前

10	クスワーハー <i>kuśvāhā</i> 野菜作り	20年ほど前に買った。元々はマハラジャの土地だった。その後、パンディットの土地となったが、彼は酒飲みで人生を破綻させた挙句、妻は自殺し、彼は村の外へ出た。その土地を、元々は小さく買ったのが、村内の別の地区から来た 10 と 22。皆が死霊が出るという恐れ、用足しに使っていた土地を、少しずつ侵食して、家を広げた。16 も同様の手口。	E、M、B、 W、C3		別地区 20年前
11	クムハール <i>kumhār</i> 土器作り	別の地区に実家があったが、実家には弟が住み、自身は 10 年ほど前に 12 から購入。	E、W、S2、 D1		別地区 11年前
12	パンディット <i>paṇḍit</i> 僧侶	兄弟で 11 と 12 の建物を建てたが、数年で喧嘩、11 の家に住んでいたほうが近隣の都市へ移住、空いた家を 11 に売却。	E、W、S2		近隣の村 15年前
13	パンディット <i>paṇḍit</i> 僧侶	11 年ほど前に、近隣の小村から来た。	E、W、S、 SW、D、SC3		近隣の村 11年前
14		パンディットの持ち物だったが、12,3 年前、外へ逃げた。父は賭博、一人息子はマリファナを吸っていた。11,12,13,15 の土地を少しずつ切り売りして、ついに全部売り払った。何人かの居住者を経て、10 年ほど前から私立学校になっている。		学校	10年前
15	パンディット <i>paṇḍit</i> 僧侶	近隣小村から移住。10 年前に 14 から買って、2 年前から住み始めた。	E、W、D3、 S1		近隣の村 10年前

16	クムハール <i>kumhār</i> 土器作り	元々の持ち主は都市へ移住。10年近くの間、家は壊れ、動物や泥棒が入り込み、人々はごみを捨て、荒れ果てていた。そこへやって来た近隣の小村の男性、周囲の人に事情を聞いて、土の家を建て妻と幼い息子たちを連れ、住み始めた。少しずつ裏の土地に手を加えて元の家より広くし始め、役所に自分の名前で税金を納めた。さらに10~15年ほどして元の持ち主が現れ、ここは自分の土地だと主張したが、税金記録でもそこはクムハールの土地となっていた。いくつもの部屋がある広い家の中で、エゴ夫婦と未婚の娘、2人の息子の家族が、かまどを別にし居住空間を分けて暮らしている。	E、W、S2、SW2、D2、SC2		近隣の村 20年前
17	ロハール <i>luhār</i> 鉄鍛冶	この土地は元々18の一族の土地だったが、40年前に政府に徴収された。それを7,000ルピーでバニヤ <i>baniyā</i> が買っていた。17は村内の別の地区に実家があり、そこには弟一家が住んでいる。結婚後3の家に賃貸で住んでいた。16,7年前に14,000ルピーで17の土地を買い、4年前から家を作り始め、2010年ごろから住み始めた。現在は3人の息子が住み続けることを想定して、家の建て増しを計画中。	E、W、S3、D1		同地区 16,7年前
18	パンディット <i>paṇḍit</i> 僧侶	「ここの人」。大きな一族が近隣の土地をほとんど所有していたが、親戚たちが次々と都市へ出ていっては相続した元の屋敷を売り払ったことに恨み節。	E、W、S3、D2		在地
19	テーリー <i>telī</i> 油絞り	近隣の小村から移住。18の一族の娘婿が13年前に9,000ルピーで売った。最近ここに住んでいた兄一家が出稼ぎに出たので、代わりに村から来た弟一家が住むようになった。	E、W、C		近隣の村 13,4年前
20	パンディット <i>paṇḍit</i> 僧侶	元々の持主であるが、近隣の都市に移住。空き家となった土の家が壊れたので、レンガの家に建て直し中。		空き家	在地
21	ヤーダオ <i>yādav</i> 牛飼	「ここの人」。家屋も含めて何も変わらず。	E、W、S2		在地

22	ヤーダオ <i>yādav</i> 牛飼い	35年ほど前に買った。事情は10を参照。別地区から買って買った家を少しずつ広げ、今は3人の息子が壁を作ってそれぞれの家族で暮らしている。	E、W、S3、 SW3、たく さんの子 供たち		別地区 35年前
23	ゴース <i>ghoṣ</i> 牛飼い	斜向かいに住んでいるパンディットのFが、結婚しなかったFBSのものであった家を相続し、近隣小村の人に売った。	E、W、S2		近隣の村 15年前
24	パンディット <i>pandit</i> 僧侶	「この人」。父は2人兄弟で、共に暮らしていた。兄のほうは結婚しなかった。弟のほうには息子が一人、彼が今の家長で、個人塾の教師をしている。彼には息子はいない。	E、W、D1		在地
25	ターコル <i>thākur</i> 戦士	18の一族の土地だった。30年ほど前に、近隣の小村から移住。	E、W、S2、 D1		近隣の村 28年前
26	ヤーダオ <i>yādav</i> 牛飼い	26の父は、村内の別の地区の金持ちだった。FBはパパで、一人で今の家に住んでいた。父は母を焼き殺し、遊女と共に財産をすべて売って外へと出ていった。26の姉は当時結婚していた。26は当時10歳くらいだったので、叔父のパパと共に住むようになった。叔父が死ぬと、土地建物が残された。26は都市へ行き、寺院の前でプージャ用品の商売を始めた。そこで恋に落ちた。相手は上位のジャーティの娘だったが、結婚した。故郷の村の家が10数年を経て壊れているという話を聞き、20年ほど前に、2人の小さな娘を連れて帰ってきた。そして家を建て直し、村の女神寺院の前で店をしながら暮らしている。	E、W、D1、 S2		別地区 20,1年前
27	ナイ <i>nāī</i> 床屋	元々隣の地区の広い家に住んでいた。夫が病気になったので、葉代のためにその家を売り、外へ出ていったバライーの土地を42年程前に買って小さな家を建てた。	E、M、W、 S2、D2		別地区 42年前

※ EはEgo、家長の男性。CはChildren

※ 2012年現在、ただし「～年前」という語りはおおよそ

まず、27軒のうち4軒が空き家であるが、いずれにおいても、現在の持ち主か近所に住む親戚が時々帰ってきては、メンテナンスを施したり境界を接する別の家族の侵食を見張ったりしている。事実、[26]の家族はかつて外部の都市に住んでいたが、故郷の家が荒れ果てているという連絡を受けて、家族で帰ってきた。このように、元の家を売却しないかぎり、たまに様子を見に来ることが重要となる。なぜなら、[10]、[16]、[22]などのように、上手く空き地（実際は他人の土地）を侵食して自分の家を広げることに成功した例もあるからである。特に[16]は、税金こそ納めているものの、他人の土地を全く無償で手に入れ、今ではこの地区でも一、二を争う広さの家を持っている。そうなってしまうと、数十年後に元の持ち主が帰ってきていくら自分の所有権を主張しても、その道理は通らなくなってしまう。[5]の家族はスキャンダルがあって外へ出ていったが、いずれは過去を清算してA村の家に帰ってくる予定である。だが、家の隣接する[4]の家族が境界を侵食しているという状況をA村に残る弟から聞き、移住先のパンジャーブ州から急いで帰ってきたため、まさに塀が立てられる直前に侵食をくい止めることができた。だが、油断は禁物である。今度はその弟家族との間に、境界をめぐる喧嘩が起こったのである。

スキャンダルによってA村を出ていかざるを得なかった例は、上記の[5]もあわせて4軒ある。そのうちの2軒はブラフマンの大きな家だったが、元の持ち主は完全に出ていき、現在では8軒の家に分割されている。また5軒の家は元々[18]の家族が所有していたが、分割相続した兄弟たちや姉妹の夫たちが外の都市へ移り住んだので、A村の相続した家屋を自分の権利がある部分だけ売り払った。現在もいる[18]の家族は、かつての自分たち家族の土地が細切れにされ、低ジャーティの人々が新しい家を建てて住んでいくのを苦い思いで見ている。[18]の家族が所有していた、堅く小さなレンガで造られ細かい装飾が施された古いタイプの優雅な家屋は途中から壊され、削られ、大きく安価なレンガで作られた新しいタイプの家屋と接合されているのだが、その新しい家のほうが大きくて立派に見えるのだ。この家族の10代後半の次男は語る。

都市へ出ていったチャチャ（*cācā*、FB）たちがみんな売ってしまったんだ。でもこの辺りもまた、パンディット（ブラフマン）たち³⁵が多く住むようになってきて[3]と[15]が最近移住してきたことに関して]、ちょっと良くなってきた³⁶。

妻の実家、もしくは妻の実家の近くに家を構えた例が27軒中3軒。結婚した兄弟が共に住んでいるのが27軒中3軒。このことから、調査地では夫方居住が一般的ではあるが、絶

³⁵ 四姓制度最高位のブラフマン・ヴァルナ。ブラフマンの中にも複数のジャーティが存在するが、調査地の低ジャーティの人々からは、「パンディット（学者の意）」と呼ばれ、多くの場合まるで一つのジャーティかのように語られる。

³⁶ 調査地では近所に持つべき人として、パンディット、医師、教師などが並べて挙げられている。また、パンディットたちは浄性が高く儀礼執行が可能であるだけでなく、クシャトリア・ヴァルナと異なり穏やかな性格をしているというイメージがある。

対に守られているというわけではないということがわかる。また、両親と既婚の兄弟とその妻たちと子供たち、そして未婚の姉妹で共に住むという大家族は、調査地のイメージとしては一般的だが、実態としては少ないということもわかる。[11](#)や[17](#)などは兄弟と世帯を分けるために積極的に新しく土地を買い、家を建てている。

こうして小さな地区を切り取っただけでも、そこには、世代を超えてより良い生活を求める人々の姿が見えてくる。彼らは生活をよりよくする条件を求めて、移住を厭わない。それは部分的・一時的な場合もあれば、恒久的な場合もある。それと同時に彼／女らは、村や元の家に残る他の兄弟たちのことはあまり省みずに、自分たち家族の再生産と社会上昇に関心を持っていることがわかる。それゆえ本論文では、父系リネージという意味での家族や経済的な世帯をあらかじめ設定するのではなく、つながりの基点として事後的に輪郭を現すものとして家族を捉えようとするのである。

2.3 ヴィシュワカルマ (Vishwakarma)、ロハール (*luhār*)

本節では、D家のジャーティについて説明をし、地域社会の中に位置づける。D家の人にジャーティを尋ねると、「ロハール」あるいは「ヴィシュワカルマ、ロハール」と返ってくる。ローハー (*lohā*) は「鉄」という意味で、ロハールは鉄鍛冶を伝統的職業とするジャーティである。調査地においては、鋤や鍬などの農具や牛車の車輪、包丁などの製作・修理をしている。

ヴィシュワカルマは神々の職人の名称であり、職人の神である。彼は全世界の製図者であり、神々の宮殿の建造者であり、神々の乗り物や武器の製造者である。また彼自身が職人たちに篤く信仰される神でもある。ヴィシュワカルマ神には5人の息子がいて、それぞれの子孫が鉄鍛冶、木工職人、真鍮でできた礼拝道具などを作る職人、石工、金銀細工師になったと言われている³⁷。この神の絵には、白い髭をたくわえた老年のヴィシュワカルマ神の周りを5人の息子が囲み、外側に様々な道具類が描かれているものが多い。

ロハールがヴィシュワカルマの中で最高位のジャーティである。毎年9月半ばのヴィシュワカルマ・ジャヤンティー (*jayantī* 記念日、生誕記念日)の日には、インド各地でヴィシュワカルマ・ジャーティを中心とした職人やものづくりに携わる人々、工場などが、普段使っている仕事道具などを並べてプージャを行う。X町にはヴィシュワカルマ寺院があり、この日には近隣のヴィシュワカルマの男性たちが集まる。また、D家の息子たちはFacebookを通じて遠方のヴィシュワカルマたちとつながっている。一度、三男のアトルのところに、

³⁷ 2011年7月、ガネーシュの語り。また多くのヴィシュワカルマ・コミュニティのホームページでもそのように紹介されている (<http://www.vishwakarmasamaja.com/aboutus.html>, <http://www.vishwakarmamahasabha.com/inner-page.html>, 2015年10月20日閲覧)。

北西インドのラジャスタン州の州都ジャイプールに住む 40 代のヴィシュワカルマの男性から電話が来たことがあった。Facebook の連絡先を見て電話してきたとのことだった。アトルは自分がインテリアデザインの仕事をしていることや、父のガネーシュがかつてジャイプールで仕事をしたことがあるということを伝え、何か仕事があったらぜひ声をかけてくれるように頼んだ。

ある日、人気テレビドラマ『クリシュナ』(Krishna、1993 年～、監督 Ramanand Sagar) の DVD を観ていたとき、クリシュナの親友スダマの宮殿を造ったヴィシュワカルマ神が登場した場面で、ガネーシュは部屋の外にいた私を急いで呼び、ほら、これがヴィシュワカルマだよ、と示した。ガネーシュはヴィシュワカルマという自身の名前をスッドウ (*suddh* 純粋な、清浄な) なものと言い、誇りを持っている、と語っている。

ロハールは UP、MP の両州において OBC に認定されている。しかしある人々は、ヴィシュワカルマは古代や中世においてはブラフマン・ヴァルナのような高い社会的地位にあり、後に外国からの侵略者などの影響により経済的状況が悪化し、地位が徐々に低下していったと主張している (<https://www.facebook.com/VishwakarmanGoldsmith>、2015 年 10 月 20 日閲覧)。またマハラーシュトラやグジャラートの一部のヴィシュワカルマたちは、自分たちはブラフマンであると主張している (<http://www.lohars.org/>、2015 年 10 月 20 日閲覧)。事実ロハールは、OBC の中では地位が高いほうだと D 家の人々は語っている。

内婚単位はヴィシュワカルマではなくロハールであり、ロハールのジャーティを超えた婚姻は一般的には結ばれない。

2.4 D 家の移住の軌跡

ガネーシュの父方の実家は、A 村からさらに車で 20 分ほどのところにある。A 村から周囲に広がる畑の中を延びる道を 15 分ほど行くと、小さな L 村が見えてくる。ほとんどの家屋が土でできていて、かなり「遅れた」村に見える。そこからさらに奥へ 5 分ほど進むと、もう一段階小さく、もう一段階「遅れている」集落が見えてくる。ここが M 村、ガネーシュの父の出身村だ。実家には今、ガネーシュの父の兄の息子兄弟 2 人が住んでいる。入ってすぐの建物はロハールの伝統的職業である鉄鍛冶の作業部屋だが、彼ら兄弟がそこで働いているところを私は見たことがない。弟は主に畑で働いており、兄はもっぱら家の前でトランプの賭け事をしている。

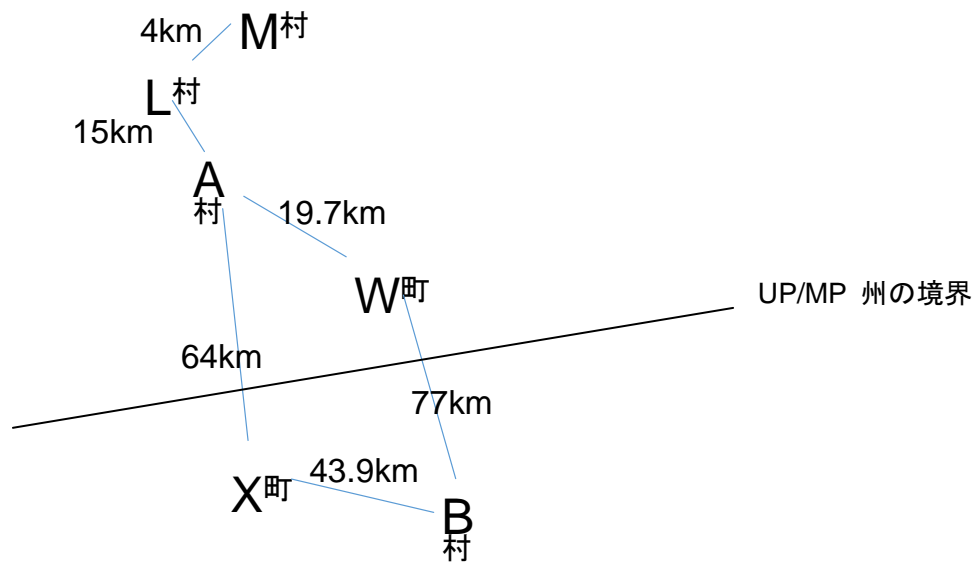


図 2-3 町村の位置関係の概念図

(距離は自動車道を通った時のおおよそのもの、筆者作成)

ガネーシュの父ダダは M 村のこの家で生まれ育った。しかしある時、突然軍隊に勧誘された。おそらくインド独立後、数年経ったときのことであったと思われる。その後、A 村出身のダディーと結婚し、軍務でインド各地に赴任した。その間 A 村のダディーの実家のすぐ裏手に住んでいた、同じロハールの一人暮らしの身寄りのない男性の世話をし、彼が死んだときには土地家屋と家財道具を相続した。この男性は結婚をしておらず、近しい親戚もいなかったという。その代わり、すぐ隣に住んでいた同じジャーティの家族の娘であったダディーを、自分の娘のように可愛がっていたという。その縁もあって、ダディーとダダは老人の世話をし、亡くなる前には土地と家屋、および一切の家財道具の目録を作り、ダダの名前で登録、所有するに至った。M 村の家に住む兄と世帯を分ける意味もあったのだろう。ダダ自身は、彼の祖先たちや親族が行っているような鉄鍛冶の仕事はしていない。そして除隊後、ダダは A 村の家に居を構えたが、数ヶ月後に不可解な事故で死んだ。ダダが死んだ時、ガネーシュは 2 歳だった。それ以来、家族はほぼダディーに入る軍人恩給だけで生活してきた。とても貧しい暮らしだったという。ガネーシュは当時の思い出を語る。

お母さんがね、寒季になると近所の人に古い毛糸や破れたセーターなどをもらいに行くんだ。そしてそれらをほどいて、洗って、私のために一着セーターを編んでくれるんだ。私がお母さんが着たセーターは、次の年には妹のものになる。

ガネーシュより 10 歳近く年上の兄は、ずっとガネーシュたち家族の父親代わりだった。

そんな兄が選んだのは、鉄工ではなく木工の仕事だった。木工は調査地においては主にベッドや椅子などの家具作りに携わる。鉄工と木工では伝統的職業で見れば同じヴィシュワカルマの子孫でヴィシュワカルマを名乗っているが、ジャーティが異なり、鉄工のほうが高位である。一方、特別な作業場が必要な鉄工に対し、木工は道具と素材があればどこでも仕事をする事ができる。父の代で途切れた鉄鍛冶業を兄の代で再開することは難しかったのかもしれない。兄は、木工の仕事をしていたムスリムの男性を頼って X 町へと移っていった。ダディーと喧嘩をしたのも移住の原因だったとガネーシュは言う。そんな兄より 10 歳近く年下のガネーシュは、A 村の公立学校で 8 年生まで勉強した後、X 町で働いていた兄に呼ばれ、兄の下で同じ木工の仕事をしたのだった。今では親戚の中でガネーシュの家族だけが木工の仕事をしている。

M 村に住むガネーシュのイトコ兄弟は、前々からガネーシュに、共同で畑を買うことを提案している。彼ら兄弟のうちの兄は独身で子供がおらず、弟には娘が 2 人いるだけだ。現在所有している畑にさらに買い足しても子供たちに相続させることはできない。なぜなら娘は「別の家族になってしまう」からである。それならば、今ガネーシュと一緒に畑を買えば、今はこの兄弟が耕作をし、将来はガネーシュの息子たちに相続させることができる。この考えをガネーシュとカジョールは気に入った。ガネーシュにとっては、土地を持つということが一つの夢だった。15 歳で家を出て兄の下で職人になってからというもの、自分の土地を持ち、自分の家を持ち、自分の店を持ち、そして畑を持って³⁸、やっとなんか、将来いつか食えなくなるかもしれないという不安から解放されることになる。彼はそれを望んできた。激情型の性格の兄が死ぬまで、少なくともガネーシュは A 村の家を自分の家だと完全に考えることはできなかった。そしてカジョールにとっても、「畑を持っている」と言えることは子供たちの結婚相手探しにおいて重要なことだった。

カジョール「ここでは結婚相手探しの時に絶対に畑を持っているかどうか聞くのよ」

私「でもみんながみんな農家ではないでしょ？」

カジョール「まあでも農家じゃなくても畑は持ってるけどね。でも、重要なのは畑を持ってるかどうかじゃなくて、ちゃんと働く男の子かどうかでしょ？ 畑が自然に収穫物を実らせるわけじゃあるまいし。なのにこの人たちったらもう」

イトコの弟「ああ、もし畑があったら今頃子供たちみんなの結婚が決まっていたよ」

私「お父さん（ガネーシュ）も畑を持っていないね」

そう指摘した私にカジョールは、自分たちの婚姻についての思い出話で答えた。

³⁸ この場合、畑を持つということは必ずしも自身で耕作するということを意味しない。農業労働者と契約して収穫の分け前を与えるという方法が調査地では広く行われている。ガネーシュのイトコたちもそのようにして農業労働者と契約している。

カジョール「そう、私の義兄（長姉の夫）が X 町のお父さんの仕事場まで行ってきてきたんだよ。で、同じジャーティで姉たちと同じ X 町に住んでいて、よく働く男の子だ。それだよ。畑とか家とかそんなの昔は聞かなかった」

ガネーシュ「お父さんはその時下着姿で集中して仕事をしていたから、誰かが自分を見に来たなんて気づきもしなかった」

2人が結婚したのは、ガネーシュが 19 歳、カジョールが 15 歳のときだった。カジョールの家族にとっての決め手は、勤労だということ、カジョールの姉も嫁いでいた X 町に住んでいるということだった。またカジョールの家も姉妹が多くて貧しく、その点でもガネーシュとつりあったのだろう。婚姻儀礼はカジョールの村で行われ、新婚生活は A 村で営まれた。ガネーシュは仕事の合間に A 村の家に戻ってきては一緒に暮らしていた。当時の生活をカジョールは懐かしく思い出す。A 村の家にはまだ結婚前のガネーシュの妹がおり、カジョールは彼女のことを大好きだった。また近所の女の子たちや嫁たちとも仲が良く、いつも声を掛け合いながら、一緒に座ったりお喋りをしたりして、楽しく過ごしていた。当時 A 村にあった映画館³⁹に映画を観に行ったのが、カジョールの映画館初体験だった。しかし厳しかったのが姑のダディーである。ダディーはカジョールのダヘージ（*dahej*、結婚持参金・財、第 3 章に詳述）が少なかったことに対して文句を言い、結婚してから実に 3 年間もカジョールが作ったローティー（*rotī*）⁴⁰を食べなかったらしい。ダディーは激しい性格の持ち主で、ガネーシュともときに大きな喧嘩をした。やがてカジョールが第一子を妊娠し、臨月が近づいてきたとき、ガネーシュはこんな状況ではカジョールはとても安心して出産できないと決心し、身重の妻を連れて X 町へやってきた。そして彼女は X 町で、長男のアーカースを出産することになる。

小さな部屋で始まった 3 人の生活を、やはりカジョールは懐かしく思い出す。中庭を囲んで隣り合って暮らしていた人々はみな親切で、幼いアーカースの面倒を誰にでも見てもらえたし、時間があれば同じ町に住む姉妹たちのところへ訪ねることもできた。しかしそんな生活もすぐに終わりを告げる。性格の激しかったガネーシュの兄と、やはり性格の激しかった兄嫁とガネーシュが仲違いをし、ガネーシュは仕事仲間から追い出されたのだ。彼らは、たった一つのスーツケース⁴¹に荷物を詰めて、まだ幼い長男のアーカースを連れて、全く知り合いのいない B 村へ移住した。ガネーシュはそれ以来兄の元から離れて自分で仕事をするようになった。当時の苦労をカジョールは語る。

³⁹ A 村の映画館はその後なくなったが 2013 年に復活した。

⁴⁰ 小麦やその他の穀物の粉を水で練り薄くのして火であぶったもの。調査地の主食。

⁴¹ このスーツケースは今でも B 村の D 家に置いてある。

知り合いも誰もいなくて、しかも姉妹たちからも離れて、泣いてばかりだった。しかも昼間は夫もいないし。歩き始めたアーカースを紐でベッドに縛り付けて、その間に井戸に水を汲みに行っていたんだよ。でもアーカースは小さい時すごく可愛くて、旅行者に写真を撮られるほどだったんだよ。

それから 30 年、ガネーシュは必死になって働き、時に病気や深刻な事態、友人の裏切りに合いながらも、今の生活、今の家族を築いてきたと語る。その間、兄の息子のハリーが生まれてまもなく兄嫁が死に、長女のバルサを懐妊する前に妹が死に、長男アーカースの結婚の直前に兄が死に、アーカースの娘チョーティーが生まれてすぐにダディーが死んだ。

兄は X 町で大きな家具の作業場兼店舗を持っていたが、あるとき大怪我をし、店をすべてたんで A 村の家で一人暮らしをしていた。その兄が死んで、A 村の家はガネーシュと兄の息子ハリーのものになった。ガネーシュとカジョールの目標、そして D 家の子供たちが大きくなってからは彼らの目標、すなわち家族の目標は、B 村あるいは X 町に自分たちの家を建てることであった。そしてガネーシュの兄の死という不幸の結果、何はともあれガネーシュとカジョールは、将来住む場所がなくなるのではないかという大きな不安からは解放されることとなったのである。

2.5 インドの新経済政策

ガネーシュの兄が仕事を始めたのが 1960 年代、ガネーシュが仕事を始めたのが 70 年代後半、結婚は 1983 年ごろである。イギリス植民地から独立後のインド経済と人々の生活は、1980 年代から漸次始まった一連の新経済政策をターニングポイントとして語られる。

1947 年の独立直後、インドはそれまでの植民地的低開発状態からの急激な成長を目指した (Dhingra 2010:81)。また、植民地時代にイギリスからの安価な繊維の流入が繊維産業に打撃を与えた経験もあり、貿易に頼らず世界市場から自立する必要があると唱えられていた (二階堂 2009:6)。ネルー政権は社会主義的な 5 ヶ年計画のモデルを用いて、これらの目標を達成しようとした。

当時のインドの経済政策の特徴は、計画経済とパーミット・ラージ (Permit Raj あるいはライセンス・ラージ License Raj) と呼ばれる、政府による産業許認可制度だった。すなわち、すべての主要・基幹産業は公共部門が担い、大規模産業に民間投資するには政府のライセンスが必要であった。大規模な事業主がそのビジネスをリノベートまたは拡大する時にも政府の許可が必要であり、輸入も政府の割り当てやライセンスを得たものしか許可されなかった。あらゆる銀行や大規模金融機関、証券取引は政府の統制下にあった。多国籍企業はインドに生産拠点を持たず、海外からの技術提携や資本提携も制限されていた。ま

た関税率も非常に高く設定されていた。その結果インドは、食糧の自給ばかりでなく工業製品の自給もほぼ達成するなど（二階堂 2009:12）、強固な国内産業基盤を築いたが、この社会主義型の経済政策は功よりも罪のほうがはるかに大きかったと言われている。事実、60年代前半まではインドは計画経済にそって高い経済成長を実現してきたが、60年代半ば以降、国境紛争や天災、指導者の暗殺などの政治的・経済的困難により、経済は混乱状態に陥ったのである（清水 2006:31）。それに加えて、インド型開発戦略がもたらした高コスト体質や技術的遅れは決定的なものとなっていた（二階堂 2009:12）。

国際収支の悪化を受けて80年代から漸次経済自由化が進められてきたが、この時期の経済自由化は、それまでの制度の枠組みを維持したままでの部分的自由化であった（清水 2006:31）。本格的な経済自由化前夜のインドでは、国内産業は非効率的となり、国際競争力を失っていた。農業生産率も低く、経済全体が成長力を失っていた。輸出を増進できなかった一方、輸入の需要は高まり続けていたため貿易赤字が拡大し、ついには外貨準備が底をついた。政府の財源が不足し、支出を補うために紙幣を増刷した結果、破滅的なインフレーションが起こった。失業、貧困、インフレーションが常に問題として存在していた。

このような状況を背景として、1991年6月に就任したナラシンハ・ラオ（Narasimha Rao）首相とマンモーハン・シン（Manmohan Singh）蔵相は、債務危機を克服するため国際通貨基金と世界銀行の構造調整プログラムを受け入れ、本格的な経済自由化に転換することを決定し、ただちに経済改革に着手した。これらはそれまでの体制を根本的に変革するものであり、危機に迫られての転換であった（清水 2006:31）。まず、産業許認可制度がほぼ撤廃された。価格・配給統制が廃止され、生産者は生産規模や生産物の水準を自由に決められるようになった。またインフラストラクチャー産業も含めたすべての経済が民間資本に開かれ、戦略的に重要な分野以外の公共部門の独占は廃止された。さらに対外開放政策が推進された。国内市場が多国籍企業に開かれ、外国企業との技術提携や資本提携も認可されるようになった。ほぼすべての商品の輸入が自由化され、輸入関税率が大幅に引き下げられ、外国為替に関する規則も大幅に緩和された。

つまり、1991年からの経済政策は、自由化、民営化、国際化を軸に実施されたのである。その結果、経済成長率は上昇することとなった。また、国内生産物の構成が変化し、国内総生産が増加した。外国との貿易、外国からの資本・技術流入、外貨準備金が増加し、外国商品が手に入るようになり、それに伴って科学技術も発展した。また急激な経済成長の波及結果として、交通輸送システムが発達した。さらに銀行、保険などの金融ビジネスも発展し、零細分野へも貸付が行われるようになった。

その一方でネガティブな評価としては、新経済政策の直接的恩恵が一部に偏っていることがあげられる。多くの国民がなお貧困の中にあり、産業構造の変化が必ずしも広い層のための雇用と結びついていないといったことが指摘されている。さらに国民の多くが従事する農業面での失敗やインフラ整備の問題、そして環境問題は、今後の持続可能な発展を妨げる可能性があると考えられる（Dhingra 2010:81-97）。

雇用に関するデータには限界はあるが、高成長が実現しているにもかかわらず巨大な労働力を吸収するだけの十分な雇用機会が創出されていない状況が指摘されている（岡橋 2009、清水 2009、二階堂 2009）。1993 年と 2004 年を比較すると、雇用者数の増加率は労働力人口の増加率を下回っており、結果、失業率は増加している（清水 2009:65）。また、企業が労働節約的な技術を採用する傾向にあるということも指摘されている（二階堂 2009:13）。その状況は、「雇用なき成長（Jobless Growth）」（二階堂 2009:15）とも言われる。

しかし、全体としては一連の新経済政策の功は罪をはるかに上回っていると考えられ、その後政権与党が変わっても、経済の自由化、民営化、国際化の基本路線は引き継がれている。91 年以降の改革の結果、インド経済は過度な官僚統制から解放され、活性化してきているといわれる（清水 2006:38）。このことは人々に、外国製品の自由な購入が可能となったこと、また新しいタイプの職が創出されたこととして経験された。さらにこれらの経済政策の変化は、波及的に様々な分野へ影響を与えたと考えられている。しかし経済自由化はまた、貧富の格差の拡大、産業間・地域間の格差の拡大など様々な歪みをもたらしていると指摘されている（清水 2006:38）。私が調査したのは、そのような経済自由化後のインドである。そして D 家の父ガネーシュも、生活の変化、仕事内容の変化を経験してきた。

2.6 兄弟間、家族間、世代間の再生産戦略の違い

2.6.1 機会へのアクセスと可能性の拡大

A 村に住む D 家と同じロハール・ジャーティのラクシュマンは、3 人兄弟 3 人姉妹の末子である。彼らの家族は D 家と普段から家族ぐるみの付き合いをしている。ラクシュマンは、自分たち 3 兄弟の現在の境遇の差に不満を感じている。父親は、先祖や親族と同じく鉄工であった。畑は持っていない。ラクシュマンは土造りの比較的大きな家に住んでいるが、それは末子である自分が親の家を受け継いだからである。彼はまた、家に付属している古い鉄鍛冶の作業場や道具も相続し、鉄工の仕事をしている。仕事内容は主に農作業具や包丁などの修理や、井戸のメンテナンスのための部品作りなどである。

長兄は県都である W 町に移り住み、オートバイの代理店を経営している。彼はコンクリートの家に住み、最近長男の娘を鉄道会社勤務の男に嫁がせた。「兄はお金を持っているから」それが可能だったのだと、同じ年頃の娘を持つラクシュマンは言う。長兄の家族は年に一回の家のプージャの時、ラクシュマンが住む先祖伝来の家に帰ってくるが、土でできた家とそこに住むラクシュマン一家の暮らしぶりを明らかに見下した態度をとり、プージャとその後の会食が終わると、同じ A 村に住む次兄の新しいコンクリート作りのきれいな

家へ寄るためにそそくさと帰っていく。

この家のプージャには、近所に住む次兄一家は来ない。ラクシュマンと次兄の間にはもう何年も交流はない。次兄はやはり鉄工であるが、妻が公立教師である上に、家とは別の場所に店を持ち、アメリカとドイツからの技術者と共に井戸改修の仕事をし、所有するカメラで彼女たちと写真を撮り、家にまで招待した。その時の写真はアルバムに収められ、フィールドを再訪した私に一番に見せられた。次兄は実は最初の妻と死別している。その後、左手に障害を持った女性と再婚した。彼女にとっては初婚だった。彼女は結婚後、障害を持っているという留保⁴²も使って公立小学校の教師となった。十分な給与を稼ぎ、自分の子供たちを私立学校に通わせている。

そんな兄たちの家族に対して、ラクシュマンの家族は明らかに差がついてしまった。そして兄弟仲も悪化した。土造りかコンクリート造りかという家のつくりから、職業や、公立か私立かという教育格差、娘たちのハイヒールの靴などの服装、バイクやカメラなどの持ち物、婚姻を結ぶ相手、外国人や都市の住民など先進的な人々との付き合いにいたるまで、長兄・次兄の家族とラクシュマンの家族の間には明らかな優劣を含む差異があるのだ。

ガネーシュは2011年、オーストラリア企業のダイヤモンド鉱山会社の現地雇用者のための住居の部屋に置く家具を作る仕事をチームで請け負った。その仕事には三男のアトルと、短期間だけ甥のハリーも参加した。彼らは仕事の内容よりも、そこで経験した外国的な仕事の進め方、その方式に感動したという。定時の朝礼、ヘルメットと眼鏡着用の安全対策（それらはもちろん無料で配られる）、大量のミネラルウォーターのボトル、好きなだけ飲むコールドドリンク、現場までの車で送迎、しかも運転手は若い女の子、そして決まった喫煙場所でしか煙草を吸ってはいけないというルール。道具もすべて貸し出され、規定の物を作るよう指導された。「何もかもシステムで動いていたんだ。私はシステムで仕事をするのが好きだ」と、ガネーシュはシステムという英語の単語を使って興奮気味に私に語ってくれた。その中で彼らは、たった1日だけ、ヴィシュワカルマ・ジャヤンティーの日に仕事を休んでプージャをしたことを誇らしく語る。さらにこの仕事ではもちろん圧倒的に良い給料がもたらされた。D家は150,000ルピーのスズキの中古ワゴン車を買った。

ガネーシュは、仕事にラクシュマンも連れていった。彼は木工職人ではなく鉄工職人なので木工の仕事は何もできなかったが、作業場を掃除したり道具を手渡したりと、補助的な仕事をするために連れられたのだ。それはガネーシュの、親友への優しさと人助けだった。

しかしラクシュマンは結局、わずか1ヶ月で現場を離れることになった。無料の熱いチャイとコールドドリンクを替わりばんこに飲み、肉でも菓子でも出されるものは残さず何

⁴² 1995年障害者法（Persons with Disabilities (Equal Opportunities, Protection of Rights and Full Participation) Act, 1995）の第39条には、「すべての公立教育機関および政府からの支援を受けているその他の教育機関は、障害者に対して3パーセントを下回らないポストを留保しなければならない」と書かれている（浅野 2011:84）。

でも食べた結果、体調を崩したのだ。さらに喫煙所でなければ煙草を吸ってはならないというルールをなかなか守ることができなかつたので、ガネーシュを通して会社の人に怒られる始末だった。しかもガネーシュは、ラクシュマンがそれでも持ち帰ったかなり大きな額の賃金を、それまで彼の家になかつた便所を作るために使うと思っていたのだが、ラクシュマンと家族は、そのお金を「なんだかよくわからないこと」のために使ってしまった、わずか数ヵ月後にはもう手元に残っていなかつた。年頃の娘たちや妻が毎日外へ用を足しに行っているというのに。これが、「あいつは駄目だった」とガネーシュが言う、一連の理由である。つまりラクシュマンは友人の助けにより外国企業の仕事にアクセスする機会は得たが、その方式に対応することができず、その成果を未来に投資することもできなかつたのだ。

その一方で、仕事の現場に行ったガネーシュと三男のアトルは、今回初めて、自分たちの仕事につながりうる地点を見出した。そのつながりうる地点とは、先進国と見まがうばかりの方式と、一気にミドルクラス⁴³の下限に加われる給料であった。そして、一回経験すると、当然次も同じような仕事に来ることを期待する。その期待はカジョールたちも含めた D 家全体で持つことになる。つまり大きな給料をもたらす外国企業との仕事が、今後も起こりうる可能性として彼らの人生に加わつたのである。それは前節で述べたインドのマクロな新経済政策の結果であるといえよう。

2.6.2 家族内の再生産戦略の違い

D 家の成員は、おのおの自らの生活と人生に関わることを互いの持つつながりの束を期待し、あるいは利用する。しかし、同じ家族内でもそれぞれの持つ条件や目標は異なる。そのような D 家の親子間、兄弟間、世代間の再生産戦略の違いは、ブルデューの言う文化資本と経済資本を使うと理解しやすいだろう。

元々ガネーシュは、職人仕事で稼いだお金を元手に、同じ資本構造を保持したまま社会上昇していこうとしていた。というよりはそれが唯一の達成可能な方法であった。つまり職人として稼ぎ、蓄えができたなら店舗を構え、設備投資をし、人を雇い、徐々にビジネスを拡大していくというモデルである。甥のハリーもまた、それ以外の戦略は思い描かなかつた。父が木工職人として X 町に大きな店舗を構え、多くの人を使って成功したのを見ているから、それが自分にも達成できる道筋として見えていたのであろう。ハリーの父は外に働きに出たときに屋根から落ちて怪我をし、その治療費のために X 町の店や残っていた商品をすべて売り払い、身一つで故郷の A 村の自分たちの家に帰ってきた。そしてそこで死んでしまったのだ。しかし怪我さえしなければ、ハリーの父、ガネーシュの兄、2 人の仕

⁴³ インド国立応用経済研究所 (NCAER: National Council of Applied Economic Research) の定義によると、ミドルクラスとは年間家計所得 20 万~100 万ルピーの家計を指す。

事の師匠であった彼は、木工職人として彼らが満足できるほどの成功を見せることができた。自分の店舗を持つということはガネーシュにとっての一つの成功モデルだった。兄よりもちょっとモダンな店にして、ただ慎重にやりさえすればよい。

その一方で、1人だけでも子供に公務員になってほしいという夢もまた、ガネーシュは持っていた。それは同時代の何億というインド人が持っていたものと同じ夢であり、具体的な達成の道筋が見えない夢でもあった。なぜなら長男のアーカースは、「お父さんは僕にもお父さんと同じ職人になってもらいたかったんだ、僕はそう言われて育ったんだ」と語っているからである。学校の成績が優秀だった長男に公務員になってほしいとは思っても、では具体的にそのためにガネーシュ自身が行為するかというと、それはできないのだ。

一方、ガネーシュの長男のアーカースは、経済資本を一回文化資本（特に学歴資本）に転換させ、弾みをつけての経済資本の増加を目指した。つまり彼は、父親の跡を継いで職人になるのではなく、大学へ行ってホワイトカラー職に就き、職人よりも多額のお金を稼ぐ、という道筋を思い描き、実際に大学に入学したのである。だが、そこに賭けたお金が少なかったため（これはアーカース自身の意見である）、そして途中の不慮の病気により、またマクロな制度的・経済的状况により、十分に資本を転換させきれなかった。アーカースは、自分自身で稼いだお金によって大学へ通い、さらに父の稼ぎが少ない時には家族の面倒まで見なければならなかったのだ。しかし、少なくとも家族の中で彼が始めたこのタイプの戦略が、家族の他の成員にも、そういった戦略が存在することを認識させることとなった。言い換えるならば、ガネーシュが漠として持っていた「子供に公務員になってほしい」という夢が、ようやく具体的な達成の道筋を示し始めたのである。それはすなわち大学に行って試験を受けるという方法である。自身は途中で勉学を中断しなければならず、したがって公務員にも会社員にもなれなかったアーカースであるが、後に公務員である公立学校の英語教師の女性と異ジャーティ結婚をし（第4章）、彼女の援助で学士号1つと修士号2つを獲得することになる。彼は今、慈善目的で運営されている私立学校の校長として安い月給を得ているが、インターネットで職を探しては登録を試みている。まだ諦めてはいない。

次男のリティクは、職人にならずに学問を続ける兄のアーカースの姿を見て、自分も同じ道筋と戦略をとることを決意した。彼もまた働きながら、時に兄のアーカースに助けをもらいながら自身で学費を払い、数学の学士号をとり、コンピュータのコースも1年間とったが、やはりその学歴を経済資本に転換させきれしていない。彼には職業に対するこだわりはなく、彼が正統的と認めるある範囲内に収まる職業（今まで彼が多少なりともエントリーを試みたのは、教師、IT企業社員、ホテルのマネージャー、英語観光ガイド、警察官、軍人などであり、それらは父ガネーシュの職人仕事に対置させられるものである）なら何でも良いと思っている。

三男のアトルは学歴資本の獲得競争から逃げ出した過去を持つ。そしてガネーシュの仕

事を手伝い、職人として社会上昇を目指すという戦略をとる⁴⁴。しかし職人の世界の中でも、椅子やベッドなどの家具を作る素朴な木工仕事を低く見ており、カタログからデザインを選び、工場製品の素材を使った、キッチンや壁棚のインテリアデザインこそが自分の仕事であるという。さらに、素朴な木工仕事が不得手であることを誇らしい口調で語りすらする。それらの仕事は、アトルにとっては後進的な時代や地域と結びつく仕事なのである。デザイン集は顧客に見せる為にタブレットに収められている。夢は自分たちが作っているようなインテリアの家を自分たち自身が持つことである。そのために、親友と共に別のビジネス（例えばレンタルバイク屋）を立ち上げることも考えている⁴⁵。しかし彼もやはり、経済資本から学歴資本への転換を通しての経済資本の拡大、そして社会上昇という基本的な道筋は認めている。彼は、長男アーカースが働きながら大学に通う道を選んだ時、それが一番早く自分たちの家を買える近道であると支持した。そして今では、自分の稼いで勉強してきた弟のアシスがもし就職してたくさん稼ぐようになったら、今度は自分がデザインの勉強をしに学校に行くと言っている。

職人の父に対し、長男と次男は高学歴からのホワイトカラー職を目指した。しかし近年のインドの成長率の鈍化の影響か、もしくはイメージするホワイトカラー職と彼らの持っている地方大学の学位が結びつかないのか、給料の安い私立学校の教員という職しか就けない。勤務時間は短く、給料は充分ではなく、彼ら 2 人は家庭教師のアルバイトもしている⁴⁶。一方で三男は、勉強を途中でやめ、父を手伝って職人となった。現在のところ三男のほうははるかに稼ぎは良い。

さて、それら全部を見ているのが、四男のアシスである。基本的に自分たちで働いて学費を稼いだアーカースとリティクとは違い、四男のアシスは学費や生活費を全部ガネーシュやアトルから出してもらった⁴⁷。ただしそんなに多くは払えないと言われ、学校卒業後は大学ではなく技術系学校のポリテクニクに行くこととなった。彼はそこを卒業してエンジニアとなり、首都デリー郊外で会社勤めをするようになったが、兄のリティクの結婚式のために退職したのを機に⁴⁸、ガネーシュとアトルと一緒に仕事をしたいと願っている。決

⁴⁴ 現在の彼は、「お父さんに仕事の助け手がおらず困っていたから、自分が手伝えることにした」、「インドの田舎の大学はひどく、お金をもらって単位をあげていて、何も勉強できないから大学には行かないことにした」というように、複数の理由を語る。母のカジョールもまた、「アトルも成績は良かったが、家族のために仕事をすることにした」と弁明をする。

⁴⁵ アトルや彼の親友たちの世代のこのような考えを、ガネーシュは、一気に金持ちになろうとする考え方で人生を甘く考えている、として批判する。

⁴⁶ 佐藤は、インドにおける教育のある若年の失業確率が高いこと、また、利用可能な労働時間を十分に活用できていなかったり、仕事量は十分であるが不十分な所得しか獲得していなかったりといった、不完全就業あるいは低雇用という問題があることを指摘している（佐藤 2004）。

⁴⁷ 1年間で Rs.36,000（内訳：部屋代（ルームシェア）500、コーチング 500、食費 1500、交通費・電気代・携帯電話代等 500）、年に 3 回試験の度に別途費用。公立なので授業料はほとんどかからない。

⁴⁸ 会社はデリー・ジャイプールロードの沿線 b にあった。月給は 6,500 ルピーからスタート

め手は稼いでいる額である。2つの修士号を持つアーカースよりも学士号を持つリティクよりもエンジニアリングのディプロマを持つアシスよりも、シニアセカンダリー⁴⁹の最終全国共通試験の会場から逃げ出したアトルのほうが、断然稼いでいるのである。しかも今や彼らは、外資系企業と仕事をした経験を持ち、車まで購入したのだ⁵⁰。それに比べて、アーカースやリティクが外資系企業の仕事をする日は来るのだろうか。

次男のリティクと三男のアトルはよく喧嘩をする。例えばリティクが靴を履いたまま神棚のある部屋に一步足を入れる。アトルがそれをたしなめる。それに対してリティクは怒る。そのときの決まり文句が、「お前は年下だろ。黙ってろ」である。しかしこの言葉を聞くと、微妙な緊張と戸惑いが生じる。なぜなら家族が今のような生活をさせてもらえるのはアトルのおかげだからである。経済的な面でも、家族に対する精神的な支援の面でも、リティクがアトルに対して優位を主張できるのは年齢だけである。しかしリティクは自分が将来ホワイトカラー職に就くことを疑わず、将来の逆転を信じて職人のアトルを見下す。父ガネーシュは、ここで仕事ができないのに外に行って仕事ができると思うな、と言う。一方で母のカジョールは、やはりリティクがホワイトカラーの正規職につく可能性が高いと思っている。そうこうしている間に、私が初めてD家と出会ってから6年が経ち、リティクはまだ何者にもなれていないのである。

だからこそアシスはガネーシュとアトルとともに働きたいと願っているのだが、しかしガネーシュはそれを拒むという。アシスは、会社勤めの技術者となって家族と暮らす家を離れ、生活費の高いデリー首都圏で暮らした結果、賃金がほとんど残らなかった経験から、会社員といっても必ずしもよいものばかりではないと思っている。アシスはリティクの婚姻儀礼のために帰郷した際の家族全員への土産代で、それまでの数ヶ月の蓄えをすべて消費してしまったのだ。両親や家族からは仕送りを期待されるが、彼に言わせればそんなことはとてもできる状態ではなかった。アシスとアトルは、「お父さんは古い方法で考えているけど、僕らは新しい方法で考えよう」という。ここでアシスとアトルが言う「古い考え」

し、8,000ルピーまで昇給していた。月5,000ルピーの部屋を5人で借りていたが、ほとんど貯えはできなかった。アシスはリティクの婚姻儀礼の前、仕事を辞めた。それは仕事をシャディーのために長期間休ませてくれなかったからである。たったの1、2日の休暇では家族への義務を十分に果たすことができないため、彼は仕事のほうを辞めたのだ。しかしその後、アーカースのせいで仕事を辞めたとも言っていた。アーカースはデリーの病院に入院していた時、同じくデリー近郊にいるアシスを頻りに呼び出していたのだ。

⁴⁹ インドの教育システムは、初等教育は1年生から5年生、上級初等教育は6年生から8年生で、ここまでが事実上の義務教育に相当するもの、初等中等教育は9年生から10年生で、後期中等教育は11年生と12年生である。これを修了すれば、高等教育機関への進学資格が得られる(岡光 2011:359)。

⁵⁰ このときのフィールド再訪の前、指導教員と調査地の人々の所有財の話をしていた。多くの家族がバイクを持つことを目指していることを話すと、指導教員は、じゃあ次は自動車だな、と言った。その時は、自動車だなんて今はまだ全然考えられない、と答えたが、中古であるにしても、まさかこんなにも早く自動車を持つようになるとは、その時は思ってもみなかった(2010年時点での会話)。

とは、公務員やホワイトカラー職を一段高いものと考え、職人仕事を十把一絡げに低いものとする、ガネーシュの考え方である。ガネーシュはいまだに、アシスが公務員になるという夢を諦めてはいないのだ。逆にアシスやアトルは、仕事の威信ではなく、純粋に稼いでいる額でその仕事を見ようとしている。アーカースとリティクという年長の兄弟と、アトルとアシスという年少の兄弟の間にも、考え方の差が見られるのである。

ガネーシュは、他人には長男の妻が公立の教師だと自慢していた。昔の知り合いなど他人に話るときは、子供たちはみな自慢の家族となる。息子はプリンシパル（校長）だ、もう一人はティーチャー（教師）、一人はインテリアデザインの仕事、もう一人はエレクトロニクスの勉強をしていて、娘はダンスをしていて寺院で披露するまでになった、今にダンサーになって、人にも教えるだろう、と。そこには英語の単語が並び、さらに威信を高める効果を与えている。しかし現実には、子供たちの職業に関してもたくさんの問題をはらんでいる。長男のアーカースは異ジャージー結婚後、別に暮らしているし、校長といっても慈善のための私立学校で給料も安い。リティクは教師といってもやはり給料の安い私立学校のアルバイトのような存在だ。しかも2人は教師という仕事を生涯の仕事と定めているわけでもなく、威信を獲得できる範囲内なら何でもいいから給料の高い仕事に転職しようとしている。アトルはインテリアデザインの仕事をパソコンなども使いながらこなしているが、昔ながらの家具職人としての仕事は低く見ており、やる気を持たない。ガネーシュは、末娘のバルサのダンスについても、他人の前では褒めるが、本人に対してはダンサーになんかなれるわけがないし、ならせもしない、と言っている。ガネーシュが望みをつないでいるのは四男のアシスだけである。ガネーシュの昔からの夢は、自分の子供の一人が公務員になることだった。はじめはその夢をアーカースに託した。次にリティク。そして今残ったのが、アシスである。ガネーシュの夢は子供の世代で叶うのだろうか。それとも孫の世代まで持ち越されるのだろうか。

2.7 それを見ている末の妹

家族みなのお話を、一番年下でいつも家にいる、家族で唯一の女の子バルサが聞いている。彼女は父、母、兄たちの振る舞いをじっと見て、考えている。彼女は兄たちの会話の隙間を見つけては、自分が稼いでみんなの面倒をみてあげるから心配するなというが、しかし誰もその話には乗らない。両親や兄たちには、そうやってほしいという気持ちとそうやってほしくないという気持ちが共存しているのだろう。自分たちのビンヌー（小さな女の子）には、働く女性になって稼いでほしいのと同時に、貞淑で幸せな良きヒンドゥー女性となってほしいのだ。

バルサ本人はダンサーか看護師になりたいと考えているが、みなが色々なことを言って

それを妨害していると感じる。妨害の1つ目は、自分がダンサーになりたいといっているのに、本格的なレッスンを受けさせてくれないことだ。バルサはダンスが好きで、得意で、家の中でもテレビのハリウッドダンスを見ながら踊っているし、古典的なカタック (*khatak*) ダンスなども独学で身につけてきた。今では学校などでダンスコンテストがあるときなどは必ず一等になるし、代表で踊る時も必ず選ばれている。自分には確実にダンスの才能があるのに、家族は誰も理解してくれず、習う機会も与えてくれず、それどころか踊ってばかりいるといって怒られ、テレビを消されて家の手伝いを命じられるのである。兄たちは掃除も洗い物も一切しないのに。

2つ目の妨害は、11年生に進む時、数学専攻にしろとアドバイスされたことだ。彼女自身は社会と英語が嫌いで、かといって数学も好きではなく、理科、特に生物が好きで得意である。そこでもし彼女が農業科目をとっていたら、農業分野では競争相手が少ないので簡単に公務員になれたであろうという目算である。しかし兄たち、特にアーカースやリティックのアドバイスに従って農業科目をとらなかった。これには近年のインドにおける数学偏重が影響しているだろう。

3つ目の妨害は、生物学を勉強しているので、看護師になるためのコースを大学で受けたいといっているのに、誰も本気で受け取ってくれないことだ。このアイデアはかなり良いもののように彼女には思われた。看護師になったら簡単に職が手に入る。職があるということは婚姻相手探しにも有利に働き、医者になる勉強をしている恋人とも釣り合いが取れるように思われる。また自分がお金を稼げば、大好きな家族に、一番小さな自分が家を建ててあげることができるかもしれない。彼女は、家族全員に一人一部屋（そこには私の部屋も作ってくれるらしい）、そしてすべての部屋にコンピュータとテレビがある、そんな家を自分がみんなにプレゼントしてあげてを夢想する。しかし家族の中でいくら彼女が未来の夢の話をしようと、当年中⁵¹になるであろう大学入学後に看護のコースをとりたいという具体的な話をしようと、家族はまじめに聞いてくれないのである。私から父ガネーシュにとりなしてくれるよう頼まれもするが、私が帰国した後、誰が自分の話をまじめに聞くだろうかとバルサは思い悩んでいる。

しかし彼女はまた、自分が女の子として兄たちとは違う条件・性質を持ち、目指すものも違うということを知っている。そしてその条件や性質、目指すもの、あるいは可能性と希望は、同じ女性である自分の母親とさえ全部は共有していないのだ。

2.8 女性の持つ資本

⁵¹ バルサは2014年のシニアセカンダリー最終全国共通試験を受けたので、2014年の夏から大学に登録することができる。この会話をしているのは、2014年の2、3月のことであった。

2.8.1 女性たちの条件の違い

本論文は家族に注目して婚姻を見ていく。個々の成員が持つ条件や可能性をもとに、外のものの内へと取り込み内のものを外へと出しながら、つながりを築きながら未来の良い状態へと向かっていこうとする時、そのつながりの束の基点として家族が輪郭をあらわす、そのようなものとして家族を捉える。本論文が注目する家族には、女性と男性が含まれる。彼らが持つ可能性のあり様、そして外から内、内から外という移動に関してのみ、ジェンダーに注目することになるが、本項では、ダディー、カジョール、ナミータ（長男の妻）、ニートゥ（次男の妻）、そしてバルサという、D家の家族の境界をまたいだ（またぐであろう）女性たちが持つ性質、資本、可能性を説明する。それらがD家という家族を未来へと動かしていく機動力の重要な一部となる。

ダディーは、私が最初にフィールドに入ったころ、地域で一番の年寄りとして有名だった。2008年当時で94歳だといわれていたが、本当の年齢は本人も知らない⁵²。A村で生まれ育ち、軍隊勤務だった夫と数年間国内各地に住んだ時と、年をとってから息子の住むB村に短期間住んだ他は、ずっとA村で生活してきた。小柄だが気の強い、美しい目をした女性だった。何も知らない私を教え、叱り、カジョールに告げ口していたのがダディーだった。ダディーは読み書きができず、また細かい数字も数えられなかった。例えば22という数字があると、20と2だよ、と教えてあげなければ理解できなかった。夫と共に自分が生まれ育った家の近くに居を構えたが、若くして4人の子供をかかえて未亡人となり、すべての装飾品を夫の遺灰と共に河に流してからはシンプルなサリーのみを身にまもって生きてきた。晩年は痩せて小さかったが、若い時には嫁のカジョールよりも太っていて逞しかったらしい。また彼女の声は遠くまでよく響いたという。娘の一人と息子の一人を自分よりも先に亡くしたが、最後はA村の家で次男一家に看取ってもらい、自分の希望を叶えた幸せな老後だったといわれている。

カジョールもまた、逞しくて美しいブンデルカンドの女性である。14歳で初潮を迎え、15歳で結婚し、30歳までには5人の子供の母となっていた。2~3年は学校に通ったものの、読み書きはできない。田舎の貧しい家で、学校に行くか仕事をするか選べと言われ、学校が嫌いだったので仕事を選んだ。四人姉妹の中では一番下の妹だけが学校に通って読み書きができる。結婚後に読書好きの夫から、読み書きを教えてあげると何度も言われたが、必要性を全く感じず断った。少女時代のある時そういったものに意識的になった時から、毎日の沐浴とプージャを欠かさない。純ヴェジタリアンでもある。きれい好きで家の中は常に片付いており、またおしゃれで、身につけるものに大きな関心とこだわりを持っている。常にサリーを着ており、それ以外の服装をしようとは思わない。

カジョールは自分の子供のころと現在との変化についてよく話をしてくれる。女の子の

⁵² 子供たちの年齢などを考えると、実際は70代前半だったと思うが、しかし70代と90代を間違えるだろうか。

服装、生理用品、そして夫との初対面、当時の話をしたらまるで笑い話だ。カジョールは笑いながら話すし、私やバルサは笑いながらそれを聞く。確かにカジョールには、どんな苦労話も笑い飛ばせる強さがある。実家の村には小さいながらも自分たちの畑があり、畑仕事を手伝いながら新鮮な豆など美味しい物をいっぱい食べていた。また乳の出の良い牛も飼っていて、美味しいクリームを毎日食べ、腕の太い、逞しい、平たく言えば太った女の子だったらしい。結婚当時痩せていたガネーシュはカジョールがせつせと食べさせた結果、ガネーシュ（ガネーシャ）⁵³神のように丸いおなかを持つようになり、結婚当時太っていたカジョールは少し痩せ、ガネーシュと同じくらいの太さになった。

長男のアーカースと異ジャーティ結婚をしたナミータは、県都の X 町の出身である。背が高く細くてすらりとしていて、少し体が弱い、きれいな女性である。サリーの他に結婚後もスーツを着ている。X 町の大学を出て公立学校の英語教師となり、B 村の学校の教師として、調査地としては非常に珍しく一人暮らしをしていた。そこでアーカースと知り合ったのである。また彼女は、教師のトレーニングを受けに一人でバスに乗って近隣の都市まで行くことができる。アーカースは酒が好きで、友人と彼女の部屋で酒を飲むこともあったが、ナミータ自身は酒を飲まない。またかつては肉も食べていたが、あまり好まず、最近では肉食をやめたらしい⁵⁴。ナミータはフランス語を話せる。また過去に何人かの男性と親しく付き合った経験がある。年下のアーカースと結婚した時には、おそらく 30 歳近かったと思われる。

高等教育を受けるということはすなわち、学生生活に付随する様々なことも経験するということである。しかし親たちは娘や嫁たちの高学歴は歓迎しても、ボーイフレンドを作ることは拒否する。もっと手前で言えば、学校には行ったほうが良いが、男の子と同じ学校で学ぶことは良くないことなのである。ただ、同じ事は息子たちや娘の夫たちに関しては言われない。娘の元に男友達に来ることは許さないが、息子が女友達を訪ねることには口を出さない。

次男の妻ニートゥは A 村や B 村のような大きな村出身である。カジョールやバルサとは違い、ナミータと同じように背が高くすらりとしたタイプである。結婚前はスーツやクルティーとレギを愛用し、ジーンズに T シャツという服装はしていなかったという。ずっと両親の家でオジヤオバやイトコたちと大家族で暮らしてきた。家族全員が純ヴェジタリアンである。経済学を勉強していて、大学 2 年生、21 歳の時に 6 歳年上のリティックと結婚した。結婚後もあと一年間大学に通い、学士号をとるつもりである。ミシンを使って裁縫ができるので、今後も何かしらお金を稼ぐことができるだろう。

バルサは、顔も性格も父のガネーシュ似だが、きれい好きなところ、暗がりや一人でい

⁵³ 厄除けと知恵の神で、象の頭をしている、民間の信仰の篤い神。物事やプージャを始める時に、最初に祈られる神である。

⁵⁴ 飲酒と肉食は、調査地では墮落した生活習慣や不浄性に関係する慣習であると、否定的に考えられている。ただし一方で、最上流階級や先進国の「進歩的な文化」や「科学・栄養学」、「合理的な考え方」と結び付けられる場合は、肯定的に捉えられる。

ることを怖がるどころ、おしゃれに並外れた関心を示すところが母のカジョールに似ている。足と胸元を出すこと以外は服装に関しては家族にあまり注意をされない。また、祖母や母、兄嫁たちとは違い、スクーターを運転できる。そのため一人でほんの短時間（10～20分程度）なら友人の家や市場に買い物に行くことが許されている。そのうち自動車の運転もできるようになるだろう。家族の中でたった一人の女の子、そして末娘ということで、みんなから可愛がられている。本人もそれを自覚しており、自分の結婚の時には両親も兄たちも最大限の努力をして多額の持参金をつけ、よい相手を見つけるだろうと考えている。彼女は結婚後の生活が、少なくとも今の自分の家族の生活水準よりも下がることはないと思っている。

2.8.2 夫が存命の幸福を表す装い

彼女たちは結婚により家族の境界をまたぐ。その結婚前後の立場や性質、服装、振る舞いの変化は劇的である。結婚前の女の子は処女であると見なされ、処女は女神に例えられ、祝福を与える力を持ち、それゆえ兄弟からも両親からもプラナム (*pranām*)⁵⁵ と呼ばれる挨拶を受ける側となる。男の子が幼い時から自分と周囲の人間との関係を理解して適切に敬意を示さなければならぬ、つまりサマージの中に自分を位置づけなければならぬのに対し、女神というこの世を超えた力とつながりを持つ女の子はその部分に関しては無頓着でいられると言えよう。一方で結婚後は、非処女と見なされることになる代わりに、夫が存命の幸福（スハーグ *suhāg*）を体現する吉祥（マンガル *mangal*）の女性となる。また行為の上での様々な制限を受けることになる。パルダー (*pardā*) と呼ばれる様々な行動上の制限は第3章第3節第3項に詳しく述べるので、ここではヒンドゥー既婚女性の装いについて説明する。調査地では、夫の存命の幸福の状態を表すために、夫が存命のヒンドゥー既婚女性が常に身につけなければいけない装いがいくつかある。

表 2-3 ヒンドゥー女性の装い

既婚女性だけでなく未婚の女の子も身につけてよい。 既婚女性も絶対ではないが、強制する家族もある。 夫死亡後も着続ける。	サリー
既婚女性だけでなく未婚の女の子も身につけてよい。 既婚女性も絶対ではない。 夫死亡後は身につけてはいけない。	銀製の腰輪

⁵⁵ 足を触る挨拶のこと。立場の低いものが立場の高いものの足を触る。相手との関係を適切に把握し、自分が触らなければならないのか、触られるのか、理解しなければならない。第3章に詳述する。

<p>既婚女性だけでなく未婚の女の子も身につけてよい。しかし夫が存命のヒンドゥー既婚女性の義務であり、夫死亡後は身につけてはいけない。</p>	<p>ガラス製の細い腕輪 銀製の足首輪 指輪 眉間につける印 金製の鼻ピアス 金製の耳飾り</p>
<p>なぜかはわからないが、調査地で未婚の女の子が身につけているのを見たことがない⁵⁶。しかし夫が存命のヒンドゥー既婚女性の義務であり、夫死亡後は身につけてはいけない。</p>	<p>銀製の足指輪</p>
<p>ヒンドゥーの婚姻を象徴する2つのアイテムである。未婚の女の子は身につけてはいけない。夫が存命のヒンドゥー既婚女性の義務であり、夫死亡後は身につけてはいけない。</p>	<p>マンガルスートラ(<i>mangalsūtra</i>) (金製の特別なペンダントヘッド) シンドゥール(<i>sindūr</i>) (額中央の髪の生え際につける赤い印)</p>

(聞き取りをもとに筆者作成)

胸から上は金製で、胸から下は銀製の物を身につける。いくらお金持ちだからといって、金の足首輪や足指輪などは調査地ではありえない。このように、その材質も含めて適切に身につけなければならないが、しかし一つ一つのアイテムに関しては、個々人のおしゃれのこだわりもあり、流行もある。例えばシンドゥールについては、カジョールは鮮やかな赤い粉をつけるのがこだわりであるが、ニートゥは暗赤色のリキッド状のものを小さくつけるのがこだわりである。またカジョールはかつてはたくさんの腕輪を、中央の腕輪を挟んで対称的にはめていたが、最近では流行に影響されたのか、少ない数の腕輪を非対称的にはめるようになった。このように、彼女たちはテレビの中も含めた他人の装いに目を凝らし、工夫を凝らす。良いと思えば褒め合い、悪いと思えばけなす。これは調査地の男性たちにも共通するおしゃれに対する態度である。

そしてこれらのアイテムは、まさに調査地の女の子にとって結婚の象徴であり、結婚生活の象徴であるといえる。大人の女性たちの装いに目を凝らしながら、母や義姉の装いに文句をつけながら、自分だったらどういう物を身につけようと憧れたり、またはその慣習をわずらわしいものと考えたりする。自分がその一連のアイテムに何をファッションとして加えることができ、何をそこから除くことができるのか(例えばサリーではなくてスーツもしくはジーンズを着たい、ガラス製の腕輪はつけないで片手に腕時計をつけたい、な

⁵⁶ インド、オディシャ州で現代インドを生きる女性の行為主体性について研究をしている常田夕美子氏より、「夫が存命の既婚女性がもっとも吉祥であり、美しいとされるので、もっとも高額で多くの装飾品を身につける。未婚女子と差異化するためではないだろうか」とのコメントをいただいた(2015年9月)。

ど) はすべて、自分が将来どんな家族のどんな男性と結婚するかにかかっているのである。そして願わくは、自分のほしいアイテムを買うだけの経済力を持ち、モダンな格好をすることを許す夫や姑がいる家族に、嫁にいきたいと思うのである。

本章では調査地について、続く婚姻の事例の章の前提となるそのセッティングを記すなかで、結婚や家族、家族の中の個人、そして家族を超えた集団の存在など、本論文のテーマを浮かび上がらせてきた。調査地の人々は、自分と他者、こことよそを比べ、より良い生活を求めている。そのより良い生活の達成単位は家族であった。そしてその家族の中には、異なる条件を持つ男性と女性が含まれているということを見てきた。次章以降では婚姻に焦点を当てて調査地の家族の姿を見ていく。その姿はまったく不確実なものであるが、しかし過去の蓄積を元に、ある程度の姿が常に想像され希求されるのである。事例の章に入っていく前に、本章の最後に、私がフィールドに入ったばかりのころの、習いたてのつたないヒンディー語を用いた、当時まだ幼かったバルサとアシスとの会話を記す。

私「お母さんはロハールだったの？」

2人「あたりまえじゃない！ (*aur kyaa*)」

私「ダディー (FM) もナニー (MM) もロハールだったの？」

2人「あたりまえじゃない！」

私「バルサもアシスもロハールと結婚するの？」

2人「ロハールはロハールとしか結婚できないの！」

「あたりまえじゃない」とここで訳した言葉は、ヒンディー語では「オール・キヤー」、英語に直訳すると *and what*、他に何かあるって言うの、という意味の言葉である。当時 10 歳と 14 歳であった彼らにとって、他に何かが起こるとは思ってもみななかったのだろう。しかしこの直後、彼らの長兄は異ジャーティの女性と結婚し、また数年後に思春期にさしかかったバルサには異ジャーティのボーイフレンドができることになる。この会話は、過去からのつながりを参照して、当時確かに家族にとって見えていた未来の方向を指し示すものだった。そして現代インドの家族や個人の未来は、実際にはもっと機会の開かれたものだったのだ。



写真 2-1、写真 2-2 ヴィシュワカルマ神

ヴィシュワカルマ神の絵。5人の息子たちに囲まれている。右は、ヴィシュワカルマ・プー
ジャの際に並べられた鉄鍛冶、木工、そして土器作りの道具。



写真 2-3、写真 2-4 足首輪と足指輪

ペディキュアも欠かせない。右の足甲にはターメリックが塗られている。



写真 2-5 腰輪



写真 2-6、写真 2-7 腕輪

腕輪はサリーの色に合わせて。右は新婚の花嫁が持ってきた腕輪ボックスのごく一部。



写真 2-8、写真 2-9 シンドウール

左はリキッド状のもの。右は粉のもの。眉間にはサリーの色に合わせた印。



写真 2-10 マンガルスートラ

左の写真の、黒いビーズの鎖についているのがマンガルスートラ。金のチェーンはただおしゃれで組み合わせているだけ。



写真 2-11 耳飾り

耳には一対は絶対に穴が開いているが、他にいくつ開けるかは好みによる。



写真 2-12 色とりどりのサリーを着たヒンドゥー既婚女性たち

第3章 差異とつながり—結婚に向けての努力と希望の事例から

3.1 はじめに

本章では、子供を結婚させようとする親の努力の事例を通して、婚姻関係を結ぶ相手の選択や自分たち家族をどう変えていくかという試みに焦点を当てる。それによって、婚姻関係を結ぶ前提となる隣接性、差異の作られ方、結婚相手に求められる類似性について記述していく。

インドの婚姻に関する研究のなかでも婚姻の相手探しに関わる部分では、婚姻規則、つまり外婚と内婚の範囲に主眼が置かれ（カパディア 1969、Harlan and Courtright 1995）、実際の相手探しの過程は等閑視されてきた⁵⁷。それは、多くの場合婚姻相手を訪ねてから婚姻儀礼を行うまでの期間がせいぜい数ヶ月と短いことや、多くの人々が婚姻相手探しに成功していることから、婚姻相手探しの過程が単純で簡単なものであるかのように見えるからであろう。しかし本章では、婚姻相手探しは決して短い期間で決定されるものではなく、他の人たちとの相互交渉的な関係性と、長いライフコースの中で行われるということを示していく。また、相手探しにおいて外婚内婚の範囲から見ると、異ジャージーティ結婚はあくまでも違反、逸脱であり、その違反に対する制裁、罰に注意が向けられる。しかし外婚内婚の規則では語られない部分の婚姻相手決定の基準に注目すると、異ジャージーティ結婚はより複雑な事情をはらんでいるということが明らかになってくる。実際、アカデミックな場において等閑視されてきた婚姻相手探しの過程は、インドにおいて Bollywood 映画、テレビドラマ、あるいは雑誌や新聞の投稿欄において、最大の関心事となっているのである。

Bollywood のトップ俳優が出演する『ナマステ・ロンドン』(Namaste London, 2007 年、監督 Vipul Amrutlal Shah) という映画もまた、婚姻相手決定をめぐるドタバタがテーマとなったラブコメディである。ヒロインはイギリス的価値観の中で育ったロンドンに住むインド系イギリス人で、高層ビルのオフィスで働き、夜になると仲間たちとクラブに繰り出してはナイトライフを楽しむ。両親はそんな彼女をインド人と結婚させたいと思い、同じインド系イギリス人とのお見合いを設定する。映画の冒頭ではそんな場面が描かれる。レストランで待つ真面目なタイプのインド人男性の元へ現れるヒロインは、両親に着せられ

⁵⁷ アミット・クマル・シャルマ (Amit Kumar Sharma) は現地の人々にとって婚姻儀礼よりも婚姻の交渉と合意が重要であることを指摘し、博士論文をもとにした著書の中の一つの章をその記述に割いているが、そこで扱われるのはダウリと占星術に関してのみである (Sharma 2011)。

たのであろうインドの伝統衣装であるパンジャーブドレスを着ているが、何杯ものウォッカをあおり、酔っ払って奔放な発言をし、お見合い相手に向こうから断らせようとし、成功する。彼女は恋人のイギリス貴族（彼は王室の人々とも交流がある）と結婚することを望んでいるのだ。

両親はそんな娘を連れて故郷の北インド、パンジャーブへと家族旅行し、そこで父親の古い友人の息子と結婚させようとする。彼女は最初は逃げ出そうとするが、ロンドンに住むパキスタン系の友人（この友人もまた、キリスト教への改宗を結婚の条件とする白人の恋人の両親と、ムスリムである自分の家族の間で葛藤する。結局彼はムスリムのままであり続けることを決心し、恋人もまたそんな彼についていく）が妙案を思いつく。つまり、インドで広く行われている社会的結婚にはなんら法的根拠が伴わないので、イギリスへ帰れば彼女は独身なのだ。そこでその場での結婚に同意し婚姻儀礼も挙げるが、ロンドンに帰ってから「夫」に、「あなたと私は無関係だ」と言い放つ。結局ヒロインはその後、恋人やそのイギリス人の友人たちがイギリス文化よりもインド文化を低く見ていることに対してインド人としての自尊心を傷つけられ、同時に「夫」の知性とわがままな自分に対する「真実の愛」に気づき、教会で行われていた恋人との挙式の間から逃げ出すのである。

この最後の挙式の場面に来た時、D家の父ガネーシュが疑問の声をあげた。「この女の子は映画の最初のほうで結婚していたじゃないか。何でもう一度結婚しているんだ？」ガネーシュは、イギリスなどの外国ではいくら婚姻儀礼を挙げ親戚や近所の人々に祝福されても法的に登録をしなければ夫婦とは認められないという、この映画の重要なポイントを理解していなかったのだ。

この映画は、結局インド人はインド人と結婚するのがいいという話として捉えられるのだろうか。そうだとするならば、そこで求められているものは何なのだろうか。イギリス貴族の恋人との結婚を望んでいたときのヒロインもまた、彼との結婚に何かしら希求するものがあつたはずである。一方でパンジャーブ出身のインド人との結婚においても、そこには大事にされた価値の類似性があつた。ヒーローは、ヒロインの父と同じ地方、同じ階層の出身である。映画の中盤ではヒロインに通訳をさせて、曾祖父が東インド会社の高官であつたというイギリス人の前でインドの誇りを語る。さらに彼はずっとヒンディー語を喋っていたが、映画の終盤、教会での結婚式の場で、上流階級のイギリス人の前で、流暢な英語を披露するのである。つまり彼はずっと隠していたが、「田舎者のインド人」ではなくて、「英語が喋れる誇り高いインド人」だつたのだ。そしてヒロインの彼を見る眼差しも変わっていく。そこには、生まれ育つた環境、父祖の土地、宗教、言語、食べ物、服装といった、ともに様々な経験をすることによって時間をかけて知ることになっていった類似性が観察される。

『ナマステ・ロンドン』の舞台はロンドンであつたが、しかしそこで語られたテーマは、私の調査地にも通底しているといえる。

インド社会学においては、インド特有の内婚・外婚範囲（ジャーティ内婚、村外婚、ゴ

ートラ外婚、北インドの上昇婚、南インドのイトコ婚等)の規定が注目されてきたが、本研究では、婚姻可能範囲内での選択に関わる、それとは異なる種類のつながり方について、特に注目していきたい。それは現代の北インド農村の低ジャーティの人々にとって非常に大きな関心事である、ライフスタイルとソーシャルモビリティに関するつながり方である。インドにおける結婚戦略と配偶者選択に関する近年の研究では、社会変化を背景に自ら配偶者を選ぶようになった都市中間層の若者が多く対象となってきた(樋口 2012)一方で、インド農村部での配偶者選択に関するいくつかの実践(ダウリ、幼児婚など)は「社会悪」、「社会問題」として論じられてきた(Kalpagam 2008)。しかしここでは、現代インドの農村部において、結婚相手探しがいかにして行われ、またそのことが家族の地位上昇とどう関係して考えられているのかを記述していく。

以下、第2節では、異ジャーティ間で接触の忌避により差異が日々作られていることを記述する。第3節では、同ジャーティ内で家族間の優劣の差が、やはり日常的な行為によって作られていることを説明する。ここまではいわゆる婚姻規則の問題であるが、しかしそれらは固定的なものではないということが示される。続く節では、しかし人々がさらに多様な差異を経験していることが描かれる。第4節では、既存のネットワークと未来の理想の家族像、他家との競争と類似性への希求の交差する、実際の結婚相手探しの過程を記述する。第5節はD家の家族における具体的な事例である。

3.2 異ジャーティ間の差異の作られ方

ルイ・デュモン(Louis Dumont)は、セレスタン・ブーグレ(Célestin Bouglé)の定義を用いて、カースト体系とは全体を多くの世襲集団に分ける体系であると述べ、その世襲集団は、①結婚や身体接触における分離、②分業、③ヒエラルキーという3つの特徴によって互いに分断され、または結び付けられるとしている(デュモン 2001:35)。インド社会を覆うカーストのヒエラルキー的構造を強調したデュモンに対し、マッキン・マリオット(McKim Marriott)は、変化を引き起こす物質の交換を通して作られるというカーストの性質を示した。マリオットは、インドにおいては物質と規範を分けることができないと述べ、人や物の間の接触によって流動的に移る、モラル=物質的粒子のようなものを、サブスタンス・コードと呼んだ。サブスタンス・コードが交換されるとそれを受け取った人の変化を引き起こす。逆に人間の変化にはサブスタンス・コードの交換が含まれている。マリオットは、南アジアにおける人間は、親子関係や結婚、その他のサービスなどを通して、身体的サブスタンス・コードが不断に移動し続けている、「可分人(dividual)」として理解できると主張する(Marriott 1976:109-111、常田 2011:92)。

私の調査地においても、人や物の間に接触による物質的流動性が見られる。特にそれが

顕著なのは、口に入るものにおいてであろう。

フィールドワークを始めた最初のころ、まだ D 家に居候する前、ホテルに泊まりながら D 家に通っていた時、私はカジョールから、水を飲むときは必ず家族の誰かに頼んで台所の土の水がめから汲んでもらうように、と注意を受けた。たとえ家にカジョールと私の 2 人しかおらず、彼女が昼寝をしていたとしても、のどが渴いた私は寝ている彼女をわざわざ起こして水を汲んでもらわなければいけないのが気まずく、不便だった。なぜそんなことを言うのか長男のアーカースに質問したところ、「お母さんは田舎の女性の考え方を持っているから。ここのそういう習慣なんだよ」と言われた。その時はわからなかったが、後から考えると、どのような性質を持っているかわからない外国人の女の子が触ることによって、私の性質が土のかめと其中的の水を媒介としてカジョールたち家族の体内に取り込まれ、彼らが相対的により不浄な状態になることを恐れていたのだ。身体的接触への注意は、私が調査地で暮らしていくために絶対に体得しなければならない感覚だった。そして私が自分で D 家の土のかめから水を汲むことを許されるようになっていった過程は、同居して生活を共にし、同じ物を食べ一緒に寝ることによってサブスタンス・コードを共有することを通して、私が D 家の一員となっていた過程でもあったのだ。

物には、サブスタンス・コードを媒介しやすいものとしにくいものがある。マリオットはそれを粗い (gross) ものと繊細な (subtle) ものと表現した (Marriott 1976:110)。土の器はサブスタンス・コードを移しやすい。調理道具でも土の鍋は、毎朝の水浴をするまでは触ることが許されなかった (ステンレスや鉄製の調理道具、そして工場生産の陶磁器のチャイカップやプラスチックのコップは触ってもよい)。

この土の水がめは、第 5 章で記述する D 家の次男リティクの婚姻儀礼のときにも問題となった。婚姻儀礼に出席するために A 村から来て B 村の D 家に滞在していた、D 家よりも低ジャーティの男性キショールが、台所においてあったこの水がめを触ったのではないかという疑惑をカジョールが抱いたのである。「キショール、お前水がめを触ったらしいね」と尋ねるカジョールの疑惑をキショールは、「チャチー (cācī, FBW)、絶対に触ってないよ。触るもんか」と必死になって否定する。しかしカジョールはその言葉を信じない。「どうするの水がめ？」と聞くガネーシュに対してカジョールは、「捨てるしかないでしょう。ちょうど婚姻儀礼で使った水がめがあるから、それを使うよ」と答え、そして問題の水がめを家の外のゴミ捨て場に持っていき、投げ捨てた。

逆に、A 村の D 家の向かいに住んでいるブラフマンの家族の末の女の子は、いつも D 家に遊びに来て水も飲んでいて。あまりにもしばしば、今や水汲み役となった私に汲ませるので、あるとき、ガネーシュと遊びに来ていた同じロハール・ジャーティのラクシュマンが、「お前はブラフマンなのだから自分で汲めばいいじゃないか」と言った。

以上の 2 つの事例からは、少なくとも自分の家の水がめは、低ジャーティの人に触らせてはならず、高ジャーティの人なら触ってもよい、と考えられているということがわかる。とはいっても人々は、ジャーティの違う人の家で水がめを触ることは決してないし、それ

どころか台所にも近づかない。私も家に来た人がたとえ年下や子供であっても、D家と異なるジャーティの人には決して「自分で汲んで」とは言わなかった。ただ同じジャーティのラクシュマンの子供たちや親戚の子供が来たときには、何の遠慮もなく「水を汲んできて」と頼めるのだった。

異ジャーティ間に優劣のある性質の違いがあるということが、日常の物のやり取りや接触の忌避によって示されるということは、逆に同ジャーティ内の同質性を意識させ、さらに同ジャーティ内での付き合いが親密で気楽であるということの人々に感じさせる。家に入ったり招いたり、飲食したり便所を使ったりを気兼ねなくできるのは、同じジャーティの内でのみ可能な行為なのである。

3.3 同ジャーティ内の差異の作られ方

しかし、そのように物の授受の操作によって他のジャーティと差異化を図りつつも、同じジャーティ内でもまた別の種類の行為によって、差異が表されている。

本節では、まず北インドの上昇婚の習慣と、そのことも含めた婚姻可能範囲の説明をした後、そのような同ジャーティ内の立場の差を維持させ作り続ける、プラナム、呼称、そしてパルダールという3種類の日常的行為を見ていく。

3.3.1 上昇婚とダヘージ

北インドの婚姻は一般的に上昇婚であるとされる。上昇婚とは、高位のジャーティやヴァルナの男性か、同じジャーティ内でも経済的・社会的に格上の家の男性に娘を嫁がせることである。「あの家族からは娘をもらうが、与えはしない」というような語りが、家族間のヒエラルキーを示している。さらに、婚姻前に地位の差があるだけでなく、婚姻そのものが新たに地位の差を作り出してもいる。つまり、婚姻は相対的に地位が高い家族の男性と地位が低い家族の女性が結婚することによって結ばれるが、もし結婚以前に2つの家族間の地位の優劣が知られていなかったら、その結婚以降に両家族間の地位の優劣がスタートするのである⁵⁸。

嫁の受け手は与え手よりも高い地位であり、逆になることはない(西村 1994:31)。一般的に贈与論では贈与を受けた方が負債を負うが、北インドの婚姻においては、妻を受ける

⁵⁸ ただし人々の実践レベルでは、具体的なつながりは忘れられていく。それらのつながりは時に、人々に具体的なつながりを忘れられた後も、後述するような呼称に名残を留めていたりする。

ほうが妻を与えるほうよりも高位にあると見なされる。娘は低位のものから高位のものへと渡される贈り物なのである。婚姻儀礼において女の子が受動的⁵⁹なもの、彼女自身が贈り物であるというカンニャーダーン (*kanyādān*、処女の贈与) の理念によるものだという (Sharma 1984:64)。

娘を持参金と共に与えることは、宗教的な功德を積む最高の贈与であると考えられている。このとき使われる「ダヘージ」⁶⁰とは、婚姻において女の子側の家族から男の子側の家族へ支払われる金銭および物品のことである。19世紀後半のイギリス植民地期、官吏や医師、弁護士といった新しい都市居住のホワイトカラー職が創設され、花形の職業となっていた。そうした職業に就く望ましい花婿を得るために、花嫁側の家族が車や家屋、現金といった贈り物をしたことが、ダヘージの慣習として他の階層にも広まっていったとされている (西村 2005:390)。

ダヘージの授受や要求、その幫助さえも本来は刑事罰の対象であるが⁶¹、調査地では一般的な行為である。その内容については、家族間で交渉が行われ、重要な婚姻条件の一つとなる。ダヘージの支払いは、娘の婚姻儀礼のときだけの一時的なものではない。それは、娘が生きていく間続くという。シャルマは、ママ (*māmā*、MB) が姉妹の子供の婚姻費用を払うのもその一環であると述べる (Sharma 1984:63-64)。つまり、嫁の与え手の家族が、嫁の受け手の家族の次世代の子供の婚姻費用まで面倒をみるのである。調査地の人々は男女ともそれぞれの立場でダヘージに関心を持つ。時の流れの中で、ダヘージと共にやって来た花嫁は、ダヘージを受け取り再分配する立場の姑となっていく (Sharma 1984:63)。息子の嫁と共にやって来たダヘージは、婿を探して娘と共に出ていく (Pocock 1954:199)。息子と娘、娘と嫁の人生が、ダヘージを媒介として繋がる。ダヘージは基本的には夫の家族のものとなり、そして嫁も夫の家族の人間となるのだ。夫の家族の人間となった嫁は、今度は、その夫の家族の子供たちの結婚を、夫の家族の一員として気にかけることになる。ダヘージもまた、婚姻関係によって義務が生じ、その義務が嫁の与え手から嫁の受け手への一方向的な贈与の行為として持続して行われていくことによって、その姻戚関係を強めていくものであると言える。

3.3.2 結婚できる範囲

⁵⁹ 婚姻儀礼において、調査地の花嫁は、笑わず、前を見ず、声をたてず、手を引かれなければ動くこともない。その態度は、婚姻相手を探す時から既に始まっている。結婚相手候補に渡す写真を撮影するときも彼女は笑わない。

⁶⁰ 花嫁持参財のこと。花嫁自身ではなく夫の家の財産となるという点で英語の *dowry* とは異なり、インドをはじめとする南アジア社会学の文脈で使われるダウリとほぼ同義である。

⁶¹ ダウリ禁止法 (*Dowry Prohibition Act, 1961*) による。ダヘージやダウリの慣習は、花嫁殺人や人口の男女比の不均衡などの様々な社会問題を引き起こしているとされている。

以上のように、北インドの婚姻は家族間の優劣の差異を前提として結ばれていると同時に、その婚姻によって新たな家族間の差異を作り出しもする。北インドの婚姻においては、男性側が女性側よりも儀礼的・社会的立場が上、少なくとも同等でなければならない。同ジャーティ内の家族間の優劣は過去の婚姻によって既に作られていることがあり、また過去の婚姻関係が知られておらず同位にあると考えられる家族同士が婚姻関係を結ぶと、そこから当該家族間の優劣関係が始まる。

この上昇婚に加え、調査地の婚姻には①ジャーティの制約、②出身地の制約、③ゴートラの制約、④親戚関係の制約があり、上昇婚も含めたそれらの婚姻規範は、次項で述べるような行為を通して記憶され、人々によって尋ねられ、守られ、そして時によって操作され破られる⁶²。以下、これら4つの婚姻規範について説明する。

① ジャーティの制約（ジャーティ内婚）

婚姻相手はまず、同じジャーティの中から選ばれる⁶³。

② 出身地の制約（村外婚）

家族の出身の村を同じくする相手とは婚姻できない。この「出身」の意味は個々の考え方によるが、おおよそ移住後数世代または数百年が経っていると見なされれば、現住地の人が制約相手となる。この村外婚の規定は、近い親戚との婚姻の禁止や、女の子が結婚後に完全に実家から離れその忠誠と従属を婚家に向けるようにするといった意図を兼ね備えているといわれる（Trawick 1992:179）。

③ ゴートラの制約

ゴートラは「家系」と訳される言葉で、各ジャーティの中に数ゴートラが存在する。婚姻相手のゴートラの格は、男性のほうが上か、もしくは同じでなければならない⁶⁴。ゴート

⁶² ハリーは、ある女の子が、彼女がバビー（*bhābhī*、お義姉さん）と呼ぶ遠縁の女性の類別の兄弟と結婚するのを助けた経験を語ってくれた。この男女の関係は上昇婚の規範に反するものであり、呼称にその関係が留められていた。一方で具体的な関係はわかっておらず、それゆえハリーはその曖昧さを利用して彼女の家族と交渉を行った。またD家の親戚のある男の子は、出稼ぎに行った先のデリーで結婚して嫁を連れて帰ってきた。彼女は同じロハール・ジャーティだということで紹介されたが、彼女の家族には誰も会っておらず、真偽を確かめる術はなかった。家族もあえて彼女のジャーティを確かめようともせず、周囲の人々はあれこれ噂をしたが、表立っては問題になっていない。

⁶³ 上記のように北インドには上昇婚の慣習があるといわれているが、後にD家の長男アーカースが自分たちよりも低いジャーティの女性と結婚したことが問題となったように、「同じジャーティの人と結婚しなければならない」ということが強調される。ただし、婚姻規則に関して言う時のジャーティのレベルも固定的ではない、ということには留意する必要がある。

⁶⁴ 多くの先行研究に、北インドにおけるゴートラ外婚の婚姻規則がみられる（カパディア 1969:191-198、八木 1991:184）。私の調査地で確認したところ、一つのジャーティ内に各数

ラが男女で異なる場合、妻は男性のゴートラに入る。しかしこのゴートラは、ジャーティと違い人々が互いに知っているわけではなく、年少の者などは自分のゴートラを知らないこともあるし、夫が妻の婚姻前のゴートラを必ずしも知っているわけでもない。ジャーティ内婚の制約よりも先にゴートラの制約はなくなるのではないか、とガネーシュは語っていた。とはいえ現在では、このゴートラは婚姻相手探しの際に必ず聞かれる。

④ 親戚関係の制約

親戚関係の制約に関しては、例えば『マヌ法典』には「母方のサピンダ (*sapinda*)⁶⁵でなく、父方のサゴートラでもない娘が、結婚と夫婦の交わりに関して推奨される」(渡瀬 1991:80)と書いてあり、現代のヒンドゥー婚姻法第3条にも「母方で3世代、父方で5世代」のサピンダ関係にあるものとは結婚できないと定められているが、それらは人々に次項で述べるような日常的行為を通して「知られている」といえる。

3.3.3 立場の差異を作る行為

以上のように、南アジア研究において上昇婚、ジャーティ内婚、村外婚、ゴートラ外婚、サピンダ外婚と呼ばれる婚姻可能範囲の規定は、実際に規則として覚えられているというよりも、日々繰り返される日常的行為によって、その範囲が覚えられ作り出されている。それらの日常的行為のうち3種類のものを本項では取り上げる。

① 足を触る挨拶

インドには、足を触るプラナムという挨拶がある。その背景となるのは、第2節で述べた身体的接触によるサブスタンス・コードの交換と人間の性質的変化という考え方である。足への接触によって高德の人の性質を得ることができる。また足は体の中で最も穢れた部分なので、目下の人が目上の人を足を手で触り、その手を自分の額や胸に当てることによって、相手への敬意を示すことになる。つまり、足を触る挨拶は、立場の上下を表すことになる。足を触る対象としてはまず神、そして師、両親であるが⁶⁶、さらに親戚同士の間でも行われる。ここでは、婚姻に関わるものとして、私の調査地⁶⁷における親戚同士で

個ずつ存在するゴートラ間には地位の優劣があり、同じゴートラ内でも婚姻してよいということだった。最上位ゴートラの女性は同じゴートラの男性と、最下位ゴートラの男性は同じゴートラの女性としか結婚できない。

⁶⁵ サピンダ親族とは、共通の祖先に対して祭果 (*pinda*) を捧げる人々 (山崎 1994:58) のことである。

⁶⁶ 神、師、両親、そして地面が、足を触る対象として正しいという語りがしばしばなされる。「昔はやたら触ることなんてしなかった。今は無知ゆえにやたらめったら触っている」とは、しばしば聞かれる語りである。

⁶⁷ 足を触る人や相手は、地域によって異なる。ここではブンデルカンドの慣習を記述する。

交わされる挨拶に限定して、足を触る関係をみていく。基本は嫁の受け手が与え手よりも上位となるという関係である。

以下に示す表は、挨拶をする人とされる人との関係を示したものである。右側の既婚／未婚女性・男性が挨拶をする人であり、左側に並ぶ親族名称の項目が挨拶をされる人である。挨拶をする人の下に並ぶ○が挨拶をする、×が挨拶をしない（逆に挨拶をされる）、—が該当者なしの関係を表している。

まず、エゴ本人の婚姻によって生まれる関係についてみていく。既婚女性の場合、夫の家族に対して、HyBW 以外の足を全員触る。その中には婚家から婚出した HZ も含まれる。HyBW は同じ婚家の嫁の立場であり、しかも関係の上で目下であるので、足を触らない。

一方既婚男性の場合、妻の実家の人々の足は誰も触らない。むしろ彼がみなに触られる立場である。

表 3-1 足を触る挨拶（配偶者の家族）

親族名称			既婚女性	既婚男性
ダーダーサスール	<i>dādā sasūr</i>	H(W)FF	○	×
ダーディーサース	<i>dādī sāsū</i>	H(W)FM	○	×
サスール	<i>sasūr</i>	H(W)F	○	×
サース	<i>sāsū</i>	H(W)M	○	×
ジェートウ	<i>jēth</i>	HeB	○	—
ジータニー	<i>jīthānī</i>	HeBW	○	—
デーヴァル	<i>devar</i>	HyB	○	—
デオラーニー	<i>devrānī</i>	HyBW	×	—
ナナドゥ	<i>nanad</i>	HZ	○	—
ナンドゥーイー	<i>nandoī</i>	HZH	○	—
サーラー	<i>śālā</i>	WB	—	×
サラジ	<i>śalaj</i>	WBW	—	×
サーリー	<i>śālī</i>	WZ	—	×
サールー	<i>sārū</i>	WZH	—	×

（聞き取りをもとに筆者作成）

次に、エゴの子供の婚姻によって生まれる関係についてみていく。親は、息子と嫁の足は触らない。彼らに触られる立場だ。逆に娘と婿の足は、親が触る。

表 3-2 足を触る挨拶（子供配偶者）

親族名称			既婚女性	既婚男性
ベター	<i>beṭā</i>	S	×	×

バフー	<i>bahū</i>	SW	×	×
ベティー	<i>beṭī</i>	D	○	○
ダーマードゥ	<i>dāmād</i>	DH	○	○

(聞き取りをもとに筆者作成)

配偶者の親同士は、妻の親が夫の親の足を触る。ただし厳密に言うところの場合男性は女性の足を直接は触らない。少し離れた地面を触ったりする。そして女性は男性の足をサリ一の裾を挿んで触り、やはり直接は触らない。

表 3-3 足を触る挨拶 (子供の配偶者の親)

親族名称			既婚女性	既婚男性
サムディー(息子の)	<i>samdī</i>	SWF	×	×
サムディー(娘の)	<i>samdī</i>	DHF	○	○
サムドゥニー(息子の)	<i>samdṇī</i>	SWM	×	×
サムドゥニー(娘の)	<i>samdṇī</i>	DHM	○	○

(聞き取りをもとに筆者作成)

男性の側から、姉妹の婚姻によって新しく生まれる関係についてみてみよう。男性は、姉妹とその夫、その子供たちの足を触る。

表 3-4 足を触る挨拶 (エゴが男性の場合の姉妹の家族)

親族名称			未婚男性	既婚男性
ベヘン(大)	<i>bahan</i>	eZ	○	○
ベヘン(小)	<i>bahan</i>	yZ	○	○
ジージャー	<i>jījā</i>	eZH	○	○
ベヘノイー	<i>bahanoī</i>	yZH	○	○
バーンジャー	<i>bhājā</i>	ZS	○	○
バーンジー	<i>bhājī</i>	ZD	○	○

(聞き取りをもとに筆者作成)

それを裏返すと、母の婚姻によって生まれてきた関係についても言える。母の兄弟には男女とも足を触られる。母の兄弟の足は男女とも触らない。

表 3-5 足を触る挨拶 (母方オジとその妻)

親族名称			未婚女性	既婚女性	未婚男性	既婚男性
------	--	--	------	------	------	------

ママ	<i>māmā</i>	MB	×	×	×	×
マミー	<i>māmī</i>	MBW	×	×	×	×

(聞き取りをもとに筆者作成)

これが2世代離れたり2つの婚姻を経たりしていると、関係は複雑になる。それゆえ、表4の姉妹の婚姻によって生まれる関係の欄では、エゴを男性に限定した。姉妹同士の場合、婚家同士は彼女たち自身の婚姻によっては優劣がついていないからである。

親戚同士が会った時には、どちらか一方が他方の足を触ることとなる。子供や若い人のように、誰の足を触ればよいのかわからない人、相手との関係がわからない人には、周りの大人やわかっている人が、「この人はお前たちのチャチャ (FB) ですよ。みんな足を触りなさい」とか、「ママ (MB) の足は触らないのよ。ママがお前の足を触ってくれるわ」というように教える。そのようにして、プラナムの適切な作法とともに、誰が自分と親戚関係にあるのか、どのような関係にあるのかということが、世代を超えて伝えられていく。プラナムは会う機会がなければ行われぬものではあるが、実際に対面した時には必ず行われ、立場の上下、そしてそれに伴う過去の婚姻関係の存在と未来の婚姻関係の可能性をも示す行為なのである。

未来の婚姻の可能性として、男の子にとっては、自分が足を触る女の子とは結婚できない。なぜなら足を触るのは姉妹などであり、妻には足を触られるからである。婚姻は足を触ることによって作られる関係と逆の方向で結ぶことはできない。

② 呼称

次に、調査地の呼称について述べる。呼称は名称ほどは多くない。また、上の世代⁶⁸に対する呼称のほうが細かく分かれている。これらは本当に親族関係にある人々だけでなく、実際に出会うほとんどすべての人々に使える⁶⁹。

⁶⁸ ここで世代というのは、実際の年齢とは関係ない。兄弟姉妹の数が多き調査地では、実際の年齢と関係の上での世代がずれていく。それゆえ、年下のブア (*buā*, FZ) や、親と同世代のバビー (*bhābhī*, eBW) がいたりする。自分と相手のそれぞれの何世代か前からの付き合いによって、自分たちの呼称は規定される。しかし繰り返し述べているように、この呼称もまた行為であるがゆえに、消えたり人々によって作り変えられたりしている。同じ年頃のもの同士が名前と呼んだり、ナナ (MF) と呼ばれるには若い人をママ (MB) と呼び変えたり、母の出身村に住むのに周りの子供たちと同様に大人たちをチャチャ (FB) と呼んだり、という状況が見られる。

⁶⁹ 師である人にはグル、役人や学校の教師、銀行員などには、男性にはサー (Sir)、女性にはマダム (Madam) またはベヘンジー (Z+ji、尊称) を使う。彼らに親族呼称を使うのはおかしいことである。

表 3-6 呼称

	女	男
2 世代上	パウ(おばあさん)	ダッダ(おじいさん)
1 世代上	アンマ、マンミー(お母さん) チャチー <i>cācī</i> (FBW)(おばさん) ブア <i>buā</i> (FZ) マミー <i>māmī</i> (MBW) モーシー <i>mausī</i> (MZ)	パパ(お父さん) チャチャ <i>cācā</i> (FB)(おじさん) プーパー <i>phuphā</i> (FZH) ママ <i>māmā</i> (MB) モーサー <i>mausā</i> (MZH)
同世代 (年上)	ディディ <i>dīdī</i> (お姉さん) バビ <i>bhābhī</i> (お義姉さん)	バーイサーハブ <i>bhāī sāhab</i> (お兄さん[尊称]) ジージャー <i>jījā</i> (お義兄さん)
(年下)	名前など	バイヤー(お兄さん[親称])など
下の世代	ベター、モーリー、	バイヤー、名前など

(聞き取りをもとに筆者作成)

2 世代上の世代に対しては、父方母方問わずおじいさん、おばあさんという呼びかけがなされる(父方と母方を区別して呼ぶ呼び方もある)。一番細かく分類されるのは、親世代に対する呼びかけである。そこにおいて、自分の父と母のどちらと関係がある人なのか、どのような関係にあるのかがはっきりと示される。例えば自分の村にいる時、その村はたいてい父の出身村でもあるので、そこにいる親世代の人は、ほとんどがチャチャ(FB)とチャチー(FBW)である。また自分の村が母の出身村である場合、その大人はほとんどがママ(MB)とマミー(MBW)である。同じ親世代の女性でも、チャチーは自分の身内であり、ブアであれば自分たち家族よりも優位の別の家族の人間である。しかし近年では、アンクル(uncle)とアンティ(aunty)という呼称がよく使われる。親世代の親以外の人々に対してはこれ一つで用が足りるので、関係がよくわからない相手に使う時に便利である。また、父母どちらの出身地でもない都市などに住んでいる場合、通常は父を中心に考えて父方の親族呼称で呼ぶが、アンクル、アンティが用いられることも多い。実際の地縁血縁から離れた関係が増える時、親族名称に基づいた呼称がその状況に適切ではなくなっていくのだろう。

同世代の年上に対しては、親族の関係にある人はお姉さんとお兄さん、姻族の関係にある人はお義姉さんとお義兄さんと、明確に呼び名が異なる。お義姉さん、お義兄さんと呼ばれている人は、明らかに既婚者である。

同世代の年下や下の世代への呼称は、細かく分かれていない。名前ですんだり、そういった世代の人々を呼ぶいくつかの呼称が混ぜて使われる。

このほかにララ(*lālā*)という呼称がある。これは、娘や姉妹の配偶者に対する呼称である。例えば妻の出身村に住む男性は、村の男性たちにララと呼ばれている。その呼称には尊敬の念がこめられている。

これらの呼称では特に、親族なのか姻族なのかという区別、つまり過去の嫁の受け手と与え手という関係が重要である。婚姻規則との関連で言えば、例えば男の子は、自分がジージャー（ZB）と呼ぶ男性が姉妹だと認識している女の子や、自分がブア（FZ）と呼ぶ女性が娘だと認識している女の子とは結婚することはできない。

③ パルダー

上記のプラナムは未婚の女の子以外の人々が行う行為（される側としては未婚の女の子も関わる）であり、呼称はすべての人々が行う行為であった。次に、既婚の女性と多くの男性たちに関係するパルダーについて説明する。パルダーとは、南アジアや西アジアの諸地域で、ムスリムとヒンドゥーの間で多彩な色調で行われてきている慣習のことである。男女の生活空間が異なること、成人男性や年配の女性や目上の人に対して女性が顔をあらわにしないこと、外出の方法が制限されることなど、女兒を除く女性に数多くの行動の制約がある（古賀・高橋 2006:787）。

私の調査地では、具体的には、サリーの縁を頭に被せたり顔を隠したりすること、特定の男性がいる場から退出すること、声を出さないことなどの行為が含まれる。行為をするのは既婚女性、対象となるのは夫の家族・親族および夫の村の人々である。特に厳しいパルダーの対象となるのが夫よりも目上の男性である。そのような男性が来た時、女性は顔をサリーであごの下まで隠し、その場を退出できる時はその場から退出し、できない時はうつむいたまま一言も発さずに過ごす。時には顔を隠して立ち上がり、後ろを向く。婚家の女性たちや夫より目下の婚家の男性がいるときは、せいぜい頭を隠す程度で、顔は出し、言葉も発することができる。夫本人に対しては、2人きりや自分たちの子供たちだけにいるときは新婚でもない限りパルダーの対象にはならないが、たとえ女性の実家であっても第三者がいるときは、夫に直接話しかけないし、外出しても一緒に歩くこともない。用事があるときは子供たちなどに代わりに話してもらう。

例えば、3人兄弟のそれぞれの妻たちが婚家の1つの部屋でお喋りをしている。3人とも婚家にいるゆえ頭にサリーの縁を被せているが、女性と子供たちだけなので顔は出ている。周りでは子供たちが走り回っている。そこへ次男が入ってくる。すると、三男の妻はすばやく顔をあごの下までサリーで隠して部屋から出ていく。次男の妻は少しサリーを深めにし体の向きを変えるが、そのまま座っている。長男の妻だけが何も態度を変えず、次男と会話を交わすことができる。

また例えば、ある日の夕方、近所に住む2人の既婚女性が門の前に座ってお喋りを楽しんでいる。女性同士は同じ年齢だが、2人の夫にはそれぞれ少し年の差がある。そこへ村の男性が通りかかるたびに、2人とも顔を隠したり、または夫が年少の女性1人だけが隠したり、あるいは2人とも隠さなかったりする。

このように、パルダーも相手が自分や夫とどのような関係にあるのかを知らなければできない行為であり、新婚の妻は姑や夫、義理の妹などに婚家の人間関係を教わって、適切

なパルダールができるようにする。またパルダールをされるほうの男性たちも、女性たちに余計な不便をさせないように、用事があるときは子供に伝言させたり、部屋の外から大きな声で呼びかけてあらかじめ存在を知らせたり、自分の家であっても部屋に長居しないようにするなど遠慮した行為をとる。男性たちもまた、女性たちとその夫たちと自分の関係を把握して適切に行動しなければならない。

パルダールにおいては特に、実際の親戚関係および出身村が重要となる。パルダールを適切にできないと、男性女性問わず周囲の人に陰口を叩かれるのである。またパルダールは、プラナムや呼称と比較しても、瞬発的な判断力が必要な行為である。調査地の人々は、狭間に立って用事使いをさせられる子供たちも含めて、日々、自己と対面する他者とその場にはいない他者との人間関係を意識し、行為し、記憶しているといえる。

ここで挙げたプラナム、呼称、パルダールのいずれも、対面で行われる行為である。ここでは、対面的交流が行われる範囲内で⁷⁰過去に形成された婚姻関係が記憶され、未来の婚姻相手はそれに基づいて適切な範囲内から選ばれる。これらの行為は敬意に基づいて行われるものであり、それは立場の上下に基づいており、立場の上下は過去の婚姻関係によって規定されている。このように極めて日常的な挨拶や呼びかけ、振る舞いの行為を通して、同ジャーティの中での立場の上下という差異が記憶され、更新されている。そして、婚姻相手はその中で適切に選択される。

3.4 別の種類の違いと、同じような人を求める結婚相手探し

ところが、同ジャーティの中の「異なる」人々の中から選ばれる婚姻相手には、「同じような」人が好んで選ばれる。それはライフスタイルに関する類似性である。ブンデルカンド地方では、生活の物質的条件が家族によって非常に異なっているが⁷¹、それらが同じような人と婚姻関係を結ぶことが好まれる。第5章でも述べるように、D家の次男のリティクの婚姻相手を探す時、選ばれなかった候補者については、その理由が「我々のようではなかった (*hamārā jaisā nahīn thā*)」からであると、みなが口をそろえて言った。D家の人々の持ち物を見ても、それがどのような使い方をするのかわからなかったというのだ。それは、

⁷⁰ 一方、日常的に交流のない範囲にいる同ジャーティの人々の間では、むしろ同質性が強調されることが多い。例えば警察の取り締まりや役所などで、名前によって同じジャーティだとわかった時、担当官が便宜をはかることがある。さらに近年では SNS 上でジャーティのグループが作られているが、そこでは互いに遠い地域に住む人々が同じジャーティという一点においてグループを形成している。

⁷¹ 第2章でも触れたように、家は土でできているかコンクリートでできているか、便所があるかないか、煮炊きは竈かガスか、移動は徒歩かバイクか自家用車か、コンピュータは使えるかなど、家族によって生活の物質的条件が異なる。

身体的接触による交換と変化の論理とは異なる論理、つまり文化資本や消費能力に関わる類似性に関係すると言える。本節では、婚姻可能範囲内でさらに婚姻相手をどのように選ぶのか、その過程を記述する。

3.4.1 子供の婚姻を考え始める

調査地では、親が主導で婚姻相手を探す。近年では、婚姻前に当人同士を会わせ、好意を持ったか結婚に同意するかを聞くようになっており、そこで好みに合わないといって破談になることもある。子供はしばしば自殺や逃亡をほのめかし、結婚させることを、またはさせないことを強制しないように親を脅す。もし実際に子供が結婚の強制によって自殺すれば警察が介入し親が逮捕されるだろうという認識が流布しており、私自身も子供が親を脅したという例をいくつも見聞きしたことがある。しかし、子供自身が相手を選ぶ恋愛結婚は調査地では決して一般的ではない。

一方、結婚しないということは基本的には許されない。親に愛されていて、極端に貧しいわけではない子供たちは、結婚しないかもしれないという考えはほとんど持たない。調査地で結婚しないのは出家者である。結婚しなかった人はババ (*bābā*)⁷² というあだ名で呼ばれることがあり、まだ若くて結婚に乗り気ではない人が、自分はババになると冗談を言うことからわかるように、結婚しなくても許されるのは出家者だけである。世俗に身を置いているにもかかわらず結婚していないということは普通ではない。

つまり、親は子供が生まれたときから自分の義務として子供を結婚させることを考えており、そのための準備を始めるのである。だが、実際に相手を探し始める前に、親にはやるべきことがたくさんある。

年頃の子供を持つ親たちは、子供を結婚させるタイミングについていつも考えている。まずその子供の年齢による制限がある。法律では、男性は 21 歳から、女性は 18 歳から結婚することができる⁷³。これは、その年齢の前に親は子供を結婚させてはいけないという幼児婚の禁止を意図している。しかし実際には、多くの結婚がもっと若い年齢で行われている。そもそも自分や子供の年齢を知らない人も多いのだ。

親戚同士が集まると誰かしらの婚姻の話になることが多い。女性たちが輪になってお喋りをしている場で、ガネーシュの兄の娘のヴィッディーは自分の長女を結婚させようとしているという話をした。

⁷² 出家者への尊称。世俗を捨てた人のこと。家長の生き方と対比される。家長の勤めを終えた後になることもできる。

⁷³ ヒンドゥー婚姻法 (The Hindu Marriage Act, 1955) 第 5 条、特別婚姻法 (The Special Marriage Act, 1954) 第 4 条。

ヴィッディー「うちの上の女の子を今年中に結婚させるんだ」

カジョール「だってまだ15歳くらいでしょ？」

ヴィッディー「同じ村で最近若い娘が恋人と逃げたの。自分の娘がそうなったらどうするのよ。そうなる前に結婚させなきゃ」

そんな意見に対して、その場で誰も反論することはできなかった。婚姻に結びつかない子供の恋愛は常にリスクとして存在する。とはいえ、幼児婚をさせて警察に捕まることもまたリスクである。調査地では、女の子は18歳から21～22歳の間、男の子は21～25歳くらいまでに結婚させるべきだと考えられている。そして、遅すぎるよりは早すぎるほうが良いとも考えられている。女の子は25歳を過ぎたら、男の子は30歳を過ぎたら、「普通の」結婚相手を見つけることはほぼ無理だと考えられている。

カジョールの長姉であるシータの娘ロシュニーの結婚については、以前から親戚中の話題となっている。カジョールの長男アーカースと年齢が近いのもう30歳近いのだが、学歴があつて、コンピュータも使いこなす。痩せているが、痩せすぎではない。ロシュニーの弟には結婚の申し込みが来ていて、その相手には姉が先だから誰か探してくれと言っている。最近一つあった結婚話では、20万ルピー相当の新車と2、30万ルピーの現金がダヘージとして要求された。どちらか一方ならまだ条件をのめるが、ロシュニーの場合は、こちらが出せる限度額の倍以上のダヘージを要求されたということになる。年齢が高いということは、それだけ婚姻相手探しには不利なのだ、という事実の例証として親戚の間でこのことが語られているのである。

後に詳しく述べるように、女の子も男の子も、双方が様々な条件を見られ、総合点を評価される。そして、総合的につりあう相手と結婚する。年齢が高いということは大きな減点となり、その分点数が低い相手としか結婚できなくなる。また、なぜこの歳まで結婚できなかったのか、それは何か特別足りないところがあるに違いないと相手に思わせる理由にもなる。それゆえ親は、適当な時期に子供を結婚させることに心を配る。

ヴィッディーが娘の結婚を思いついたように、子供の問題行動も親が子供の婚姻を考えるきっかけとなる。例えば、隠れて恋人を作っている女の子はできるだけ早く、できるだけ遠くに嫁がせることがその問題の解決になる⁷⁴。ろくに仕事もしないでほつき歩いている男の子は、妻を持ち子供ができれば落ち着くのではないかと考えられる。

また家族の事情もある。母親が歳をとったり、忙しすぎたり、家に女性の数が足りないとしたりすれば、家族は嫁を早く迎えたいと考えるようになる。家の中の家事は基本的に女性と女の子の仕事であり、家族の生活の物質的条件が悪いほど彼女たちの労働量も多くなるので、家の中に複数の女性がいることが望ましいものとなる。年頃の女の子が家族

⁷⁴ しばらくは結婚しないだろうと思われていた女の子が、いきなり結婚相手が決まり、日もあけずに婚姻儀礼を行ったことがある。後々聞いてみると、恋人と一緒にいるところを目撃され親に知られたという話である。

の重要な労働力であれば、まず上の息子の嫁を迎え、その後、娘を結婚させようとする。ただし、嫁が来るのを待ちすぎれば、娘の婚期を逃すことになってしまう。

婚姻相手を探す前には、さらに準備が必要だ。男の子の場合、新しい夫婦が住むための別の部屋が必要になる。女の子の場合、婚姻の主な儀礼は女の子側の家で行われるので、多くの親戚や新しい姻戚に見られても恥ずかしくないように、やはり家をきれいにしなければならない。それゆえ多くの家で、例えば土の家をレンガの家建て直したり、レンガがむきだしだった壁をコンクリートで固めたり、2階3階と増築したり、水道や台所やバスルームや便所など、少しずつ時間をかけて新築や部分改築をする⁷⁵。家をきれいに作り直すことは、たんに婚姻儀礼の日やその後の生活のために必要なだけではない。婚姻相手を探すとき双方の親は必ず相手の家を見る。女の子の親は娘がこれから営む生活を想像し、男の子の家族はどんな姻戚を持つことになるのかを推察する。家がきれいで快適なことは、婚姻相手探しの重要な点となるのだ。そうすると、他の条件、例えばダヘージが少ない、色が黒い、という欠点を補えるかもしれない。

A村のD家のすぐ裏に住む牛飼いジャーティ・ヤードオ(yādav)の家族は、3人兄弟と老いた父が広い敷地に建つ土の家を3つに区切ってそれぞれ住んでいた。次男と三男は結婚していたが、長男だけが独身だった。ところがある時、長男が都市出身の「教育を受けた」女性と結婚することになった。その時、相手の女性の父親が出した結婚の条件が、娘が住むための煉瓦造りの家と便所を新築することだった。そのことについて、牛飼いの家を自分の家の屋上から覗き込みながら、ガネーシュと、同じジャーティの友人のラクシュマンが噂話をした。

ガネーシュ 「長男は学もなくして牛を飼うしか能がない男なのに、学のある嫁が来た」

ラクシュマン 「次男と三男は学があるのに、学のない嫁をもらっている」

ガネーシュ 「ほんとだ、学があるのには学がないのが来て、学がなくして一番年とっている長男に一番良い相手が来た」

私 「例えば長男だったら一番相続が多かったりするの？ つまり、何か長男と結婚する利点があるの？」

ガネーシュ 「別に、もうそれぞれ別れて暮らしているから、特にないよ。でも、[3兄弟の] 嫁の間では新婚早々ボスになれる」

ラクシュマン 「嫁は何歳くらいなんだろう？」

ガネーシュ 「きっと年とってるだろう。あいつに嫁ぐくらいだから、何か足りない点(kamī)があるに違いない」

⁷⁵ 調査地では地震がほぼなく、また建物は土やレンガで下から積み上げるように建てられている。それゆえ建物の一部を削ったり接ぎ合わせたりする部分改築や増築が容易であり、人々はその時々家族の事情や経済状況に応じて、少しずつ家を手直しをする。

男の子の場合、最も重要なのは仕事である。仕事をしているなら、給料はいくらなのか、もっと条件のよい仕事に就ける可能性はあるのか、まだ学校で勉強をしているなら何年後に仕事に就きどの程度の収入を得られそうなのかなど、仕事に関してできるだけ点数を稼いでおけば、それだけ良い条件の嫁を迎えられることになる。さらに父親や母親、兄弟の職業や収入、財産も問題となる。

また、結婚の際に嫁や娘に与えるための金銀の装飾品類も、一度に揃えることはできないので、子供が小さいころから少しずつお金が貯まるたびに買い集めていく。こうして様々な準備を時間をかけて行い、子供の年齢や性格や家族の事情も加味しながら、そろそろと思ったときに、親たちは子供の結婚相手を探し始めるのである。

3.4.2 実際に訪ねる

親が子供を結婚させようとして決心し、子供もそれに同意すると、いよいよ相手探しが始まる。まずは情報発信と情報収集である。親は、親戚や同じジャーティの人や仕事仲間など周囲の人に、自分には結婚させたい子供がいるという意思を広く伝え、どこかに良い相手はいないかと尋ねる。親戚の誰それには娘がいる、どこそこに良く仕事をする男の子がいる、という情報を得ると、実際に相手とその家族と家を見に行く⁷⁶。その際、間に立って紹介してくれる人がいると、話は円滑に進みやすい。

ただし、紹介者が丁寧に紹介してくれるともかぎらない。ある日、ガネーシュの元を、妻カジョールの実家の村出身のブラフマンの知り合いが訪ねてきた。B村に住むガネーシュの知り合いの裕福なブラフマンを、娘の結婚相手として紹介してほしいということだった。彼はさらに、ダヘージとして数十万ルピーは出す、ということも付け加えた。ガネーシュはその場では紹介することを快く承諾していたが、彼が帰ったあと、「何千万ルピーもの財産があるお金持ちが、息子の結婚相手にわずか数十万ルピーのダヘージの娘を選ぶわけがないだろう。紹介するだけ無駄だし、そもそも恥ずかしくて紹介できない」と言っていた。

この事例のブラフマンの男性も、娘の結婚相手を探しに遠方の村まで知り合いを頼って訪れているが、そもそも調査地では、婚姻相手を探しに最初に相手の家へ行けるのは女の子側だけである。つまり男の子側は、女の子側が訪ねてくるのをただ待つしかない。このことは、男の子側の家族をやきもきさせる。男の子側にできる積極的行動は、さらに広く情報発信・収集をすることだけであるが、何度も尋ねるのは良いことではない。男の子に何かしら足りないところがあるから焦っているのでは、と思われるためだ。一方、女の子の側は、良い男の子がいるという情報を聞くと、実際に相手の家を訪ね、男の子を見に行く。このとき、本人は行かず、多くの場合、家族の男性が行く。

⁷⁶ 訪問の具体的な様子に関しては付録2参照。

女の子側が訪ねて行って、結果に満足すると、男の子側に女の子を見に来るようにと言う。この言葉を言われるまでは、こちらから行ってもいいですかと男の子側は言えない。招待を受けて初めて、男の子側は女の子を見に行くことができる。女の子側が訪ねる時と同様、男の子側も、家族や親族、近所の人や友人など、本人以外の人々が行く。父親や兄弟、オジなど男性が行くことが多いが、近年では姉妹や母親も見に行くようになっている。女性には女性の視点があるし、男性が入れない相手の家の中まで入ることができるので、近年では姉妹を連れて行くことが肯定的に語られるようになっているのである。このとき当人たちの写真を交換し、本人や、相手を見に行かなかった家族に見せるために持ち帰る。

お互いに訪問を終え、男の子、女の子を気に入ると、そのしるしとして甘い菓子の箱とお金が渡される。特に女の子を見に行くときは、手ぶらで行くことは許されない。しかしこの菓子とお金を渡すだけでは、まだ何も決定されていない。

3.4.3 結婚相手に求めるもの

双方が家を訪ねて確かめるのは、若さ、美しさ、仕事、性格、体格、皮膚の色、学歴、家族、ダヘージ、生活のレベル、家や土地、財産など、多岐にわたる。本人や家族に聞いてその応答を見るほかに、実際に観察したり、周囲の人に評判を聞いたりして確かめる。ガネーシュは一度女の子の父親が訪ねてきたとき、友人のラクシュマンを呼んで同席させた。たまたま相手がラクシュマンの親戚だったのだ。親戚の前では嘘をつくことができなから彼を呼んだのだという。

双方は様々な条件を鑑みて、相手を総合的に評価することになる。女の子側は何人もの男の子を見に行き、これはと思う男の子がいれば再び訪れて招待をする。もしくは1回の訪問で招待することもある。条件の良い男の子の家には何人も招待があるので、何人かの女の子の中から1人を選ぶことになる。もちろんどの条件を重視するか、それぞれの合格点をどこに置くかは人によって異なる。

以下に挙げるのは、D家の向かいに住む、ラクシュマンの次兄の長男のゴールー（男、2011年当時22歳、学生）の結婚相手探しの事例である。ゴールーの家族は、父、母、ゴールー、弟2人、妹である。父は職人、母は公立小学校の任期付き教員で、比較的裕福な一家である。ゴールーは、地元のディグリー・カレッジを卒業した後、首都のデリーでアニメーションの勉強をしている。その後は実家に住みながら、地元のカレッジで教え、またインターネットを使ったアニメーションの下請けの仕事をして、ダブルインカムを達成することを目指していた。

ゴールーの弟のプスペン（当時19歳）が、2011年7月に私に語ってくれた。

ゴールーには最近、3人の女の子の家族が見に来た [2009年に私が初めて村を訪

れたときにも、ゴールーには婚姻の申し込みが来ていた]。結局今回、3人の女の子を比べて、学歴と、何をくれるかを聞いて、5万ルピーのバイクをくれて学歴のある女の子を選んだ。もう1人は2万5千ルピーのバイクと言ひ、もう1人は学歴もなかった。母親とゴールーとプスペンが女の子を見に行き、気に入り、結婚を決めた。

このシンプルな語りからは、プスペンが何を重要視しているかがわかるだろう。彼は簡潔に2つの条件、つまり学歴とダヘージを比較してみせた。後に3人の写真を見せてもらったとき、選んだ彼女が一番顔も可愛いということで私たちの意見は一致した。しかし、最初の語りの中ではその点は触れられなかった。

この結婚話は結局、2012年の秋に破談となった。女の子側が当年中の結婚を望んだのに対して、男の子側が職について1~2年後の結婚を望んだのが理由だった。この点で双方妥協できず、結婚は取りやめになった。実は、2011年の6月の時点で、ゴールーの家族は当年中に結婚が行われると思っていた。しかし7月末の時点で、結婚は職についてしばらくしてから、という意見が支配的になっていった。その後1年以上も婚約状態が続いた後、当初は曖昧になっていたが、実はゴールーの家族が一番重要視することになる条件が、徐々に明確になっていったのだ。つまり、まず安定した職、そして仕事に慣れた後の結婚、という順番である。このように考えることは、実は調査地においては一般的ではない。両親と男兄弟で同居するという居住形態において、家族は生計においてもある程度助け合うものであり、まだ経済的に独り立ちしていなくても結婚することは可能であり、決して珍しいことではない。

ハンサムなゴールーは、また別の女の子が見つかると思っている。ゴールーには、かつて同じジャーティの別のガールフレンドがいたこともある。その彼女については、自分の母親にも伝えたと言っていた。そのことを尋ねた私に対して、ゴールーは「その子と結婚することになるだろうと思っていたよ。今回は2人目のガールフレンドだった。そのうち3人目を見つけなければね」と、余裕がある態度を示した。

しかし、ゴールーの家族が断った相手の女の子は、近隣のロハール・ジャーティの中では評判の、とても魅力的な女の子だった。ガネーシュとラクシュマンは、断ったゴールーとその家族を、馬鹿なことをしたものだと言っていた。このように、結婚適齢期にある若者の評判や噂は、ある程度同じ地域の同じジャーティの人々の中で回っている。よその家族を訪ねた人が自分たちの家族を見に来ないと、自分達家族の条件がその分劣っているような気がする。また逆に、自分たちよりも格段に条件が悪いと思っていた相手に訪ねられると、自分たちのサマージ内での評価はその程度だったのかとがっかりすることになる。

婚姻相手探しの場では、相手进行评估すると同時に、自分たちも他人の目によって評価されるのだ。自己評価とつりあう相手が望まれるが、来た相手は再び自己の価値を照らし出す。同じジャーティの中で競合する相手とも比べられ、話の進み具合が自分たち家族を映す鏡となる。自負が試されるときでもある。自信満々に結婚相手を探し始め、当初はあれ

やこれや様々な条件をつけていたが、だんだん自信をなくし始めて条件をどんどん下げていくということは、よく聞く話である。待てばもっと良い条件の相手が現れるかもしれないが、時間は年齢を奪っていく。もっと悪いのは、下の弟妹たちの婚姻に悪影響を与えることである。ある程度のところで決断をしなければいけない。

これらの評価は多くの場合、噂や1~2回の訪問によって得た情報によってなされる。応急処置的に取り繕うこともあれば、多少の嘘や誇張が混じっていることもある。例えばカジョールの次姉の娘の夫は、結婚して以来働かずにずっと家におり、妻を束縛して、些細なことで嫉妬し、暴力をふるい、携帯電話を取り上げて数日間も部屋に監禁するような男性であることが判明した。結婚前の話では店で働いているということだったが、実は財産を持っているだけで自分では全く働いていなかったのだ。現在、彼女は実家に滞在しているが、彼女が離婚するべきかしないべきかは家族や親戚の中でも意見が分かれている。ガネーシュとカジョールは常日頃、「ヒンドゥーに離婚はない⁷⁷」と言っており、カジョールの姉たちも同じような意見である。一方三男のアトルは、「暴力をふるって閉じ込めるような男性とは離婚するべきだよね？ でも彼女の親は彼女に夫のもとに戻ってほしいと思っているんだ」と語る。

このように、非常に大きな嘘を見破れなかったために結婚後苦労したという話が身近に聞かれるため、自分たち家族にも同じようなことが起こらないかとの不安が常にある。結婚相手は、売り込む努力、真実を見抜こうとする努力、そして自己評価と妥協を重ね、決められていく。

3.4.4 学歴の重要視

D家の裏に住む牛飼いの長男の嫁の事例やゴールーの事例でも見られたように、近年では婚姻相手探しの場において、特に女の子の学歴が重要視されるようになってきている。その理由は、一つには女性が働くということが肯定的に捉えられるようになってきているということ、もう一つには、女性が母親として子供たちの教育をしっかりとすることが望まれていることが挙げられる。

インドでは、高位ジャーティの女性達は、夫の補助的役割をする従順な妻、母として振る舞い、裕福になれば家にいるようになるという (Kapadia 1997)。このように、一般的に

⁷⁷ 離婚の慣習を認める人々としてのムスリムやクリスチャンを意識した言葉である。もちろんヒンドゥー婚姻法第13条には離婚規定がある。第13条第1項i aには、虐待行為が離婚事由となると書かれている。ヒンドゥーの高位ジャーティの間では慣習的に離婚が認められず、低位ジャーティの間では認められる傾向にある。それゆえ、離婚の可否がジャーティの地位の高低を示すひとつの指標として見なされることがある。このガネーシュとカジョールの発言は、自分たちはヒンドゥーの婚姻理念に沿わないような低いジャーティでは決してないということを示したものであるといえる。

は家庭内を管理する専業主婦がヒンドゥー女性の理想であった。しかし近年では、外で働いて給料を稼ぐということが肯定的に語られるようになってきている。ここには、肉体労働や小売業は含まない。それらは、昔から貧しい低位ジャーティの女性たちが生計をたてるためにしている労働である。そうではなくて、いわゆる「頭を使う、椅子に座ってする仕事」をする女性が、結婚相手として高く評価されるようになってきている。代表的な例は教師である。特に、公立の教師にでもなれば、一般的な男性の数倍もの給料を、長期にわたって安定して得ることができる⁷⁸。そのためには学歴が必要である。結婚相手候補の女の子が、この段階まで教育を受けたかは重要である。12年生を卒業していれば、大学へは婚家が通わせて、職につけることもできるが、10年生までしか教育を受けていない女の子ならば、さらに長期間学費を払って学校へ通わせなければならない。5年生までならさらにもっとである。そのため、嫁を何か給料をもらえる職に付けたいと考えている人は、相手の女の子の学歴を特に気にかける。

また、「頭を使う、椅子に座ってする仕事」は、女の子に限らず調査地の人々にとって憧れの的であり、成功者の証の一つともなりうるものである。自分の世代、息子の世代には叶わなくても、孫の世代にはそのような職業についてほしいと願う人々は少なくない。そして家庭で子供たちのしつけや教育を引き受けるのは母親であるから、嫁には教育のある女の子が望ましいとされているのである。

しかし、嫁に教育があるということはまた、諸刃の剣でもあるとも考えられている。上記のように利点も多いが、姑や夫に従わない生意気な嫁となる可能性もあるのだ⁷⁹。また、もし嫁が都市出身だったら、村での生活において、あれが足りない、こんな仕事はできないなどとわがままを言うかもしれない。一方、田舎者の教育を受けていない嫁は、物を知らないかもしれないし、親戚や他人の前で恥ずかしい振る舞いをするかもしれないが、しかし働き者で従順な嫁となるであろうと考えられている。すべてを兼ね備えた嫁が望ましいが、望むものはまた矛盾してもいるのである。

3.4.5 ママとプーパー

結婚相手探しから婚姻儀礼を行うまでは、広い人間関係が非常に重要である。その中でも特にママとプーパーの役割が大きい。ママとは母方オジ (MB) のこと、プーパーとは父方オバの夫 (FZH) のことである。彼らは、自分の姉妹や義兄弟の子供たちのことを気にかけて、適齢期になったら結婚相手探しを行い、相手を見に行くときは一緒に行き、話を付け

⁷⁸ 教師に限らず公務員というのは調査地では「勝ち組」であり、憧れの職業である。

⁷⁹ チョウドリーは、異ジャーティ間の恋愛をして制裁を受けた女性に対して、教育が彼女にこんな考えを植え付けたとする周囲の人々の語りを例示している (Chowdhry 2009:146-147)。

させ、ダヘージを代わりに払い、婚姻儀礼の段取りをつけ、贈り物をし、細かいマネージメントをする。婚姻儀礼の当日、両親の代わりに儀礼に参加することもある。つまり、花婿花嫁双方のママとプーパーが、子供の婚姻の実質的な責任者として期待されているのである。逆に言えば、ママやプーパーと仲が悪かったり、ママやプーパーが貧しかったりすると、子供たちの婚姻が遅れがちになることもある。

D家で子供たちの結婚相手がなかなか見つからなかった時期、自分たちの親戚関係を顧みる会話が家族の中でなされた。

ガネーシュ「トモ、インドの婚姻ではママとプーパーが親みたいなものなんだ」

私「婚姻儀礼のときに麦とか米とか持って来るんでしょ？そして花嫁はママの首に抱き付いて泣くんでしょ？」

ガネーシュ「それだけじゃない、ママやプーパーは義兄弟や姉妹の子供の婚姻相手探しも中心的にやるんだよ。でもうちはママやプーパーがやってくれないんだ」

カジョール「ママはやろうという気はあるんだよ。少なくとも小さい方のママは[カジョールには兄と弟がいる]。でも小さい方のママは貧乏だからできないんだ。大きい方のママはお義姉さんがあだから。プーパーは大きいほうのも小さいほうのも[ガネーシュにも姉と妹がいる]全然」

カジョールは自分の弟夫婦を愛しているのでかばう発言をするが、兄夫婦のことは信頼していない。一方ガネーシュの姉妹については、姉夫婦はその前にD家が開催したプラーン (*purāṇ*) 儀礼(第4章で詳述)に招待したにもかかわらず来ず、妹は死んでおり、義弟は全く連絡してこなかった。

インドでは、年中行事として兄弟と姉妹の仲を確認する儀礼が繰り返し行われる⁸⁰。親は子供より早く死ぬであろうが、その後は兄弟が姉妹の面倒を見ることを期待される。兄弟は姉妹に現金や服などの贈り物をし、姉妹は兄弟に祝福を与える。一方、男の兄弟同士だと、それは完全に同じ家族内の関係である。また姉妹同士の関係は、完全に違う家族の間であり、儀礼の場においても、互いにお客様と同じような扱いになる。しかし兄弟と姉妹の間の愛は、その互いの子供たちへの世話と愛情として引き継がれる。そして特に互いの子供たちの婚姻に関しては、大きな役割を果たすことが求められている。子供の婚姻の過程は、前の世代の兄弟姉妹の愛情や交流が明らかにされる場でもある。

⁸⁰ ラクシャバンダン (*rakṣābandhan*) や、年に2回のバハーイードージュ (*bhāidūj*) など。バハーイードージュは年に1回、ディワリー (*divālī*、カーティク [*kātik*] 月の黒分15日に行われる、ヒンドゥー最大の祭り。灯明を家の周囲に灯し、富の神ラクシュミー [*Lakṣmī*] 女神を祀る) の2日後だけにある地域が多いようだが、私の調査地では年に2回、ディワリーの2日後とホーリー (*holī*、ヒンドゥーの春祭) の2日後にあった。その日は遠方に住む兄弟姉妹が互いに訪ね合うこともある。

本節で見てきたように、婚姻関係を結ぶ相手の選択は、婚姻相手へのライフスタイルの類似性の要求と同ジャーティ内の競争的差異化の試み、過去に形成され維持されている人間関係や物質的条件と描く未来の家族の姿への希求の交差する場で行われていると言える。次節ではより具体的に、D家の人々による婚姻相手探しの事例を見ていく。

3.5 未来への希望と不安—D家の物語

3.5.1 関係の回復への努力

D家の長男のアーカースが結婚する前、つまり24、5歳の時、彼に結婚話が来ていた。当時の彼の月給は3,000ルピーで、それに加えてアルバイトもしており、充分ではないが低すぎもしない収入だった。相手も決して悪くはない条件だったが、アーカースは、自分ももっと勉強をしたいと言って結婚を断った。

2009年2月、アーカースは別のジャーティの女性ナミータと結婚をしてしまった。そのことは、家族の心情に様々な影響を与えた。

2011年、フィールドに戻った私は、次男のリティクも自分の好きな人と結婚して、親と離れて住むというメンタリティーを持っているだろうという、ガネーシュとカジョールの不安な気持ちを聞かされた。それは、ガネーシュとカジョールは年を取れば子供たちの誰とも住めなくなり、そうなったらどうやって生きていけばいいのかという、自分たちの老後の心配とセットとなる不安でもあった。また今現在の問題として、カジョールが年を取ってくると家事を1人でするのは疲れるし、A村とB村の家を行き来する時に、大人の女性が1人は家にいなければならない。当時のガネーシュとカジョールは、ダヘージは何もいないからただ良い女の子がほしい、それだけしか願っていないのにつながらない、と言っていた。家族としては、甥のハリー、次男のリティク、三男のアトルまで、いつでも結婚させる準備はできていた。特に年上の2人の結婚は急務だった。

アーカースの異ジャーティ結婚によって停止していた親戚づきあいは、当時復活していなかった。ガネーシュとカジョールは、「私はヒンドゥーだ。このサマーグの中に生きることを望んでいる」として、関係を取り戻そうと、手始めにカジョールが最も親しみを感じ慕う長姉シータの家に行く計画を立てた。「とりあえず電話で聞いてみて、行っていいのなら行くし、来るなど言われればそれまでだ」と言いながら、カジョールはさっそく電話し、私を口実に使い、アングレジーマダム (*angrejī mādām*, English Madam、外国人の女性) が勉強のために小さい村を見たいと言っているから、行っていいか、と尋ねた。しかし結局行ったのは、A村からB村へ行く途中にある、シータの上の娘の家であった。彼らはそこ

へも電話して、A 村から B 村へ行く途中にマダムと一緒にちょっと寄るからと伝えた。私とガネーシュとカジョール、アトルとバルサで出かけると、夫の両親も含めてみんなで歓迎してくれて、少し元気になった。その時もてなしてくれた夫の父は、後のリティクの婚姻儀礼の時、最重要ゲストとしてガネーシュがもてなした。

2012 年 1 月、長男の異ジャーティ結婚によって同ジャーティの中で劣位に置かれた D 家の地位を回復するための浄化儀礼バークヴァトプラーン (*bhāgvat purāṇ*) が行われた。プラーンの影響はすぐに出た。プラーンが行われているときに来た親戚から結婚式の招待状をもらい、プラーンが行われた翌日には、さっそく婚姻相手を探す女の子の兄と父がハリーとリティクを見にやって来た。さらにその翌日も一組来た。

当時カジョールが嫁に望んでいた条件は、美人がほしい、しっかり仕事をする娘がほしい、というものだった。プラーンの前に語っていた、ただ良い女の子がほしいという内容よりも具体的になっており、求める女の子のレベルも上がっている。しかし両親の 2 人の息子の結婚に対する熱量は違う。ハリーは甥でリティクは息子なのだ。ハリーの嫁と一緒に住む気はないが、リティクの嫁とは一緒に住むだろう。ハリーには学歴がないがリティクにはある。ハリーは職人として一生生きていくだろうが、リティクは会社員になる可能性がある。つまり、2 人はそれぞれつりあう相手や結婚の条件が違うと思っている。

リティクは何であれバイクがほしい、バイクをくれない話はすべて断ってくれと言っていた。この話には前段がある。D 家は当時 2 台のバイクを持っていたが、それはガネーシュと三男のアトルがそれぞれの稼ぎで買ったものだった。リティクはバイクに乗りたいときアトルに遠慮しなければならないことにより年長者のプライドが傷つけられ、しばしば喧嘩になっていたのだ。リティクがバイクを持つには今のところ、高給の職に転職するかダヘージで手に入れるしか方法がないのである。

一方のハリーは、自分の結婚についてもその条件についてもガネーシュとカジョールには何も言わない。周囲の人は、ハリーが結婚し子供も生まれれば、もう少し仕事もちゃんとするだろうし、家にも帰ってくるだろうと言う。一方ハリーは、ガネーシュとカジョールは甥である自分の結婚のためにはお金を払わないだろう、だから自分でお金を貯めなければならぬ、という不安と不満を感じている。

プラーンを開催したことで復活したかに見えた同ジャーティの人々の婚姻相手探しの訪問は、その後すぐに選挙期間になり、警官が巡回しているからという理由で訪ねる人が来なくなった。調査地では警察との関わりは極力避けられる。そして選挙が終わった後も、婚姻相手を探す女の子の家族が訪ねてくることはもうなかった。プラーンの影響は、親戚づきあいという既存の横のつながりの回復に関しては効果があったが、婚姻相手探しという未来の縦のつながりの回復に関しては実は限定的なものだったことがわかったのである。しかし既存のつながりを維持し、強め、あるいは回復することが、未来のつながりを作ることにつながっていく。実際に、次男のリティクの婚姻相手は親戚のつながりの中から紹介されることとなる (第 5 章参照)。

ガネーシュは、どんな機会でも掴まえて息子たちの結婚相手探しを頼んでいた。2012年11月、長年交流がなかったのに突然訪ねてきたハリーの母方オジの息子（MBS）⁸¹にも、誰か良い女の子を知らないかを聞いた。彼は自分の母方オジの娘（MBD）たちの話をした。確か3人の女の子がいて、内1人はすぐには結婚できない年齢だったと思う、という話だった。ガネーシュは彼に、当人たちも含めた家族全員で女の子の家に行くから、三男のアトルも含めたみんなで話して好きになった者同士が結婚すればいい、と言った。しかしその話を後に聞いたカジョールは、まずは女の子側が訪ねて来ることが絶対に必要だ、と言った。なぜなら前節でも説明したように、女の子側が先に男の子を訪ね、招待されてはじめて男の子側が相手を訪ねることができる、というのが調査地の慣習だからである。近年では、訪ね合うにも色々な形態があるが、それでも相手があることなので、昔から決まっている作法どおりに行うのが無難だとされている。ここでも1回の情報発信以外、男の子側は何もすることができない。彼がきちんと女の子側に情報を伝え、女の子側が来てくれることを願うだけである。

3.5.2 希望と不安

ガネーシュは子供たちの結婚相手について、当時このように語っていた。まず異ジャーティ結婚をした長男のアーカースに関しては、「その行為も結婚相手も最低である。しかし彼はもう家から出ていってしまい、家族から離れてしまった。だからもう考えないことにする」と言っていた。

甥のハリーに関しては、「自分たちは将来同居する気はないので、ただハリーのことだけを気にかけることができる人、ちゃんとハリーの稼ぎを受け取って、夫を管理できる女性が望ましい」とガネーシュは語る。カジョールはハリーに関して、「ハリーは仕事をする、家に帰ってくる、すべてはそれからだ。それさえすれば、腕のいい職人だし、今すぐにだって結婚はできる。自分の息子たちだっていつまでも食わせないというのに、彼をいつまで食わせられるというのか」と言っている。

甥のハリーに関しては、ガネーシュは残念に思っている。ハリーが2歳の時に、ハリーの母親（ガネーシュの兄嫁）が死んだ。そのとき、ガネーシュとカジョールは幼いハリー

⁸¹ そのとき知ったことだが、実はこの親戚の男性も、異ジャーティの女性と結婚したとのことだった。しかしそれは会話の中でさりげなく伝えられ、それを聞いたガネーシュもカジョールも特別な反応は示さず、帰り際には、嫁によるしく伝えてくれと言っていた。彼はD家の子供たちにとって（類別的）母方オジの息子だったが、A村からバスと電車で5時間ほどかかるブンデルカンド地方北部の都市に住み、長年交流がなかった。また彼はX町に住むハリーの親戚たちとあまり良くない関係にあった。おそらく彼は、D家と親戚であっても、D家のサマージの外にいたのだろう。であるからこそ、彼の異ジャーティ結婚はD家にとっては何の問題でもなかったと言える。

を引き取って育てることを申し出た。当時D家はB村に住んでいた。しかしハリーの父は一人息子を自分の手元で育てることを望み、その申し出を断ったという。ガネーシュとカジョールは、「あの時引き取って自分たちの家族と一緒に育てていれば、ハリーもうちの子供たちみたいに良い子になっていたかもしれない」と語っている。2010年ごろから、ハリーには相手の家族公認のイスラムのガールフレンドがおり、彼女の家に入り浸っている。彼には以前からイスラムの友人が多かったが、今では完全にイスラムになってしまったのではないかとガネーシュたちは疑っている。証拠として三男のアトルは、「ハリーは火曜日〔ヒンドゥーが寺院へ行く日〕には水浴しなくても、金曜日〔イスラムがモスクへ行く日〕には曜日を確かめて水浴しなきゃと言って絶対に水浴している」と言った。そのような状況を受けてカジョールは、A村の家の中に壁を作って2つに分け、一方をハリーの家、一方をD家の家にするによって、彼に今後問題が起こっても自分たちにその問題が及ばないようにしようとしている。ここにも、隣接性とそれに伴う接触およびサブスタンス・コードの移動の論理が見られる。ガネーシュたちの考えによれば、ハリーはD家とともに生活してこなかったから、D家のような性質を共有していない。それどころか現在ではイスラムたちと生活を共にすることによって、本当にイスラムになりつつある。そこで、現在では時々一緒に住むことによって維持されている近接性によるつながりを、家を分けることによって物理的に断ち切ろうとしているのである。それは、サブスタンス・コードの移動を避けるだけでなく、サマージの人々につながりが切れていることを示すためでもあると考えられる。

怒りっぽい性格で、安定した職のない次男のリティクに関しては、「自分の夫のこと、夫の両親や弟妹たちのこともちゃんと気にかけて、面倒を見ることができる女性。リティクの稼ぎが少ないから、自分で考えて、何かしら稼ぐことができる女性。そのためには学がある人がいい」と言っていた。アーカースをはじめ、バルサも含めた兄弟たちが、リティクにはガールフレンドがいると確信していた。そのことで一度ならず問題に巻き込まれてもいたのだ⁸²。しかし彼自身は、親が気に入った同じジャーティの女の子と結婚すると決めていた。

リティクの問題については、ガネーシュとカジョールはある程度知っていたが、三男アトルの心の中の問題は知らなかったようである。アトルには過去数ヶ月間だけガールフレンドがいた。しかし今では女性不信となり、結婚しないでババになると言っている。一緒に仕事をするアトルをガネーシュは、リティク以上に将来一緒に住む可能性が高い息子だと思っていた。そんな彼のためにガネーシュが望む結婚相手は、「幸せに笑って暮らせる人、将来別に住むのだったら自分たちが呼んだらすぐ来る人、一緒に住むなら両親や家族皆の世話をしてくれる女性」と語る。

四男のアシスは女の子のことに興味津々で、チャンスがあればガールフレンドも作りた

⁸² そのときの次男リティクの問題は、三男のアトルが長男アーカースに相談し、アーカースとその友人が解決していた。

いるかという会話をしている。四男の彼の結婚相手についてガネーシュは「考えたこともない。誰かしら見つければその人とすればいいと思っている」と言う。

末子のバルサは、ガネーシュの死んだ妹の生まれ変わりであると考えられている。ガネーシュの妹はとても可愛くて色が白く、性格のよい娘だったが、嫁ぎ先で死んでしまった。死に目に会えなかったガネーシュは、火葬の火の前で、私の娘として生まれてきておくれ、と妹の遺体に呼びかけた。その直後カジョールの妊娠が発覚し、そしてバルサが生まれた。それゆえガネーシュは、バルサを怒ったことがないという。彼女の結婚相手についてガネーシュは、「自分の両親を気にかけて一緒に暮らしている男性を」と望んでいる。

バルサは、同級生の色々なことを経験している女の子たちのことを軽蔑する一方、その行為の中身が気になって仕方がない。だが、彼女たちと同類には見られたくないし、そのような行為をするつもりはないという。また、クラスの男の子たちは汚くて子供っぽく、全く相手にできないという。兄がたくさんいるから、自分の結婚の時は多くのダヘージについて、良い人と結婚できると思っている。

ガネーシュは、5年以内（つまり2017年ごろまで）に、子供たち全員の結婚が済むことを望んでいる。彼はこう語る。

特にバルサの結婚は、5、6年以内、つまり21歳ごろまでには絶対に済ませるべきだ。それくらいに全員の結婚が終わればサマージの皆の心象も良い。そうすれば自分とお母さん〔カジョール〕は、リシケシュとかマトウラといった巡礼地でプー ज्याをして暮らす。しかし子供たちにお金を催促するのはよくないから、何かしら小さな商売はできるだろう。お店を持つか、もしくは職人仕事の言葉の交わり方を後進に教える、という仕事が一番ふさわしいだろう。

それでも時に、大きな不安が押し寄せる。

子供をすべて順番に結婚させていくことは両親の大きな仕事であり、私だって子供が生まれて以来ずっとそのことを考えてきた。しかし自分はその最初でつまづいてしまった。それゆえ、今も心のどこかで、ふたたび、みたび、同じことが起こるのではないかと恐れているんだ。

子供の結婚相手探しは、親自身の老後と結びついて考えられている。そんなカジョールの不安に対して息子たちは、「自分の息子のことを信用できないの？」と冗談交じりに聞くが、カジョールはまじめな顔で、「自分の息子のことは信用している、今はね。でも結婚した後の息子は全然信用できない、親よりも嫁の言うことを聞くようになるんだから。嫁が来た後、まあ見てなさい」と言うのである。

3.5.3 他人の結婚を見て自分の結婚を想う

2012年3月のホーリー祭の日、三男のアトルのもとに、ある女の子から「Happy Holi」という携帯電話のショートメッセージが届いた。アトルは思わず苦笑した。彼女は前年の1月から3月までアトルのガールフレンドだった子であり、前年のホーリーも一緒に祝ったが、その後、連絡が途絶えていたのだ。アトルの誕生日にもバレンタインデーにも連絡がなかったのに、1年後のホーリーに再び簡単なメッセージを送ってきたのである。

アトル「僕の後に誰のガールフレンドになって、今は誰のガールフレンドになっていることやら。だからインドの男の子の50%、女の子の90%は信用できない」

私「どういう風にガールフレンドと知り合ったの？」

アトル「会って、知って、携帯電話の番号を交換して、後は携帯電話が仕事をしてくれる」

私「彼女はどんな人だった？」

アトル「彼女の話はしたくない」

その代わりにアトルは、最近結婚した自分の親友でナイ（床屋）・ジャーティのアルジュンの話しをした。アルジュンはアトルにしてみれば信じられないくらい幸運な人だった。

アルジュンはいいい、5、6年前から毎日電話しあっていた恋人の女の子と結婚した。愛することは誰でもするが、目の前にいる人と本当に愛し合えるのは難しい。しかし愛する人と結婚すべきである。近頃のインドの女の子たちは、男の子たちよりもたくさん、愛に関して裏切っている。愛し合っている人がいても、別の人と結婚している。アルジュンにもその妻にももっと別の条件の良い申し込みがいくつかあったが、2人とも互いと結婚した。彼らは正しい人たちだ。

アルジュンは同じジャーティの婚姻可能な恋人がおり、彼女と恋人関係にあることを両親には隠したまま、上手く2人の結婚を取り決めさせるように仕向けたのだ。

私は、2014年の2月に行われた次男のリティクの婚姻儀礼に参加するために、調査地へ戻った。リティクの結婚の準備で誰もが忙しい中、アトルが、リティクのサスラール(*sasurāl*、配偶者の実家)の誰か女の子から自分に電話やメッセージが来ているのだとあってそれを見せてくれた。彼女は婚姻儀礼のときに会えれば名乗り出るといっているらしい。リティクが婚約の時に家族の全部の電話番号を相手方に伝えたため、それを見た女の子がアトル

に連絡を取ってきたのだろうという。リティクの弟であるアトルと、リティクの妻の妹（類別的、もしかしたら実妹かもしれないが）である彼女は、婚姻可能範囲内である⁸³。

大きな変化があったのは末子のバルサである。彼女にはボーイフレンドができていた。2歳年上のブラフマンの男の子ランビールである。彼女は私に、「私たち2人はお互いなしでは生きていけないし、別の人とは結婚できないから、結婚するしかないの」と、秘密を教えてくれた。

ただしバルサはアーカースと違い、両親に伝えた後に結婚するという⁸⁴。

彼の姉の結婚は済んでいるし、彼の兄の結婚はランビールよりは先だろうから、その点に関しては誰にも問題は起こらない。自分の場合は、自分よりも結婚が後であろうアトルとアシスに問題が起こりうるが、アトルは自分は結婚しないと言っているし、アシスのことはまあわからないけど。

彼女は自分の将来について一生懸命考えており、誰かに相談したいと思っているが、できる相手は当の恋人のランビールか、外部の調査者の私だけなのである。

リティクの婚姻儀礼の準備が進む期間は、バルサがランビールとずっと電話をしている期間でもあった。とはいっても人前では電話はできない。婚姻儀礼の間、他人が入り込んで混雑する家の中で、大切なもの置き場と定めて鍵をかけた部屋に、勉強道具と携帯電話を持って籠もり、小声で電話をしていたのだ。その携帯電話の料金は、彼女に恋をする別のブラフマンの男の子サチンに振り込ませていた。彼女はランビールに夢中だった。ちょうど進行中のリティクの婚姻儀礼の日程に合わせて、私たちの結婚初夜ではどうする、といった、性的な話題もかなり話していた。バルサは自分にこんな素敵なボーイフレンドができたことが信じられないという。ランビールは最高位ジャーティのブラフマンで、色白でハンサムで、医者になる勉強をしていて英語が話せ、しかもお金持ちである。彼の家族は母や姉も含めて全員が仕事をしており、ライフスタイルは先進的だ。今度自家用車も買らしい。それに比べて自分は、賢くもないものすごく可愛いわけではないし、家族も裕福なわけではない。そんな自分の幸運にバルサは興奮し舞い上がっている。しかし一抹の不安もある。

数日前、バルサの学校の友人 N が、ボーイフレンドと歩いていたところを自分の兄弟に見つけた。その時 N のボーイフレンドは、「お前の姉妹がこういう悪い性質だから悪いのだ」と言ったらしい。つまりボーイフレンドは N を裏切ったのだ。その痛手に加えて、恋人がいたことが家族のものに知られ、母親さえ娘の N と親しく喋らなくなった。周囲の人みんなに冷たくされ、食事もせず、ずっと横になっているらしい。バルサは、N が死んでし

⁸³ もし彼女がニートゥの類別的姉であれば、アトルとの結婚は不可能である。

⁸⁴ ポリウッド映画でもよく起こる“love-arranged marriage” (Uberoi 2006, Doron 2012)、つまり恋をした相手と（親の了承も得て）祝福される結婚を望んでいると言えるだろう。

まうか村から出ていくかするだろうという。そしてNはバルサに、「ランビールも嘘をついているに違いない。あなたには素敵な家族がいるのだから、こんなことは全部やめてくれ。男の子なんてみんな同じなのだから」と言ったというのだ。

この忠告を聞いて彼女は悩み始めている。そういえば、ランビールには時々電話が通じないことがある。それに比べて彼女に恋をするサチンは、電話をワンコールでかけても、たとえ夜中で寝ていてもかけ返してくる。一つ一つの証拠となる出来事を思い返してみても、ランビールの不誠実さ、サチンの真実の愛を考えてみる。「ランビールは、結婚はできないと言っているの。君のお兄さんの身に起こったことを考えてみろ、多くの人に迷惑をかけるわけにはいかない、って。彼って冷静で素敵でしょ？」と、熱くなりやすい自分を冷静に宥めてくれるランビールにバルサは尊敬の念を抱く。しかしそれは裏返せば、愛情の薄さを意味するのではないか、というのがバルサの懸念である。

このランビールとバルサの関係は、一見すると高位ジャーティ男性による低位ジャーティ女性の性的搾取関係のようである。上位階層の男性は下層の女性と性的関係は持っても決して社会的制度としての結婚はしない⁸⁵。もちろんそのようにこの事例を理解することも可能である。しかしここで注目したいのは、ハイティーンの子の心中に宿る不安と憧れである。これは彼女の人生なのであり、問題なのは恋人と結婚できる確率ではなく、ゼロかすべてか、なのだ。

バルサは女の子として、自分がランビールの家族に受け入れられるのか、不安を抱いている。長兄アーカースの妻ナミータはDよりも低いジャーティの女性であるが、母カジョールは罵倒して決して受け入れない。自分たちとナミータの差以上に、自分はランビールよりはるかに低いジャーティである。ナミータの身に起こっている罵倒と同じことが自分の身に将来起こるのではないだろうか、しかしもし2人の結婚が受け入れられたら、愛だけでなく、親が探すのでは到底叶わないような好条件の男性と結婚できるのだ、という期待をバルサは語る。

北インド・ブンドルカンド地方の婚姻相手探しにおいては、過去のつながりの維持・強化が重要である。そこから未来の関係が作り出されるからである。それは、本章第3節で述べたように、日常的な行為によって維持され、あるいは作られている。行為によって作られているからこそ、停止することもある。

婚姻相手探しはまた、家族の理想像とも関わっている。固定的な「家族」を求めつつも、そこには外部の女性を取り込んでいかなければならない。そして嫁として来た女性の持つ

⁸⁵ チョウドリーは、高位ジャーティの男性が低位ジャーティの女性と性的関係を持つことは、その男性性や活力、性的能力を立証するが、それらは結婚するときには言及されないという (Chowdhry 2009:154)。そして、「誰が不可触民の女性と結婚するというのだ。我々は彼女らとはただ性的関係を持つだけだ」という高位ジャーティの男性の言葉 (Chowdhry 2009:154) や、不可触民女性の「好色な性質」に言及して、「そういう女性たちが簡単に利用できるとしたら、我々の息子たちは抵抗できない」と語る高位ジャーティの女性たちの言葉 (Chowdhry 2009:156) を紹介している。

ている良い性質（モラルの面でも、経済的豊かさの面でも、顔の美しさの面でも、というよりも、それらが分割できないものとして）が家族の中に取り込まれ、後の世代も含めた家族がより良い状態へと変化していくことが望まれるのである。

この「良い」と「悪い」は、「浄性」といったものとのみ結びつくものではない。なぜなら、アーカースとナミータの結婚は激しく拒絶されるが、外国人である私がアーカースやD家の息子たちと結婚することはむしろ望まれていたからだ⁸⁶。良いと悪いにもいくつかの種類があるのだろう。それらを研究者たちは、浄と不浄、消費能力の強弱、文化資本の量、社会関係資本、美醜についてなどに概念分けするが、しかし当事者たちの概念では必ずしもはっきりと分けられるわけではない。特に北インドの文脈においては、互いに対応していると何となく考えられているものである⁸⁷。

しかし、家族の内にもいくつかの不安要素がある。例えばアトルの独身願望や、バルサの恋愛（しかも異ジャーティ間の）などである。独身願望は外部者を内部に取り込まないために家族を未来へと進めなくさせ、恋愛は家族の状態を悪いほうに変化させる可能性がある。しかしそれはあくまで可能性の段階である。バルサが望むように、もしかしたら受け入れられるかもしれないし、逆に良いほうへ変化するかもしれない。その不確実な希望こそが、理想の家族を希求させていると考えられる。

⁸⁶ 例えばカジョールは父系リネージのメールの儀礼など私を参加させられない儀礼の時には、「トモが嫁なら参加できるのだけれど」と毎回言っていた。近所の人から「トモを嫁にもらえばいい」と言ったときには「自分たちは来てほしいけど、本人が来たくないと言っているからしょうがない」と答えていたし、カジョールやガネーシュには、何度かそれぞれ別々の機会に「嫁に来い」あるいは「嫁に来るか？」と聞かれた。

⁸⁷ 例えばブラフマンは最高位ジャーティであり、きちんと礼拝や儀礼を行うことができ、教育があり、良い職に就き、お金を持っていて、同じように裕福なブラフマンと親戚関係や同じブラフマンであるという仲間意識によってつながりを持ち、知識を占有し、色が白くて背が高く体格が良い、という一連のまとまったイメージがある。バルサの「向かいの家族は貧しいけれど、自分たちの娘は良いところに嫁がせている」やカジョールの「パンディット（ブラフマン）たちは良い縁組ができるのよ」という語りからもそれが伺える。

第4章 戦略・サマージ・愛情

—異ジャーティ結婚と浄化儀礼の事例から

4.1 はじめに

前章では、調査地の家族がいかに子供の結婚のために努力しているか、子供の結婚の事を考えながら生きているか、ということを書き記述してきた。前章の最後では、D家の人々のそれぞれの、より良い未来への揺れ動く思いを指摘した。本章では、親の視点から見れば自分たちの計画の失敗となってしまった長男の異ジャーティ結婚とその後家族が行った浄化儀礼の事例から、同じであることと異なることの間での緊張関係、複数の種類の類似性の再生産の試み、二項対立的な語りの中での個人の志向性、そしてサマージがどのように会話の中にあられ、サマージとの距離がどのように作られ、それがどう作り直されているのか、ということを見ていく。

ジャーティ内婚は現在の調査地で非常に重要視されている婚姻規則であるが、インドにおいては神話や経典の中にヴァルナ／ジャーティ、宗教、「人種」を超えた無数の婚姻事例が見られ、広く知られてもいる (Chakraborti 1999)。例えば『マヌ法典』には、異なるヴァルナの男女に生まれた子供たちが、その父と母の身分の組み合わせに従って雑種身分となり、その雑種身分同士の組み合わせでまた新たな雑種身分が作られ、さらにそれぞれがヒエラルキーの中に位置づけられるということが書かれている⁸⁸ (渡瀬 1991:340-350)。現在の調査地の人々も、異ジャーティ間の恋愛結婚をした若者は何も新しいことをしたわけではないと語る。実は異ジャーティ結婚の事例は、周りを見回してみると調査地においても存在する。それらは違和感をもたれながらも人々の相互交渉の中で個別に受け入れられてきた。しかし、インドにおける異ジャーティ結婚に言及する研究の多くは、ジャーティ追放などの関係の断絶か、もしくは都市のミドルクラスの進歩的な人々による選択に注目してきた (Corwin 1977、樋口 2012)。そこではジャーティから個人の選択へと、一足飛びに

⁸⁸ 山崎は、ジャーティとヴァルナの関係に関して19世紀ひろく知られていた説として、古代には4つのヴァルナに分かれていたが、異なったヴァルナの男女間で通婚が行われ、それによって多くの雑種姓が生まれ、その上シュードラが職業に従って分かれたことによって数多くのジャーティが生まれた、と説明する。さらに、この説はあまりにも単純な説明であり、全く信拠できず、現実のカースト制度を理解するためには役立たないと指摘している (山崎 1994:44)。

視点が移されてきた。

本研究では、即時的に選択が下されるというよりも、日常生活の交換関係や未来を志向する思い、戦略的な駆け引きと家族の愛情、そして儀礼の方法が絡み合いながら、長い時間をかけて個別的に輪郭を現していく家族、という視点から、異ジャーティ結婚の事例を見ていく。またその際、第 5 章の同ジャーティ結婚の事例との比較の視座を持つために、異ジャーティ結婚から浄化儀礼、そしてその後の D 家と夫婦との関係の中で、過去のどのようなつながりが現れているのか、未来の家族の姿がどのように志向されているのか、個人的な資質はそこにどう関わっているのか、といった点に注目しながら記述していく。

4.2 恋愛結婚としての異ジャーティ結婚

アーカースのジャーティは第 2 章第 3 節で説明したように、ヴィシュワカルマのロハールである。そしてそのガールフレンドであり後に妻となったナミータのジャーティは、ライ (*rāy*) と呼ばれるカラール (*kalār*) であった。カラールは、酒の製造と販売を主たる生業としてきたジャーティで、ロハール同様、UP、MP 両州において OBC (その他の後進諸階級) に認定されている。しかし 1896 年に出版されたウィリアム・クルーク (William Crooke) の『北西諸州とオードゥのトライブとカースト』によれば、カラールは酒造り・販売とのつながりによって社会的地位を失っていったヴァイシャ・ヴァルナの子孫であるとされており、またある地域のカラールはクシャトリヤ起源を主張していると言う (Crooke 1999:107)。今でもカラールの人々の一部はヴァイシャ身分を主張している (<http://www.peoplegroupsindia.com/profiles/kalwar/>、2015 年 10 月 20 日閲覧、People Groups of India 内の Kalar の説明に対するコメント欄の反論)。

このような背景からか、D 家のジャーティは OBC に含まれるが、ナミータのジャーティはヴァイシャに含まれるらしいと、ある日 D 家の中で話題になった。ではどうして親戚や近所の人たちがナミータのジャーティは自分たちよりも低いと言うのか、とカジョールが聞く。次男のリティクは、国の基準は実際とは違うこともあるから、国の基準では向こうのほうが高いのかもしれないと説明した。しかし実際には両者とも OBC 認定がされている。アーカースは、自分たちはロハールのほうが少しだけ地位が高いと言い、彼らはライのほうが少しだけ地位が高いと言っている、と説明した。それゆえ彼ら 2 人の結婚によってどちらかが社会的地位を著しく変えたとか、上昇させたなどということはない。しかしどれだけ僅差であったとしても、2 人のジャーティは異なり、婚姻可能範囲外の存在だった。では、そのような規範において婚姻対象外である 2 人は、何によってつながっていったのだろうか。

異ジャーティ結婚は字義通りには異なるジャーティの相手と結婚することであり、恋愛

と必ずしも相関関係にあるわけではない。すべての恋愛結婚が異ジャーティ結婚であるとは限らず、同じジャーティの人と結婚しても自分たちは恋愛結婚であると誇らしげに語る人々もいる⁸⁹。しかし逆に異ジャーティ結婚は調査地ではほぼすべてが恋愛結婚と見なされる。恋愛結婚はラブマリッジ (love marriage) と英語で呼ばれ、そして異ジャーティ結婚もまた、多くの場合ラブマリッジと呼ばれる。それに対して一般的な結婚は、恋愛結婚と対比的に説明する時には英語でアレンジドマリッジ (arranged marriage) と呼ばれるが、調査地でそれをさす言葉はない。単に「結婚 (シャディー、*śādī*)」と言ったときには、それは当人の意志も入るとはいえ、家族や親戚の主導によって相手が決まり、サマージに祝福され、世俗に生きる人々がみな行う人生儀礼の一つであるような、慣習に則った結婚なのだ。つまりラブマリッジは、普通の結婚とは異なり当人たちの意志で決めた結婚という意味を含意しているといえる。それは古い慣習にとらわれない人の行為として、肯定的にも否定的にも捉えられる。さらに「ラブ」という言葉から、男女間の恋愛にまつわる様々なイメージをも喚起する。

異ジャーティ結婚は、ジャーティ内婚という、調査地の最も重要な婚姻に関わる社会規範に違反した婚姻の形態である。しかし本章の事例の男女、アーカースとナミータはそこに差異を見ず、愛と類似性の存在を見ようとした。

4.2.1 真実の愛

調査地にはある特定の「真実の愛 (*pyār, prem*)」のイメージがある。特に男女間の恋愛を肯定的に捉えるとき人々はよく、人口に広く膾炙した「愛の神」クリシュナ (*Kṛṣṇa*) の物語を語る。クリシュナ神は、16,108 回の結婚、あるいは恋愛をしたと言われている。彼はすべての人を愛し、すべての人に愛された。最も有名な愛人ラーダー (*Rādhā*) に、クリシュナはこう言っている。「結婚は2人の人間がするもの。私とあなたは一つだ。どうして結婚できる？」全国にあるクリシュナ寺院では、クリシュナの神像の隣には正妻ルクミニ (*Rukmiṇī*) ではなく、人妻ラーダーが寄り添う。またクリシュナ信仰の詩で有名な女流

⁸⁹ 主に若い人々の間で、後に述べるような「真実の愛」のイメージを自分たちの恋愛と重ね合わせて見ていたり、恋人を結婚のために切り捨てなかったという誠実さを強調したりする時に、自分たちは恋愛結婚だと誇らしげに言う。前章に述べた三男アトルの親友アルジュンの結婚もそのように語られていた。ただし言う相手は慎重に選ばれ、友人たちや同世代の若者の間で語られることが多い。なぜなら、恋愛結婚を没価値的なものと捉える人々や、他人がすることとしては良いが自分の家族の中では認めない人々が多いからである。自身が異ジャーティ間のヴァルナを越えた下降婚 (商人ジャーティのグプタ *guptā* の女性と牛飼いジャーティのヤーダオ *yādav* の男性) をした近所の女性は、「やっぱり好きな人と結婚するのが幸せだと思う」と私に向かって言った後、「自分の娘には親が選んで結婚させたけど」と言って笑った。

詩人ミーラーバーイー (*Mirābāī*)⁹⁰は、クリシュナを愛するあまり家を捨て、遁世したという。彼女たちの愛は「真実の愛」と呼ばれ、賞賛される。それらは婚姻とは関係がなく、相手から何も求めない、他の事は何も気にしない、ただただ相手だけを見つめる、無償の愛である。それは再生産に帰結するものでなく、ヒエラルキー的な男女関係にあるものでもない(常田 2011:138)。つまり本来ラーダーとクリシュナの愛は現世的な結婚や家族の維持とは結びつかないものなのである。

ハリウッド映画のスーパースターたちもまた、「真実の愛」のイメージをスクリーン上で、あるいは実生活で作り続けている。元ミス・ワールドのアイシュワリヤ・ライ (*Aishwarya Rai*) は、その美貌とダンスの上手さで、ハリウッドのトップ女優の一人となった。一方サルマン・カーン (*Salman Khan*) も、ハリウッドのバッドボーイと呼ばれる人気俳優である。2人は恋人同士だった。ところがサルマンはあまりにアイシュワリヤを愛するあまり、彼女を束縛するようになった。自分以外の男とは映画に出るなといい、それを拒むアイシュワリヤを殴ることもしたという。結局 2人は別れた。しかし、現在ではハリウッドのトップ俳優の一人となったサルマンは、いまだにアイシュワリヤを愛し続けているという。

以上は調査地のほぼすべての人々が知っている物語で、「サルマンは、結婚するならアイシュワリヤと、でなかったら誰ともしない。なぜなら今でもアイシュワリヤを心から愛しているから。そして本当に愛する人は生涯でたった 1 人だけなんだ」と、サルマンのファンであるという少年は語る。

この話は美男美女のすれ違いの悲恋、という単純な物語では終わらない。アイシュワリヤはその後、ハリウッドで最も有名な俳優の 1 人であるアミターブ・バッチャン (*Amitabh Bachchan*) の息子アビシェーク・バッチャン (*Abhishek Bachchan*) と結婚したのだ。アイシュワリヤが真実の愛に対して誠実ではなかったといわれる所以である。一方サルマンは、有名女優と浮名を流しつつもいまだに独身をつらぬいている。調査地の特に若い男女は、「アイシュワリヤにもし何かトラブルが降りかかったら、たとえアビシェークが何もしなくても、サルマンが絶対に助けに行くだろう」と、宗教の違いを超えてアイシュワリヤただ一人に生涯を捧げたモテ男サルマンの「真実の愛」を賞賛する。ここでもサルマンとアイシュワリヤは結局結婚していない。

神話の中の神々においても、現代のスターたちにおいても、「真実の愛」にはただ相手だけを見つめ、この世のその他のことは全く気にしないというバクティ (*bhakti*)、自己献身のイメージが存在する。一方、アイシュワリヤが結局はアビシェークと結婚したように、「真実の愛」を妨げるものはたいてい慣習と規則に縛られた周囲の人の反対や名誉欲・金銭欲であると語られる。D 家の長男アーカースもまたその点を強調し、もし自分がガールフレンドのナミータを捨てたらそちらのほうがひどいではないか、と主張する。彼は、「多くの人は愛する人とは違う人と結婚する。しかし僕は彼女と結婚した。みんな僕は立派な人だと言っている」と主張した。彼は付き合いのはじめにナミータの目の奥に感じた自分への愛

⁹⁰ 16 世紀、ラジャスタンの女流詩人。

を語る。「相手の目を見れば、自分を愛しているかがわかるでしょ？ 彼女が僕を見る目から愛を感じたんだ」と言うのである。

ナミータはB村の近くの都市X町の出身で、B村では一人で暮らしていた。X町には家族が住んでいる。ナミータには兄と姉と妹がいる。当時D家とナミータは、同じ建物の別の部屋に賃貸で暮らしており、顔見知りだった。アーカースとナミータは、2006年ごろ恋人関係となった。

その経緯はこうである。アーカースはかつて、非常に重い病気にかかっていた。大学を途中で辞め、1年間ほぼ寝たきりで暮らしていた。ほとんどの友人が病気の医学的・呪術的感染を恐れて離れていったなかで、唯一友達であり続けたのがナミータだったという。ナミータはある日、アーカースに愛の告白をした。そしてアーカースはその告白を受け入れた。

しかしここでアーカースが自分たちの結婚に関してクリシュナの物語を持ち出すのは詭弁であろう。なぜならバクティは本来はこの世的な結婚や家族を作るといふこととは結びつかないものであるからである。ではアーカースとナミータは、「真実の愛」の他に何を2人の関係において見ていたのだろうか。

4.2.2 類似性

2人は、互いに愛の存在以上に類似性を認め合っていた。それは互いの現在の職、そして未来の計画と可能性を語り合う中でさらに確証されたものだった。

ナミータは公立学校の英語の教師である。公立教師、つまり公務員は調査地では安定した高給と社会的地位が望める花形の職業である。ナミータが公立教師であるということは彼女に学があり、自活できるだけの生活力があり、なおかつ教師のトレーニングのために一人で遠くまで出かける勇気と知恵があることを証明するものだった。一方のアーカースも過去の大病のため学士号こそ取れていないものの、数学と英語が得意であり、まだ若くこれから学ぶ意欲もあり、私立学校の校長として教育と学校の運営に当たっていた。貧しいOBC（その他の後進諸階級）やSC（指定カースト）の家族の子供たちのためのこの私立学校は、村の裕福な篤志家が家族で出資したものであり、英語で教育を行ういわゆるイングリッシュ・ミディアム（English medium）の学校である。アーカース自身も、優秀だが貧しいOBC家庭の青年として、その裕福な家族から仕事を任されているのだった。さらに彼は、高い学費の私立の寄宿学校に通っているその篤志家の家族の子供たちが休暇で帰ってくる時は、その家庭教師も勤めていた。これもアーカースの優秀さを物語っている。アーカースとナミータは互いに教育の価値を認め「進んだ」価値観を持つもの同士として、つながりを感じていた。そして事実、アーカースは結婚後にナミータの援助によって、数学の学士号と、ソーシャルワーカー修士および数学修士の2つの修士号を取るのだった。

また、アーカースとナミータの付き合いには、他の若い男女の恋愛関係においては見られないいくつかの特殊な状況があった。それはおもにナミータが仕事をしていて自立した一人暮らしの女性であったことが可能にしたものであった。

例えば 2 人は自分たちの携帯電話でいつでも連絡を取ることができた。調査地の恋人関係において、近年では携帯電話が活躍する。ただし、多くの場合携帯電話は家族の何人かの共有であるし、家の中で一人きりになれる機会もあまりない。調査地では一人きりになるのが嫌いな人が多いが、そのような中で一人きりになろうとすると目立ち、不審の目で見られる。また収入がない多くの無職の女の子や学生の場合は、携帯電話の料金を払うこともできない。調査地で携帯電話は前払い料金制であり簡単に残金が確認できるため、共有の携帯電話の料金が減っていれば必ず家族に誰に電話したのかを聞かれる。

その点アーカースとナミータには自由があった。2 人とも自分だけの携帯電話を持っていた。アーカースは男なので一人で家の外へ出ることができたし、ナミータは一人暮らしだった。2 人とも働いているので料金も払うことができる。もっともナミータの電話料金はアーカースが払っていた。それが男らしさの一つの表れであるらしい。2 人は毎日電話で会話をしていた。何をしているか、ご飯は食べたか、などを訊ね合うことによって、つながっている感覚を感じることができたのだ。

また、彼らは 2 人だけで会う場を作ることも容易にできた。互いの姿を見ること、誰にも聞かれないような場所で一言二言言葉を交し合うことですら、調査地の少年少女にとっては重要な行為である。ましてや若い男女が 2 人きりで落ち着いて会う場所を見つけるのは難しい。誰にも見られずに 2 人きりでゆっくりと座ることができる場所として調査地で語られるのは、ホテルの部屋、友人の部屋、森、畑、ムスリム墓地などであるが、そことて人の目が皆無なわけではない。アーカースとナミータの場合、ナミータが一人暮らしであったために場所の問題はなかった。アーカースはときおり同じ建物の中にあつたナミータの部屋を訪ねていた。

男女に限らず、一人暮らしというのは調査地では珍しい。親元を離れた男子学生たちもできることなら誰かルームメイトを見つけたがる。幼いときから常に大家族で暮らしてきたため、一人きりでいることに慣れておらず、嫌な気持ちになると言う。その中でも特に珍しいのが、若い未婚の女性の一人暮らしである。男の子ならば家族が出かけている間一人で留守番をすることもある。老女ならば息子たちが出ていった家で一人で住むこともある。しかし若い女の子は通常、昼間一人で家にいることのないように済むように囚われることが多い。一人で部屋を借りて住むなどということは奇異の目で見られるものだった。

ナミータが一人暮らしをしていたのは、彼女と実家との関係が影響している。ナミータは過去に何人かの男性と交際しており、それが理由で彼女の家族はほとんど彼女と交流を持たなくなっていたという。それゆえナミータには結婚相手探しをしてくれる人がおらず、この年齢まで独身であった。これらの事情はナミータがすべてアーカースに告白しており、自分と付き合うことによって彼女は変わったのだ、とアーカースが私に話してくれた。

アーカースの父ガネーシュは、アーカースがナミータの一人暮らしの部屋に通っていることを不審に思っていた。そして妻のカジョールに、父親である自分から言うのは角が立つから母親から注意するようにと言った。しかしカジョールは、「ナミータは年上だしアーカースよりも学歴があるので、勉強を教えてもらっているだけで何も心配することはない。あなたは自分の息子のことをそんなに汚い目で見ているのか」と諭した。アーカースの結婚後は、当時の自分の判断が間違っていたことを認めて悔やんでいる。

アーカースに直接注意できぬまま月日がたったある日、家主がガネーシュを訪ねてきた。「悪く思わないでほしいのだが、アーカースとナミータが部屋の中であってはならない体勢で座っているのを開いた戸口から見た。それをあなたは知っているのか」⁹¹という話だった。家主は、ナミータに退去を求めた。このことをアーカースは、「一人暮らしの女の子の部屋にボーイフレンドが訪ねてきているという理由だけで、周囲の人は彼女に嫌がらせをしている。これは時代遅れな考えで正しいことではない」と言う。しかし結局ナミータはその部屋を出ていき、別な場所に新しい部屋を借りた。

アーカースとナミータは共に学問に価値を置き、両者とも教師である。この付き合いを愛情に基づいた付き合いであるとみなし、古い因習にとらわれない価値観を示す行為として語る。それに対比させられるのは、アーカースが「村の女性たち」と呼ぶ周囲の女性たちや、ナミータが「田舎者」と呼ぶアーカースの母カジョールなどである。さらに彼らには結婚前から話し合っていた将来の計画があった。妻のナミータは公務員なので銀行のローンを借りやすい。そのお金を使ってアーカースがいくつかの学位を取り、IT 関連の会社に就職し、ナミータは専業主婦となり、デリー（インドの首都）やボパール（MP 州の州都）、インドール（MP 州の大都市）などに住むというのが、2人の類似性に基づく未来の計画だった⁹²。

4.3 新しい「家族」の形成

アーカースとナミータは、2人の関係における愛と類似性を強調する。だが、それらに加えて戦略的な判断が含まれていたことは否定できない。アーカースにとっては学位をとって職を得ることが何よりの夢だった。そのためには資金が必要だったが、今の自分と家族にはそれを用意できる見込みはなかった。また親がアレンジする結婚では、これほど収入のある女性と結婚することはできなかつただろう。そしてナミータもまた、その年齢や家族との不仲のせいで、自分で恋人を作らない限り結婚できる可能性はなかった。さらにそ

⁹¹ この表現は、ガネーシュが私に当時の状況を説明する時に使った表現である。

⁹² 結婚直後のアーカースの証言による。転職先を探すアーカースに色々と質問していた私に対して、彼は、ナミータはできれば専業主婦になりたいと言っていると語った。

の恋人は十分に優秀で、将来自分を専業主婦にさせてくれるだけの稼ぎが見込めることが望ましかった。それらの戦略的意図に加えて、さらにいくつかの出来事が、2人の結婚を確定させていく。

4.3.1 婚姻儀礼

ナミータは引っ越した先でもまた、近所の人々や家主から悪口や嫌がらせを受けていた。独身女性が一人で住んでいること、そして恋人が訪ねて来ていることが理由だった。2008年の暮れも近いころ、周囲からの嫌がらせに耐えかねたナミータは自分の手首を切った。それを知ったアーカースは、独身で一人で住むナミータについての噂話をする周囲の「村の女性たち」の口をつぐませるため、数時間の婚姻儀礼をする決心をした。ボーイフレンドが訪ねてくるのは問題だが、夫なら問題ではないだろうと彼はその時思ったという。

アーカースとナミータの婚姻儀礼は、2009年2月5日、A村とB村の中間地点のC村にあるガヤトリー (*gāyatrī*) 寺院で行われた。そこには複数の僧侶たちが住んでいて、婚姻儀礼を執行し、寺院からの婚姻証明書も与えている。その日の彼らの婚姻儀礼には、B村から2台の車と各自のバイクで25名ほどが参加した。参加したのはアーカースとナミータのほかに、アーカースの父方祖母ダディーと弟妹たち(ハリー、リティック、アトル、アシス、バルサ、ナミータの家族からはなし)、2人の友人のベンガル⁹³人夫婦、アーカースの友人たち、アーカースの勤める学校の使用人3人、そしてB村の僧侶である。

婚姻儀礼は、一般的な婚姻儀礼のティーカー (*tīkā*) の場で行われるもの(一連の儀礼の中核、内容は第5章に詳述)だけが数時間で⁹⁴行われた。ナミータのカンニャーダーン(処女の贈与)は、ベンガル人の友人夫婦が行った。このベンガル人夫婦は結婚前からアーカースとナミータと交流を持っていた。D家とナミータが近所に住んでいたころ、ナミータとベンガル人一家は隣同士で暮らしており、友人関係にあった。またベンガル人一家の子供たちにナミータが家庭教師をしており、家族ぐるみのつきあいをしていた。

婚姻儀礼後には会食が行われた。食事や、儀礼には欠かせない甘いものの準備はC村の店で行い、それらの費用は当人たちが支払った。総額30,000~40,000ルピーの出費だろう。しかし花嫁の首にかけるマンガルストラはアーカースの父方祖母ダディーがお金を払ってあげたものだった⁹⁵。

⁹³ ベンガル地方といえば一般的に、インド東部の西ベンガル州およびバングラデシュが含まれる。ベンガル地方に住む人々はベンガル人と呼ばれ、北インド内陸部のブンドルカンド地方に住む人々にとっては、言語や食生活などが異なる人々であるとの認識がある。

⁹⁴ 一般的な婚姻儀礼は、中心的なものだけでも約2週間にわたり行われる。第5章に詳述。

⁹⁵ ダディーは、最初の男孫であるアーカースを孫の中で最も可愛がっていた。激しい性格の持ち主で、嫌な事があると食事をしなくなったが、ガネーシュかアーカースが手ずから食べさせた時だけ食べた。またガネーシュがアーカースの結婚を絶対に認めないと言って

アーカースとナミータの婚姻儀礼の日、カジョールは重い病気で、ガネーシュが付き添って遠くの町の病院へ行っていた。

アーカースは、婚姻儀礼の効果を二つの場面に分けて操作しようとしていた。一つは、彼が「村の女性たち」と呼ぶ人々（ナミータをスキャンダラスな女性だと噂している）に対して、婚姻は成立して2人は夫婦なのだからもう噂をされるいわれはないと示すことであり、もう一つはD家と自分自身に対して婚姻関係は成立していないと言い聞かせることだった。結婚した当初、アーカースは実家で家族と暮らし続けていた。D家の中でもまた、アーカースの結婚に関しては全く語られなかった。

アーカースは私に対しても、自分は結婚していないと言っていた。

僕の結婚ではダンスも音楽もなかったんだ。ダンスも音楽もない儀礼では結婚した気がしないよ。それに家族も親戚も友人も近所の人もいないところで儀礼を行ったので誰にも認められていないだろう。婚姻登録⁹⁶をしなければ2人が夫婦である証明はどこにもないだろう。

これは完全にアーカースの思い違いだった。アーカースとナミータの婚姻は瞬く間に周知の事実となった。第5章でも見ていくが、調査地では、きちんと儀礼をしなければ、つまりサマージの人々の目の前で神々に祝福されなければ夫婦にはなれないと散々強調されるにもかかわらず、アーカースとナミータは噂によって完全に夫婦と見なされるようになったのである。

そして何よりもナミータが、ヒンドゥー既婚女性の装い（第2章第7節第2項参照）を身にまとい、アーカースの妻として振舞っていたのだ。ナミータは結婚当初からシンドゥールをし、マンガルスートラを身につけていた。また少しずつサリーを買い集め、着るようになっていった。市場でアーカースの両親に会ったときには頭や顔を隠したし、外に働きに行っている姿を義父母に見られないように配慮して敬意も示していた（パルダー。第3章第3節第3項参照）。生活態度や服装を結婚前後で何も変える必要のない男性であるアーカースは、女性のナミータに比べて、自覚的になる必要がなかったのかもしれない。また、その無自覚さにD家も呼応していたと言えるだろう。より自覚的だったのは何人かの親戚だった。

いたときにとりなしたのもダディーだった。「アーカースは結婚を認めなかったら自殺するかもしれない。しかしアーカースが病気だった時に大変な苦勞をして治したではないか。ここで自殺させては意味がなくなる。放っておきなさい」とダディーはガネーシュに言ったという。

⁹⁶ 調査地においては、ほとんどの夫婦は法的婚姻登録の届けを行っていない。サマージの前で行われる婚姻諸儀礼によって、男女は夫婦であるとひろく承認される。

4.3.2 つながりの停止

2009年3月、アーカースの母方オバ（カジョールの次姉）の夫 MZH が D 家を訪ねて来て、アーカースを家族から切り離さないと D 家を親戚づきあいから切り離すと告げた。彼が訪ねて来た日はバルサの誕生日だった。アーカースもやってきており、家で何が行われているのか見ようとしていた。モーサー（MZH）の訪問は突然であり、穏やかなものだった。アーカースも家族も相槌をうつだけでほとんど話をせず、モーサーが喋るのを黙って聞いていた。モーサーは帰り際に誕生日のバルサを呼んで何歳になったかを聞き、お小遣いを与えた。その和やかな雰囲気、私はモーサーが何を話したのか全く気づかなかった。しかしモーサーが帰ったとき、アーカースは以下のように説明した。

モーサーが何を言ったか理解できた？ 自分を家族から外さないと、家族を親戚づきあいから外すと言っていたんだよ。でもモーサーたちはかつて自分たち家族が苦しい状況にあったとき、全く助けてくれなかったんだ。だから自分は彼らになんて言われようと平気だ。彼らと今後付き合えなくなったって全く気にしない。ただ、お父さんとお母さんは気にするだろうな。そして自分はお父さんとお母さんと付き合えなくなるのだけがいやだ。

D 家がアーカースを切り離さなかったわけではない。しかし D 家は親戚づきあいを停止されることとなった。婚姻儀礼などの親族の儀礼に呼ばれなくなっただけでなく、日常的に連絡を取り合ったり訪ね合ったりすることもほとんどなくなった。母方オバの夫のようにわざわざ告げてこなかった親戚たちもみな、表立って非難することはないが、会うこともなくなった。

一方で、ナミータの兄も、アーカースとナミータのもとを訪れて話をした。アーカースは彼に、2人の結婚には反対だ、しかしもし結婚したいのなら勝手にしろ、と言われたという。またアーカースによると、ナミータは姉ともしばしば連絡を取り合って話をしていたようだが、女友達に相談することのほうが多かったという。ナミータの両親は2人の結婚には干渉してこなかった。

アーカースと D 家は、徐々に婚姻関係の存在を認め始めた。彼らは婚姻が成立していることを示すナミータの装いや親戚の勧告に呼応するように行動を始めた。まずアーカースがナミータを D 家に連れていき、嫁として両親に会わせた。しかし両親はナミータを激しく拒否した。改めて結婚の事実を告げたアーカースを前にガネーシュは激怒し、カジョールは泣いた。両親は「私たちは親戚から、アーカースを選ぶかサマージを選ぶかの選択を迫られている。お前は家族を選ぶのか、それとも妻を選ぶのか」と問いただした。

これらはすべて婚姻儀礼の後で起こったことである。そして結局両者とも、積極的には選択をしていない。そもそも何をすればアーカースを切り離すことになるのか、サマージ

を選んだことになるのか、明確な解答はなかった。しかし一つ一つの行動をしていくことが、結果的には選択を形成していくことになった。

アーカースはナミータと暮らすために家を出ていくことになった。これには二段階あった。まず、ナミータが病気になったので、看病をするために彼女の部屋で 2 人の同居が始まった。アーカースは仕事を抜け出しては滋養食を作るなどかいがいしく看病し、夜は彼女の部屋に泊まっていった。次に、病気になったり死霊を見たりするなど縁起の悪い部屋を移るために、B 村の D 家と同じ地区にある建物の、2 人用の広めの部屋に引っ越した。その結果、アーカースが実家を出てナミータと一緒に住むという居住形態が確定した。

アーカースが実家を出るにあたって両親は、彼がほしいものは何でも家から持って行ってよいが、今回だけで、それ以降は何も要求したり頼ったりしないようにと言った。アーカースは、数万ルピーの現金、ベッド、純銀の足首輪⁹⁷、そして彼が昔から特別に信仰している学問の女神サラスヴァティー (*Sarasvatī*) の絵などを実家から持って行った。なぜそれらの物を持っていくのかと聞いた私にアーカースは、

自分は長男として幼い時から働き家族が貧しかった時代を支えてきた。自分が働いて稼いだ金で家族のために多くのものを購入した。その分を持っていくのは当然だ。お父さんもこれはお前のものだ、持っていけと言った。

と言った。こうしてアーカースとナミータは、2 人暮らしには十分な部屋 (家賃は月 2,000 ルピー) で、ベッド、テレビ、ダイニングテーブルと椅子、冷風機などをそろえての新婚生活をスタートさせた⁹⁸。

引っ越してしばらくしたころ、アーカースとナミータは私を夕食に招いてくれた。初めて会ったナミータは、美しい青のサリーを着ていて、私に対してはパルダールをしていなかった。彼女は私が青色を好きだということをアーカースから聞き、青色の装飾がついた腕輪のセットをプレゼントしてくれた。また夕食にはいくつかの野菜料理のほかに乳粥 (*khīr*) も作ってくれていた。甘い物を用意してくれていることは私へのもてなしを表している。建物の中を興味深く観察していた私を不思議そうに見ていたナミータに対して、彼女は人類学を勉強しているんだ、とアーカースが説明した。ナミータは自分もカレッジに通っていたころ、ST (指定部族) の人々の生活習慣などを調べる人類学の授業があったと言った。

⁹⁷ この足首輪は、数ヶ月前に両親が未来の嫁のために買ったばかりの、太く重みのある高価なものだった。

⁹⁸ 当時 D 家が 8 人で住んでいた 2 部屋の家賃が月 3,000 ルピーだった。またダイニングテーブルは D 家にもなく、調査地ではお金持ちの家にあるイメージがある。床で食べるのが一般的であり、椅子に座って机で食べるスタイルは洗練されたイメージを持つ。

4.3.3 アーカースとナミータと D 家の関係

常日頃ヒンドゥーには離婚はないと言っていたアーカースの両親だが、彼らは当初、1年以内にアーカースを離婚させ、別の娘と結婚させるつもりだと言っていた。結婚後しばらくアーカースの両親は婚姻の存在を認めようとしていなかったし、2人の関係を終わらせることができると思っていた。そもそも自分たちが儀礼に参加していない婚姻が、本当に成立していると言えるのか、半ば意識的に曖昧にしていたのだろう。この態度はアーカースにも共通していた。アーカースはしばしば自分は結婚していないと言っていたし、また歌も踊りもなしでは結婚した気がしないとも言っていた。想定できたとはいえ、家族と不仲になったことは辛く、妻と母との間の罵倒の連鎖に疲れきってもいた。それゆえ、すぐに離婚するだろうとも、またしかしそもそも法的には結婚していないから離婚する必要がないとも言っていた。しかし徐々に、アーカースとナミータが夫婦であり、ナミータは D 家の嫁であり、2人の間に 2010 年 3 月に生まれた娘チョーティーが孫であることが、はっきりし始めたようだ。

しかしその過程は揺れ動くものであり、行動や言葉に表れるアーカース一家と D 家の関係には、多くの矛盾とずれがあった。

2010 年 3 月、アーカースとナミータの間に娘チョーティーが誕生した。チョーティーが生まれたとき、カジョールはナミータに、調査地のヒンドゥーの子供がいる女性が身につける銀の指輪を贈った。彼女は時々ナミータとチョーティーに贈り物をしているし、チョーティーを連れてアーカースが実家に来たときなどは可愛がっている。チョーティーが 1 歳になる前、A 村の女神寺院で、ムンダン (*mundane*) と呼ばれる頭を剃る儀礼をした。父ガネーシュ、母カジョール、四男アシス、妹バルサ、アーカース、ナミータ、チョーティーが行き、一晩 A 村の家に全員で泊まった。しかしナミータは赤ん坊のチョーティーをカジョールにだけは絶対に抱かせなかった。その状況をアーカースの弟の三男アトルは、「お母さんは姑としてのお義姉さんへの義務をすべて果たしているが、お義姉さんは嫁としてのお母さんへの義務を何も果たしていない」と言う。しかし、カジョールが姑としてナミータに接しているのなら、息子夫婦を家族から切り離すことは一体どうやってできるのだろうか。

このように、何らかの首尾一貫した強い意志などはないままに、言葉も、行為も、矛盾したまま紡がれていく。

異ジャーティ結婚をした男女への社会的制裁としての関係の断絶という先行研究が頭にあった私は、日本からインドに長期調査のために戻った直後の 2011 年の 7 月、ガネーシュとカジョールと巡礼旅行に行った先で、カジョールがナミータとその娘のチョーティーにお土産を買うのを見て非常に驚いた。そしてその後 A 村と B 村で見たのは、単純化して記述することができない複雑な言動だった。

まず嫁のナミータの存在である。家族の中では顔が悪い性格が悪いとあしざまに言い、

親戚や近所の人や同じジャーティの人々に対してはもう関係がないものという態度をとるが、しかし時々、久しぶりに出会った古い知人などに対して、長男が校長で嫁が公立教師であることを自慢することがある。それは自分の子供たちが何をしているか説明するときや、子供たちに学があることを言いたいときなどである。

またナミータをD家に受け入れなかったのは彼らなのだが、一緒に住んでいれば1年で10万ルピーの貯金ができただけなのに彼らは恩知らずにも別に暮らしている、という恨み言を言い続けている。これは、ガネーシュと息子たちだけでアーカースとナミータの家族の分も稼げるので、同居してればナミータの公務員の給料を丸々家族の貯金に回せたのに、という楽観的な考えである。ここでは、実際に一緒に住もうとしなかった、という状況と、一緒に住んでいればよかったのに、という言葉の矛盾がある。

もう息子ではない、嫁ではない、家族から別になったというものの、例えばある儀礼で息子の数だけ菓子の包みを作ったり兄弟の数だけ綿をちぎったりする場面にくると、アーカースは息子とされ、兄弟の数に入れられている。しかしアーカースの祖母ダディーの葬送儀礼では、サマージの人々が集まるからということでアーカースとナミータは出席を拒否された。一方、ガネーシュとカジョールはアーカースの部屋を訪ねないものの、弟妹たちは勉強を教えてもらったり相談にのってもらったりするためにしばしば2人を訪ねる。両親も子供たちには注意をしていない。

さらに弟妹たちの恋愛に関しても、ガネーシュは私に対しては、彼らが恋人を結婚相手として連れてくれば許すといっている。彼は自分が理解ある人間だと私に示したいのである。しかし実際にアーカースの結婚に関してはガネーシュは許さなかったのだし、弟たちも自分の恋人についてガネーシュに言うなどとんでもないことだと思っている。ガネーシュにしても息子と恋愛のことについて語り合うことは決してない。まして娘に関しては言わずもがなである。

アーカースはナミータと人生を共にするために家を出ていった。アーカースの両親は、家族を選ぶかナミータを選ぶかの二者択一を迫った。アーカースにとっては、その二者択一は不可能だった。どちらも大切であり、この世の何よりも愛している存在はどちらかといえば家族のほうであると言う。両親にとってもアーカースはかけがえのない息子であり、家族のことを相談する長男として唯一無二の存在であった。しかし両親も二者択一を迫られたと語る。すなわち「サマージか息子か」である。

アーカースにとっては、こんなことすべては馬鹿らしいことである。「新しい時代にはすべてなくなるだろう、都市では段々なくなってきたのだし」と、実際の都市に住んだことも、ほとんど行ったこともないのに、彼は繰り返し語る。また、ナミータも自分を拒絶するアーカースの母を「田舎女 (*dehāt kī*)」と呼ぶ、とアーカースは悲しそうに語る。ここでも彼らは言葉の上では家族か妻か、サマージか息子か、都市か田舎かという二項対立的な図式を語るが、それに加えて矛盾をも語り、行為する。サマージはいらないと言いながら、アーカースとナミータの取る行動のいくつか（例えばナミータの既婚女性としての

服装やパルダールなどの行動、引越しの際に銀の足首輪を持って行ったことなど)は、サマージの存在を前提とするものだった。

結婚の後アーカースとナミータを前にして両親は、結婚したいのなら勝手にしろ、ただしこれからいっさい手助けはしないと告げた。病気になったらどうするのか、子供の世話などどうするのか、不慮の事故が起こったらどうするのか、両親は問いただした。アーカースは、ナミータは公立学校の教師であり政府が給料を払い続けてくれるから大丈夫だと言った。「私たちにはサマージが必要だ。サマージの中でしか私たちは生きられない」と両親が言うと、「私たちにはサマージは必要ない」とアーカースは言った。

アーカースとナミータの将来設計は、ナミータが公立の教師であり銀行のローンを組みやすいのでお金を借りて、アーカースが学位や資格をとり、教師を辞めてIT関連などもっと給料の良い会社勤めの職に就き、ナミータが専業主婦になる、というものだった。2人の頼りにするものは、高い学歴とお金、公的制度だった。それはサマージに変わって充分セーフティーネットとなるはずであると想定された。しかし2人が理想とする将来像は、裕福な女性に家について働かないというヒンドゥーの規範に沿ったものであると言える。

ガネーシュは今でも強い憤りを示す。アーカースが重い病にかかったとき、ガネーシュは治療のために多くの犠牲を払った。大きな問題は経済的問題である。金を稼ぐために遠くデリーまで、熟練技術者のガネーシュが単純肉体労働をしに行ったのだ⁹⁹。また、それまで行ったこともなかった南インドの大都市バンガロールまで薬を買いに行った。数十万ルピーのお金をアーカースのために使った。そんな思いをして治した息子が数年後に勝手な結婚をして家を出ていった。恩返しもせずに。

また弟妹たちも長兄に対して複雑な感情を抱く。弟妹たちは長兄のアーカースのことが好きだったし尊敬していたし頼りにしてもいた。D家の人々は兄妹で最初となるアーカースの結婚を楽しみにしていたし、実際に良い条件の申し込みも来ていた。しかしアーカースは、自分をもっと勉強したいので結婚はまだしない、と断っていた。そして恋愛結婚をして家を出ていった。四男のアシスは「たいした勉強だよ」とつぶやく。弟たちは今、兄が何をしたかをよくわかっている。ガールフレンドがいる人もいるが、両親の気に入った同じジャーティの女の子と結婚するということははっきり語っている¹⁰⁰。みんなが大変な思いをした、もう二度と家族に同じ思いをさせるわけにはいかないと、弟たちは思っている。そこでは、兄を今でも慕い、彼の知恵とリーダーシップと人脈を頼りにし、しかし自分勝

⁹⁹ 職業の階層意識が強い調査地では、ミストリー (*mistri*) と呼ばれる熟練職人が誰でもできる肉体労働を行うことは屈辱的なことである。

¹⁰⁰ フラーとナラシマンは、インドにおいてみられる、西洋の個人主義とは異なる「感情的な個人主義 (affective indivisualism)」による結婚を、「友愛結婚 (companionate marriage)」と呼んだ。それは、感情的な満足を伴う親密さの理想によって動機付けられた、親と子供たちが一緒に子供の結婚相手を選ぶ婚姻形態であり、親は本人よりもふさわしい相手を選ぶことができるという考え方を含んでいる。そしてそのような結婚は、ジャーティと階級の両方を再生産するという (Fuller and Narasimhan 2008)。

手なわがままで自分を含めた家族に多大な迷惑をかけた兄を恨むという、やはり複雑なつながりが見られる。

浄化儀礼のプランをする前の D 家の状態を見ると、まず親戚づきあいはほとんどが停止されていた。しかし完全には言えなかった。途中では、第 3 章でも述べたように、MZDHF の家を訪ねて歓迎してもらったこともあった。また第 5 章で登場する B 村の類別的ブア (FZ) のゴーリーの息子に子供が生まれた時には、その誕生儀礼に招待されている。

同サマージ内の付き合いも、ほとんどが停止されていた。しかしこれもまた完全にではなかった。何故なら 1 人だけ、弟の婚姻相手候補がいたからである。そしてアーカースとナミータの状態としては、親戚づきあいもサマージとの付き合いもなかった。しかし D 家との付き合いは、やはり完全には停止されていなかった。言葉の上ではつながりを拒否していたが、時によってはつながりを誇示していた。そして行為の上ではつながり続けていた。さらに感情の上では揺れ動き続け、それゆえ戦略的には部分的につながりを利用しようとしていた。

4.4 浄化儀礼と受け入れの形成

アーカースとナミータの結婚から 2 年半以上が経った。その間 D 家は、親戚づきあいの多くを断たれていた。大きな問題が、子供たちの結婚だった。イトコのハリー (当時 27 歳) を筆頭に、25、22、19 歳の弟と 15 歳の妹がいたのだが、婚姻相手を探す同じジャーティの人は来ていなかった。親戚や同じジャーティの人々との横のつながりが断たれるということは、家族の再生産という縦のつながりの可能性もまた断たれるということになるのだ。

実は、娘の結婚相手を探す父親が 1 人は来ていた。25 歳の弟リティクのために、彼より年上の、色黒で背が高く太っていて姉妹が多いダヘージなしの女の子の父親が来た。彼女の良い点はなんといっても看護師の訓練を受けていて将来の高給が見込めるところだった。ただし彼女の結婚後の学費は D 家が負担するということがあった。両親は彼女のことを気に入り、次男のリティクと会う場を設けさせた。ガネーシュとカジョールは 2 人が結婚することを望んでいた。息子の 1 人が同じジャーティの女の子と結婚することによって、サマージとのつながりを取り戻す糸口をつかめるかもしれないと思ったからである。しかしリティクは直接彼女に気に入らないことを伝えたという。これをガネーシュは、アーカースの婚姻に次いで第二の間違いをリティクが犯したという。後に彼女が別の男性と結婚したという噂を聞いたガネーシュは、「そりゃそうだ、だって看護師だぞ」と言った。

この事例からは、異ジャーティ結婚後の当初は、次男のリティクが同じジャーティの女の子と結婚するということが、D 家の地位の回復の方法となると見込まれていたということがわかる。また同じジャーティの人々の中にも、アーカースの異ジャーティ結婚を、サマ

ージから D 家を決定的に区別するものとは見なさず、ただ条件をかなり悪くする項目の一つに過ぎないと捉えていた人もいたということがわかる。事実、条件がかなり悪い女の子の父親が、この相手だったら婚姻関係が結べるかもしれないと考えて訪ねてきたのである。

このような不確定な希望があったからこそ、ガネーシュとカジョールは 2 年半の間、自分たちとアーカース一家とサマージの人々の関係がどうなるかを見てきたと考えられる。もしかしたら「うまくなおる」かもしれないとも思った。しかし事態は改善しなかった。2011 年 10 月、ついに両親は異ジャーティ結婚の解決策を実行することを決意し行動に移す。その解決策とは、バグヴァトプラーンを行うことである。これは 2010 年 5 月にアーカースを心配し続けながら亡くなったガネーシュの母ダディーの遺言であり、ガネーシュとカジョールがアーカースの問題を相談していたグルマハラージ (*guru mahārāj*)¹⁰¹の助言でもあった。

プラーン (プラーナ) とは、ヒンドゥー聖典の一部をなす文献であり、主要 18 プラーンの他に多数の副プラーンがある。バグヴァトプラーンは主要 18 プラーンの一つであり、9 世紀ごろの成立であると言われている。ヴィシュヌ (*Viṣṇu*)¹⁰²派の根本聖典であり、ヴィシュヌ神話や、特にその化身の一つであるクリシュナ神の物語が書かれている。形態としては一冊の分厚い本であり、その本を一週間かけて読み解説するという儀礼そのものも「バグヴァトプラーン」もしくは略して「プラーン」と呼ばれている。B 家が行うと決めた儀礼はこれだった。バグヴァトプラーンは、必ずしも異ジャーティ結婚に伴う不浄の状態を浄化するための手段ではない¹⁰³。しかし今回は特別にそのために行われた¹⁰⁴。バグヴァトプラーンを行うと、その家は浄化され、すべての問題はリセットされると言う。では、なぜアーカースの結婚以来 2 年半の間にもっと早く行わなかったのだろうか。理由のひとつとしてあげられるのは、バグヴァトプラーンが費用のかかるイベントであるということだ。また、プラーンを行わなくても問題が解決するかもしれないと思い様子を見ているうちに 2 年半が経ったが、子供たちの結婚適齢期が過ぎようとしている中で、よう

¹⁰¹ グルは師、マハラージは師匠やブラフマンなどへの尊称。ガネーシュとカジョールはあるグルと師弟関係を結んで (*guru dīkṣā*) いて、彼のことをグルマハラージと呼んでいるので、本論文でも彼のことをグルマハラージと呼ぶ。グルはヒンドゥー世界において最上級の敬意を示すべき存在である。ガネーシュは自身の結婚直後に、そしてカジョールはアーカースが結婚する数年前に、同じグルマハラージと師弟関係を結んだ。調査地の人々は、人生をどのように生きるべきか、いつ子供を結婚させるべきか、どのようなプージャをするべきかなどの助言を得るために、そのような師弟関係を結ぶ。

¹⁰² ヴィシュヌはヒンドゥーの最高神の柱。

¹⁰³ バグヴァトプラーン自体は頻繁に各地で開催されている。クリシュナ生誕の地マトゥラで行われるプラーンなどは、何十人ものパンディットが参加し、高名なグルが講話をし、何千人もの聴衆が集まり、テレビ中継もされる。

¹⁰⁴ チャッティースガル州で調査をしたパリーは、かつて会食を催すなどの適切な罪滅ぼしの行為をすることによって、異ジャーティ結婚をした夫婦やその子供が夫のジャーティに受け入れられることがあったと述べている (Parry 2001:804)。

やく決意したということのようだ¹⁰⁵。

本節では、家族が金銭的負担も含めてどれほど労力を負ったか、ライフスタイルの異なる親戚同士の関係がどのように儀礼の場に現れているか、そして浄化と関係の回復がどのようになされたのかに注目しながら、プラーン儀礼の詳細を記述していく。

4.4.1 プラーンの日程

2011年10月～12月、まず始まったのは、A村の家の改築だった。彼らはプラーンをB村の家で行うことも考えたが、B村の家は賃貸で借りている一時的な家で、自分たちの家ではない。プラーン儀礼では家族の状態と共に土地と家そのものも浄化されるが、儀礼で家が浄化されてもそれが他人の家であれば意味がない。グルマハラージも自分の家で行うようにとアドバイスをしたことにより、プラーンはA村の家で行われることが決定した。しかし当時のA村の家は床が土でできた田舎家だったので、大勢の親戚が来て見られても恥ずかしくないように、最低限の改築をしなければならなかった¹⁰⁶。これは第3章で述べたように、婚姻儀礼の前に家の改築をするのと似ている。

プラーンは2012年の1月23日から8日間の日程で行われることに決定した。当初候補に挙げられていた日にちは2011年の12月だったが、家の改築が間に合わなかった。そこで次に吉なる日程をグルマハラージに見てもらったところ、1月23日という結果が出たのだった。

1月12日、何度も電話で催促をしたのちに、B村に住むグルマハラージが、ガネーシュと同じくA村出身でB村に住む弟子のバイクの後ろにまたがって、A村の家へやってきた。A村の家の状態を見て、プラーンの講話をする場所と、プラーンの期間中パンディットたちが寝泊りする場所を確認してもらい、場を浄化するブーミプージャ (*bhūmi*「土地・場所」、*pūjā*) という儀礼を行ってもらうためだった。かなり冷え込む気候の中をやってきたグルマハラージは、カジョールが示した場所をそれでよいと即答し、さっそくブーミプージャを行い、中門の内側でのプラーンが終わるまでの下足履きを禁じた¹⁰⁷。グルマハラージとバイクの男性はカジョールが作ったプーリー¹⁰⁸の夕食を食べ、B村へ帰って行った。

プラーンの一週間前くらいから、プラーンで使われるものなどの本格的な準備が始まる。

¹⁰⁵ 結婚適齢期が過ぎることのリスクは、付録3を参照。

¹⁰⁶ A村の家は改築を重ねているが、このときの改築では、元々あった大きな土の床の部屋を間に壁を作って2部屋にし、コンクリートの床にした。また一時的な部屋を3部屋作ってその一つを台所に仕立て、門と水周りをやはりコンクリートで葺いてきれいにした。その結果、部屋数が1から5となった。

¹⁰⁷ 足、そして靴は穢れたものである。ヒンドゥー寺院に入る時や高位の人の家に入る時は靴を脱ぐ。また、目下の人の靴には触らない。

¹⁰⁸ 油で揚げた薄焼きパン。他人、特に低ジャーティの人が高ジャーティの人に食べさせる時に作られる、穢れを移しづらい食事である。

プラーンの場を整えるためのテントや敷物、椅子、泊まりに来る客やパンディットたちのための布団などは「テントハウス (tent house)」と呼ばれるレンタル業者から借りる。この業者はおもに婚姻儀礼のときなどに呼ばれる。マイクやスピーカーなどは普段親しくしているブラフマンの家族が営む音響業者から借りた。生活用品や食料を大量購入し、招待客リストを作って招待状を配りに行くのも、婚姻儀礼と共通している。家の中は牛糞と石灰で掃除され清められ、前日から親戚のアニータチャチー (FBW) が、当日の昼にはヴィッディーディ (eZ) がやってきて家の仕事を手伝った。彼女たちは第 5 章で記述する次男のリティクの婚姻儀礼のときにも早めにやってきて家族の仕事を手伝った女性たちである。

第 1 日目 (カラスヤトラ *kalaś yatra* [カラスは「壺」、ヤトラは「行進」、最初の講話) ¹⁰⁹

1 月 23 日木曜日、プラーンの初日になってもまだ準備は続いている。午後、いよいよ村内のマハーカーレシュワル (*Mahākāleśvar*) 寺院へ出発する。この寺院に住む行者によるとこの名の寺院は全インドで 2 箇所しかないらしい (もう一箇所はヒンドゥーの大聖地ウージェイン Ujjain)。家から徒歩で 10 分ほどの距離にある寺院に、みなで歩いていく。その時来ていた親戚のほかにも、近所の人と一緒に来るように誘う。特に重要な近所の家として、昔から親しく付き合い、物を貸し合ったり巡礼に行ったときはプラサード (*prasād*、神前への供物のお下がり) を渡したりしていた 2 軒の家族があった。そのうち 1 軒の家族は D 家と同じジャーティの家族で、昔は家族ぐるみで仲良くしていたが、長男アーカースの異ジャーティ結婚後、以前より距離をとっていた。しかし今回のプラーンで、その家の母がカラスヤトラのカラスの一つを担ぎ、また娘と息子も行列に参加した。しかしもう 1 軒のブラフマンの家族の主婦は、しきりに誘われたにもかかわらず、娘の 1 人が行くからといって彼女自身は参加しなかった。

マハーカーレシュワル寺院に到着すると、そこには B 村から来たグルマハラージと、グルマハラージが連れてきた 3 人組のパンディット、ブーミプージャのときにも来た弟子、そしてイベントを盛り上げる馬と馬飼、太鼓打ちの男性 2 人がすでに待っていた。3 人組のパンディットのうち 1 人は講話とハーモニウム ¹¹⁰ 担当、若い 1 人はタブラー (*tablā*) ¹¹¹ 担当、もう 1 人のやや年寄りのパンディットはマントラを唱えシャンク貝を吹く人だった。グルマハラージに指示されてカジョールがカラスを準備する ¹¹²。カジョールとヴィッディー、そして付き合いが途切れていた同じジャーティの家族の女性の計 3 人がバランスをと

¹⁰⁹ バーグヴァトプラーンの全体の日程は付録 4 参照。

¹¹⁰ インド音楽向けに改良された小型で軽量のリードオルガン。

¹¹¹ 一對の一面太鼓。

¹¹² ステンレス製のかめの口にマンゴーの葉を敷き、ステンレス製のプレートを置き、米を乗せ、その上に土製のオイルランプを安置して火を灯す。それを頭の上に乗せるのだ。このとき女性の担いだカラスからオイルランプが落ちて割れてしまうというハプニングが起きたが、パンディットが、プレートに直接油を入れて火をつけるように指示した。

って頭の上に載せた。さらにガネーシュが頭の上に白い布を置き、その上に金色の布に包まれたバークヴァトプラーンの本を担いだ。

マハーカーレシュワル神の像の周りを時計回りに回って参拝し、寺院の外に出る。馬と馬飼、太鼓叩きが先頭になり、その後をプラーンを頭に載せたガネーシュとパンディットたちが続く。年配のパンディットが時々シャンク貝を吹き鳴らす。その後ろから、カラスを担いだ3人の女性と、その他の女性たち、少女たち、子供たちが歩いていく。三男のアトルと四男のアシスは一部始終をビデオカメラで撮影している。行列に加わる人がどんどん増えていく。通りすがりに出会う知り合いや通り沿いに住む知り合いに、行列に加わるように、家まで来るようにと誘いながら進む。家の近くの大木の根元の古い寺院まで来ると、少し止まって馬飼いが馬に芸をさせた。その場で馬に足踏みさせながら一周させるというものだ。太鼓の音が大きく、激しくなる。

家に到着すると、あらかじめステージ上に準備してあった講話の場所¹¹³にパンディットたちやグルマハラージが案内される。グルマハラージと3人のパンディットの計4人が台の上に座り、グルマハラージと講話担当のパンディットがマイクを使ってマントラを唱える。中庭のインドセンダンの高木に取り付けられたスピーカーからグルマハラージの声が響き渡った。この後1週間、停電の時を除いて、プラーンの言葉や講話の声、音楽の演奏がこの家から近所中に鳴り響くことになる。

一方、行列についてきた人々は、舞台に向き合うようにして絨毯が敷かれた場所に座る。舞台に近い前のほうには女性たちや子供たちが座り、一段高くなった奥には男性たちが位置取り、焚き火を囲んで、煙草や噛み煙草を嗜む。行列には加わらなかった近所の人たちもやってきて、場所が足りなくなるほどに人でいっぱいになった。

ところがその後、プラーンの準備にパンディットたちが手間取っている間に、聴衆たちは待ちきれなくなって次々と帰って行ってしまった。プラーンの場に必要なる物を用意したり配置したりするのに1時間以上もかかったのだ。グルマハラージは準備したり家族に指示を出したりしながらもマイクで聴衆に、「もう少しだから待ちなさい、プラサードだけでももらっていきなさい」と、座って待つように何度も勧めたが、座っていた人々は「家のことをしなければならぬから」とか、「後でまた来るから」とか、「全然始まらないじゃないの、さあ行こう」などといって、1人減り2人減り、結局最後に残ったのは、何もなくても普段から入り浸っているガネーシュの友人たちと、ブラフマンの音響業者の義理堅い母親だけだった。しかしそれでも準備が整い、ガネーシュとカジョールが舞台の上でパン

¹¹³ 少し高くなったコンクリートの舞台の上に木製のダブルベッドほどの大きさの台を置き、全面をテントハウスから借りた白い布で覆っている。台の上には2つの円柱型のクッションと敷物を敷き、後ろの壁には特注したプラーンの内容を知らせる垂れ幕や買ってきた神々の絵のポスター、既製品のプラスチックの花飾りや、手作りのマンゴーの葉の飾りを飾った。このマンゴーの葉の飾りは講話の舞台だけでなく、各部屋の入り口や中門の上にも飾られた。マンゴーの葉はA村の藩主のマンゴー園から取ってきたもので、村人なら誰でも自由にそこに入ることが許されている。

ディットたちと向かい合わせに並んで座り、まるで婚姻儀礼の新郎新婦のようにつないだ布を肩にかけ、若いパンディットがタブラーを叩く音が聞こえ始めると、何人かは戻ってきた。そしてプラサードを配るころにはたくさんの子供たちをはじめ人が再び集まり、無事にプラン第1日目は終わった¹¹⁴。

その日のうちにグルマハラージはB村へ帰り、3人のパンディットだけが残った。彼らには改築によって急遽一時的に作られた中門の脇の部屋があてがわれ、そこに布団が敷かれ、飲み水が置かれた。プーリーの夕食をまずパンディットたちとガネーシュに食べさせ、家族も食べた。洗い物をし、掃除をし、床に敷いたテントハウスから借りてきた布団に寝転がったのは夜中の12時をすぎていた。改築前は1つの大きな土間だった部屋が、真ん中に作られた壁とコンクリートで葺かれた床で2部屋になっている。一方の部屋にヴィッディーと子供たちが、もう一方の部屋にはガネーシュたちの家族とアニータとその娘と、そして私が寝た。

第2～6日目 (クリシュナ誕生日、ルクミニ結婚式、スダマチャリトラ *sudāmā charitra* [スダマはクリシュナの幼馴染の貧しいブラフマンのこと、チャリトラは「伝記」])

プランの第2～6日目までは、毎日ほぼ同じ日程で行われた。朝起きると、女性たちが手分けして掃除をし、チャイを作る。パンディットたちとガネーシュとカジョールが水浴し、その後順次残り的人々が水浴していく。寒い時期のため、電熱器とかまどの両方を使ってお湯を沸かし、水と混ぜて水浴をする。バスルームが1つしかなく、しかもそこでトイレもしなければならぬため、朝は大変込んでいる。さらに水浴した後はそれまで着ていた服を一緒に洗うので、ますますバスルームを使うタイミングが難しくなる。調査地では大便をすると体が穢れるので、次に水浴するまでは儀礼やプージャなどに参加したり寺院に立ち入ったりすることができなくなる。それゆえ朝の水浴するまでの時間か、すべての仕事が終わった夜間に大便をするのが一番好都合であり、人々の体はこのリズムできている。普段家族だけで住んでいる時にも朝のバスルームの取り合いは熾烈なのに、プランの期間中はパンディットと親戚で人数も増えているので、ガネーシュはバスルームの裏の回り込まなければ見えない位置に、ビニールの布を敷いて簡易のバスルームを作った。しかしそこはアニータやヴィッディーの娘たちなど、普段から屋外での水浴に慣れている人だけが使い、ガネーシュの家族は誰も使わなかった。年配のパンディットだけは毎日近くの池まで水浴をしに行っていた。

パンディットたちはそれぞれ水浴を済ませると、舞台へ上がり、午前9時ごろからガネーシュとカジョールも座って小一時間ほどプージャをした。年配のパンディットは少し遅く水浴していた池から戻ってきて、菩提樹の実の首飾りを使って数を数えながらマントラ

¹¹⁴ この一連の人々の反応は調査地においては一般的な態度である。何かが始まると思っても始まらないのはよくあることだし、様子を見ながら確実に何かが始まった後で来るのも一般的である。

を唱える。その後、講話担当の中年のパンディットがプラーンの本のその日の部分を早口で読む。それが終わると朝の軽食である。果物や菓子、乳粥など、パンディットたちが食べたいという物を用意する。昼になったら昼ごはんを食べる。最初のころパンディットたちは毎食プーリーだったが、油ものばかりでは胃がもたれるので、油で揚げていない普通のローティーを食べるようになった。講話担当のパンディットは歯が少ないので、付け合せの生の大根を細かく切って出した。他にも、何の野菜を使った料理が食べたいか、ニンニクや香辛料の量はどのくらいかなど、注文の多いパンディットたちの要求に女性たちは応えていた。

午後3時半、ガネーシュとカジョールも舞台に座り、解説の時間が始まる。北インドの1月はかなり寒く、日が暮れてくると特に冷え込むが、それから夜の7時ごろまでトイレにも行かず、途中で水を飲むくらいで、講話担当のパンディットは木の台の上に、そして2人のパンディットたちとガネーシュとカジョール夫婦は冷たいコンクリートの舞台の上に座り続ける。講話はバグヴァトプラーンの解説である。物語の説明もあり、パンディットオリジナルの例え話もあり、ハーモニウムとタブラーの伴奏で歌うように物語るところもあり、聴衆が手拍子で合わせたりして、聞いていても面白いし、笑い声も起こるほど盛り上がりもする。年配の女性など時間がある人は解説の時間になるとやってきて、講話を聴いている。しかしたいいてい人は終了間際にやってきて、アールティー (*ārtī*)¹¹⁵を受け、プラサードをもらって帰っていく。

聴衆が帰っていくと、チャイの時間、夕ごはん、そしてしばしの団らんの後就寝である。プラーンの第2~6日目まではおおよそこのように過ぎていったが、しかしいくつかの変化はあった。第3日目の25日(水)は、クリシュナ神の誕生の物語の日であり、その誕生日が祝われた。第5日目の27日(金)はクリシュナ神とその妻ルクミニの婚儀儀礼の物語の日であり、2人の結婚が祝われた。第6日目の28日(土)は、プラーンとは関係ないがちょうど春を祝うバサントパンチュミー (*vasant panchmī*) という祭礼の日であった。ちょうどパンディットたちがいるのでせっかくだからということで、朝のお勤めが終わった後に家の近くの古い寺院で、やはりガネーシュとカジョールが座って講話担当パンディットにバサントパンチュミーのプージャをしてもらった。ガネーシュはこの思い付きに非常に満足していた。またその日の午後の講話は、クリシュナ神の親友スダマの物語スダマチャリトラだった。第6日目にはタブラー担当の若いパンディットが帰っていった。彼の仕事は翌日以降はもうない。

毎日停電が起こり、だからUP州に住むのはいやなのだと、特にMP州側に住む人々が文句を言う。朝の水道が出る時間に電気が停まると電動ポンプで水が汲めず、数十メートル離れた井戸から汲まざるをえない。また講話中に停電になるとマイクやスピーカーが使え

¹¹⁵ 祈祷の際や賓客の歓待を表すために、油などに点火して盆などに載せ、対象の前にかざしたり円を描くようにして回す儀礼。その後参加者は火に手をかざして押し戴くような行為をする。

ず、盛り上がり欠ける。夜には暗闇になってしまい、今回レンタルしたガスライトは高価な燃料代をどんどん食っていく。こうして毎日、たくさんの不備があり、用意するものがあり、反省会があり喧嘩があり、全員がめまぐるしく働きながらも、プランを自分たちの家族で開催したことはとても楽しかった日々として、後々まで語られることになる¹¹⁶。

第7日目（護摩行、会食）

第7日目の29日（日）は、護摩行と会食が行われるプランのメインの日であり、招待客が次々に押し寄せる日である。前日の午後から大量の野菜が届き始め、夜には大人数のための鍋をかけるかまどを庭に掘って翌日の準備をする。何人かの招待客は前日から来ているので、この日からテントハウスに借りる布団の数を増やし、男性たちは外で寝てもらうことになった。第7日目の朝から料理人がやってきて会食のための料理を作る。大鍋や菓子作りの道具などはやはり業者から借りてくる。家族はもちろん、近所の女性や少女たちもプーリーを作る道具をそれぞれの家から持ち寄って手伝いに来る。講話をしていた舞台の前に護摩を焚く火壇を作る。続々と招待客たちがやってきた。多くの親戚たちは、アーカースの結婚以来会っていなかった人々である。特にカジョールは自分の姉妹たちと再会したとき涙を流して抱き合った。アーカースの弟妹たちは、久しぶりに会う同年代のイトコたちとの話が尽きない。招待状を送ったのに来ない人々もいた。ガネーシュの死んだ妹の夫と息子や姉夫婦は来ず、華やいだ気分一抹の影を残した。家族や客たちは順番に数人ずつ護摩を焚き、食事をした。そのまますぐに帰っていく人もいれば、しばらく滞在する人も、泊まっていく人もいる。この日は再びグルマハラージもB村からやってきた。同じジャーティの家族の親しい友人夫婦が、その場でガネーシュとカジョールのグルマハラージの弟子となった。ガネーシュはずっと外に座って、客たちの対応をし、誰が来ていたのかを把握していた。

夜には、外の舞台の前では男性たちが、部屋の中では女性たちが集まり、それぞれに歌を歌った。講話担当のパンディットがハーモニウム、イトコのハリーの友人が両面太鼓、ヴィッディーの息子がスティックタンバリンをそれぞれ見事な腕前で奏でるために、だんだんみな気持ち盛り上がり、手拍子や合いの手にも力が入ってくる。パンディットやヴィッディーの夫が美声を聴かせ、夜中の12時まで歌った後、講話担当のパンディットが締めくくった。「さあ、今ちょうど夜中の12時だ。6日前のちょうど昼の12時にこのプランは始まったんだ。なんて素晴らしいプランだったのだろう。」

その夜、アトルとアシスをはじめとする何人かの男性たちは、泊まっていった大勢の親戚たちの翌朝の水浴のためのお湯を大鍋いっぱい沸かすために、ほとんど寝なかった。

¹¹⁶ 四男のアシスなどは後々まで、家族みんなと一緒に暮らして忙しく働いたこの経験をとっても楽しかったものと語り、自分が将来稼ぐようになったら2年に一回くらいはこのような何らかの家族の催しをしたいと言っていた。

最終日

最終日の 30 日 (月)、この日は自宅から村の中の池まで行き、そこでプージャが行われる。この日パンディットたちが電車¹¹⁷で帰りたいというので、その時間に間に合うよう、朝の 8 時半には全員水浴をして家を出なければならない。ガネーシュが来たときのように再び金色の布に包まれたバグヴァトプラーンの本を頭に載せ、今回は太鼓叩きを雇わずに前夜に来たハリーの友人が両面太鼓を叩く。女性たちがプージャの道具やプラサードなどを持って歌いながら後に続く。池に着くとガネーシュとカジョール、グルマハラージと残った 2 人のパンディットがガート (*ghāt*)¹¹⁸へ降りていき、最後のプージャを行った。ついて行った客たちはその様子を周囲から見ている。池のすぐそばが A 村のバス停であり、そこから最寄りの Y 町の駅へのバスも出ている。パンディットたちや何人かの客たちはそのまま直接バス停から帰っていった。

残り的人々は家へ帰っていく。女性たちが一団となって歌いながら歩いていく。家に帰りつくつと、改めて帰る人は帰り、食事をするものは食事をする。客が帰るときには、ただで帰すことはできない。プラサードを袋に詰めて持たせ、小額のお金を渡し、どちらか一方がもう一方の足を触って挨拶をする (プラナム)。とりあえずどの客も 1 回は引き止められ、もう一泊していけ、せめて夕方まで残れと、押し問答がある。

その日の午後、カジョールと子供たちと私、カジョールの姉妹たちとその子供たちとで、A 村の女神寺院まで参拝することになった。村の有名な寺院参拝は、互いの家を訪ねあつた時などに行われる楽しみの一つである。しかしプラーンの期間中ずっと家に滞在して手伝いをしたアニータたちやヴィッディーーたちはこの遠足には参加せず、私たちが寺院から家に戻った時にはもうそれぞれの村へ帰っていった後だった。末の妹のバルサは、「うちはお母さんのがわとばかり付き合って、お父さんのがわとは付き合わないの」と言っていた。

ここでは、手伝いの交換などはその義務がある範囲の親戚の中で行われる一方、それとは別の論理で、生活レベルや価値観が類似した親戚だけで特に親しく付き合う、という関係が見られる。カジョールの姉妹たちとその子供たちだけがこの日も泊まり、翌日帰っていった。カジョールはみなを見送る時、再び泣いた。

4.4.2 アーカーズとナミータの問題の話し合い

こうしてバグヴァトプラーンという儀礼はつつがなく済んだわけだが、では肝心の、

¹¹⁷ A 村のバス停から W 町の鉄道駅まではバスや乗り合いタクシーが頻繁に出ている。W 町の駅から B 村の近くの鉄道駅までは、1 日に 2 本の電車がある。

¹¹⁸ 川や池などの岸に、主に水浴、沐浴、洗濯、水汲み、船着場などの目的で設けられた場所。普通、石などで階段状になっている。

アーカースとナミータの問題はどうなったのだろうか。そのことに関して、何が語られどのような行動がとられたのだろうか。

本項では、アーカースとナミータの夫婦関係、および D 家との関係、そしてサマージでの位置づけについて、当時どのように考えられていたのかを、時間で区切って説明していく。①婚姻儀礼を挙げた直後、②プラン開催が決まった後、③プランの最中、そして④プランが終わった後のそれぞれのタイミングにおいて、状況が変わっていった様子を記述していく。

① アーカースとナミータが婚姻儀礼を挙げた直後

結婚直後、異ジャーティ結婚による家族とのつながりの停止を防ぐ方法が何かないのかと私が尋ねたとき、アーカースは次のように言った。

自分を切り離さなければ家族が親戚から切り離されるんだ、そして親戚はジャーティから。知っているだろう、インドではジャーティのつながりがどんなに大切かということは。彼らはジャーティを切り離すことができないから、僕を切り離さざるをえないんだよ。どうすることもできないよ。ただ時代が変わり、人々が新しい考えを持てば、こんな馬鹿らしい問題はすべてなくなるけどね。

ガネーシュたちも同様のことを言っており、アーカースとナミータの異ジャーティ結婚問題を解決できるのはただ、自分以外の人々が古い慣習を捨てることだけだと思われていた。それは第 1 章で言及した多くの先行研究が述べる、異ジャーティ結婚をするとジャーティ追放というサマージからの制裁を受けるという事例と、ぴったりと符合する説明だった。

ただし、先行研究で言われているようなジャーティ追放の具体的方法は、例えば職能集団からの排除など、現代インドにおいて現実的ではない部分もある。そしてやはり、「ジャーティからの切り離し」や「家族からの切り離し」を語るアーカースやガネーシュたちも、どうやって切り離すのか、何をすれば切り離したことになるのか、その具体的な行為の中身については言及していないのである。そして実際本章第 3 節第 3 項で記述したように、D 家とアーカースとナミータは愛憎入り混じりながらも交流を続けていたのである。

しかし少なくともこの段階では、D 家はアーカースを切り離すことによってサマージでのつながりを確保し、アーカースとナミータだけがすべてのジャーティ内のつながりを断たれて痛みを受けると考えられていた。

② プラン開催が決まった直後

実際は、D 家もまたジャーティ内でのつながりの多くを断たれることとなった。そもそも何をすればアーカースを切り離したことになるのかわからない一方で、家族のサマージか

らの切り離しは、交際の停止、諸儀礼への招待の停止、婚姻相手候補としての訪問の停止としてあらわれた。実際に言葉で何か言ってきた親戚はモーサー（MZH）を除いてほとんどいなかったが、動きが止まってつながりが弱まった。

しかし、プランをすることを決めたことによって、急に家族の問題に色々な見通しがたった。まずそもそもプランはD家を浄化し、低い地位から回復させ、今置かれている苦しい状況を解決するものと見込まれていた。

さらにプランで親戚を含めた地域の同ジャーティの人々も来るし、リティクやハリーの結婚も決まるかもしれない、と明るい気持ちになっていった。次男リティクの結婚に関しては、アーカースの結婚直後、誰も訪ねてくる人がいなかったときカジョールは、「私たちは女の子と一緒に何もいないんだよ。ただ性格さえよければそれでいいんだ」と言っていた。しかしプランを行うことを決めた後は、

リティクには、お金持ちで学歴があって美人のお嫁さんがほしい。なぜならリティクには学歴があり、コンピュータの会社にもしかしたら勤めが決まるかもしれないから、こっちだって少しは要求していいはずである。それに、あれがお前の妻だ、嫁だと言われるのだから、見た目も良い女の子がいいに決まっている。

というように、相手に求める条件も変わってきた。

バグヴァトプランはヒンドゥーで一番といってもよいほど大きなプランである。もし誰かの結婚が決まっていれば同時に婚姻儀礼を行うこともできるほどめでたく大規模なものである。プランの前のD家には、そんな儀礼を自分達家族が行う誇らしさと、お祭りの前の浮かれた気分があった。

さらに、アーカースとナミータの受け入れに関しても突如見通しが立った。プランで集まった年配の同ジャーティの男性達、いわゆるサマージワレー (*samāj wāle*、サマージに属する人々、男性複数形) が、アーカース夫妻をサマージに受け入れるか外すか決める。受け入れることが決まればプランの席に呼び護摩を焚かせる、というのが、プランが行われることが決まった当初語られるようになったアーカース夫妻の受け入れの手順だった。さらに改めてロハール・ジャーティの誰かにナミータのカンニャーダーンを行ってもらい、アーカースとナミータとの婚姻儀礼を行い、ナミータの手によって食事を作らせみんな食べる儀礼¹¹⁹を行えばよい、というようにガネーシュは私に説明した。

ナミータは、D家の属するロハール・ジャーティの認識では、ロハールよりも低いライ・ジャーティの成員である。インドの浄と不浄に基づく食の観念において、低いジャーティの人が作った食事、その中でも特に油を使わない食事は食べることができない。例えばこねた小麦粉を油で揚げたプーリーというパンは、誰が作っても食べることができるが、こ

¹¹⁹ これは婚姻儀礼の中の、花嫁が実家に一旦戻った後、再び婚家に帰ってきた後に行われる儀礼である。一般的にはキール (*khīr*、乳粥) を新婚の嫁に作らせるという。

ねた小麦粉を鉄皿で焼いたローティーというパンは、低位ジャーティの人が作ったものは食べることができない。つまりナミータが低位ジャーティの女性であり続けると、彼女が作った調査地の主食を D 家は食べることができず、それゆえ嫁であるとはいえナミータと一緒に暮らすことができなかった。しかしナミータにプラーンの場で護摩をさせることによって、ジャーティと一緒に（ローティー・ラグナー *roṭī lagnā*¹²⁰）させることができたはずだった。

この段階では、D 家のサマージでの回復（親戚づきあいという横のつながりの意味でも、子供たちの婚姻相手探しという縦のつながりの意味でも）と、アーカースとナミータ夫婦のサマージや D 家とのつながりの回復の、両方が達成されることが見込まれていた。そしてその方法は、突然（のように私には見えた）目の前に示されたのである。しかもその方法は前から誰もが知っている方法のようであった。

プラーンをするという決定をガネーシュから聞かされた時、私はガネーシュに尋ねた。アーカースとナミータが婚姻儀礼を挙げるのと同時にプラーンを行ってれば、ナミータは婚姻と同時にロハール・ジャーティに編入され、この 3 年間こうむってきたような問題は起こらなかったのではないかと。ガネーシュはそのとおりだといった。

この時点で説明されていたつながりの回復の手順や方法は比較的明確なものだったが、やはり肝心な部分で具体的ではなかった。つまり、「サマージワレー」とは誰なのか、彼らが話し合うのはいつ、どのタイミングにおいてなのか、どこで話し合うのか、といったことは語られないのである。というよりも、その時になるまではわからなかったということであろう。逆に言えば、過程にある時点では様々な可能性があったと言えるだろう。

③ プラーン儀礼の最中に起こったこと

ではプラーンの期間中、何が起こったのだろうか。あちこちの場所、時、人で話し合いが行われていた。

まだ大勢の親戚や客が来ていない初日、23 日の夜遅く、その日のすべての仕事を終え夜中の 12 時過ぎに電気を消し、床に敷いた布団に雑魚寝をしながら、突然アーカースに関する話が始まった。

ガネーシュ「プラーンが始まる前アーカースに電話してグルマハラージと話すように言ったが、アーカースは今は時間がないからと断ってきた。その後アーカースから電話してきて、プラーンで手伝えることがあったら言ってくれと言ってきたから、自分は手伝ってもらうことは何もない、

¹²⁰ ラグナーは多義的な言葉であるが、基本的には「つく」といった意味を持つ。食事に関して用いられる場合は、準備する、という意味で使われる。ローティー・ラグナーという言葉の意味は、新しい嫁にローティー（油を使っていない、すなわち低位ジャーティの人が作ると食べることができない食物）を作らせる、すなわちジャーティの一員とさせる、ということである。

しかしもしかして呼ぶように言われたら呼ぶから来るように、と伝えたよ」

リティク 「[驚いたように] お兄ちゃんと話したんだ」

ガネーシュ 「アーカースは自分にはサマージは必要ないと言っているが、それはサマージの何たるかがわかっていないから言うんだ。お父さんとお母さんには必要だと伝えた」

カジョール 「そうね」

ガネーシュ 「おいヴィッディー、前にハリーの携帯電話番号を聞くために電話してきたことがあっただろう。お前の親戚の婚姻儀礼の招待のためだったんだろう？ でもお前は俺たちは招待しなかった」

ヴィッディー 「あの時は……」

ガネーシュ 「お前の行動は理解できる。お前もサマージの中の人間だ。今の自分の家族の手前もある」

ヴィッディー 「私の家族は皆、チャチャ (FB) に非はないと言っている。ただ、他の人や村の人の目があるから」

この時点で、サマージワレーが、いつかはわからないがプラーンの最中にある決定をすればアーカースがいつでも来られるように、アーカースに既に伝えてあったということがわかる。

護摩行と会食が行われた 29 日、数百人ももの客のうち、多くの親戚が泊まっていった。女性たちは部屋の中で雑魚寝、男性たちは外で何ヶ所かに焚かれた火にあたりながら夜を明かす。その夜、ある一つの焚き火の周りでアーカースの話が出た。

ガネーシュ 「アーカースを呼びたい」

他 「前から何故呼ばなかった？」

ガネーシュ 「アーカースを呼んだらあなたたちは来ていたか？」

他 「来ていないな」

ガネーシュ 「それが理由だ。彼の必要性はない。2 年半前にもう捨てている。しかしあなたたちとの交流は私たちにとって絶対に必要だ」

結局彼らは、アーカースを呼んで護摩を焚かせても良いと言った。プラーンを執行したパンディットやグルマハラージも、護摩に使う材料を少し残しておいて、もし 2 人が来たら後から護摩を焚かせるように言った。そこで会食の日の 29 日の夜アーカースに電話して、30 日の朝にナミータとチョーティーを連れて来るように言った。ところがアーカースは断り、結局来なかった。

実際にプラーンの場になってはじめて、前には護摩を焚かせることが受け入れの方法だ

と言っていたが、そもそも護摩を焚く日にならないとサマージの人々はやって来ない、ということが認識された。護摩を焚いた29日の夜になってはじめてサマージワレーは話をするのであったのである。アーカースとナミータの問題はプラーン儀礼のはじめからずっと語られ続けていたが、しかしまとまった場所で話し合われることはなかった。

一方、D家のサマージの中での地位の回復は、プラーンに親戚、同ジャーティの人、近所の人、友人たちといった大勢の招待客が訪れたことにより、達成されたと思われた。

④ プラーン儀礼が終わった直後

D家はサマージ内の元の位置を取り戻したとみなされた。プラーンの翌日からさっそく娘の婚姻相手を探す客がD家に訪れるようになった（実際には第5章で述べるように、弟の結婚まではさらに2年間待たなければならなかったが）。プラーンでの数年ぶりの再会に涙を流して喜んだ親戚とも、その後も交流は続いている（こちらもいくつかの親戚や同ジャーティの人々とは疎遠のままであったが）。

一方でアーカースとナミータは切り離されたままだとみなされた。ナミータはヴィシュワカルマの名前を名乗っているが、「サマージが誰も認めていないのにその名前に何の意味がある」とD家の人々は言っている。

D家の長男であるアーカースが、ロハール・ジャーティよりも低いと地域社会では認識されているライ・ジャーティの女性ナミータと結婚した。そのことによってD家も「低い」と見なされるようになり、全親戚が含まれる同じジャーティ内での付き合いが停止されることとなった。そのような差別化された状況を打開しようとD家が行ったのが、浄化儀礼のバーグヴァトプラーンであった。

家族の低くなった状態は、儀礼を行うことによってとりあえずは回復された。一方、異ジャーティ結婚をした男女に関しては、サマージへの回復のための救済措置はないと当初言われていた。しかし実はあったということがわかった。しかし結局本当にそれが回復儀礼だったのかどうかはわからなくなった。

そしてプラーン儀礼を行うことと、D家のサマージ内での地位の回復、ナミータの受け入れ、アーカースの受け入れといった問題解決の達成度合い、達成可能性、それぞれの関係や、どれがいつどの時点で起こったのかということは、曖昧なまま残った。

4.5 異ジャーティ女性を家族にする方法

アーカースとナミータは護摩を焚きに来なかった。彼らのこの態度をどう捉えればよいのだろうか。またその判断の結果、何が起こったのだろうか。また、プラーンは何を引き

起こしたのだろうか。

まず、バグヴァトプランが本当に異ジャーティ結婚をした当人たち自身の地位の回復、そして異ジャーティの女性の同ジャーティへの編入を可能にする儀礼だったのかどうか、わからなくなった¹²¹。プランの途中のある時点までは、近い未来の計画としてナミータを編入する方法が見えていたが、アーカースとナミータがプランの場に来ず、サマージのみなの前で護摩を焚かなかったことで、その道筋は辿られなくなった。

その道筋とは、改めて同じジャーティの女性との婚姻としてアーカースとナミータの婚姻諸儀礼を行うというものだった。しかし、そもそもナミータはジャーティとしては既にヴィシュワカルマの名前を名乗っており、公的な書類の上ではナミータは既にヴィシュワカルマ・ロハールのジャーティである。であるとすれば、ここで問題となっているのは、地域を越えて分布する境界のはっきりしたジャーティではなく、対面的で実際の行為を媒介としてつながる、それゆえ境界の曖昧なサマージのほうであると考えられる。ナミータがD家の嫁となるためには、公的な制度上において同ジャーティとして認められるだけでは不十分であり、地域社会の中で同サマージとして認められるために、プラン儀礼での護摩行、同サマージの人によるカンニャーダーン、ローティー・ラグナーのための手ずから料理をして食べさせる家族の嫁として受け入れる儀礼が、行われる必要があったのである。しかしアーカースとナミータはプランの場に来ず、当初思い描いていたこれらの規則に基づいた方法が行われることはなかった。

ところが、プラン前にも交流があったように、プラン後もD家とアーカースたちとの交流は断続的に続いたのである。

4.5.1 アーカースの苦境の始まり

プランから1年あまり経った2013年2月のある日、およそ半年ぶりに、娘のチョコレートを持ってアーカースがB村のD家を訪ねてきた。D家の家族は2人を迎え、チョコレートを食べさせ、翌日もまたアーカースはチョコレートを持ってやっしてきた。しかしそのときはD家の母方の親戚が訪ねてきており、そちらをもてなすのに忙しくて2人はほうっておかれた形になった。後日再度訪ねてきたアーカースはその日の対応について不満を口に、また自分の苦境を漏らした。

アーカースの体調は悪くなっていた。しじゅう咳をしていて、過去の大病の再発かもしれない。また3歳になろうとする娘の世話も、共働きのために充分に見ることができ

¹²¹ 一方、成員が、家族のサマージ内での地位を回復する儀礼であったかどうかについては、親戚づきあいが回復したという意味ではおそらくそうであると言えるだろう。少なくとも昔からの付き合いを回復したいと思っていた人々にとっては、プランをしたということが立派な理由となった。一方新しいつながりを作ろうとまでする積極的理由にはならず、第5章で述べるようにそれには2年後の弟の結婚まで待たなければならなかった。

ないでいた。さらに家を建てるために借りた銀行ローンの返済に追われて経済的にも苦しくなり、何年も前の流行後れの服を着ていた。建築を始めた家はまだ完成していないのでいまだに借家に住んでいるが、かつての家賃 2,000 ルピーの広い部屋から、家賃 1,500 ルピーの狭い部屋へと引っ越していた¹²²。

それに対してガネーシュとカジョールは、強い口調で反論した。アーカースとナミータの結婚のときに、これからはいっさい援助できないと言ったし、アーカースも助けは要らないと言い切ったわけで、病気のことも子供の世話のことも、突発的な不幸が起こったときのことも散々言ったではないか、今頃何を言ってくるのか、と。またアーカースがプラーンの後も D 家に出入りしていることは、危険なことでもあった。D 家とアーカースは無関係となり、D 家のみがプラーンによって浄化されたことになっていたからである。少なくとも今回、親戚に D 家にいるアーカースを見られた。彼らはきっとそれを他に言いふらすだろう。せっかくプラーンを行った効果が無に帰するかもしれない。アーカースはそれを聞き、では自分はもうこの家に来ないほうがいいのかと尋ねた。両親は、D 家に来て対応が悪いと思うのだったら来なければいい、と言った。

ここでも再び D 家とアーカースとの関係は曖昧である。アーカースが今更ながらに苦境を訴えることに関しては明確に非難し、アーカースが D 家の家に出入りすることは危険であるとアーカースに伝えるが、ではもう来るなというのかと問われると、はっきり来るなとは言わないのである。また、アーカースが D 家に来てはいけない理由も親戚に見られて言いふらされることであると述べ、自分たちが嫌な思いをするからだということを直接的な理由としては語らない。

ガネーシュの分析によると、アーカースの不幸の原因はプレッシャーである。自分より年齢も給料も上の妻に頭を抑えられている。本来であれば姑が注意することができるが、アーカースには、妻に注意してくれる相手がいない。三男のアトルは、神による罰だと語る。そしてアーカース自身によれば、彼ら夫婦の間に互いを思いあう愛がなくなったことが問題だった。

4.5.2 助けることをめぐる駆け引き

2014 年 3 月、次章で述べるリティクの結婚が行われたころ、アーカースの体調は非常に悪化していた。2013 年の 11 月末から 12 月まで約 1 ヶ月、首都のデリーで入院していたが、肺が 1 つ駄目になっていて酸素吸入器を常につけていた。病気が重くなつてからは家族や親戚がアーカースに会いに行くようになっていた。12 月に母カジョールと三男のアトルが

¹²² アトルが教えてくれた当時のアーカース一家の家計予想は、アーカースの月給 6,000 ルピー、ナミータの月給 12,000 ルピー、ローン返済が月 6,000～7,000 ルピー、家賃が月 1,500 ルピーである。

見舞いのために数日間デリーに行った。しかし母カジョールと妻ナミータとの関係はいまだに悪く、カジョールが行った日の前日の夕方に、ナミータは娘のチョーティーを連れて B 村に帰ったらしい。四男のアシスも仕事でデリー近郊に住んでいたとき、何度も呼ばれてアーカースのデリーの病院へ行っていた。アーカースが B 村に帰ってきた後は、カジョールの長姉のシータやその娘も、B 村を訪ねてきたついでに病気になったアーカースに会いに、アーカースの家へ行っている¹²³。

D 家の人々が言うには、ナミータはアーカースのために全く何もしていない。近隣都市の X 町で教師としての義務であるトレーニングを受けているが、それを理由にご飯も満足に作らないという。

D 家の人々はアーカースの治療の為に必要なことをこう説明した。

ガネーシュ「アーカースのためにはまず、決まった時間に栄養のある食事が必要だ。

前に病気になったときは、毎日魚を食べさせていた」

私「お母さん [カジョール] が菜食者なのに!？」

カジョール「ああ、食べさせていたよ。それもその日に獲れた新鮮な物を」

ガネーシュ「その他にも果物やら牛乳やら 1 日 300 ルピー分の食事を食べさせていた。今アーカースに必要なのは、朝には、ドライフルーツをターメリックを加えて牛乳 1 リットルでやわらかく煮込んだもの。昼には、できたての豆カレーと、薄く作った熱々のローティーに純粋なギー (ghee)¹²⁴を塗った物を 2 枚。間食に、ハウレンソウを入れた新鮮な野菜と果物のミックスジュース。夜、その日とれた新鮮な魚カレー。これを毎日規則正しい時間に食べさせることを 1 ヶ月間続けることだ。今アーカースは、食事を用意されても食べていない。もしくは自分が気が向いたときに気が向いた量だけしか食べない。しかしみんながそばにいて、1 人が 1 回ずつでも、『少しでも食べなさい』、『ほら、食べなきゃ駄目だよ』と声をかければ、病人も食べることができる」

カジョール「アーカースは今、昼間は一人で家にいるんだよ。ナミータは学校に行っているし、チョーティーはプレスクールに行っている。一人でどうしてご飯なんか食べる気になる？」

¹²³ ナミータは、夫のモーシー (MZ) のシータの娘とその夫がカジョールと一緒に訪ねてきた時も、みんなの足を触ってすぐに奥へ引っ込み、三男のアトルにチャイを持って行かせて自分は姿を見せなかったという。このエピソードをカジョールたちは、親戚に應對して一緒に座りもてなすという嫁の義務を果たしていない証拠として語るが、私はナミータがチャイを作り足を触る挨拶をしているという点に、つながりの維持と形成を見たい。サマージがいらないと言いつつも、ナミータは関わり続けていくことをやめていないのだ。

¹²⁴ 精製バター、バターオイル。調理の他、ヒンドゥーの祭儀に際しても用いられる。

ただしこれらを実行するには非常にお金がかかり、人手もいる。

2014年2月13日の朝、アーカースからガネーシュに電話があり、ガネーシュが訪ねて行った。アーカースはガネーシュに、B村に建築途中の家を売る、A村に住む、快復祈願のブージャをするなど、何でも言うとおりにするから自分を助けて治してほしいと伝えた。ガネーシュはアーカースに、自分はお前を助けるが、ただ今はリティクの婚姻儀礼があるから家には受け入れられない。婚姻儀礼が終わるまで待つように、と伝えた。

リティクのメインの婚姻儀礼が終わった2月24日、母方オジと父方オバの夫がアーカースのところへ行った。翌25日には、母方オバたち、母方オジの妻、イトコの女の子たちが訪ねて行った。アーカースの具合が悪いと聞いて、婚姻儀礼に集まった親戚たちの多くがアーカースのところへ順番に訪ねていく。

中にはアーカースが何か移る病気か穢れたものでもあるかのように距離をとっていた人もいるらしい。ただ他人の不幸見たさに行った人もいるだろう。結局アーカースの家に必要なを見舞いに行かせたのは良かったことなのか悪かったことなのか、家を知らないのだといつてかわしたほうが良かったのではないかと、D家の中で話し合う。それにリティクの結婚が済んだ今、再びアーカースとの距離を縮めれば、D家はリティクの結婚が済むまでアーカースを切り離れたふりをしていただけだったと言われる危険性がある。

リティクの婚姻儀礼が終わった後、ガネーシュはほぼ毎日アーカースの部屋へ行き、今後のことについて話し合っていた。ガネーシュとアーカースが病気を治すために調べたある方法は、最先端機器を使った何十万里ピーもかかる高価な治療法だった。ガネーシュは、「それについては考えない。私は自分ができる範囲内の事を考える」と言う。婚姻儀礼の前にはガネーシュの言うことに何でも従うと言っていたアーカースだったが、しかし結局、アーカースは今の自分の周りのものを捨てることを渋っていた。ガネーシュの提案は、アーカースとガネーシュが2人だけでA村の家に住み、ガネーシュがアーカースの看病に専念するというものだった。B村の家には新婚のリティクの妻のニートゥが来ていた。B村の家は狭く、アーカースはニートゥの夫の兄としてパルダールの対象であるため、アーカースが家にいるとニートゥが住むのが不便になる。かといってアーカースとナミータの1部屋しかない借家にガネーシュが住むわけにもいかない。今度はガネーシュ自身がナミータのパルダールの対象である。ガネーシュはアーカースに、ナミータとチョーティーと一時期でも離れて、1人でA村の家に来る必要があるといった。ガネーシュはアーカースに、ナミータと離婚することは求めている。

一方、カジョールの言い分は、アーカースがナミータと離婚をしない限り、自分はアーカースの看病をしない、というものだった。

カジョール「私はアーカースがナミータと離婚すれば、一切の物を犠牲にしてもど
んなにお金がかかってもアーカースを治してみせる」

私 「チョーティーはどうするの？」

カジョール「もしみなが望めばチョーティーを引き取って私が育ててもいい。まだ小さいので母親のことは忘れることができるでしょう」

カジョールは、2人の離婚を絶対必要な条件として挙げる。自分としては、アーカースがナミータと離婚しないというのなら自分は看病しないしB村の家にアーカースを住ませることもしない、ただそれだけだという。ガネーシュがA村の家で1人でアーカースの面倒を見るのはかまわないが、自分は関わらない、とカジョールは宣言した。

そしてアーカースの言い分は、みんながただ自分の病気を治すことだけを一番に考えて協力しあってほしい、というものだった。このみんなの中には、ガネーシュもカジョールもナミータも含まれている。治るためには何でもすると言っていたアーカースだったが、A村の家に行かないし、ナミータとも離婚しないし、建築中の自分の家を売ることもしないし、お金も払わない。むしろA村の家を売って自分の治療費を作ってくれと頼んだ。アーカースは自分の世話をするために母方オジのラヴィの娘を寄越すように頼んでくれないかとカジョールに言ったが、カジョールは、私たちの家族をお前の使用人のようにはさせないと断った。

この難しいパズルを解くために、ガネーシュは頭を悩ませていた。それを見た四男のアシスが、アーカースの家に泊まりこみ、アーカースの世話をすることを申し出た。ガネーシュはこの申し出を気に入った。看病には世話をする人の問題と同時に金銭の問題もある。D家はアーカースの看病にかかる費用はアーカースとナミータが出すべきであると考えていた。しかしアーカースとナミータは、D家が経済的にもアーカースを助けてほしいと言っていた。アシスはリティクの婚姻儀礼のために仕事を辞めていたし、年少者の彼が家に住み込んで働いた分くらいはアーカースとナミータもお金を払うだろう、アシス自身はお金を持っていないからまさか彼にお金を払わせることはないだろう、とガネーシュは語った。それに対してガネーシュやアトルが仕事を休んで看病をすると、家計が苦しくなる恐れがあった。ただでさえリティクの婚姻儀礼で借金があるのだ。アシスはアーカースの部屋に泊り込むことになった。アシスはアーカースの弟なので、ナミータの厳格なパルダの対象ではない。アシスに対してナミータもまるで結婚前にそうだったように優しくしてくれるらしい。「優しくするようにアーカースがナミータに言いつけたのだろう」とカジョールは言う。

私はアシスがアーカースの家に住み始める前の3月9日に、母カジョールと三男アトルと共にアーカースの家に行った。アーカースがアトルに電話をし、来てくれと頼んだのだ。アニメを見ていたアーカースの娘のチョーティーはさっそく大好きなアトル・チャチャ(FyB)と遊びたがる。カジョールはアーカースのすぐ隣に座った。酸素吸入器をつけたアーカースはパソコンを置いた机の前に座っている。彼は1日中、インターネットで自分の病気の治療法を探しているのだ。床に敷かれた敷物の上では、ナミータのキャンヤーダーンをしたベンガル人夫婦の息子たちとナミータが、右上腕に巻く黒い布と、邪視除けの首

飾りをアーカースのために作っていた。ちょうどその日の午前中に来た霊能者がアーカースの病気の原因を特定したところだった。その原因とは古い家屋の死霊、誰かの呪い、病気の 3 つで、それらが合わさって数年前からアーカースに攻撃を仕掛けているとのことだった¹²⁵。

カジョール「調子はどうだい」

アーカース「このシャツを開いて見せてあげようか、お母さん。骨と皮ばかりだから」

カジョール「妻と離婚したら面倒を見るよ」

ナミータ「ああ、離婚すればいいさ！ 私を捨てればいい！」

カジョール「お前には何も言っていない！」

アーカース「ナミータ、何も言うな。お母さんも」

帰り際に、カジョールはチョーティーに「ダディー (FM) と一緒に行くかい？ 村祭り見物を一緒にしよう。夕方にはチャチャ (FyB) がまた送ってくれるから」と話しかけた。チョーティーは喜んでよそ行きの服を棚から取り出し、ナミータのところへ持っていった。ナミータはチョーティーに服を着せてやり、カジョールたちと一緒に送り出した。チョーティーは村祭りでカジョールに飛行機の形のおもちゃを買ってもらい、家に帰った後はバルサブア (FZ) と家中を走り回って遊び、アトルチャチャに送ってもらって帰っていった。ガネーシュがアーカースの家での様子を訊ねた。

ナミータ「今日はベンガル人が 2 人もいたよ。1 人は例の夫婦の息子で、もう 1 人は知らないけど」

アトル「あれは息子のいとこか友人か何かだよ。前にも会ったことがある」

ガネーシュ「見ろ、今まではベンガル人は 1 人しかいなかったのが、2 人に増えている。そのうち家に乗っ取られるぞ」

ナミータは以前から親しい関係にあり、自分のカンニャーダーンをしてくれたベンガル人の一家に助けを求めている。それはアーカースの治療のことにまで及んでいる。一方、アーカースは助けをベンガル人一家だけでなく D 家にも求めている。父母や弟たちに頻繁に電話をかけ、会いに来てくれるように頼み、用事をしてくれるように頼んでいる。むしろ根本的な治療と世話は、D 家のほうに頼もうとしている。ここにいくつかの家族が重なり合っていることが見て取れる。D 家、アーカース、ナミータ、チョーティー、そしてベンガ

¹²⁵ 彼は、「治してあげるから、お礼は貧しい子供たちの学校に寄付しなさい。古い邪視除けは井戸に捨てなさい」といったという。アーカースがこの霊能者に頼ることは、カジョールは評価していた。

ル人一家が、それぞれにとっての家族の内側や境界線上、あるいは外側にいる。例えば D 家にとってはベンガル人一家など他人以外の何者でもないが、ナミータたちにとってみれば多くの時間を家で共に過ごし、困った時には助けてくれる人々であり、さらにカンニャーダーンをしてくれたという儀礼的なつながりまである。アーカースにとっては自分とナミータとチョーティーの間に家族の境界が引かれることは決してないが、カジョールにとってはアーカースとナミータの間に線が引かれており、チョーティーはその境界線上にいる。さらに一時的に感情的になったカジョールは、自分の弟の娘を「私の家族」と呼び、息子の使用人にはさせない、とさえ言った。

愛情と世話と交流のつながりは一般的な家族の範囲を超えて広がっていく。リティクの婚姻儀礼で D 家にやって来た人々の何人かはアーカースの大病を知り、それぞれの人々がそれぞれの方法でアーカースの病気を治そうとしていた。父方オジの婚出した娘 (FBD) のヴィッディーは、兄弟のアーカースの病気のことを、自分が住む村の高名な僧侶に相談していた。僧侶は特別なプラサードをアーカースに与えるようにといたので、彼女はガネーシュを呼んで、村のプラサードを取りに来るようにと聞いた。

プラーンには来ずリティクの婚姻儀礼には来たガネーシュの姉の夫 (FZH) は、彼の村でプージャの準備をしている。かつてアーカースが大病にかかった時、その村の女神に山羊を殺すことと処女たちに菓子振舞うことを誓約して、快復祈願をしていたのだ。アーカースの過去の病気が治ったのはこの村の女神の力だとガネーシュたちは考えていた。しかし当時はお金がなかったために、菓子しか振舞わなかった。その後祈願成就のお礼参りをしなくてはと思いつつも、山羊を振舞うことをしなかった。今また女神の力にすがってプージャを行い、今度こそは山羊を振舞わなければならない。

ナミータは公的な書類上はアーカースの妻であり、ヴィッシュワカルマ・ロハールのジャーティに既に属している。一方「サマージ」に編入するための儀礼的方法は存在したが、それは行われなかった。しかし D 家とアーカースたちの交流は完全には途切れず、経済的援助や人的助けをめぐって駆け引きが行われた。それらは時に感情的な言い合いにまで発展した。その言い争いと不信は主に、相手の個人的な性格・性質への非難という形をとってなされた。しかしプラーンに来なかったことによって今後の交流が断たれたと思われた親戚やサマージの人々ですら、病気という苦境にいるアーカース (に愛情をかけるガネーシュとカジョール) に再び愛情をかけ、そのつながりは完全には断たれていないのである。



写真 4-1 カラスヤトラ

寺院を出発するカラスヤトラ。先をプラ
ーンを頭に載せたガネーシュが進む。



写真 4-2、写真 4-3 プラーンの会場

仮設された部屋にテントが張り巡らされ、装飾されて舞台にしつらえられた。



写真 4-4 舞台上に座るカジョ
ールとガネーシュの夫婦

舞台上に座る講話担当パンディ
ット、タブラー担当パンディット、そ
してカジョールとガネーシュの夫
婦。落ちかかっているが、赤と白の
布をつないで婚姻儀礼のときのよ
うに2人の肩からかけている。

第5章 儀礼と家族の形成—同ジャーティ結婚の事例から

5.1 はじめに

本章では、具体的な婚姻儀礼の事例から、他人である女性がどのように家族の嫁となっていくかという儀礼の方法に焦点を当てる。

まず本章の事例となる D 家の次男の婚姻儀礼が行われたときの状況について改めて説明する。D 家の長男アーカースが異ジャーティ結婚をしたのが 2009 年 2 月（第 4 章）、その結果 D 家がこうむった地位の低下を解決するために浄化儀礼バグヴァトプランを行なったのが 2012 年 1 月（第 4 章）、そして D 家の次男リティクの婚姻儀礼が行われたのが 2014 年 2 月であった。リティクの結婚が決まる前、長男アーカースの異ジャーティ結婚の影響は弟たちの婚姻相手候補が訪ねてこないという家族の危機的状況として特に顕在化していた¹²⁶。両親のカジョールとガネーシュの言動の端々には、子供たちの結婚への焦りがあらわれていた。つまり当時の彼らは、どんな婚姻儀礼でも引き受ける用意ができていたといえる。そんな状況で決まったリティクとニートゥの結婚に求められたものは、何よりも D 家がサマーグの中で完全に地位を回復する端緒を作ることだった。本章で以下に述べていくように、その焦りは婚姻相手が決まった後も、できるだけ落ち度がないように適切に婚姻儀礼を行おうとする彼らの態度にあらわれていた。一方、こちらが焦っていたということは当然婚姻相手の家族にも知られているわけで、こちらを軽んじる態度は物や金銭の出し惜しみとしてあらわれた。

もう一つ、本章の事例を理解する上で重要となるのが、第 2 章で説明した A 村と B 村という 2 つの調査地の対比である。A 村は発展していないが自分たち家族の家があり、自分たち家族の神がいる土地である。一方 B 村には生活の利便性と付き合いやすい隣人・友人たち、そして現在の生活の大部分がある。その 2 つの場所のバランスをとりながら、それぞれの場所で行うべきことを確実に行っていこうという D 家の判断が、婚姻儀礼の進行に影響を与えた。

前章では異なるジャーティの女性との結婚の事例を記述したが、本章では同じジャーティの女性との結婚の事例を、特にその婚姻儀礼に注目して描くことによって、外部者であった女性を内部化することでいかに家族が未来の状態へと進んでいくのかを考察していく。

¹²⁶ 第 3 章で述べたとおり、男の子側から積極的に婚姻相手候補の女の子を訪ねていくことはできない。

結婚に伴って女性にくっついて婚家の中に取り入れられるのは、罪あるいは凶性 (Raheja 1988) や幸福な贈り物 (Fruzzetti 1982)、ダヘージだけではない。本章の事例の花嫁ニートゥには様々な良い性質があり、いくつかの悪い性質があった。そして最も重要な点は、ないものは持ってこられないということ、そして分不相応に過大に望むことはできないということである。本論文では、婚姻に伴い女性にくっついてくるものを「家族」という観点で捉えなおしてみる。

本章の事例の婚姻儀礼の場では、未来が不確かだからこそ、そして過去の行為とつながりの結果が今現れているからこそ、様々なレベルで人々が注意深く行動しようとしている。しかし結果として思っても見なかったことが起こり、不満は残る。それでも紡がれたつながりの中で人々は生きていかなければならず、そしてそのつながりが、家族を未来へと進める機動力の主要な部分となっていく。一連の諸儀礼において、過去に作られた関係がどう現れているのだろうか。また、未来の状態はどう志向されているのだろうか。これが本章の問題である。

5.2 婚姻儀礼

婚姻は、調査地では神聖視され、通常約 2 週間にも及ぶ一連の儀礼の諸実践によって確定されていく。それぞれの儀礼は、新婚の夫婦が関わるもの、父系リネージの成員が関わるもの、その他の親戚が関わるもの、近所の女性たちが関わるもの、両家の親族が関わるものなど、それぞれに関わるべき人が決まっており、専門家にやり方を聞きながら、落ち度のないように注意深く進められていく。特に今回繰り返されたのが、村の諸寺院と家の門扉および祭壇にターメリックで手形をつける儀礼であった。これは、当該男女が夫婦となる儀礼の後の行われ、それによって女性が「父系リネージの一員となる (*maer men pathnā*、メールは「父系リネージ」)」といわれる儀礼である。本節では、第 3 章で述べたとおり、地位の差異を前提に選ばれた婚姻相手が、一連の手続きを経ていくことによって家族の内外部者となっていく過程を記述する。またその際、様々な「思いもよらなかった事柄」が起こったということにも注目していく。

5.2.1 結婚話がどのように起こったか

本節の事例の花婿リティクは、ガネーシュとカジョールの次男であり、アーカースの弟である。アーカースの異ジャンパーティ結婚から 5 年、浄化儀礼バークヴァトプランから 2

年が過ぎていた。プランのおかげで親戚づきあいは回復していたが、当初の期待に反して結婚相手を探す同ジャーティの人々の訪問は一向になかった。ガネーシュとカジョールの焦りはつるばかりだった。しかし、ついに結婚話がやってきたのである。結婚話を持ってきてくれたのは、親戚だった。

2013年10月27日に、ある女の子の家族がリティクを見にやってきた。そして、女の子本人を家に見にくるように、リティクの家族を招待した。女の子側から逆に招待を受けたということは、第3章でも述べたとおり、結婚のプロセスが進んだことを意味する。60kmほど離れた村の人だったらしい。家族全員で見に行ったが、「彼らは我々のようではなかった。彼らのライフスタイルは我々よりも下だった」とD家の誰に聞いても言う。妹のバルサは、「家族になるのだったら、家にある物をどうやって使うのかぐらいわからなきゃ困るでしょ。1人目の女の子は、これは何？ これはどうやって使うの？ といちいち聞く感じだった」とその状況を説明した。具体的には、D家の息子たちが使っていたタブレットなどを物珍しそうに見ていた、ということのようである。

11月8日に、もう一組女の子の家族から連絡が入ったと知らされた。その女の子ニートゥが、後にリティクの妻となる女性である。「ニートゥの家族は我々のようだった」と、家族全員が口をそろえて言う。彼らの一連の態度からは、結婚相手には同じようなライフスタイル・消費傾向の家族の人間がふさわしいと考えられていることがわかる。しかしそれらの判断は2人目の候補者、ニートゥが現れたからこそ可能となったと言えよう。比較できるようになったという意味ではなく、1人目の女の子は、断ることができたからこそ批判することができた。

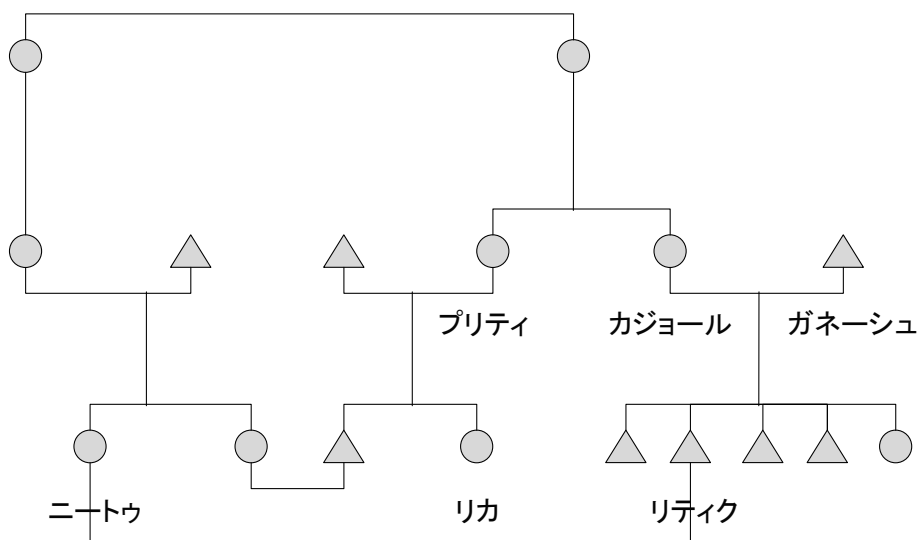


図 5-1 花婿と花嫁の既にあった関係

(聞き取りをもとに筆者作成)

ニートゥは21歳、大学2年生がもうすぐ終わるところで、専攻は経済学である。姉と兄、妹がいる。他に、父方オジの家族とも同居をしている。リティクの母方オバ、カジョールの次姉であるプリティの長男の妻の妹 (MZSWZ) であり、母方祖母の妹の娘の娘 (MMZDD) でもある。プリティの娘のリカの婚姻儀礼で会っていたので、母カジョール、妹のバルサ、四男のアシスは前から知っていた。リカの婚姻儀礼の場で花嫁側の親族として、数日間共に過ごしていたのだ。

結婚に至る事情はこうである。

- ① 年頃となったニートゥの父が、誰か男の子がいないかと、娘の夫の父 (DHF)、つまりニートゥの姉の舅である、プリティの夫に電話をした。
- ② プリティの夫は、妻の妹の息子 (WZS) であるリティクのことを話し、出会いの場を設けた。
- ③ プリティの家に、リティクの家族は本人も含めて全員、そしてニートゥとその兄が来て、会った¹²⁷。
- ④ その後リティクたちの住むB村に、ニートゥの父、母方オジ (MB)、母、兄が来て、家族が住む家を見て、結婚を承諾した。

その際ガネーシュは1つだけ嘘をついた。ニートゥの家族は菜食者で、こちらの家族のことも聞かれたが、うちも誰も肉を食べないとガネーシュは伝えていた。しかし実際には母のカジョール以外は全員が肉を食べるのだ¹²⁸。

婚姻の口約束をした後は、オーリー (*olī*) とパッキヤート (*pakyāt*) という2つの儀礼で、その約束を確実なものにしていかなければならない。オーリーとパッキヤートは別に行われることもある。その場合は通常、オーリーは女の子の家で、パッキヤートは男の子の家で行われる。しかし1日のうちに1ヶ所で両方済ませることもある。今回はニートゥの家で11月21日に、オーリーとパッキヤート、さらにエンゲージメント (*engagement*) という

¹²⁷ 最初に設けられた出会いの場は、一般的な女の子側の家ではなく、第三者の家であった。それゆえ慣習に則った方法から離れて当人たちが直接会うことを可能にしたのだろう。一方、その次の段階では、B村の家にニートゥ本人は来ないという慣習に則った方法がとられた。定められた慣習から踏み外すことなく、しかし「合理的に」当人たちの出会いの場を設けるといふ、バランスのとれた対応がなされているのである。

¹²⁸ 調査地では、肉食は不浄性と結び付けられ、低ジャーティの慣習とされている。D家で唯一の純ヴェジタリアンのカジョールは、夫や息子たちが肉料理を作るときは終始不機嫌になり、部屋の奥に引っ込んでしまう。台所も使わず、食器や調理用具も別にし、幼い娘でも肉を食べた後は同じ布団では眠らせない。それでもまだ自分の夫のガネーシュは優しいとカジョールは言う。肉料理を作るようにカジョールに強制しないからだ。カジョールの友人のヴェジタリアンの女性たちの何人かは、肉を食べる夫たちに命令されて鼻と口を覆いながら肉を調理しているという。つまり、菜食者と肉食者が一緒に家族として住むことは、サブスタンス・コードの面で非常に困難が多いのだ。しかし自身が肉食者であり男性であるリティクは、ニートゥ側の家族に嘘をついたことに関して「少しの嘘はありなんだ」と説明した。結局D家が肉を食べるといふことは、婚家に来て早々のニートゥにバルサがばらしてしまった。バルサもはじめは嘘をつこうと努力したが、肉食の事実は大した嘘ではないと判断したらしい。

近年流行している儀礼が、続けて行われた。

5.2.2 婚姻の約束を確定させる交換

2013年11月21日、ニートゥの家で、オーリーとパッキヤート、そしてエンゲージメントが行われた。男の子側の参加者は以下のとおりである。アーカースとその妻と娘は参加しなかった。

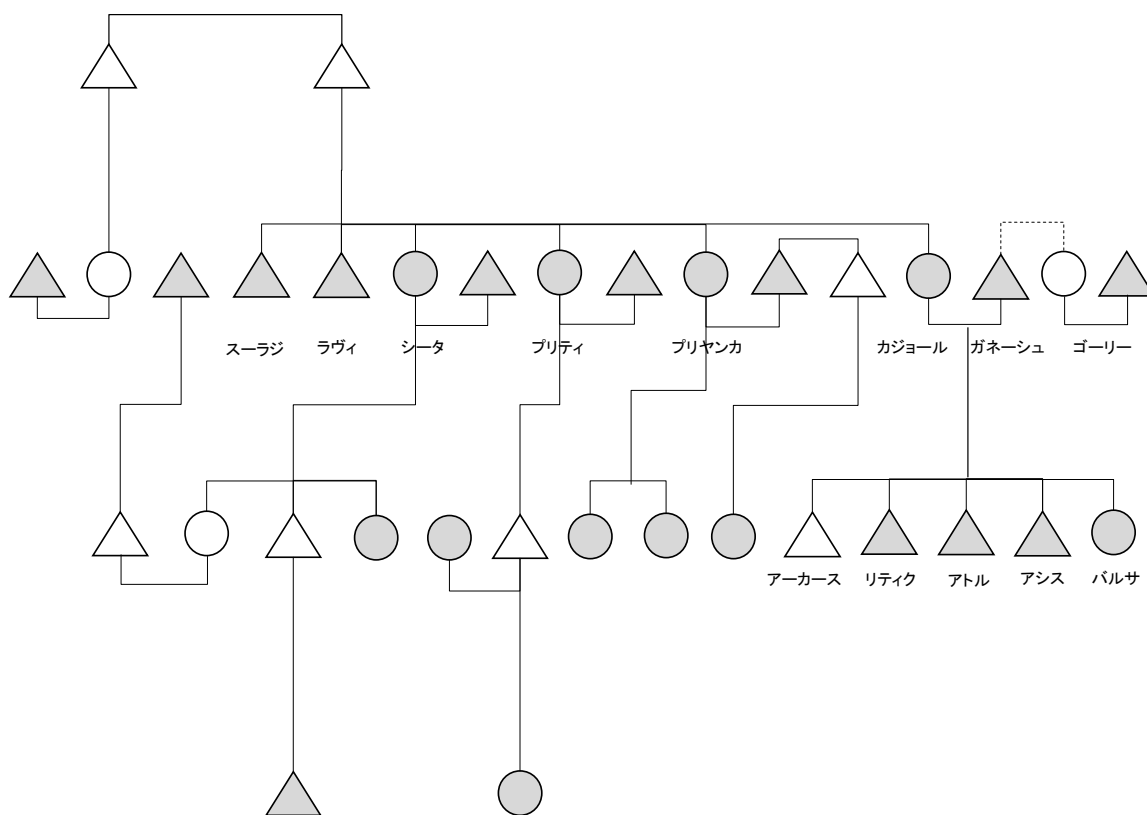


図 5-2 オーリー、パッキヤート、エンゲージメントに参加した男の子側の親戚
(色つきが参加者、聞き取りをもとに筆者作成)

ここで注目すべき点は、リティクの側の参加者が、母方の親戚ばかりであるということである。唯一参加したゴーリーの夫は実際の父方オバの夫ではなく、同じ B 村に住むため日頃から親しくしている、当人たちも関係を言えないほどに遠い親戚である¹²⁹。リティク

¹²⁹ ゴーリーはガネーシュの MZDHBWZ であると、ガネーシュは説明した。それゆえゴーリーはガネーシュの類別的姉であり、ガネーシュの子供たちもゴーリーのことをブア (FZ)

の父のガネーシュは兄と姉、そして妹の4人兄弟だった。しかし兄夫婦と妹は死んでおり、妹の夫は遠くの町に住んでいて疎遠になっている。姉夫婦は近くに住んでいるにもかかわらず2年前に行われたプランに来なかったため、やはり疎遠になっていた。それに比べてカジョールの兄弟姉妹たちは比較的近くに住んでおり、日常的に行き来をしていたのだ。カジョールは2兄弟4姉妹であるが、今回は全員が集合した。また今回は、ニートゥがブリティの親戚でもあり、さらにはカジョールたち兄弟姉妹の母方オバの娘がニートゥの母であるというつながりの隣接性の強さが、夫となるリティクの母であるカジョールの方の親戚を勢ぞろいさせた。つまりカジョールたちは幼いころからニートゥの母と姉妹として親しく付き合っていたのである。そのことはまさに、今のD家の子供たちとそのイトコたちとの兄弟姉妹としての愛情が、彼らの次の世代、またその次の世代の婚姻関係を紡いでいくであろうことを予期させる。

まず女の子のニートゥを儀礼の場の床に座らせて、オーリーが行われた。

オーリー（男の子側から女の子側への贈与）

オーリーでは男の子側が品物を用意し女の子側に渡す。オーリーとはサリーなどの服の縁のことであり、そこに品物を置いて贈与する行為のことでもある。オーリーで男の子側が用意した品物は以下のとおりである。

- ① 供物的食べ物類（砂糖菓子、菓子、蓮の実、リンゴ、ザクロ、ガヴァ、パイナップル、オレンジ、バナナ、ビンロウジュの実、グローブ、カルダモン、干し葡萄、ナツメヤシ、カシューナッツ、アーモンド、ココナッツ）
- ② ニートゥ本人への贈り物（サリー2、中身の詰まったメイクアップボックス、携帯電話、足首輪、カーディガン）
- ③ 兄弟姉妹への贈り物（3人の兄弟にズボンとシャツ、2人の妹にスーツ¹³⁰）

オーリーでは男の子側の親族男性たちが順番に、インドボダイジュの葉で作られた器に砂糖菓子とお金を入れて、ニートゥのレンガ（*lehenga*）¹³¹のオーリー（縁）に入れる。

次にリティクを儀礼の場の床に座らせて、パッキヤートが行われた。

パッキヤート（女の子側から男の子側への贈与）

パッキヤートでは女の子側が品物を用意し男の子側に渡す。D家がもらったのは、以下のとおりである。リティク本人に服と下着一式、ガネーシュにズボンとシャツ、カジョールにサリー、2人の弟にズボンとシャツ、妹にスーツ。そして51,000ルピー、これもダヘー

と呼んでいる。しかしガネーシュの子供たちもゴーリーの子供たちも自分たちの具体的な関係を言えなかった。

¹³⁰ 女の子用の服装。ワンピースとズボン、スカーフがセットになったもの。

¹³¹ 女性の服装で、一般的なサリーよりも高価で華やかであるため、婚姻諸儀礼の時に着られることが多い。

ジの一部、というより主要な部分である。今回男の子側はダヘージの金額を指定しなかったので¹³²、向こうがくれた額をそのまま受け取った。

パッキヤートはニートウの兄とリティクが向かい合って座り、以下のとおり行われた。

- ① ニートウの兄がリティクの足を触る。
- ② ニートウの兄がリティクにティーカー (*tīkā*)¹³³をする。
- ③ ニートウの兄がリティクに贈り物と皿 (ピンロウジュの実、グローブ、カルダモンなどがのった既製品のセット) を渡す。
- ④ ニートウの兄がリティクに花でできた首飾りをつける。次にリティクからニートウの兄へ同様に花でできた首飾りをつける。
- ⑤ 互いにパーン (*pān*)¹³⁴を食べさせる。
- ⑥ 抱き合う。
- ⑦ ニートウの兄がリティクに、ココナッツと砂糖菓子を渡す。

以上の 2 つの儀礼は床に座って行われたが、次のエンゲージメントはリティクとニートウを椅子に座らせ行われた。

エンゲージメント

リティクからニートウへ、次にニートウからリティクへ、指輪の交換を行う。男の子側が用意したものは 7,000 ルピーの金でできたもので、女の子側がくれたものもおそらく同等の金額のものだろう。その後、リティクとニートウを囲んでの写真撮影が行われた。

オーリーは男の子側から女の子側へ、パッキヤートは女の子側から男の子側へ、エンゲージメントは相互にと、贈与の方向の異なる 3 つの儀礼を経て、婚姻関係を結ぶということが確定されていった。本来は別の場所で行うオーリーとパッキヤート、そして新しい指輪交換の儀礼が一ヶ所で、しかし別々のものとして行われた。ここでも、確実にやるべきオーリーとパッキヤートの 2 つの儀礼と、「ファッションナブルな」エンゲージメントの儀礼、そして「合理化」のバランスがとられている状況が見られる。

もう一つ、リティクの父ガネーシュには重要な仕事があった。それは婚姻儀礼を、リティクの家族が住む B 村で行うことをニートウの家族に承諾させることであった。通常調査地では、婚姻儀礼は女の子側の村で行い、男の子側はバラート (*barāt*) という花婿行列を

¹³² 一般的にダヘージの額は両家の間で交渉が行われるものであるが、今回は D 家の側に長男の異ジャータ結婚という負い目があったために、D 家からは額を提示しなかった。

¹³³ ヒンドゥーが額、腕、胸部などに辰砂、白檀、ターメリック、石灰、サフラン、粘土などを用いて描く宗派標識や宗教上、信仰上ないし装飾的なしるし。調査地では、一連の婚姻儀礼の中のメインの儀礼もティーカーと呼ぶ。

¹³⁴ キンマの葉に薬味などを入れて噛む嗜好品。

組んで賑やかに儀礼の場へ行進していくものである。前例がないとは言わないが¹³⁵、慣例に反する方法で今回婚姻儀礼を行いたいとガネーシュが思ったのには訳があった。

5～6年前、ある婚姻儀礼でリティクと弟たちが、相手方の村の男の子と大喧嘩をし、カジョールは贈り物だけして息子たちを連れて主要な儀礼を待たずに帰ってきてしまったことがあった。その婚姻儀礼が、リティクの母方オバのプリティの長男とニートゥの姉の婚姻儀礼、つまりニートゥの家で行われた婚姻儀礼だったのだ。同じ家で婚姻儀礼が行われれば、喧嘩相手と再び顔を合わせる可能性がある。しかもリティクはその喧嘩の当事者だった。ようやく叶ったリティクの婚姻儀礼でガネーシュが何よりも望んだのは、喧嘩などの問題が何も起こらないことだった。両家の間での話し合いの結果、ガネーシュの説得が勝ち、男の子側の村、つまりB村で婚姻儀礼を行うことが決まった。

長男のアーカースが異ジャーティ結婚をしたのが2009年の2月、浄化儀礼のプランを行ったのは2012年の1月であった。プラン後は親戚づきあいの横のつながりとともに、弟たちの結婚相手探しという家族の再生産に関わる縦のつながりも回復したかと思われたが、それは一時的なことで、長い間弟たちの結婚相手候補が現れることはなかった。2年たってようやく実現した今回の婚姻儀礼は、その意味では本当の浄化儀礼と言えるかもしれない。プラン後、横のつながりとともに縦のつながりも回復させた家族の姿をサマージにお披露目する場で、問題が起きてほしくないというガネーシュの何よりの希望だった。

しかしこの決定は、もしかしたらその後の遺恨につながったかもしれない。というのは、ニートゥの家族の婚姻儀礼にかかる諸費用や、ダヘージにおける金銭の出し惜しみがはなはだしかったからである。その原因としては、もちろん長男アーカースの異ジャーティ結婚というD家の負い目が挙げられるが、自分たちの村で婚姻儀礼を挙げられなかったという恨みがこれらの態度をとらせたのではないか、という疑念は常につきまとった。

2013年3月末で長期調査を終え帰国する私に、ガネーシュは残念そうに「トモがいる間に一つでも家族の婚姻儀礼を見せてあげたかった」と告げた。またカジョールは、「もし急に結婚が決まったらトモは来られるの？」と聞いてきた。それに対して私は「ビザを取らなければならないので最低でも2週間はほしい」と答えた。カジョールは、「もしハリーでもリティクでも誰でも結婚が決まったら、オーリー、パッキヤート、シャディー (*sādī*、婚姻儀礼) と、時間を空けずに続けざまにさせたいけど¹³⁶、話が確実になった時点ですぐに連絡するから」と言ってくれた。

11月に結婚話が決まったとき、最初の婚姻儀礼の日程の候補は12月だった。家族としては早く済ませてしまいたいのははやまやまだったが、しかしその日程は、占星術上は最善

¹³⁵ 例えば前述の、リティクのモーシー (MZ) の娘リカの婚姻儀礼も、男の子側の村で行われた。

¹³⁶ 当初語っていたカジョールの希望としては、女の子の家族が訪ねてきてから最初の1週間でオーリーとパッキヤート、次の1週間で婚姻儀礼にまでこぎつける、ということだった。実際にそのような日程が可能かどうかは別として、カジョールの、息子の婚姻儀礼への熱心な思いと焦りが感じられる。

の日にちではなかった。最も好ましい日付が2月22日だった。アーカースの結婚の失敗があったため、両親は、万全を期して最も吉なる日程で婚姻儀礼を行うことにしたのだった。

私は2014年の2月11日に、婚姻儀礼前の楽しい気分の漂う家族のもとに到着した。家に着いてすぐデリーで買ったお土産をひろげた私にリティクが「バフー (*bahū*, 嫁) には何を買ってきた?」と尋ねた。それを聞いたアトルが、「ほらもう妻のことを心配しているよ。毎日電話をして、少しずつ愛情を感じ始めているんだ」と兄のことを冷やかした。私が「リティクはニートゥに何回会ったことがあるの?」と尋ねると、2回だけとのことだった。モーシー (MZ) の家で互いに見合ったのが1回と、婚約儀礼での1回だけである。しかし実際、電話は毎日しているようである。婚約期間中は、調査地の若者が人生で最初で最後に、おおっぴらに恋人を持つことができる機会なのである。

オーリー、パッキヤート、エンゲージメントという3種類の儀礼、父ガネーシュによる相手の家族との婚姻儀礼に関する利害の絡む交渉、そして携帯電話で交わされる婚約者同士の会話。これらの、それぞれ関わる人物も交わされる物事も異なる交換関係が漸次起こっていき、リティクとニートゥが結婚するという約束も確定していくこととなる。

5.2.3 婚姻儀礼の過程

本項では、前項で約束された婚姻が実際に結ばれていくことになる婚姻儀礼の概要を、時系列に沿った形で書いていく。この諸儀礼の順番は、調査地で一般的な部分と、今回だけの特殊な部分があるということをはじめに断っておく。いくつかの儀礼に関しては、主な儀礼を執行するグルマハラージ¹³⁷が日にちを指定したり、天候の影響で延期されたりしている。また、調査は基本的に花婿家族の側から行ったため、花嫁家族の側で行われた儀礼には基本的に参加できず、また参加者のカテゴリーや時機の問題で全儀礼には私が参加できなかったため、いくつかの儀礼は撮影された写真や聞き取りを元に再現した。また、ここで記述するのはすべて花婿側の人々が何らかの形で加わった儀礼のみである。その上で、ここでは特に諸儀礼に関わる人の種類（親族カテゴリー、近所の人、職能者、女性、男性など）と、そこで起こった様々な「期待通りにはいかなかったこと、反省すべき点」に焦点を当てて、記述していく。

私がB村のD家に到着した時、四男のアシスも家にいた。アシスはこの婚姻儀礼の前に仕事を辞めていたのだ。実の兄の婚姻儀礼のために勤めていた会社に休暇を申請したところ、わずか1日か2日しか認めてくれなかったのである。近年では業者に外注されることも多い儀礼にまつわる諸事だが、それでも家族の成員が大きな役割を果たす。本当に信頼ができ、一生懸命仕事をしてくれるのは、家族だけである。四男のアシスはリティクの婚

¹³⁷ バグヴァトプランを執行したときの僧侶であるグルマハラージが、一連の婚姻儀礼を執り行った。

姻儀礼で大きな働きを果たすことを求められていたし、その必要を本人も自覚していたのだ。そして会社から認められる1日か2日の休暇では、家族への義務を果たすには充分ではなかった。

私が到着した時にはもう、婚姻儀礼を行う諸々の場所の交渉は済んでいた。婚姻儀礼のうち一番メインのティーカー（後に詳述）の日の儀礼はマリッジハウス（marriage house）と呼ばれる結婚式場で行われることになっていた¹³⁸。家ではなくマリッジハウスやホテルで婚姻儀礼を挙げることは、近年では珍しくない。また、親戚やゲストたちが寝泊りする場所として、すぐ近所に建ったばかりのまだ人が住んでいない新築の家を1ヶ月間借りていた¹³⁹。木工の仕事をしている自分たちでその新築の家の扉を全部付けてあげることによって、安い値段で借りることができるだろうという目論見もあった。

以下の記述ではわかりやすさのために、ジャーティ名は伝統的職能を書き、下線を引く。初出時のみ現地の音と翻字も併記する。ただしグルマハラージとその妻グルマター（*guru mātā*、マターは「母」）だけはそのままグルマハラージとグルマターと記述し、やはり下線を引いて示す。また親族名称は新郎のリティクからみた関係を記している。諸儀礼の番号は後の項での分類のためにふったものである。

マルワー（*maṛvā*）の日の8日前（2月12日水曜日）

花婿の父ガネーシュと母カジョールが、ブンデルカンドの婚姻儀礼で行われる慣習のハルドール（*Hardaul*）の招待¹⁴⁰のために、カジョールの実家へ行った。途中ガネーシュだけがニートゥの家へ行き、こちら側が刷った¹⁴¹招待状を渡した。

ここ数日、ガネーシュはほとんど家にいない。朝早く出かけては夜遅くに帰ってくる。婚姻儀礼で仕事をしてくれる職能者たち¹⁴²を確保しなければならないからだ。

弟たちが借りた家に扉をつけているところへ、母と妹と私は食器などの荷物を運びこむ。

¹³⁸ サービス内容は付録5参照。

¹³⁹ リティクの婚姻儀礼を自分たちの家があるA村ではなく普段住んでいるB村で行うことを決めたはいいものの、B村の家は賃貸で、とても狭い。狭くても婚姻儀礼ができないことは必ずしもないのだが（部屋が一部屋しかなくても婚姻儀礼を挙げた例があるという）、やはり客や親戚に不自由な思いをさせないように、ちょうど近所の人が建てたばかりの家を、一ヶ月間借りたのだ。

¹⁴⁰ ハルドールの起源譚については付録6参照。

¹⁴¹ 調査地では、男の子側と女の子側がそれぞれ別々に招待状を作り、それぞれの客へ渡す。

¹⁴² 婚姻儀礼で仕事をする職能者とその報酬については付録7参照。後述するが、もし婚姻儀礼が「自分たちの村」であるA村で行われていれば、話はもっと簡単だった。古い世代から決まった職能者がいるからだ。しかしB村では前の世代からの付き合いがある職能者はおらず、今回の婚姻儀礼は家族にとってB村で初めての大きな家族儀礼であった。またD家はB村で自分たちの家を建てておらず、それゆえ賃貸暮らしを続けており、B村の中でも引越しを繰り返していて、現在住む地区の土地とそこでの人間関係に根ざしていなかった。

空には雲が多く、季節はずれの雨が降っている、すっきりしない天気である¹⁴³。

マルワーの日の6日前（2月14日金曜日）

ガネーシュがグルマハラージに電話して、最初の儀礼チュイマーティー（*chumātī*、チュイは「触る」、マーティーは「土、大地」）がいつ行われるべきかを聞く。今日14日（金）か17日（月）で、月曜日がより良いということになる。チュイマーティーの場に床屋（ナイ *nāī*）¹⁴⁴はいても良いが、必ずしも必要ではないということも確認する。

マルワーの日の5日前（2月15日土曜日）

ガネーシュが入りに塗装¹⁴⁵してくれる人のところへ電話をする。カジョールが近所の女性たちを含めた自分の女友達のところへ、今後の儀礼への参加の招待と手伝いのお願いをしに行く。ガネーシュについてきてもらう。次項で述べるが、近所の女性たちが関わる儀礼は一連の儀礼において非常に多い。それにしても季節はずれの雨が気がかりだ。調理に使う鉄鍋から皿に移さずに直接ご飯を食べると自分の婚姻儀礼で雨が降る、という言い伝えがあるという。リティクは何度も食べたことがあるらしい。

マルワーの日の4日前（2月16日日曜日）

さらに準備しなければならないものを、次々に思い出していく。家族の人数が多いと、誰かが忘れても別の誰かが思い出すからよい。今日は、アビナンダンパットラ（*abhinandanpatra*、アビナンダンは「歓迎」、パットラは「書状」）¹⁴⁶を用意しなければならないということを思い出した。

B村の家は自分たちの家ではなく賃貸なので、A村の自分の家から、父系リネージ（メー

¹⁴³ この時期は調査地では乾季である。寒季から暑季への変わり目で1日か2日雨がふることはあるが、この年のように雨が降り続くのは異常気象であった。

¹⁴⁴ おもに理髪業に従事してきたジャーティ。婚姻儀礼では第二の僧侶と呼ばれるほどに重要な役割を果たす。

¹⁴⁵ 調査地の建物の壁は、レンガ組みの上にセメントが塗られ、さらに石灰を水に溶いた物を塗っている。土の家の場合は、土の壁の上に土でできた塗料が塗られている。婚姻儀礼が行われる時、花婿と花嫁の家ではそれぞれ、塗料の上からさらに、同じ塗料に色を混ぜた物を何色も用意し、「祝結婚」、「ようこそ」、などのメッセージや新郎新婦の名前、花やハートなどの絵を描く。石灰や土の塗料は、年に1回ディワリー祭のときに塗りなおすので、その時に壁はまたきれいにまっさらになる。しかし今回B村で1ヶ月借りている家も普段住んでいる家もどちらも自分たちの持ち家ではないので、一般的な直接壁に描く方法はとれない。そのため発泡スチロールに文字や絵を書いて壁にのりで貼り付けるという方法をとった。

¹⁴⁶ 歓迎祝辞を記した書状。後のジェイマラー（*jay mālā*、ジェイは「万歳の掛け声」、マラーは「首飾り」）の儀礼の際に両家の父が交換する。フォトスタジオでも作っているので、三男の親友の写真家に作成を頼んだ。

ル) の神メールバツバ¹⁴⁷を連れてこなければならない。賃貸に住む人は、家の神から普段は離れて暮らしているのだ¹⁴⁸。今日の夕方ガネーシュとカジョールが A 村に行って、明日の朝メールバツバを連れてくるという¹⁴⁹。ちなみに婚姻儀礼が終わればメールバツバは自分で帰っていくので、送っていく必要はない。

マルワーの日の 3 日前 (2 月 17 日月曜日)

メールバツバと、リティクの父方オジの妻のアニータ (FFBSW) とその娘を連れて、ガネーシュとカジョールが帰ってくる。アニータは D 家にとって交流がある範囲では唯一の、メールの大人の女性である。色々な仕事ができるし、性格もおとなしくて信頼もできる女性である。ガネーシュの父の実家の M 村 (第 2 章参照) に住んでいる。

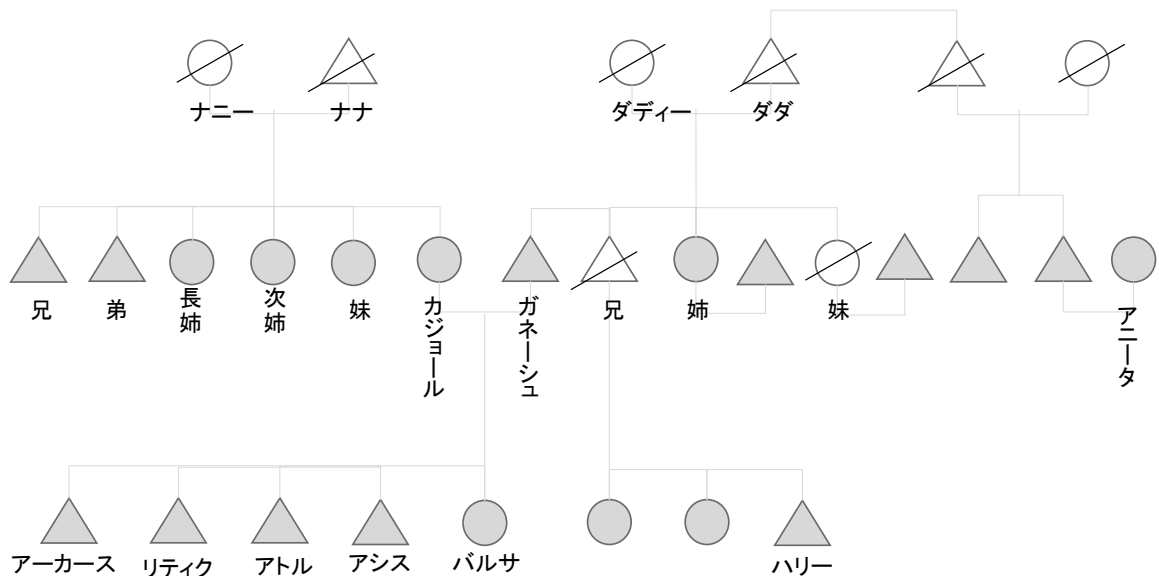


図 5-3 父系リネージの女性であるアニータとの関係

(聞き取りをもとに筆者作成)

調査地の料理に欠かせない香辛料を製粉所に挽いてもらいに行く。この香辛料は婚姻儀礼期間中、家やマリッジハウスで使われる。

¹⁴⁷ ヒンディー語ではクルデオター (*kul* 「家、家系」、*devtā* 「神」)、ブンデルカンディーではメールバツバ (*babbā*)、つまりワンス (父系リネージ) の神である。

¹⁴⁸ 家を出て新しく別の家を建てた人は、元の家を少し持って行き、メールバツバを分祀することができる。

¹⁴⁹ 朝起きて、水浴、プージャの後、右手にギー (精製バター) をつけ、家の祭壇に赤い布を押さえつけることによって、その布にメールバツバが移る。その布を持って帰ってきて、新しく借りた家の祭壇と定めた場所の壁に張る。

① チュイマーティー

チュイマーティーは、一連の婚姻儀礼の最初のものとして認識されている。後の儀礼で使うかまどを作るための土を取ってくる儀礼である。そのかまどはマイナー (*māynā*) もしくはメールと呼ばれる菓子を作るのに使われる。メールはそのまま家や父系リネージを表す言葉であり、同じ名で呼ばれるメールという菓子は、家の祖先または神のプラサードとなる。

儀礼は夕方から行われる。僧侶 (パンディット *pandit*) や 床屋 などの執行者はいないが、ガネーシュの友人の母が来てくれて儀礼の仕方を教えてくれる。チュイマーティーで使う品物¹⁵⁰の準備をしながらチャイを振舞ったり、太鼓を叩いて歌を歌ったりして参加者の近所の女性たちが集まるのを待つ。すべてヒンドゥーの夫が存命の既婚女性たちである。すぐ近くに住んで日ごろから交流がある地域の人々という基準で呼ばれており、ジャーティはばらばらである。

1. 19 時ごろ家を出発する。歌を歌いながら、カーリーマター (*Kālī mātā*)¹⁵¹ 寺院のそばの池の畔へ行く。
2. オイルランプを灯しながら、インドボダイジュの木の下の土を掘る。掘る役は弟、すなわち三男のアトル。掘る前に母のカジョールが線香をたいて、アトルの右手と額にターメリックと米でティーカーをする。
3. 掘った土はまずカジョールのオーリー (サリーの縁) へ入れられ、その土はさらに皿へ移される。
4. 6 つの籠に次々と掘った土を入れ、その場にいた人に 1 人 1 つずつ持たせ、道中の寺院にお参りしながら家へ帰る。
5. 借りている新築の家へ行き、座って、胡麻と黒糖を混ぜたものと砂糖菓子をプラサードとして皆に配る。それぞれの儀礼でプラサードに何が用いられるかは異なる。

家の神と関係するメールを作るかまどを作るための土を取ってくる儀礼チュイマーティーで役割を果たすのは、土を掘り出す役目の弟、土をまずオーリーに受ける母、そして参加者であり目撃者となる近所の女性たちである。婚姻の最初の儀礼には、部屋がいっぱいになるほど大勢の近所の女性が来てくれた。おかげでいよいよ婚姻儀礼が始まったのだという喜びも増した。一方ガネーシュをはじめとする男性たちは最後まで姿を見せなかった。ただし帰り道になってようやく現れ行進を盛り上げた 太鼓叩き (バソール *basor*) は、ガネーシュが手配して寄越した者だという。

マルワーの日の 2 日前 (2 月 18 日火曜日)

¹⁵⁰ 用意したものは、6 つの籠 (近所から借りたるなどしてかき集めた)、真鍮の皿に、ターメリック、米、黒糖、砂糖菓子、線香、ギー、オイルランプ、マッチ、土を掘るための道具。

¹⁵¹ シヴァ (*Śiva*) 神の配偶神パールヴァティー (*Pārvatī*) の憤怒形。

婚姻儀礼で仕事をする 床屋 が A 村から来るはずだったが、期間中 1 日しか来られないと言い出したため、急遽 B 村から見つけなければならなくなった。一連の婚姻儀礼に 床屋 の存在は欠かせない。そのことがここ数日のガネーシュの懸念だったが、今日ついに仕事を頼める 床屋 の家族を見つけたらしい。仕事をするのは男性の 床屋 が 1 人、女性の 床屋 が 1 人で、それぞれの仕事がある。床屋 は第二の僧侶と呼ばれるほどに儀礼で重要な役割を果たす¹⁵²。

チュイマーティーで採ってきた土と、アシスとアトルが近くの畑から採ってきた土を混ぜて、カジョールとアニータが 7 つの道具¹⁵³を作る（女の子側は 5 つ）。

借りている家の屋上の水槽の掃除、部屋の掃除、婚姻儀礼で着るサリーの裾を縫う¹⁵⁴ことを任される。全員に仕事は山ほどある。

マルワールの日の 1 日前（2 月 19 日水曜日）

ガネーシュの兄の娘ヴィッディーと彼女の子供たちが来る。まずアニータが来て、そしてヴィッディーが来るという順番は、プランの時と同じである。この 2 回の D 家の儀礼においては、アニータは父系リネージの女性として、ヴィッディーは婚出した娘として、この 2 人の女性がカジョールを手伝い、家族の女性の仕事をする。

マルワールの日（2 月 20 日木曜日）

今日から 3 日間が婚姻儀礼のメインである。その第一日目である今日はマルワールの日でマンダップ (*mandap*)¹⁵⁵を立ち上げる日である。

食器を洗う 水汲み (ディーマル *dhimar*)¹⁵⁶の女性 comes。今日から彼女は朝から晩までここで過ごして、ひたすら大量の食器を洗い続けるだろう。

今日、初めて男性の 床屋 が来たので、さっそく仕事を言いつける。女の子たちとアニー

¹⁵² 調査地では、祝い事に際して厄除けや安寧、息災の祈願のために対象者の頭の上でお金をくるくると回す。それはニチャーワル (*nichāwar*) と呼ばれ、誰が誰に対してやってもそのお金を全部持っていくのがナイである。

¹⁵³ 4 つの皿と 3 つのかまど（小 2 大 1）の計 7 つ。ついでにあると便利なため、かまどのための台 1 つを作る。2 人が土をこねてそれらの物を作る様子を隣の家の屋上から眺めていたブラフマンの女性が、「あなたたちは作るのが上手ね。私たちが作ったときはやり方がわからなくて大変だったわ」と言った。言外に、土でかまどを作るのが田舎の慣習であるという前提があり、私にはとても厭味たらしく聞こえた。

¹⁵⁴ 通常サリーを新しく買うと、ブラウスの縫製、サリーの布端の始末縫い、そして裾の部分の裏布当てをしなければならない。自分で仕立てができなければブラウスは仕立屋に頼むが、始末縫いと裏布当ては仕立て代の節約のため自分たちですることが多い。

¹⁵⁵ 木でできたあずまや状のもの。ほぼすべての儀礼はその下で行われる。男の子側の家と女の子側の家の双方に作られる。今回はそれに加えてマリッジハウスの一部屋にも作られた。

¹⁵⁶ 婚姻儀礼では水汲み、皿洗いに従事するジャーティ。

タが歌を歌いながら擦って洗ったケツルアズキを 床屋 がつぶす。これはバラー (*barā*)¹⁵⁷ を作るためである。

そうこうしているうちに、親戚が来はじめる。やってきたカジョールの長姉のシータがさっそく妹に注意している。マルワーの今日は新郎の母は断食しなければならなかったらしい。「なんていったってうちでは初めての婚姻儀礼なのだから、私は何にもわからないわよ、あなたたちが教えてくれなきゃ。姉さんは昨日来てくれればよかったのに」とカジョール。長姉のシータが来ると、カジョールは一気に妹らしく甘えたふるまいをするようになる。

15 : 15 木工 (バライー *barhāi*)¹⁵⁸ が、マンダップのための木を持って来る。

17 : 50 マリッジハウスに持っていく野菜が来る¹⁵⁹。

18 : 44 カジョールたちがバラー、パコラ (*pakorā*)¹⁶⁰ 作り。

19 : 35 壁に飾りを貼る。

儀礼を執行する グルマハラージ が来る。

20 : 00 土器作り (クムハール *kumhār*)¹⁶¹ が土器¹⁶²を持って来る。床屋 がマンダップを立ち上げるプー ज्याの準備を始めた。

② マルワー

マルワーは、マンダップと呼ばれるあずまやのような物を立ち上げる儀礼である。このマンダップの下で、婚姻儀礼のほぼすべての儀礼が行われる。今回新郎側のマンダップは、借りている家の屋上に作られることになった。マンダップを立ち上げる儀礼は グルマハラージ が執り行う。この儀礼の参加者はメールの男性たちだが、その場にいたメールの男性はガネーシュだけだった。そこで彼が 1 人でグルマハラージと共に座ってマルワー儀礼が進められた。ガネーシュはその日既にご飯を食べてしまっていたので、ガンジス川の水¹⁶³

¹⁵⁷ ケツルアズキのペーストを小判型にして油で揚げて、乳清に浸けた食べ物。マルワーの日に食べることになっている。

¹⁵⁸ 木工に従事することを主たる生業としてきたジャーティ。婚姻儀礼ではマンダップ作りに従事する。

¹⁵⁹ マリッジハウスで出される料理の材料は、こちらが用意して持っていくまでをしなければならない。マリッジハウスは必要な量を一覧表にして渡してくる。

¹⁶⁰ ひよこ豆粉の衣をつけた野菜の揚げ物。マルワーの日に出される食事は、前出のバラーと、パコラを入れたカレー (*karī*、ひよこ豆の粉を、ヨーグルトからバターをのぞいた液体で溶いた、白っぽくとろみのある汁物) と決まっている。

¹⁶¹ 土器製造を主たる生業としてきたジャーティ。

¹⁶² 7つの飲み水用の壺と2つの大皿、1つの小皿。叩いた音を聞いて目に見えないひびが入っていないかを確認したカジョールが、そのうち1つのマトカを交換させる。絶対に割れていないと言い張るクムハールとの口論にはカジョールが勝ち、1回家に帰って代わりのものを持ってこさせる。

¹⁶³ ガンジス川の水は、調査地ではほぼすべての家にプラスチックの容器に入れて常備して

を飲ませて浄化し、20時半ごろ儀礼が始まる。

1. その場にいた5人の男性と男の子（必ずしも父系リネージの成員ではないし、親戚ですらない）が、鉄の棒でとんとんとマンダップを作る土の上を叩く¹⁶⁴。ガネーシュが中心の枝をさす。そこにマルワーというマンダップの中心の棒をさす。この棒の名前もマルワーであり、儀礼自体もマルワーと呼ばれている。
2. 21時、カジョールや近所の女性たちが来る。カジョールも食事をしてしまっていたためガンジス川の水を飲む。イトコの女性ヴィッディーがターメリックと油を混ぜたものを持ってきて、まず床屋に、そしてその場にいるみんなの背中に両手で手形をつける。加えて互いに顔にもターメリックを塗りあう。そうこうしている間も木工は黙々とマンダップを作り続ける。
3. リティクがプーリー（揚げパン）と木の枝を持ち、ショールを被せられて、近所の井戸までプージャをしに行く。女性たちは歌を歌いながら先を進み、男性たちもその後からついていく。
4. その後みなに食事¹⁶⁵を振舞う。
5. メールの人たち全員で、7つの壺に井戸から水を汲みにいき、井戸でプージャをする。汲んできた水は、マンダップの下に置く。この水がこれから一連の婚姻儀礼で使われることになる。
6. MZのプリヤンカが、リティクの首飾りに邪視除けを結びつける。菓子7つと指輪とお金、ガネーシュ神を持ったリティクが、まず部屋のメールババのいる祭壇を触り挨拶する。そして類別的FZのゴーリーがサリーの縁でリティクの背中を押さえながら、屋上のマンダップの下へ行く。
7. マンダップの下で姉妹たちによる新郎への、油塗り¹⁶⁶が行われる。MBの娘がやり方をよくわかっていてみんなに説明する。

儀礼を行う場を整えるマルワーの日の儀礼に関わるのは、マンダップの立ち上げの最初に関わるメールの男性と、参加者目撃者である近所の女性を含めた女性たち、そして花婿

ある。一滴ですべてを浄化する力を持つため、通常は普通の水に数滴のガンジス川の水を混ぜて浄化に用いる。そのため、一度汲んできた水はかなりの期間もつ。また、ガンジス川の水は保存していても腐らない。マルワーの日、本当は新郎の父は断食して備えなければならなかったのだが、知らなくて食事をしてしまっていた。食事をすると儀礼的に穢れるので、ガンジス川の水を少し飲んで浄化した。

¹⁶⁴ 本来ならば地面の上に作るが、今回は借りた家の屋上、コンクリートの床の上にマンダップを作る。そのため一斗缶のようなものに土を詰め、そこに木の枝を挿してマンダップを作った。

¹⁶⁵ カリー、バラ、豆料理、米、ローティー、漬物、塩。一連の婚姻儀礼の日程全部の中で、マルワーの日の献立だけがこのように決まっている。

¹⁶⁶ 両手の親指で、お椀の油、花婿の足の甲、膝小僧、手首、二の腕、こめかみへ。7回しなければならぬが、夜遅すぎて女の子たちがみんな寝てしまったので、3人で回す。その間ずっとFZのゴーリーはリティクの頭をサリーの縁で押さえている。この油塗りは2日間にわたり数回行われた。

本人である。花婿当人は、マルワーの日から諸儀礼に関わるようになる。マンダップの立ち上げの場にガネーシュ 1 人しかいなかったことが、メールの男性が少ないことを浮き彫りにした。アトルとアシスは別の仕事で忙しかったし、アーカースとハリーは不仲¹⁶⁷が原因でその場におらず、2 人いるはずの父方オジ（実際は父のイトコ）たちは動物たちの世話がある田舎の村からまだ来ていなかった。またその後の油塗りをするのは姉妹たちであったが、こちらは充分にたくさんいた。

マイナーの日（2月21日金曜日）

マイナーの日とは、メールバツバのプラサードであるメールと呼ばれる菓子を作る日で、その場に必要なのはメールの成員だけである。

10:45 ガネーシュの友人とアトルの友人 2 人がテント貸出し業者からテントを持ってきて、日除けのためにマンダップを囲うように立てる。

③ マイナー

マイナーとは、メールとも呼ばれる菓子を作る儀礼である。父系リネージの事もメールという。つまりメールとは、家の神であるメールバツバへのプラサードとなる菓子のことなのだ。前日の夜に屋上でガネーシュ、リティック、アトル、アシス、アニータとカジョール、つまりメールの人々が¹⁶⁸、麦粒を石臼にいれて少しずつ挽き、粉にして置いておいた。その粉を水でこねたものを飴玉状に整形して、油で揚げてメールを作る。

メール作りは花婿のリティックからスタートする。MZ たちが作り方を教えてあげるが、同メールに属する人たちがメールを作るということで、手伝うことはしない。リティックの FBS であるハリーもそのタイミングで来たのでメールを作らせるが、いくつか作っただけですぐにどこかへ行ってしまった。結局婚姻儀礼の期間中、ハリーがいたのはこの時だけだった。父のガネーシュも来て手伝うが、メールの成員である弟たちや母のカジョール、父方オジの妻（FBW）のアニータは他の仕事で忙しいのでなかなか参加できない。それゆえメール作りはなかなかはかどらない。

チェイマーティーで取ってきた土で作ったかまどに 土器作り が持ってきた土器の鍋をかけ、油を入れ、メールの成員が作った小麦粉を練った生地を揚げる。すると、油の中でメールの生地が破裂した。そのことに対して、メールバツバが怒っているのだとガネーシュが言う。ガネーシュとリティックが 2 人だけで作り続けるが、メールの成員が少ないことを嫌がうえにも意識させられるし、作業のゴールは遠いし、生地は相変わらず油の中で破裂し続けるし、何となく暗い雰囲気になっていた。

しばらくして、結局メールの人はメール作りのスタートの必要条件だけで、他の人も

¹⁶⁷ ハリーとガネーシュの間には、A 村の家の持ち物をめぐって最近諍いが起きていた。

¹⁶⁸ 妹のバルサは、いずれ婚出するためメールの成員として数えられない。一方婚入してきた女性たちはメールの成員である。

作っていいということがわかり、MBのラヴィとMZのシータがメール作りを手伝い始める。2人は作業が早い上に作り方のコツ¹⁶⁹を知っており、しかも土のかまどと土の鍋ではなくガスコンロと鉄の鍋を使うことにしたので、もうそれ以降メールが破裂することもなくなり、作業は順調に進み始めた。

メールバツバのためのプラサードを作るマイナー儀礼に関わるのは、父系リネージの成員であった。しかしアーカースとハリーは不仲のためおらず、ガネーシュの兄は故人であった。またアニータの夫とその兄はM村で牛や山羊の世話をしなければならないのでB村には早くからは来られなかった。さらに言えば、アニータ夫婦には息子がおらず、アニータの夫の兄は未婚だった。そのためよりメールの成員が少なかった。このように、「不仲」、「早世」、「一緒に住んでいない」、「男の子がいない」、「未婚」といった、調査地の価値観において悪い条件がこの家族には重なっていることを、いやがうえにも意識させられるのである。

20:15 イトコのヴィッディーがリティクにターメリックと油を混ぜた物を塗る¹⁷⁰。

④ チーカト (cīkaṭ)

これは姉妹と兄弟の愛を確認する儀礼である。花婿の母と姉妹、その兄弟たちが行う。

マイナーの日の20時25分、カジョール(M)、シータ(MZ)、プリティ(MZ)、プリヤンカ(MZ)の四姉妹、メールの女性アニータ(FFBSW)、カジョールの弟のラヴィ(MB)、ラヴィの妻、カジョールの兄スーラジ(MB)の代理の息子、スーラジの妻、ゴリー(類別的FZ)、床屋の女性、水汲みの女性が屋上のマンダップの下へ行く。

1. 床屋がラヴィとスーラジの息子の足の親指にマホール(mahāvar)¹⁷¹を塗る。
2. カジョールが兄夫婦(兄は代理)と弟夫婦にターメリックでティーカーをし、ギーに浸した砂糖菓子を食べさせる。
3. スーラジ(代理)とラヴィからカジョールへ贈り物としてサリーを渡す。カジョールの頭にその贈り物を載せて抱き合う。その妻たちとも抱き合う。
4. カジョールの姉妹たちとアニータ¹⁷²もスーラジ夫婦とラヴィ夫婦にティーカーをし、砂糖菓子を食べさせる。スーラジ夫婦とラヴィ夫婦は、シータ、プリティ、プリヤンカ、アニータの足も触る。
5. 抱き合っている彼ら彼女らの頭の上に互いにお金をまわして(ニチャーワル)、床屋と水汲みに渡す。床屋にばかり渡すので、私にもくれと水汲みが文句を言う。

¹⁶⁹ 生地をきれいに球状に整形すると破裂しやすく、穴や隙間があるように不揃いに整形すると破裂しない。

¹⁷⁰ 肌を白く美しくするため。

¹⁷¹ ラックカイガラムシから採れる赤い顔料。

¹⁷² アニータは、その夫の兄弟の妻であるカジョールの兄弟にとっては類別的姉妹となり、カジョールやその姉妹たちと同じ立場の存在となる。

6. スーラジ夫婦とラヴィ夫婦にバラ（昨日の残り）を食べさせる。

チーカトに関わったのは、花婿の母と、その兄弟姉妹たちであった。結婚する当人たちも家族も関わらない儀礼は、一連の婚姻儀礼の中でチーカトだけである。兄は体調が悪くて来られなかったが、代理の息子を含めると、母の兄弟姉妹が全員集合したことになった。

20：50 門の外で 太鼓叩き の音楽に合わせて友人や親戚たちがダンスをする。

22：30 リティクの手へヘナ染料¹⁷³で模様を描く。みんなも互いの手にヘナ染料を塗り合う。

ティーカーの日（2月22日土曜日）

いよいよ婚姻儀礼のメイン、ティーカーの日がやって来た。朝 6 時半から、男の子たちはマリッジハウスと家を何度も往復し、用意すべき荷物の確認をする。大雨が夜中から降り始め、屋上に一昨日立ち上げたマンダップが全部壊れてしまい、ガネーシュは不吉なものを感じていた。

15：30 男性の 床屋 が来て、リティクの準備、シェービングを手伝う。

⑤ 出発の儀礼

夕方の 16 時 40 分、リティクのメイクアップ¹⁷⁴を姉妹が施し、兄弟たちがリティクに服を着せる。MZ のシータの次男の妻が、邪視除けの墨をリティクのこめかみに塗る。これはバビー (eBW) の役目であり、長男アーカースの妻がもし同じジャーティの女性だったら、彼女がこれをしていただろう。

床屋 がリティクの足にマホールを塗り、太鼓叩き と共に寺院参拝¹⁷⁵へと向かう。サンカル (*Sankar*)¹⁷⁶寺院とカーリーマター寺院を回って、18 時 50 分に帰宅した。

マンダップの下で、リティクと母カジョールの髪をくっつけ、そこに砂糖菓子を溶かした水をたらして飲む。カンカン (*kankan*)¹⁷⁷をイトコのヴィッディーがリティクに結ぶ。母方オジとその妻がリティクの足に触り、最後に母方オジがリティクを持ち上げる。

¹⁷³ ペースト状で、手や足に描き乾かしてから落とすと、模様が浮かび上がる。花婿花嫁は絶対に（ただしこれも「昔は行われていなかった」という）行う。他の人たちはおしゃれのため、義務ではない。模様描きには上手い下手があり、女の子たちの習い事にもなっている。

¹⁷⁴ 花婿のメイクアップとは、眉毛の上に赤と白の点で模様を描き、目の周りにカージャルという黒い墨を塗るものである。だが、リティクとバルサが、そういうのは素敵ではないから（つまり過度に飾るのは最近の流行ではないから）やめようと言い、結局顔に白い粉をはたいただけで終わった。

¹⁷⁵ 各寺院で、バルサが持つお椀に入った小麦粉と赤唐辛子を、リティクの周りをまわして、イトコが持つ葉の器へ、という動作をする。

¹⁷⁶ シヴァ神の異名。

¹⁷⁷ 鉄とカラシナの実でできた飾りのついた、魔除けの聖糸。花婿と花嫁の手首に結ぶ。伝統的には鉄鍛冶ジャーティが用意するものだが、近年では既製品が買える。

花婿行列に参加する人々の準備が完了し、20時54分に、門の前で出発の儀礼¹⁷⁸が行われる。女性たちは門の内側から、男性たちは外から見守る。

花婿の出発準備に関わったのは、兄弟、姉妹、女性親族、母、母方オジ、そして花婿であった。この儀礼までに間に合うようにと親戚が到着したため、門の前にあふれかえるほどの人となった。

21:34 花婿行列の変更された出発場所¹⁷⁹に到着。寒空の下、花婿行列の出発までひたすら待つ。

22:10 リティクが馬に乗り、警察に捕まったディスコ¹⁸⁰なしで出発。花婿行列はとても静かでダンスもなく、ダンスのために立ち止まることもないのでひたすら歩き、早く到着した。途中花火¹⁸¹が打ち上げられたときには少し盛り上がった。

⑥ 歓迎の儀礼

22時42分、マリッジハウスに到着後、歓迎の儀礼が行われた。婚姻儀礼の時間が書かれた紙を花嫁の父が花婿の父に渡すラグン (*lagun*)¹⁸²、双方の父が抱き合うサジャンベント (*sajanbhent*)¹⁸³、花嫁の父が花婿にティーカー¹⁸⁴をする。その時すべて花嫁側から花婿側への金銭の贈与がある。しかしその時渡された金額は、D家が予想していた金額よりもはる

¹⁷⁸ 兄弟たちがタオルをつかんでリティクと共に並ぶ。女性たちが順番に彼らにティーカーをし、砂糖菓子を食べさせる。リティクの足の下には粉絵と木の台が置かれている。ヴィッディーとゴーリーが、ヨーグルトからバターを分離させる時に使う棒をタオルの上から向こうへ、下からこちらへと移動させる。床屋がタオルの向こうへ薄焼きパンのローティーを投げたが、これは間違いだったらしく、地面に落ちたローティーは慌てて回収された。

¹⁷⁹ この日B村ではダンスフェスティバルが行われており、花婿行列の当初予定のルートが交通規制に遭うことが当日になって判明、急遽花婿行列の出発場所が変更され、短くなった。

¹⁸⁰ 前注のダンスフェスティバルのため、この日、22時までは大きな音を立ててはいけないことになっていた。その規則を知らなかったピックアップトラック上の大音量スピーカーが、バラートの参加者のためにダンス音楽を鳴らしていたのだ。このスピーカーを積んだトラックを調査地では「ディスコ」と呼ぶ。ディスコは警察に連れていかれ、その場で解決することはできなくなった。こちらが払ったマリッジハウスのセット料金の中のディスコ費用は返金なしだが、警察への保釈金はマリッジハウス側が支払った。

¹⁸¹ 自分たちで手配したもの。打ち上げや手持ちなど、計3,200ルピー分。

¹⁸² ラグンには、婚姻儀礼の時間、何がいつ行われるべきかを全部、女の子側の僧侶が書いたものを、男の子の父に渡す。ラグンはその後家に置いておき、もし何か夫婦間で問題が起きた時に、あとから見て、その原因を特定するために内容を確認することができる。ラグンと一緒に、土地でもお金でも何でも渡すことができるが、ニートウの父は2,500ルピーを渡した（一般的には21,000ルピーからスタート [ガネーシュ談]）。

¹⁸³ 双方の父が抱き合う。10ルピーをニートウの父からリティクの父へ渡した（一般的には1,000ルピーからスタート [ガネーシュ談]）。

¹⁸⁴ 男の子に女の子の父がティーカーをする。ニートウの父がリティクに500ルピーを渡した（一般的には11,000ルピーからスタート [ガネーシュ談]）。

かに少ないものだった。

関わったのは、花嫁の父、花婿の父、花婿であった。男の子側の親族では男性のみが門のそばで儀礼に参加し、女性たちは脇をすり抜けてマリッジハウスの中に入ってしまった。このこともまた後々問題視されることとなり、家族の中で議論されることとなる。

23時22分、花嫁が待つ部屋へ花婿が儀礼前にわずかな時間入ってくる¹⁸⁵。

花婿行列に参加した人々は、てんでばらばらに食事をしたあと、やがて設けられたステージ下の椅子に座り始める。本当はすぐに次のジェイマーラーの過程へ進みたいのだが、マリッジハウスのセット料金に含まれていたはずの花で作った首飾りが手違いで準備されておらず、慌てて手配する。親戚ではない数人の男の子たち以外誰もダンスする人もなく、手持無沙汰のまま時間が過ぎていき、何事かと会場がざわつき始める。花嫁の入場を待つて家に帰ろうとしていた近所の人たちが、義理を果たすために辛抱強く待っている¹⁸⁶。

ティーカーの日明けて1日目（2月23日曜日）

待っている間に日付が変わる。ティーカーの日の中でもメインの儀礼は、調査地では、日付が変わってから夜中から朝方にかけて行われることが多い。

⑦ ジェイマーラー¹⁸⁷

午前0時27分、姉妹に付き添われた花嫁のニートゥが、花婿側花嫁側双方が見守る中、中央の敷物が敷かれた通路を歩いてステージに上がる。ニートゥの姉妹からリティックに贈り物が渡される。花首飾りを花嫁と花婿が互いに掛け合うジェイマーラーの後、花婿の両親であるガネーシュとカジョールから始まって順番に参列客との写真撮影が行われていく¹⁸⁸。

途中アビナンダンパットラとその返礼のダンニャワードパットラ (*dhanyawādpatra*、ダンニャワードは「感謝」) を父親同士が交換する¹⁸⁹。

マンダップの下ではない、飾り立てられたステージ上で行われる新しい儀礼ジェイマー

¹⁸⁵ 互いの姿を見たあと、女の子が米を投げる。男の子は速やかに部屋を立ち去る。

¹⁸⁶ 本来ならば招待客は、食事をしてすぐに帰ってもかまわない。しかし何人かの、親戚でもごく親しい友人でもないがそこそ深い付き合いをしている人々は、ジェイマーラーの花嫁登場のタイミングまで待とうとする。

¹⁸⁷ 花でできた首飾りを花婿と花嫁が互いに首に掛け合う儀礼。昔はなかった新しい習慣だという。出席者との写真撮影ポイントでもある。続く諸儀礼では花婿側が用意した衣装を花嫁は着ることになるので、このジェイマーラーの時だけ、花嫁は自分で選んだ衣装を着ることができる。

¹⁸⁸ 一通り写真撮影が終わると花嫁は退出し、残った花婿だけが招待客と2度目、3度目の写真撮影を行う。

¹⁸⁹ こちらはフォトスタジオでお金をかけて写真入りのアビナンダンパットラを作ったが、向こうのダンニャワードパットラは弟の手書きだった。

ラーには、友人たちも含めた参列者すべてが関わった。友人も近所の人も親族も姻族も、男性も女性も子供も、すべてが関わったのは一連の婚姻儀礼の中でもこのジェイマラーだけだった。

自分の写真撮影が終わった後は、各自焚き火に当たったり、家に帰ったり、布団の敷かれた待合室に引っ込んだりして、占星術によって決められた続く儀礼の開始の時間を待つ。

1 : 40 待っている間にニートゥが会食の会場にやってきて、リティクと兄弟姉妹、親しい友人たちで食事をするが、ニートゥは恥ずかしがってほとんど食べずに帰ってしまった。

2 : 30 リティクも花婿側の控え室へ戻り、休憩をとりつつ次の儀礼の開始時間を待つ。

⑧ チェラーオ (*carhāv*)

花婿側は男性しか入れない儀礼である。花婿の父たちが贈り物の詰まったスーツケース¹⁹⁰をマンダップの下で花嫁のニートゥへ渡す。また髪が生え際に花嫁の実妹によって最初のシンドゥールが塗られる¹⁹¹。その後花嫁は控え室に戻り、それまで着ていた自分の好みで用意した服を脱ぎ、花婿の父にもらった婚礼衣装を身に着けるのだ。

嫁に贈り物をするチェラーオ儀礼に関わったのは、花婿の父と男性親族と、花嫁側の親族、そしてまだ結婚する前の花嫁であった。花婿側の（父系リネージか母方オジではない）男性親族が儀礼の中で定まった役割を果たしたのは、一連の諸儀礼ではチェラーオだけである。

3 : 30 女の子側のカンカン¹⁹²。

⑨ ティーカー

4 : 10 いよいよ時間が来て、リティクがマリッジハウスに作られたマンダップの部屋へ行く。はじめはリティク一人でプージャがスタートする。

4 : 39 ニートゥが来る。最初2人は向かい合って座る。

4 : 59 カンニャーダーン¹⁹³。この後2人は隣り合って座り、白い布を一緒に羽織ってつながる。

¹⁹⁰ 中身は付録8参照。カジョールの婚姻の時は長持を渡していたが、近年ではスーツケースに入れて渡すのが先進的で合理的だとD家の人々は考えた。

¹⁹¹ 花嫁に実妹がいないときは、類別的妹が最初のシンドゥールを塗る。

¹⁹² 女の子側のマンダップの部屋で、赤い布を広げ、女性親族5人がその布の端をつかみ、赤い糸で周囲をめぐる。布には砂糖菓子とお金を置く。その糸で、ニートゥのカンカンを彼女の姉が結ぶ。

¹⁹³ ニートゥのFeBとFeBWが行った。

5 : 40 バーンワル (*bhānvar*)¹⁹⁴。

5 : 47 パーン・パカライー (*pāv pakarāī*、パーンは「足」、パカライーは「つかむ」)¹⁹⁵。

6 : 43 マーング・バハルナー (*māng bharnā*、マーングは「髪分け際」、バハルナーは「満たす」)¹⁹⁶。

バチャン (*bacan*、誓約)¹⁹⁷。

7 : 10 終わり。

一連の婚姻儀礼のメインであり、これをもって夫婦となるティーカー儀礼の諸儀礼に関わっていたのは、花婿と花嫁の2人と、花嫁側の親族だった。ただし父をはじめとする花婿側親族の男性たちはその場において、儀礼に必要な品物を 僧侶 や 床屋 に渡す役目を果たすなどしていた。一方、花婿の母をはじめとする花婿側女性親族は、花嫁を家に迎える準備をするため、また十分に眠るため、家に帰ってしまった¹⁹⁸。

⑩ ビダーイ (*bidāī*)

マンダップの部屋の隣の花嫁控え室で、花婿と、花嫁の父が、贈り物をくれるか食事しないかの攻防をする。これは一般的に行われる儀礼的交渉で、これによって花婿はダヘージの大きな部分をもらうことができるはずだった。リティクには兄弟が、ニートウの父には女性たちが味方する。はじめは笑いながらのやり取りだったが、ニートウの母は泣き、姉は必死に説得し¹⁹⁹、やがて雰囲気が悪くなり、結局リティクは何ももらわないまま、ニ

¹⁹⁴ 聖火の回りを花婿と花嫁が7周する。ヒンドゥー婚姻法 (*The Hindu Marriage Act, 1955*) 第7条第2項には、サプタパディ (*saptapadi*、花婿と花嫁がつながって、聖火の前を7ステップすること) が行われた時点で婚姻成立と書かれている。マーング・バハルナーと並んで、調査地の婚姻成立のイメージがある行為である。

¹⁹⁵ 女の子側親族が、花婿と花嫁の足をターメリック水で触って、食器や家の中の物を一つずつダヘージとして贈る。

¹⁹⁶ 夫が妻の髪分け目にシンドゥールを塗る。これをもって結婚成立と調査地では言われることが多い。これ以降ヒンドゥー既婚女性は、夫が死ぬまで髪分け際に朱を絶やすことはない。

¹⁹⁷ 花婿と花嫁への訓戒。「皆さんお静かに」と言って、その場にいる人々の注目を集めてから僧侶が語り始める。バチャンはそれぞれの僧侶がそれぞれの方法で語るものである。内容も少しずつ異なるのかもしれない。今回のバチャンを聞いたはずの人々のいう内容も少しずつ違うし、後から別の僧侶に頼んで紙に書いてもらったものはさらに違う内容であった。ただし女性から男性へ7つ、男性から女性へ5つという願い事の数は全員が共通して言っている。内容は付録9参照。

¹⁹⁸ 本来ならば婚姻儀礼は女の子側の家で行われるので、花嫁を家に迎える準備をするために花婿の母は花婿行列には参加せずに家に残る。その時家に残った女性たちは男装をし、女性たちだけでふざけて楽しむという。しかし今回のリティクの婚姻儀礼では、男の子側の村のマリッジハウスでティーカー儀礼を行ったため、新郎の母のカジョールたちは花婿行列にも参加し、その後家に帰ることもできた。

¹⁹⁹ リティクは花嫁の家族から食べ物を受ける代わりに金の鎖をくれと聞いた。これはガネーシュから耳うちされたアドバイスで、本来ならばリティクはバイクをねだりたいところだが、百歩譲って金のネックレスを、要求したのだった。ニートウの家族からは、金の鎖

ートゥがリティクにちょっと甘い菓子を食べさせる。

悪い雰囲気の中、女性の床屋に言われるままに定まった残りの儀礼の手順をこなしていく。女の子側のメールバツバのプラサードであるメールを白い布にもらう。オイルランプを灯す。マンダップの部屋に戻り、マンダップに飾られていたマンゴーの葉を1つとって、リティクの帽子の白い糸1本と共に皿に置く。儀礼が行われた後のマンダップの下では、ガネーシュとその友人たちと双方の僧侶たち、男性の床屋たちが、謝礼金の交渉をしていた。

その後リティクは同じマンダップの部屋の椅子に座って、ニートゥの妹を相手に、今度は靴を履かないという²⁰⁰攻防を始めた。

すべてが終わったあと、花嫁とその家族の、別れの時が来る。ビダーイとは花嫁と家族の別れの時のことである。花嫁は泣き叫び、家族や親戚の女性たちも泣いて別れを悲しむ。普段弱さを見せることがない調査地の男性が、娘との別れに際して涙ぐむ姿は心を打つ。行くのを嫌がる女の子を最終的には母方オジが抱きかかえ、花婿の待つ車に乗せる。

別れの時は、花婿と花嫁、花嫁の父と母方オジをはじめとする女性側の親族が関わる。基本的には、花婿が花嫁側の親族と対峙するときである。

朝の10時過ぎ、花で飾り立てられたセダンに乗ったリティクとニートゥが家へ帰ってくる。マリッジハウスに今まで一緒にいた男性の床屋がバイクで追いかけてきて、カジョールが教えたとおりに、つぼの水を、家に背を向けて座る2人にくるくるとふりかける。

その後続々とニートゥが持ってきた荷物やダヘージが家に運び込まれる。昨日の朝から寝ていない2人は別々の部屋で休憩をする。

16:08 花婿と花嫁が何人かの親戚と共にカーリーマター寺院へ、太鼓叩きと共に出発。

白い布で繋がったままプージャをする。

16:44 家に戻ってくる。

⑪ ムーンディカーイー (*munh dikhāī*、ムーンは「顔」、ディカーイーは「見せる」)

花婿の親族が新しい花嫁の顔を見る儀礼である。親族の既婚女性たちは順番に花婿と花嫁にティーカーをして、リティクにはお金、ニートゥには銀製品をあげる。さらに輪状の形の菓子を通してサリーの縁で深々と顔を隠した花嫁の顔を見る。受け取ったニートゥへの贈り物は、彼女自身がバッグへしまう。イトコが書記となり、贈った人と物をノートに

ではなく500ルピーを受け取ってくれという要求があった。相場としてはかなり安い。リティクは、それなら何も受け取らないで食事をする、という。しかしニートゥ側の家族としては、ただで食事をされるのは聞こえが悪い。

²⁰⁰ リティクの主張は、ニートゥの妹にお金をあげたいというもの。妹はいらないといい、くれるというなら1ルピーをくれという。そんな風にはあげないとリティクが言い、結局妹に501ルピーを受け取らせた。

書き留める²⁰¹。贈り物を実際に手渡すのは女性たちだが、書き留められる名前は彼女たちの夫の名前である。

新しく来た花嫁の顔を見るムーンディカーイーの参加者は、結婚した 2 人と、花婿側の親族の既婚女性たちである²⁰²。

ムーンディカーイーが終わったあとに、部屋の中に作られたメールバツバの祭壇の前へリティクとニートゥが行き、いくつかの儀礼を行う²⁰³。

この日の夜は、リティクは兄弟たちと、ニートゥは姑たちと一緒に寝、夫婦は別々に寝る。

ティーカーの日の 2 日後 (2 月 24 日月曜日)

朝からニートゥとリティクが水浴、身づくろいを済ませる。ニートゥのもとには女性の床屋が来て、体にターメリックと油と小麦粉を混ぜた物を塗る²⁰⁴。

正午ごろから、マンダップの下で、メールの成員である、リティクとニートゥ、ガネーシュと弟たちがメールの菓子を作る²⁰⁵。服を着替えたリティクの足に床屋がマホールを塗る。

⑫ メールプージャ

メールの成員以外に見られないように、メールバツバが置かれた部屋に鍵をかけて、ニートゥも含めたメールの成員だけで、ガネーシュが執行者となってメールプージャが行われた²⁰⁶。他の儀礼の場合は直接関わらなくても目撃者として、どんな立場の人でもその場にいることができた。しかし、関わらない人がその場に立ち会うこともできないのは、このメールプージャだけであった。

²⁰¹ 内容は付録 10 参照。

²⁰² 本来のように花嫁側の家でティーカー儀礼が行われ、バラート (花婿行列) に花婿側の女性親族が参加していなかったとしたら、このムーンディカーイーが初めて花嫁の顔が花婿側の女性親族たちに披露される機会となっていた。

²⁰³ その部屋に入るのを姉妹が邪魔をし、「部屋に入りたかったらお金ちょうだい」という。兄弟の婚姻儀礼は姉妹にとって稼ぎ時であり、バルサははりきっていた。

ニートゥの実家から来た米と豆をニートゥが器に入れて、リティクが足で倒す。米と豆を混ぜたものを親族の子供たちや女性たちのオーリーに入れて渡す。これは豆粥の材料となる。その後、リティクとニートゥが甘い乳粥を互いに食べさせる。

²⁰⁴ 肌を白く美しくするため。またターメリックの黄色は聖なる色、浄なる色でもあるという。

²⁰⁵ メールの成員である FFBSW のアニータは体調が悪くなり、帰ってしまっていた。

²⁰⁶ メールプージャは調査地のヒンドゥーの最大の祭礼、ディワーリーの時にも行われる。やはり部屋に鍵をかけて間違っても他人が入ってこられないようにして行う。私もそのときはカジョールに、「トモが嫁だったら参加できるんだけどね」と言われて参加を断られ、付き合ってくれたバルサと一緒に外で待っていた。

⑬ カター (*katā*、説話)

この日、リティクとニートゥはカターが終わるまで断食をする。午後 4 時 6 分、マンダップの下で、グルマハラージ、ニートゥ、リティクが座って、カターが始まった²⁰⁷。

カターは新しく夫婦となった 2 人への、グルマハラージ からのありがたいお話だった。関わっていたのは花婿花嫁だけである。

⑭ 手を置く²⁰⁸

手を置く儀礼は、村と家の神に挨拶をし、その成員になることを表していると考えられている。この儀礼が終わるまでは、夫婦は床を共にしてはならないという言い方をされる。夕方の 18 時 25 分ごろ、近所の女性たちが集まってくる。女性の床屋が女性たちの足にマホールを塗る。花婿と花嫁と数人の親戚、近所の女性たち、太鼓叩きが出発。カーリーマター寺院とサンカル寺院でターメリックを塗った手を壁に置いて手形をつける。帰宅し、普段住んでいる家と婚姻儀礼の間だけ借りている家の両方の家の入り口、そしてメールバッパの祭壇に手を置く。

手を置く儀礼に関わったのは花婿と花嫁、そして参加者目撃者としての親戚と近所の女性たちであった。

⑮ ゲーム

20 時ごろ、互いの手首に糸できつく結ばれたカンカンをどちらが早く取ることができるかというゲームがマンダップの下で行われた。まずニートゥが、次にリティクが挑戦した。大きな銅の皿の中に水を張り、その上で行われるが、かた結びされた糸に水がかけられ、非常に取りにくそうである。周りをイトコたちが取り囲み、**MB** ラヴィの妻が盛り上げる。リティクが勝った。

続いて、取れたカンカン、こねた小麦粉で作った魚、指輪、お金を、ターメリックとシンドゥールと、マルワーの日にメールの人達が汲んできた井戸水で作った色水の中に入れ、ニートゥとリティクが手探りで探してどちらが先に取れるか、というゲームを行った。7 回やって 5 対 2 でリティクが勝った。その後、リティクがその小麦粉で作った魚をおもちゃの弓で射って、すべてのゲームの過程は終わった。21 時過ぎに、花婿と花嫁は一緒にメールバッパの部屋へ行く。入るのをまた姉妹が入るのを邪魔するも、無事に入室し、メールバッパの足を触る。

周りににぎやかな観衆はいたが、ゲームに関わったのは花婿と花嫁だけであった。ゲー

²⁰⁷ アシスタントは女性の床屋が行い、プージャ、説話、ヴィシュヌの物語の冊子の音読、護摩、アールティー、プラサード、そして手首に赤い聖糸を巻く。最後にメールバッパの置かれた部屋へ行き、メールバッパの足を触る。

²⁰⁸ 花嫁の実家から来たターメリックを水に溶かしたもので、花婿と花嫁が村の寺院や家に手形をつける。男性は扉の左側片方に 1 つの手で、女性は両手で両側に、手形をつける。

ムの最中に花婿と花嫁は手を触れ合ったりして、少し心的距離が縮まったものと思われる。

⑩ スハーグラート (*suhāgrāt*、結婚初夜)

三男のアトルと友人のアルジュンが買い物に行く²⁰⁹。買って来たものは、

1. ルームフレッシュナー
2. スペシャルパーン2つ (1つ50ルピー、セックスパウダーが入っている)
3. 交換するためのギフト (良いものが見つからなかったので、今度渡すという約束だけで)
4. 甘い菓子 (よいのがなかったのでチョコレートを2つ)
5. 赤いバラの花20~30本
6. コンドーム (必要ないが一応)
7. 女性用のセクシーなナイトウェア

それに加えてアシスが、カジョールに言われて新しいベッドカバーと枕カバーを買ってくる²¹⁰。部屋の準備は家族総出で、幼い兄弟たち姉妹たちも手伝う。大人数で使いやすいように壁際に配置されていたベッドは部屋の真ん中へ運ばれた。私が使っていた枕が家で一番良い枕だったので、妹のバルサが取りに来た。「スハーグラートのために使うの」と言って持って行ったバルサを見て、兄のアトルは、「バルサもスハーグラートの意味を知っている。大きくなったものだ」と言った。品物を全部リティクに渡し、部屋には鍵がかけられた。そこでは、牛乳をグラスに1杯ずつ飲み、ギフトを交換し、パーンを互いに食べさせるという。

翌朝、リティクは7時には部屋を出た。真っ赤なバラの花びらが家中至る所に散らばっている。生殖と家族の再生産のためのスハーグラートに関わるのは、花婿と花嫁であった。

ガネーシュは、友人の父親が死んだので24日から葬送儀礼の手伝いに行っていて、25日に帰ってきた。

ティーカーの日の6日後 (2月28日金曜日)

昼前、カジョールの友人であるアンティ²¹¹と、ゴーリー (リティクの類別的FZ) が来て、ヴィッディーやカジョールと今日のスハーグレ (*suhāgle*) のための食事作りの手伝いをする。ヴィッディーが儀礼に必要なもの²¹²をバザールに買いに行く。

²⁰⁹ アトルが言うには、本当はリティク本人が工夫を凝らして妻のためにあらかじめ色々を用意すべきだった。しかしリティクが何もしていなかったため、アトルが親友のアルジュンに協力してもらい、当日の夜になってから慌てて準備を始めた。

²¹⁰ 本来はベッドも含めた寝具一式新しい物を花嫁の家族が贈るはずだが、ニートウの家族は持たせなかった。

²¹¹ ガネーシュの仕事仲間の妻。ブラフマンである。このように行事で助けが必要な時に、カジョールと互いに手伝いあっている。

²¹² プラサード用のガラス製の腕輪とビンディー (*bindī*、眉間につける小さな丸い印) を買ってくる。パーン、チェナ豆、団子、特別な土などを準備。儀礼を執り行うグルマーター

13 : 30 グルマター (グルマハラージの妻) が来て、プージャの準備を始める。

⑰ スハーグレ²¹³

スハーグレは既婚女性たちの儀礼である。スハーグとは「既婚女性の夫が存命の幸福」のことである。儀礼に参加する近所の女性たちとニートゥの足に、床屋がターメリックとマホールを塗る。14 時ちょうど、近所の女性たちが見守る中、グルマターが指示をしながらニートゥにプージャをさせる。アールティーをし、プラサードを皆に配った後、ニートゥは退席する。近所の女性たちには食事²¹⁴がふるまわれる²¹⁵。

女性のプージャであるスハーグレに関わったのは、プージャをした花嫁と、参列した近所の女性たちであった。儀礼を執行した グルマターも含めて、参加者全員が夫が存命のヒンドゥー既婚女性であった。未婚の少女は関わらず、また花婿のリティクも全く関わらなかった。

ティーカーの日の 8 日後 (3 月 2 日日曜日)

⑱ ダードレ (*dādre*)

ダードレは女性たちが集まって歌を歌う催しで、一連の婚姻儀礼の最後であると言われている。

夕方の 18 時ごろ、ぼつぼつ女性たちが集まり始める。ニートゥは普段着のサリーを着て呼ばれるまで部屋で待機している²¹⁶。しばらくするとニートゥが呼ばれていく。新しく借りた家の玄関脇の広間のようなスペースに敷物が敷かれ、近所の女性たちが座っている。一人の年配の女性が太鼓でリズムをつけ、女性たちは婚礼・婚姻に関する歌を掛け合いを混じえながら歌う。ニートゥも歌え歌えと周りの女性たちから言われるが、歌が苦手なため結局歌わない。自分たちの婚姻儀礼でのダードレの思い出などが笑いながら語られ、歌に自信がある人たちが一通り歌い、19 時 39 分、帰る人は帰り始める。花嫁の顔をまだ見て

(グルマハラージの妻) にあげるサリー、51 ルピー、足指輪も用意。

²¹³ スハーグレに参加する女性は、その時まで断食をしていなければならない。断食をするには今日スハーグレがあると知らされなければならない。スハーグレが今日あることが決まったのは昨日の夜だが、昨日の夜は雨でみんなに知らせに行くことができなかった。そこで今朝、誰かが何かを食べる前の時間に、カジョールと父がみんなの家を訪ねて招待に回った。招待しに行くにはその前に水浴をしなければならない。カジョールはこの日朝 6 時に水浴をした。

²¹⁴ メニューは、プーリー、ジャガイモとトマトのカレー、漬物、ヨーグルトサラダ、サラダ、塩、水である。このような共食の機会に供されるのにはきわめて一般的な食事内容である。

²¹⁵ 食後、女性たちのオーリーに米を入れて渡し、ガラス製の腕輪とビンディー、パーンをそれぞれとる。

²¹⁶ それまでの諸儀礼の時は、花婿も花嫁も婚礼衣装を身につけていなければならなかった。今回初めてニートゥは、婚礼衣装ではないサリーで儀礼に参加した。

いなかった人は、ニートゥにお金を渡し、パルダの裾をめくって顔を見る²¹⁷。D家と同じ建物に賃貸で暮らしている家族の女性は、この機会にニートゥの元へ行き顔を近寄せ、これからは互いに前後に住む者として顔を突合せ、やりとりをしながら暮らしていくのだからよろしくね、と言っていた。彼女はX町出身の気さくな若い女性で、ニートゥにとっては姑のカジョールよりももしかしたら気楽に付き合うことができるようになるかもしれない。ダードレの参加者にはプラサードとして砂糖菓子を渡し、持って帰らせる。

ダードレに関わったのは花嫁と彼女を見に来た近所の女性たちや女の子たちだった。他にも婚姻儀礼の時に用事があって来られなかった、昔近所に住んでいた女性も、この日やって来て嫁の顔を見ていった。

ティーカーの日の9日後（3月3日月曜日）

A村へ行く。（4.3.1に記述）

ティーカーの日の11日後（3月5日水曜日）

17時はじめごろから、翌日のビダーイのために、近所の女性に手伝ってもらって菓子作りを始めた。ビダーイとは別れのことである。ティーカーの場から花嫁が自分の家族と別れるのもビダーイと言うが、嫁が婚家から別れるのも今度はビダーイとなるのだ。明日、ニートゥの兄や妹が迎えに来て、一時的に嫁は実家に帰る。そのときに持たせる菓子²¹⁸を作るのである。

婚姻儀礼のときに女の子側の家から、今作っているものと同じ種類の菓子を詰めた籠が来ていた。そしてその籠とともにそれよりも一回り大きい空の籠が来ている。その大きな籠に菓子を詰めて返してくださいよという意味である。しかも向こうの家族がくれたものよりも美味しく上手に作って返せるようにと、女性たちは工夫を凝らす。籠に詰めた菓子の上からマンゴーの葉を被せ、赤い布で包んで完成である。「向こうの家族が贈ってきた菓子は安い材料で作った全然美味しくないものだったが、こちらは良い材料を使ってきちんと作ろう」とカジョールが言い、出来上がりにはみんな満足する²¹⁹。

ティーカーの日の12日後（3月6日木曜日）

ビダーイの日がやってきた。午後、ニートゥの兄、弟、父方オジの息子、母方オジの息子、妹、父方オジの娘、姉の娘が、車をチャーターして来る。客が来た時の作法に従って、まずチャイとおやつを出し、しばらくして食事を食べさせる。

²¹⁷ 「嫁の顔を見るにはお金がかかる」と調査地では言われている。

²¹⁸ 輪のぎざぎざ型5、花型5、パーン型5、○型、餃子型。どれも基本的には小麦粉を練り、油で揚げた菓子である。

²¹⁹ ただし、カジョールは向こうに渡す籠の底に、向こうから送られた菓子の一部を詰めた。これは、向こうの菓子とこちらの菓子の差を見せ付けるためか、かさ増しのためか、それとも向こうのけちな態度に対する嫌がらせか。

⑱ 実家へ帰るビダーイ

16時40分、女性の床屋が来て、女性と女の子たちみんなの足にマホールを塗る²²⁰。ニートゥがメールバツバの足に触る。メールバツバの祭壇のある部屋の入り口にも触り、米を少しずつ置く。さらに普段住んでいる本来の家の祭壇にも触る。

17時15分、ニートゥは20ルピーを婚家の各人に渡し、全員の足に触る。ニートゥの長兄は50ルピーを渡しながらか、妹の婚家の全員の足に触る。2人とも私の足にも触った。ガネーシュは家にいなかった。

ビダーイは、新しく姻族関係になった両家の人々が、婚姻儀礼後始めて顔を合わせて会話をする場であった。

リティクが仕事先からビダーイに間に合って帰ってくる。2人でなにやら会話をしている。ニートゥがバルサを物陰に呼び、実家でのパーティー²²¹用のお金をカジョールがくれないがどうしようという。ニートゥは誰にも言わなくてよいというが、バルサは察してカジョールに言いに行った。カジョールが来てニートゥに1,000ルピーを渡す。

ティーカーの日の13日後（3月7日金曜日）

1ヶ月間借りていた家を掃除し、荷物も全部引き上げ、鍵を持ち主に返す。家賃は扉をつけた費用と相殺になるかと思われたが、500ルピー余分に払うことになった。マンダップの残りも倉庫にしまう。儀礼で使ったそれらの品物は、雨季に池へと流すことになる。

カジョールは嫁を、1ヵ月後のノオ・ドゥルガー (*nau durgā*、ノオは「9」、ドゥルガーはシヴァの配偶神パールヴァティーの戦う女神の姿)²²²のころに呼び戻すという。婚姻儀礼から今まではニートゥもお客さんのように座っていただけだったが、次に帰ってくるまでには家の中でのニートゥの荷物やみんなの居場所も決まって、彼女にも家の仕事をさせるようになるだろう、とカジョールは言う。今まで何十年も家事を一手に引き受けてきたカジョールは、これからは座っていてもチャイや朝食が出てくる生活を送れるようになるだろうと嬉しそうに言う。

²²⁰ 一連の作業は空のオーリーでは行われない。まず床屋とニートゥのオーリーに米が置かれる。その米はすべてナイが持っていく。

²²¹ 新婚の花嫁が婚姻儀礼後いったん実家に帰った時、自分の女友達を招いてパーティーをひらく。婚家でもらった宝飾品を身に着け、食事を振る舞い、それぞれにプレゼントを渡す。その費用はすべて夫と婚家がかかるはずである。

²²² 9日間かけて行われるドゥルガー女神の祭り。

5.2.4 反省会

ダードレをやるころには誰もが疲れ切っていた。1 か月もの間、睡眠時間を削り、緊張を強いられ続けていたのだ。体調を壊したり、声が枯れたり、体重がかなり落ちた人もいた。そんな中で、今回の婚姻儀礼に関する反省と批判が続々と飛び出してきた。

まずティーカーの日、マリッジハウス用の 50 キログラムの砂糖が無いことが判明し、当日の朝慌てて届ける羽目になった。そんな大きな品物を忘れるなんてとガネーシュは家族、特に息子たちに対して怒る。

アシスとしては、ダンスが 1 つもなかったことが残念だといった。あんなに期待して妹のバルサと一緒に練習したのに。今回は、花婿行列のディスコが警察に捕まってしまったことが原因だったが、ディスコはマリッジハウスに一括で頼んだセットに含まれていた。そうであれば、規則を確認しておくのは業者の役割ではないのか。花の首飾りもセット料金に含まれていたのに用意されておらず、深夜に手配することになった。そのため客には寒空の下、何十分も待たせることになった。アシスは規律も何もないインドが嫌いだという。

マリッジハウスで婚姻儀礼をやることの意味をカジョールは知らない、とガネーシュとアシスは言う。すなわち、家に鍵をかけ、信頼できる 2 人の親戚の男性に番人をさせ、後はみんなでビダーイまでマリッジハウスで過ごすということなのだ。しかしカジョールをはじめとする女性たちは、ほとんどが写真撮影が終わると家に帰ってしまった。今回は婚姻儀礼には珍しく友人や仕事仲間の女性の客がたくさん来たのに、家族や親族の女性が誰もいなかったため、座ってお喋りすることなくすぐに帰ってしまったのが残念だったし、カジョールは反省すべきだとガネーシュが言う。

実際にはこの指摘は間違っている。まず、もしビダーイまで花婿側の女性たちがマリッジハウスにいたら、花嫁を家へ迎える儀礼の準備を家ですることができない。一般的にはバラートには花婿の母をはじめとする花婿側の女性たち何人かは参加せず、家に残っているものである (146 ページ、注 198 参照)。また、女性のゲストが来たのはバラートの前であり、花婿側親族がその場にいられるはずはない。しかしガネーシュはバラート到着前からマリッジハウスの会場の準備のために出入りしていて、そこでゲストの対応をしていたために、女性ゲストが多く来たことを知っていたのだ。本来ならば婚姻儀礼の会食に来るのは花嫁側の親族と花嫁側のゲストだけである。そこに花婿行列が登場するという順番である。花婿側の客は婚姻儀礼のメインの日の会食にはいないはずである。花婿側の村でメインの儀礼がおこなわれるというイレギュラーな状況であったため、段取りがあやふやになった結果の、この反省と批判であった。

リティクは、花婿行列が到着してすぐにみんな中に入ってしまったことに対して家族を責める。門の前で出迎えの儀礼を受けるリティクのそばにはこちらの身内は誰もおらず、馬から下ろしてくれる人もいなかったもので、すごく嫌な思いをしたという。

またマリッジハウスの中で、明け方に行われるティーカー儀礼を待つ間、寒いからといって焚き火を用意したのが悪かった、だからみんな休憩のために用意された部屋に集まらずにばらばらに座ったのだとガネーシュが言い、焚き火を用意したどこかの誰かを責めた。

婚姻儀礼などの儀礼の場から招待した親戚が帰る時には、プラサードや菓子などの食べ物を袋につめ、11 ルピーなどの小額のお金と、女性たちにはサリー²²³を渡す。さらに米とターメリックでティーカーをし、どちらかがどちらかの足を触る（プラナム）。客は決してただで帰してはいけないことになっている。しかし婚姻儀礼の慌しさの中で、しかもばらばらに帰っていく客の中で、何人かにはティーカーをせずに帰ってしまったようだ。数人の最年長者や重要な客のことはガネーシュが注意して見ている、決して黙っては帰らせないようにしていたが、親切にも車を貸してくれたイトコの夫が帰ったのを見逃したのは誰の責任か、婚姻儀礼後に犯人探しが行われた。これも家にいたカジョールたちが気を使って見ていなければいけないはずだったとガネーシュが言う。

花婿の母であるカジョールは家にいるべきだったのか、それともマリッジハウスにいるべきだったのか。ガネーシュは反省の中でカジョールに、マリッジハウスにいてゲストの対応をすること、家にいて親戚の対応をすることの、両方を要求した。それはガネーシュたち自身の婚姻儀礼がそうであったように、花嫁の家で儀礼が行われるような婚姻儀礼では自然に達成されるものであった。しかし今回のように花婿側の村で、そしてマリッジハウスで婚姻儀礼が行われるという状況下では、矛盾する行為となった。一方でカジョールは、花婿行列にも参加し、家で花嫁を迎える準備もしたいと考えた。それはやはり花婿側の村で婚姻儀礼が行われるというイレギュラーな状況下で可能となった。

婚姻儀礼の間は親戚が一緒に暮らしていた。親戚が泊まりに来るとみんなが物を共有するので、家のものが色々なくなっている。妹のバルサは、お気に入りのジーンズがなくなっていて怒っていた。疑わしいのは親戚の同世代の女の子たちである。

女の子側の家族からこちらへの批判もあった。それは、マリッジハウスでの翌日の朝食の準備がティーカーの終わりに間に合わなかったのはあまりにも遅すぎる、子供たちに牛乳もチャイもないなんて、というものだった。しかしその批判は、その後男の子側の家族の中で振り返った話の流れの中で、間に合わせたことにすり替わっていた。

これらの批判は主に、家族から家族へ、つまり身内に対して向けられている。思ってもみなかったことが次々と起こったひどい婚姻儀礼だった、というのがみな感想である。そして、思ったとおりにいかなかった理由は常に特定の人や行為に帰せられる。そこでは矛盾することが求められており、結局どうすべきだったのか答えは出ないが、しかしそれでも、「自分以外の誰か」がきちんと行為していればもっと上手くできたはずだ、と説明さ

²²³ 親戚や仕事をした人に配るために買ったネーグ (neg) と呼ばれるサリーの総額は5,000ルピー。その他にねだられたカジョールのお古のサリーもいくつか渡した。3月1日にヴィッディーが帰ったときは、その働きに応じてサリーを2つ (1つ新品1つお古)、お古の携帯電話 (後に壊れていることが判明)、腕輪のセット、お古のイヤリングをあげる。さらに私のお古のサンダルがほしいというので、ヴィッディーの娘にあげた。

れる。このような反省の仕方は調査地では一般的であり、特に婚姻儀礼などの大勢の人が関わる機会では、繰り返し表明される態度である。

5.3 過去に作られた関係を大事にしようとする動き

婚姻儀礼の過程の記述を通して、人と物と場所と神々の配置を見てきたが、そこには過去に作られたつながりが現れている。本節では、儀礼に関わった人々の分類、A村とB村の対比、そして今回の婚姻儀礼であらわれた親戚たちとのつながりについて、記述していく。

5.3.1 儀礼に関わる人の分類

本項では、一連の婚姻儀礼で行われた諸儀礼について、そこで関わった人の立場に注目する。妹のバルサが婚姻儀礼直前に兄のリティクと喧嘩をしたとき、「私はシャディー（婚姻儀礼）でなんにもしないから。妹がしなければいけない役割は全部、イトコたちにやらせてよ！」と宣言したことからもわかるように、婚姻の諸儀礼において、人々は結婚する当人たちとの関係に応じて様々な役割をこなす。それは、「母方オジ」、「妹」、「兄嫁」といった当人たちとの関係を示す親族名称に応じており、それゆえ当該者がもし不在であったときは、その不在が明確に可視化され、その場にいる人々に強く意識されることとなる。例えば今回の婚姻儀礼では特に「メールの成員」と「兄嫁」の不在が強く意識された。

以下では、儀礼の過程のどの段階でどのような立場の人々が関わっているのかを把握するために、諸儀礼における参加者のカテゴリーを表で示した（表 5-1）。以下の表で示し、本文中の記述でも記してきた 19 の儀礼の分類は、調査地の人々自身が名前と呼ぶ区別に基づいて私が分けた。

表 5-1 諸儀礼への参加者

		近所の女性	親族男性	親族女性	家族男性	家族女性	新郎	新婦	姻族男性	姻族女性
1	チュイマーティー	●			●	●				
2	マルワー	●	●		●	●	●			
3	マイナー				●	●				
4	チーカト		●	●		●				
5	出発の儀礼		●	●	●	●	●			
6	歓迎の儀礼				●	●	●		●	

7	ジェイマーラー	●	●	●	●	●	●	●	●	●
8	チェラーオ		●		●			●	●	●
9	ティーカー		●		●		●	●	●	●
10	ビダーイ							●	●	●
11	ムーンディカーイー			●		●	●	●		
12	メールブージャ				●	●	●	●		
13	カター						●	●		
14	手を置く	●		●			●	●		
15	ゲーム						●	●		
16	スハーグラート						●	●		
17	スハーグレ	●						●		
18	ダードレ	●						●		
19	実家へ帰るビダーイ				●	●		●	●	●

(聞き取り・観察をもとに筆者作成)

上記の表に関して、いくつかの点を指摘できる。まず、男の子側の女性親族は関わらず男性親族だけが関わる儀礼が⑧、⑨である。それに対して男の子側の男性親族は関わらず女性親族だけが関わる儀礼は⑤、⑪（⑤は門で行われた儀礼に関しては女性親族だけが関わった）である。花婿であるリティクが関わらない儀礼は①、④、⑧、⑰、⑱である。その内⑧、⑰、⑱は、リティクなしでニートゥだけが関わった。

一連の婚姻儀礼では、それぞれ様々な立場の人々が関わっており、その立場に応じて参加すべき儀礼が異なっていた。特に近所の女性たちが婚姻の目撃者として、一連の儀礼の最初と最後のほうに登場している。そしてその最後のほうの儀礼では、もはや花婿のリティクの存在は必要ではなく、ニートゥが1人で女性たちと対峙させられている。その代わりに、歓迎の儀礼からティーカーの前半までは、父のガネーシュとともにリティクが1人でニートゥの親族と対峙するのである。

この場合の女性たちとは、単に「近所の」女性たちというわけではない。本来男の子の村に住む既婚女性たちは、男の子の類別的FBWあるいはBWであり、つまり類別的には身内の（家族の）女性である。その意味では、メインの儀礼では花婿が花嫁側の人々と、そして家に帰ってきてからは花嫁が花婿側の女性と、向き合っているといえる。今回の事例においては、B村が花婿リティクの父ガネーシュの出身村ではなく、さらに当時D家が住んでいた家は数年前に引っ越して来たばかりなので、「近所の」女性たちは花婿のチャチーFBW、バビーeBW、バフーyBW²²⁴たちではなく、母カジョールの「友人」といった意味合

²²⁴ 本来はSWのことだが、調査地ではeBは父親的な存在となるので、弟の嫁も息子の嫁と同じような存在となり、バフーと呼ぶ。

いが強くなっていた。花嫁のニートゥがこれから既婚女性としてこの土地でこの女性たちに囲まれてこの女性たちと同じカテゴリーの人間として生きていくという意味では同じかもしれないが、しかし D 家がまたいつ引っ越すかはわからないので、この関係は一時的なものでありうる。一方、後に述べる A 村で行われたダードレに集まった女性たちは、ニートゥがこれから日常的に関わることはないだろうが、しかし D 家が A 村の家を手放さない限り生涯ずっと付き合いしていく女性たちとなる。

一方男性たちは、(父系リネージと母方オジ以外の) 親族男性にしろ、ガネーシュの友人や仕事仲間にしろ、特に固有の決まった役割はなく、ただガネーシュのそばにいて個人的な助け手(実践的にも精神的にも、そして経済的にも²²⁵)として存在していた。

5.3.2 A 村行き

本項では、本章事例の婚姻儀礼の重要な前提であった A 村と B 村の関係について見ていく。婚姻儀礼の一連の過程の初めから、婚姻儀礼の実際の場合とはならなかった A 村が、重要な場所として度々登場してきた。

まず婚姻儀礼の開始に先立ち、花婿の両親であるガネーシュとカジョールは「自分たちの村」²²⁶である A 村に行き、「自分たちの家」から「父系リネージの神様」を連れてきた。また、A 村の人々も婚姻儀礼には招待された。A 村からの招待客は、普段は自分たちの A 村の家での暮らしぶりしか知らないが、B 村での家と近所の人々を見て、D 家を先進的な家族であると改めて理解するであろう。

その分、様々な不都合もあった。家の壁に直接華やかな塗装をすることもできなかったし、親戚たちの多くは D 家の場所を知らなかった。B 村の家は賃貸で自分たちの家でなく、さらに家族は B 村内でも引越しを重ねていた。今の家は婚姻儀礼の数年前に引っ越したばかりであったため、多くの親戚は家までの道を知らず、毎回少々離れたところにある村のバス停まで迎えに行かなければならなかった。これが A 村の昔から住んでいる自分たちの家だったら、親戚たちは各自で家までたどり着いていただろう。さらに儀礼に関わる様々な職能者たちも、A 村でならば決まった人々との付き合いが昔からあるが、B 村では家族の専門の職能者たちはしっかりと定まっておらず、ガネーシュ自らが探さなければならなかった。

そして一番大きな問題が、「メール・メ・パトナー(父系リネージの一員となる)」と呼

²²⁵ 何人かの A 村からの客の男性たちは、ガネーシュに頼まれた時には経済的援助をしようと多めのお金をポケットに入れて持ってきていた。

²²⁶ 第 2 章でも述べたとおり、A 村は D 家にとって「先祖代々の」村というわけではなく、ガネーシュの父の時代に近隣小村から移住してきた、ガネーシュの母の実家があった村である。ちなみにガネーシュの母の兄弟の家族は既に外部に移住していて A 村には住んでいない。

ばれる、ターメリックで手形をつける儀礼が行われる場所と順番の問題であった。婚姻儀礼後は、自分たちの家がある村の女神に挨拶し、家の神に挨拶し、その祠や門扉、祭壇に花婿と花嫁がターメリックの手形をつけることが絶対に必要である。もし婚姻儀礼が A 村で行われていれば話は簡単だった。ティーカーの次の日に徒歩か車で村内の各寺院を回ればよかったのである。しかし婚姻儀礼を B 村で行ったために、B 村の寺院や家の祭壇には手形をつけたが、A 村にはティーカーから一週間が経ってもまだ行けていなかった。本来ならば A 村にはティーカーの次の日にでもすぐに行くはずだったのだが（これも後から言われた弁明）、季節はずれの長雨と、ガネーシュが友人の葬送儀礼に行ったことによって、予定が狂った。本来ならば手形をつけた後でなければスハーグラート（結婚初夜）は迎えられない。B 村の寺院に手形をつけただけでスハーグラートを行ってしまったことは良かったのだろうか。こなすべきことを一つ一つこなしていかなければならない。それを怠った長男アーカースの婚姻の結果にみんなナーバスになっていた。第 4 章でも述べたように、アーカースはリティクの婚姻儀礼当時、重病にかかっており、それは彼の婚姻の失敗の結果であると考えられていた。

さらに、一連の婚姻儀礼の最後を告げる歌を歌う催しのダードレを B 村でも行ったが、A 村でもすることが望ましかった。妹のバルサのシニアセカンダリーの最終全国共通試験が 3 月 4 日にある。A 村では一泊しなければならない。A 村に出発する日には、朝早く起きてカジョールがプラサードの菓子を作ることと、行く人全員が水浴することが必要条件である。ニートゥが実家に帰るビダーイの日との兼ね合いもある。様々な条件をかんがみ、誰が行くか、どうやって行くか、話し合いは続く。ガネーシュは 3 月 1 日の土曜日に行くぞというが、土曜日と日曜日は手を置くことができないと決まっている。グルマター（スハーグレの儀礼を執り行った グルマハラージ の妻）に頑固なガネーシュを納得させ、A 村に行くのは、3 月 3 日月曜日になった。またその翌日の帰り道に、かつてガネーシュが嫁が来るようにと願掛けをしたハヌマーン (*Hanumān*)²²⁷ 寺院に寄ることにして、予定が決まった。試験のあるバルサは 1 人残り、同じ建物に賃貸で住んでいる女性に夜だけ一緒に寝てもらうことにした。

3 月 3 日月曜日、カジョールは朝の 4 時 45 分に起きて、プラサード用の甘い小さいプリー（揚げパン）を作る。結局四男のアシスは妹のバルサとともに残ることにして、他の全員が水浴して、8 時半にスズキのワゴン車に乗って出発した。

昼前に、A 村の女神寺院に到着した。ニートゥの実家から贈られたターメリックを潰し、井戸で汲んだ水を混ぜてペースト状にし、手を浸して門扉に手形を付けさせる。A 村の女神寺院は村の入り口の手前にある山の上にある。眺めの良いその寺院の境内に座って、プラサードを食べる。ガネーシュとカジョールは病気のアーカースのためにココナツを割って快復祈願をした。山の下の特トシーマター (*Santōṣī mātā*)²²⁸ 寺院にも手形をつける。

²²⁷ 古代インドの叙事詩『ラーマヤナ』に登場する、ラーマ神の忠臣である猿神。

²²⁸ ヒンドゥーの、新しく出現した女神の神格。

A 村に入る。ここはカジョールのサスラール（配偶者の実家）、一連の婚姻儀礼で姑として振舞ってきたカジョールだが、ここでは嫁の立場であり、心もちパルダールを深めにする。13 時ちょうど、A 村の家に到着。中門、戸の横と、神々のいる祭壇に手形をつける。家にはイトコのハリーがいたが、すぐに出ていってしまった。喧嘩中の叔父一家と顔を合わせるのが気まずかったのに加え、花嫁のニートゥの厳格なパルダール対象となるジートゥ HeB としてその場にいることを遠慮したのだろう。

17 時半、近所の女性の 床屋 が家に来る。近所の女性と女の子が来る。みんな足にターメリックとマホールを塗る。

1. 中庭にある小さな祠の前で、ニートゥにプージャをさせる²²⁹。その間リティクは車に座って音楽を聴いたり、弟や近所の男友達とお喋りをしたりしながらぶらぶらしている。
2. 家の水置き場、キッチンにターメリックで卍を書かせる。
3. リティクを呼ぶ。普段着に花婿の衣装であるターバン型の帽子だけを被ったリティクと婚姻衣装を着たニートゥの 2 人に白い布を被らせ、祠に手を付けさせる。女性たちが 2 人の上にお金を回し（ニチャーワル）、床屋 に渡す。
4. ニートゥが処女の 5 人の足を触らなければいけないが、1 人しかいない。もう 1 人を近所から呼んで来て、残り 3 人は後回しにする。ニートゥは女性たちの足も触る。

以上の一連のプージャの過程は、B 村では行われなかったものである。その後 B 村でも行ったダードレを、A 村でも行う。来る人はお椀に一杯の麦粒²³⁰を持って来る。これらは全部最後に 床屋 が持って行く。ここでもやはり歌の苦手なニートゥは催促されても歌わなかった。

「学のある嫁が来たよ」と自慢げに言うカジョールに、同じジャーティの近所の女性は、「学があるんだ」と、驚いたように聞き返した。長男アーカースの異ジャーティ結婚の後、弟のリティクにどのような嫁が来るのか注目されていたのだろう。その驚いた様子を見て、カジョールは満足そうだった。

翌日、ガネーシュがかつて、息子の嫁が来たら必ず連れて来て手を置かせると願掛けをした、X 町近くのハヌマーン寺院に行く。途中 X 町で、この名物マタルチョーレー (*maṭar chole*、マタルは「エンドウマメ」、チョーレーは「豆の煮物」)²³¹とティキヤ (*tikiyā*)²³²を食べる。これらは D 家の家族全員の大好物だが、ニートゥもまた大好きだということが

²²⁹ 白い土と牛糞を塗って（右手でさせる）、米とターメリックで卍を書かせ、その上に牛糞で作った俵型の団子のような物を置かせ、その上に米とターメリックでティーカーをさせ、砂糖菓子、11 ルピーを置かせ、ひっくり返させる。

²³⁰ お嫁さんの顔を見るために、B 村の時はみんなお金を持って来た。女性たちが麦粒をたくさん持っているか、お金のほうを持っているか、つまり田舎か町か、という違いらしい。

²³¹ 煮た豆に酸味のあるソースと薬味をかけたおやつ。

²³² 一口大のボール状の小麦粉で作ったカリカリした皮に野菜をいれ、酸味のある水を入れたおやつ。

ここで判明した。私たちは店先で、カジョールとニートゥは車に乗ったまま食べる。「お母さんが始めて自分の嫁とおやつを食べるよ」とリティクがニヤニヤしながら言った。

正午過ぎにハヌマーン寺院に到着する。そこにある大小さまざまな祠・寺院のすべてに手形を付ける。前に来たときに比べて、ラーダクリシュナとパールヴァティーの祠が増えていた。

その後、奥にある井戸のほうで、私とニートゥとリティクの3人だけで写真撮影会をした。何となく2人について行こうとした私に弟のアトルが、「なんでトモまで行くの [新婚の2人の邪魔だろう]」と笑いながら言ったので遠慮しようとしたが、ニートゥについてきてくれと言われ、結局ついていくことにした。奥のほうに風景の良いところがあり、私がカメラマンとなり、立ったり座ったり肩を抱いたり構図を変えて何枚も写真を撮ったため、かなり時間がたってしまった。リティクは、「もしトモがついて来ていなかったら、2人で何か変なことをしていると思われるからね」と笑いながら言った。ニートゥはティーカー儀礼以来ずっと羽織っていた新婚の花嫁のしるしである少々野暮ったいショールを脱ぎ、リティクとのツーショットを何枚もポーズを変えて撮っていたが、カジョールたちが待つ場所へ戻るときに、「妻の姿から、嫁の姿へ」とつぶやきながら、再びしっかりとショールを体に巻きつけた。

14時半、B村の家に帰宅した。くつろぎながら、ハリドワールの女神寺院にも嫁を連れて行かなければ、とガネーシュが言う。ハリドワールは、シヴァ神の住居であるヒマラヤに連なる山麓が途切れて平原となるところにある都市で、ガンジス川がガンジス平原へと流れ出る地点にある、北の聖地である。プランの前、2011年にガネーシュとカジョールと私が巡礼に行き、その時ガネーシュが、もし我が家に嫁が来たら絶対にお参りをさせると願掛けをしていたのだ。それゆえ祈願成就のお礼参りをしに行かなければならない。このような一つ一つの儀礼を蔑ろにして神々を怒らせたのが、長男のアーカースたちであった。その結果が今の不幸と大病である。タイミングやお金の問題はあるが、祈願成就のお礼参りは絶対に必要である。

このA村行きの事例からは、ガネーシュとカジョールたちが、踏むべき手順を踏み外すのを恐れていることがわかる。A村へ行くことには2つの目的があった。1つは、A村の女神寺院と家に手を置くことである。そしてもう1つは、B村で婚姻儀礼を行ったために参加できなかったA村の女性たちに、自分たちの息子が結婚し、嫁が来たということをお披露目することであった。前項で書いたように、近所の女性たちが参加する儀礼は婚姻儀礼にはとても多い。しかし、A村の近所の女性たちはそのどれにも関わられなかった。もちろん招待はしているが、B村との距離や彼女たちの毎日の生活を考えると現実的ではない。そこで、A村でも2度目のダードレを行ったのだ。それによりカジョールはA村の女性たちとまとめて顔を合わせて会話をし、少なくとも、息子が結婚したのにA村に来なかった、もしくはA村に来たのに何もしないで帰っていったという非難だけは免れることができた

う²³³。さらには、長男アーカースの異ジャーティ結婚というスキャンダルを好奇の目で見ているサマージの人々に、なんら欠陥のない学がある自分たちの家族にふさわしい嫁が来てくれたことを披露することができた。

A村に行き、女神寺院と家に手を置き、家に一泊してダードレを開いたという行為を通して、A村の人々と家と女神とのつながりを維持し続けるというD家の意思が示された。それは、ある秩序に従う（もちろん排他的にではなく）ということを示すための行為であった。そしてその行為は、家と女神に関係する秩序を巡って、アーカースの病気が問題を可視化させたため、特に念入りに行われたと考えられる。それは人々に同ジャーティ結婚をさせる秩序と同じ種類の秩序、そして志向性である。新しい嫁のニートゥも加えたD家は、そのような価値、志向性、実践と、これからもつながっていくのである（繰り返すが、排他的にではなく）。

5.3.3 親戚たちとの付き合い

次に、親戚たちとのつながり（過去の婚姻によって結ばれたつながり）が婚姻儀礼の場においてどのように現れたかについて見ていく。そこでは、気が合うか、信頼できるかといった感情と、親族名称によって指示された立場、そして実際に招待したり会ったり来たり返事したり手伝ったりするなどの行為によって、親戚同士の好意やつながりが作られて続けている。

親戚といっても誰もが信頼できるわけではない。婚姻儀礼中は多くの親戚が泊まってくため、家族の大切なものや現金を置くための一部屋を決め、その鍵は家族の成員しか持たないようにした。そしてそれでもなお、家の中のものがなくなっていた。人々は、親戚の中でも信頼できる親戚と信頼できない親戚を、感情とそれに基づく行為の上で区別している。例えばその鍵のついた部屋には、ある親戚たちは家族のものと一緒にでも入らせないようにしていた。その区別は親族名称における関係の近さとは対応しない。しかしそれでも、婚姻儀礼の目撃者となる招待客の中心となるのはやはり親戚全員である。それぞれの親戚は、婚姻の当事者との関係に応じてそれぞれの役割を果たすことが求められている。

客や親戚たちを婚姻儀礼に招くということは、招待状を発注するところから始まる。招待状 200 通の印刷の発注ののち招待客の一覧表を父のガネーシュを中心に作っていく。その結果 144 名分の名前（世帯主の名前）が書かれたリストができあがり、そのうち 22 が直接の親戚関係にある人、残りはほとんどがガネーシュの知り合いであった²³⁴。そしてさら

²³³ さらに、何で A 村に一泊しつかないのかという質問には、ニートゥのビダーイが迫っているから、そしてバルサの試験があるからという、文句のつけられない立派な答えをすることができた。

²³⁴ 父ガネーシュの知り合いとはすなわち家族の知り合いであることと同義である。家族の知り合いを父であるガネーシュはほとんど知っている（知っているべきである／父ガネー

に残りが、花婿のリテイクや弟妹たちの友人たちに当てられる。もちろん 1 通の招待状によって複数の参列者が来ることになる。1 枚 6 ルピーを 200 枚、計 1,200 ルピー分の招待状が、注文した業者から 2 月 9 日に届いた。招待状は直接手渡しで配られる。ガネーシュと四男のアシスがバイクに 2 人乗りしながら、地域一帯に広がる親戚や友人、知り合いたちの家に、2 日かかりで配りにいく。夜は途中の親戚の家で 1 泊する。よほど遠いところへは郵便を使うが、今回の婚姻儀礼では、200 通のうち 2 通だけが郵便で発送された。他に、親戚の家の近くまで行く人に託して届けてもらうという方法もとられる²³⁵。また花婿当人も含めた子供たちの友人たちにはそれぞれが手渡しで配った。

招待状を送る相手選びは、リストに名前を書きとめるという行為を伴うために、時に迷うこともある。今回特別に考えなければならなかったのが、先に行われたプラーンに來ななかった相手に今回も招待状を送るのかどうか、という問題である。具体的には、ガネーシュの妹の夫とその息子である。妹が死んでいるため長いこと疎遠になっているが、向こうの息子にとってガネーシュはたった 1 人残る実のママ (MB) であり、こちらの子供たちにとって向こうは実のプーパー (FZH) である。双方とも甥姪たちに庇護や儀礼的義務があり、本来ならば親しく付き合っているべき関係なのだ。やはりあちらが義理を尽くさなくてもこちらは尽くしておくべきだという結論に達し、招待状が郵便で送られた。

また、プラーンを行う前、親戚との交流がいっさい途切れていた時に訪問して歓迎してくれたカジョールの姉の娘の夫とその父 (MZDHF) は、招待客リストのトップに名前が載せられた。彼らの名前はプラーンの招待客リストでは 6 番目だった。一方プラーンの招待客リストでトップに名前が載っていたガネーシュの姉夫婦は、プラーンに來ななかったためか、今回の婚姻儀礼のリストでは何と 121 番目に名前が載せられていた。

今回の婚姻儀礼は、家族にとっては 2 年前のプラーンに引き続き、2 回目の「家族の大きなイベント」だった。招待する側となるということはつまり、招待状を印刷して、送り先の一覧表を作り、宛て名を書き、実際に配るという作業を伴うものである。そしてその一つ一つに、過去に形成された関係の想起もまた伴うのだった。

今回の婚姻儀礼を通して、いくつかの関係が疎遠になったことが改めて可視化された。疎遠になった関係の 1 人目は、上で挙げたようにガネーシュの死んだ妹の夫である。妹が死んで 20 年近く経っている。さらにその娘もその母の後を追うように死んでいた。交流は徐々になくなっていった。1 回だけ数年前に、彼の息子の結婚話の関係で、彼の母のゴートラ (父系クラン)、つまりガネーシュの家族のゴートラを尋ねる電話があった。しかしその後

シュが知らないような知り合いとは付き合わないほうがよい)。ここでも、個を単位とできる部分とできない部分があることがわかる。「家族」を単位としたほうが、この招待状の事例はわかりやすい。

²³⁵ ガネーシュの ZHBS→その兄弟 (ある都市への街道沿いにバイクの店を持っている) →店へ寄った、その都市へ行く途中の人→その都市に住む親戚、というルートで 1 通の招待状が今回無事に届けられた。「今では乗り合いタクシーに渡したものが相手先まで無事に届くことはない」と人々は言うが、それでも人を介したこんな配達方法もある。

はプランにも来ず、連絡もなく、そして今回の婚姻儀礼にも来なかった。また彼らの家は、A村やB村からバスと電車で5時間ほどかかるブンデルカンド地方北部の都市にある。距離の遠さも疎遠になった原因かもしれない。今のところ、こちらの子供たちにとっての実の父方オバの夫であるという親戚関係の近さによって、招待客一覧には載せられているし、これからも載せられ続けるだろう。しかしその次の世代になるともしかしたら交流は途絶えるかもしれない²³⁶。

疎遠となった2人目は、リティクの父方オジの娘（FBD）のバウアーである。父ガネーシュの兄には娘2人と息子1人がいて、長女のヴィッディーはプランの時も今回の婚姻儀礼でも家族を連れて早めに来て、家の仕事を手伝い最後まで残っていた。彼女らの両親は既に亡くなり、婚出した彼女たちにとってはガネーシュとその妻カジョールが実家の両親代わりである。ガネーシュとカジョールへの呼称も、チャチャ（FB）、チャチャー（FBW）だけでなくパパ（F）やアンマ（M）も使っている。つまり彼女たちは親族カテゴリーで言えばバルサと同じ立場にある。しかし次女のバウアーは前回のプランにも来ず、今回の婚姻儀礼にも来なかった。前回のプランの時はいくつか、遠くUP州の州都ラクノウに家族で出稼ぎに行っているためプランには行けないことを電話で連絡してきたし、彼女の夫だけがそれでもわざわざ戻ってきてプランに参加した。今回も電話連絡はあり、来るとも言っていたのだが、実際には来なかった。

今回の婚姻儀礼にいたるべきだったがいなかった3人目は、上記のヴィッディーとバウアーの弟、父方オジの息子のハリーである。彼はガネーシュたちのメールのメンバーであり、一時期はA村の家とB村の家とを一緒に行ったり来たりしながら、一緒に暮らし一緒に仕事をしてきたこともあった。ハリーとガネーシュたちは定期的に喧嘩をしている。しかしプランの時はいくつか暮らしながら家族のメンバーとして大きな役割を果たしていたし、毎年1回行われるメールのプージャにもほぼ参加していたのだ。けれども婚姻儀礼の数か月前、その前からかつてないほどの仲違いをしていたガネーシュとハリーは、決定的な大きな喧嘩をしていた。カジョールはA村の家の中に塀を作り、ハリーの家と自分たちの家を分けたがっていた。そのことはハリーにも直接伝えられていたし、ハリーも叔父夫婦にはっきり言葉で伝えはしないが、陰ではその卑劣さを様々な人に話していた。結果、今回の婚姻儀礼でハリーが登場したのはティーカーのわずか1日前であり、その時ちょうど行われていたメールのプラサード作りを少し手伝い、食事だけしてどこかへ去っていった。そしてその後、婚姻儀礼に戻ってくることはなかった。また、A村の家と寺院に手を置きに行ったときにもA村の家にはハリーがいたが、みんなが到着するとすぐに出ていき、その日も翌日も帰ってこなかった。

この妹と弟の不在に、ヴィッディーは何度も何度も泣いていた。「パパとアンマが死に、チャチャとチャチャーを私はパパとアンマと思っているのに、2人ともリティクのシャディー

²³⁶ 確認しておく、両者の関係はガネーシュが贈与の与え手（giver）、妹の夫とその息子が受け手（taker）である。

(婚姻儀礼)に来ないなんて」と泣くヴィッディーを、「あんたは偉いよ」と周りの人々は慰めた。

一方、今回来ないかと思われたが来たのが、ガネーシュの姉夫婦である。彼らはA村から車で1時間ほどの近い距離に住んでいるにもかかわらず、前回のプランでは姉の夫の弟が来ただけで、姉夫婦は来なかったのだ。また彼らの息子は仕事で度々A村に来ていたがガネーシュはそれを知らず、一度たまたま入ったバイクの販売店で会ったときにそれを知り、近くまで来ているのなら実の母方オジのところへ顔くらい見せるべきだ、と陰でこっそり文句を言っていた。そんなわけでガネーシュは姉一家に不信感と寂しさを感じていたのだが、今回の婚姻儀礼では夫婦2人でやってきて宿泊し、ティーカーの時はプーパー(FZH)がガネーシュとともに座り、ムーンディカーイーではブア(FZ)が花嫁に足指輪を贈り、親戚としての役割を果たしていった。ガネーシュはとても嬉しそうだった。

以上の事例から指摘できることは、一つ目は、招待に応えない、という行為によって関係が弱まっていくということ、二つ目は、しかし「実のプーパー(FZH)」「メール(父系リネージ)の成員」などであるという親族名称はそれでもなお力を持つということである。しばらく交流がない状態であっても、それほど近い関係だったとすれば、現れてすぐにその立場に応じた役割が再開される。例えばハリーなどは実際にガネーシュやカジョールとひどい喧嘩中であつたにもかかわらず、しかもほんの数十分しか儀礼の場になかったにもかかわらず、ちょうど2月21日のメールづくりの最中、数少ないメールの成員が来たということで、すぐにマンダップの下へと連れていかれ、メールを作らされていた。同様にガネーシュが妹の息子の婚姻儀礼にでも行くときは、たとえそれまでどんなに交流がなくても、手ぶらで行くことは許されないだろう。あとあとまで、「ママ(MB)が何も持ってこなかった」と語られ続けるだろう。さらに興味深いのは、アーカースの名前が招待客リストに載っていたということである。異ジャーティ結婚をして大問題を引き起こし、表向きは今でも関係を停止させているにもかかわらず、そして病気で絶対に来られないとわかっているにもかかわらず、招待状が渡された²³⁷。

一方で、そのように突然には再開されない関係もある。今回の婚姻儀礼に、A村の同じジャーティの家族の男の子プスペンと、そのイトコの女の子でラクシュマンの娘のラーニが来た。ラーニの一家はD家と昔から変わらず親しく付き合っていたが、プスペンの一家はアーカースの異ジャーティ結婚後プランまでは、すぐ目の前に住んでいたにもかかわらず疎遠になっていた。リテイクの婚姻儀礼にかつての関係だったら必ず来たであろうプスペンの父と母は来なかったが、しかし今回少なくとも息子のプスペンだけは来て、昔のように家族親戚とともに数日間泊まっていき、家族の仕事を手伝ってくれた。またプスペン

²³⁷ さらにアーカースの娘のチョーティーの名前も招待状に載っていた。一般的に調査地の婚姻儀礼の招待状には、家族の中の小さい子供の名前で、「私たちの叔父さんの結婚式に絶対来てね」、「私たちのお姉さんの結婚式に絶対来てね」などといった言葉が載せられるものだが、D家にはそのような子供がチョーティーしかいない。そこでチョーティーの名前で、招待の言葉が記された。ここでもまた、家族の小ささが意識させられる。

の母はプランにも参加し、今回 A 村で行われたダードレでも最初に来て最後まで残っていた。その様子は交流が時間をかけて徐々に再開しつつあることを感じさせた。

近い関係の親族の場合、「実のプーパー (FZH)」「メールの成員」という、相手に対して固有な立場に応じた役割をすぐに再開することができる。その席は常に彼ら彼女らのために空いている。不在の場合、例えばバラート出発前の花婿に邪視除けの墨を塗る兄嫁の役割を類別的兄嫁として代理のイトコの妻が務めたように、どこかに必ずいる類別的親戚がその役目を代わりに負うが、もし本来の人物がいるとして彼女が現れたら、その席にすぐに座ることになるだろう。例えばその兄嫁が役割を果たすべき儀礼の段階に来た時、みんなの頭には長男アーカースの異ジャーティ結婚の相手であるナミータの存在が思い浮かんだ。もし彼女が家族の一員となっていたら、当然彼女がその役割を果たしていたはずである。一方、同じジャーティの成員よりも遠い関係の人の場合、交流の再開は徐々に、複数の行為の積み重ねによって起こっていくと考えられる。つまり、相手に対する規則に基づく立場が、関係の変化の時間に影響を与える。

5.3.4 露呈したつながり

本節で見てきたような、婚姻儀礼であらわれたいくつかのつながりについて、いったんここでまとめておく。予定通りの役割、予定外の役割を実践することで何が達成され、何が露呈したのか、何が将来の火種として残ったか。儀礼はどのような力によって方向付けられたのか。そして個別の動き、家族の動きを超える集合（サマージやメール）はどのように語られ、現れ、効果を果たしたのか。

まず、婚姻儀礼そのものは、滞りなく達成された。それはつまり、婚姻儀礼ができるだけのつながりを D 家が有していたということ、築けていたということの証明でもある。しかもその婚姻儀礼を、品位を落とさずに行うことができた。つまり、経済的にもファッション的にも D 家が満足するだけの水準で行うことができた。このように、儀礼においてなすべきことをしかるべき人を集めて行うということに加えて、経済的・ファッション的に良いものをやるということが、D 家がサマージに認められ評価されることにつながっていくのである。

しかし全体として婚姻儀礼は上手くいったが、個々の諸儀礼の場における親族名称に基づく人の役割が明らかにしたのは、D 家は長男の異ジャーティ結婚だけでなく他にも問題を抱えていたということである。その中でも特に明らかになったのが、メール（父系リネージ）の成員に関する問題である。メールに関しては、「不仲」、「早世」、「一緒に住んでいない」、「男の子がいない」、「未婚」といった、調査地の価値観において悪い条件が重なっていたということが改めて可視化された。特にイトコのハリーの問題は、異宗教間の結婚という大きな問題になる可能性も含んでいる。さらに、母カジョール側の親戚には都市や大

きな村に住む人々が比較的多いのに対し、父ガネーシュ側の親戚には小さな村に住む人々が多い、すなわち洗練されたセンスを持っていないということもあいまって、カジョールのほうの親戚は好きだがガネーシュのほうの親戚はどれも好きになれないし信用もできないという感情もまた、露呈した。

このように、婚姻儀礼の期間中、D家が囲まれていたものがまさにサマージであったといえる。サマージにおけるD家の立場は今回の婚姻儀礼でやっと回復したとD家の人々は語る。サマージに対してメールとは、現在のD家にとっては、儀礼的な価値に基づいた集団である。日ごろ頻繁な付き合いがあるわけではないが、儀礼の際には重要な存在となる。そして今回メールの問題が露呈したわけであるが、しかしD家には長男を除いてもまだ3人の男の子がおり、しかも今回の婚姻儀礼では家族の成員が1人増えたと同時にメールの成員も1人増えたわけであり、その1人の増加は更なる成員の増加（弟たちの結婚、および子供の誕生）につながっていく出来事でもあるといえるだろう。とすると、この問題が過去のものとなる時がくる可能性が今回高くなったと言える。言い換えれば、つながりの断ち結びは常に過程的なものであり、未来に開かれたものであるとすることができる。

5.4 未来の家族を作っていこうとする動き

過去に作られたつながりがあらわれる場であった婚姻儀礼は、新しいつながりが作られる場でもある。儀礼の場においてニートゥは、シンドゥールを額の分け際に塗られることによってリティクの妻となり、ターメリックの手形をつけることによって村とメールの一員となっていったが、さらにその後、生活を共にし、会話を交わし、互いを知っていくことによって、「D家」の一員となっていった。

5.4.1 互いを知り合っていく過程—嫁と家族のつながりの形成

リティクはニートゥという名前が気に入らないので、別の名前をつけようとしている。女性は嫁に来ると、実家の名前を捨てて婚家の名前を付けられる²³⁸。カジョールの時のように定着せずに元の名前が使われることも多いが、今回はどうだろうか。

ティーカーとビダーイが済んでD家にやってきたニートゥがどんな人かということ、

²³⁸ 結婚前後の女性に限らず、調査地の人々は男女とも複数の名前を持っていることが多い。誕生の時に儀礼的につけられた名前はたいてい進学の際の登録名となり「学校の名前」と呼ばれ、学校でできた友人たちにはこの名前と呼ばれる。一方、家族の中では別の愛称がつけられて「家の名前」と呼ばれ、家族や親戚、近所の人々にはこの名前と呼ばれる。

ガネーシュが私にインタビューをさせた。ガネーシュは舅であり厳格なパルダールの対象であるから、嫁のニートゥと直接話をする事ができないのだ。ニートゥは、スナック類や紫色、俳優のサルマン・カーンが好き。甘いものよりは塩味が好き。チャイはほとんど飲まない。純ヴェジタリアン。結婚前はクルティーとレギまたはスーツを着ていたが、ジーンズは着ていなかった。歌もダンスも苦手である。大学の BA²³⁹は2年目が終わりかけで、あと1年残っている。次に学校に行く時は変な気がするだろう、シンドゥールを塗って、マンガルストラをつけて学校に行くと、みんなが色々聞いてくるだろう、と語るニートゥの言葉を、私はガネーシュやその他の家族の成員に話して聞かせる。

ガネーシュ「ニートゥはプージャをする気があるか、できるか？」

カジョール「自分たちが教えれば覚えていくでしょう」

ガネーシュ「世話をしたり気を使ったりするタイプか？」

カジョール「多分そうね。キッチンでの食事の時、弟たち食べなさい、お母さん仕事は後にしてまず食べたら、と必ず言うから、ちゃんと周りを気にできる子だと思う」

ガネーシュ「リティクはニートゥの世話をしそうか？」

私と弟たち「今のところ、塩味の菓子やビスケットを朝食のために運んでいって食べさせたりしている」

カジョール「新しい嫁だからといって、下を向いてじっとしているだけではない、それなりに喋りもするのが良い。それに賢さもある。ある晩リティクとニートゥが、内容まではわからないけれど大きな声で会話しているのが聞こえたので、次の朝、口論でもしていたのかと冗談交じりに注意したら、次の日からもう声はしなくなった。つまり1回言ったらわかる、賢いということで良い。リティクがああだから夫婦でバランスがとれている」

このような情報が、互いの中で交換され、共有されていく。また別の機会には、リティクが「彼女も冗談を言って笑うのが好きで、その点で僕らみたいだ」と言えば、バルサが「何が良かって、細くて腰のラインがきれいなところよ」と兄嫁の美しさを褒めた。ニートゥの賢さや明るい性格、美しい体形は、近い将来誕生するであろう彼女の子供たちにも受け継がれるだろう。その一方で、ニートゥの直すべき点も徐々に指摘されるようになっていった。

A村から帰ってきた日、村祭りがあるのでニートゥにも行かせてあげようとカジョールが言った。「祭りの期間中にB村にいて、見物もさせなかったとなると感じが悪いでしょ」というのがその理由だった。バルサとリティクがニートゥと一緒にいけばいいと思っていた

²³⁹ Bachelor of Art. BAは3年間のコースである。

が、「トモ、あなたも行きなさい。私もトモも行かないとなると、ニートゥは悪い気がするだろうけど、でも私は行かないから」とカジョールに言われた。姑は姑なりに気を使いながら、手探りで嫁との良好な関係を作ろうとしているのだ。その際、ニートゥがサリーの上からカーディガンを羽織ったのを、カジョールは「ショールを羽織りなさい、ニートゥ。新婚の嫁はショールを身につけるものなのよ」と注意した。ニートゥはお気に入りのしゃれたカーディガンを脱いで、いかにも新婚ですとアピールしているようなショールをおとなく身にとった。

ニートゥは左利きである。カジョールもバルサも左利きだ。カジョールもバルサも家中では左手を使い、外では右手を使って食事をするが、ニートゥには食事の時は右手を使う訓練をするように注意した。「食事の時は右手を使いなさい。右手で食べる訓練をしなければね」というカジョールの指摘に対して、このときもニートゥは黙って食事の手を左手から右手に変え、食事続けた。

また朝早くから冷たい水で水浴することも、体を壊すからといってカジョールが注意した。それに対してはニートゥは、「大丈夫お母さん、私は実家でもいつも冷たい水で水浴していたから」と答えた。しかしその後私が2人きりのときに、「あれは嘘でしょ？」と聞くと、本当は実家では温かいお湯を混ぜて水浴していたことを認めた。

ニートゥはショールを羽織ることや右手で食事することといった、花嫁として、あるいはヒンドゥーとしてのふさわしい態度をとらせようとする姑の注意には従順を示し、冷たい水で水浴するなという姑の親切からの言葉には「大丈夫だから」と断って忍耐強さを示した。

そもそもリティクとニートゥの結婚をアレンジしたのは両親であるが、ガネーシュは息子の妻となる女性の事をよくは知らなかった。リティク自身も彼女のことを知り始めてまだ日が浅い。重要なのは、同じジャーティの女の子だということ、比較することができたもう1人の候補者よりは良かったということだけだった。そして結婚後に互いによる情報を通して、ニートゥ自身のことやリティクとニートゥの関係を知っていこうとしている。さらに、カジョールは少しずつ嫁のニートゥの行為を適切なものへと変えようとしている。そしてニートゥもその要求に応じて対応を変えながら上手く応答している。バルサはナナドゥ(HZ)としてバビー(BW)と一緒に座り、最終試験に備えて勉強を見てもらったりしている。言葉の端々から推測するに、ニートゥは真面目に勉強するタイプらしい。バルサにも一生懸命勉強するよう諭していた。家族の成員がそれぞれの立場、興味関心、価値観に従って、新しい家族の成員であるニートゥのことをよく知ろうとし、あるいは矯正しようとし、あるいは彼女が持つ資本を利用しようとする。

ティーカー儀礼の場でリティクとニートゥは夫婦となった。ティーカー儀礼のマンダップの下で行われる諸儀礼によって、ヒンドゥーは夫婦と認められるのである。しかしそれだけでは、夫婦となった2人は床を共にすることはできなかった。その後のいくつかの、父系リネージと家の神と村の神に関係する諸儀礼を終えてのち、生殖行為という大義名分

を持ち、このジャーティの中のこの家族の再生産という目的が伴った性交渉をすることが許されるのである。これは、まず男性の妻として認められ、そしてメール、さらにサマージの嫁として認められる過程であったといえるだろう。そしてその後、相互理解やふさわしいふるまいを身につけることなどをとおして、隣接性と類似性を獲得し、徐々に家族の成員らしくなっていくと考えられる。一方、前章で述べた異ジャーティ結婚をした長男アーカースの場合は、結婚前から恋人同士として何年もの付き合いがあり互いのことは知り合っていたが、それが他の家族の成員にまで広がることはなかった。

5.4.2 婚姻儀礼後の反省と批判—新しい姻族とのつながり方

ニートゥが身に帯びて持ってきたのは、ただ彼女個人が持っている属性だけではなかった。彼女が持つつながりの束が、ここでD家に接続される。ニートゥと結婚するということは、ニートゥの家族と婚姻を結ぶということである。そしてそのつながりは未来へと伸びていく。そのとき家族は良い方向へ向かっていくのだろうか、それとも悪い方向へ向かっていくのだろうか。

婚姻儀礼が始まる前から、ニートゥの家族が全然お金を出さないということに対して批判が続いていた。ダヘージの金額も少なく、持参財には期待したバイクがなく、歓迎の儀礼で渡された金銭の額は今までどんな貧しい人たちの婚姻儀礼でも見たことも聞いたこともないほど少ないもので驚愕したと、ガネーシュや弟たちは口々に言った。怒りっぽい性格のリティクに、喧嘩になるのは目に見えているから今後ニートゥの実家には行くな、電話で会話もするなども注意する。カジョールは、「あんたは絶対にサスラール（配偶者の実家）に行くんじゃないよ。嫁を迎えに行く時もアトルに行かせるから、自分では行かないようにしなさい」とリティクに伝えた。

スハーグラート（結婚初夜）のために、女の子の親は、ダヘージに何はなくとも、新しいベッド、マットレス、枕、ベッドシーツ、枕カバー、毛布を絶対に贈るものであると調査地では言われている。しかし、今回ニートゥの親は全く何も持たせなかった。アトルは、「向こうは花婿行列に来てほしかったんだ、でも逆に行くことになってしまっって何か悪く思ったのだろう」と言う。それに対してアシスは、「それかもしかしたら、自分たちは家具職人だからダヘージに家具などはいらないと言ったことを勘違いしたのかもしれない。でもそのくらいは常識的に考えるべきだよ」と意見を述べた。結局ベッドシーツと枕カバーだけはD家が新しい物を買ったが、ベッドやマットレスや枕や毛布などは古い物を使って、スハーグラートは迎えられた。

ティーカーの時のパーン・パカラーイーでのダヘージの食器類は、安物のスチール製ばかりだった。「こんなにたくさんなくていいからいくつか真鍮のものを買えなかったのか」と文句を言うカジョールにガネーシュが、「知り合いの食器屋がいるから呼んできて全部買

い取ってもらおう」と提案する。カジョールは「何言っているの、自分のダヘージを全部売ったと嫁が言うじゃないの」²⁴⁰と否定するが、本当はできることならそうしたいのだ。

同じくパーン・パカライーのダヘージには、ミシンが2台あったはずなのに、家に運び込んでみると1台しかない。ニートゥを通して電話して問い合わせたところ、1台しかあげてないと言う。しかしその場にいた何人もが、ミシンが確かに2台あったことを覚えていた。誰かが「裁縫教室が開けるな」と冗談まで言ったのだ。親族が持ってきたダヘージが重複したために、こっそり2台のうち1台を持って帰ったに違いないと語られる。

このように、相手の態度に対して大いに不満を持つ婚姻儀礼ではあったが、しかし、何はともあれ少なくともB村で婚姻儀礼をしたことで喧嘩は起こらなかった、とガネーシュは強調する。その言葉に家族はみんな大きくなずいた。例えば、向こうの家の荷物を持っていったとニートゥの家族に疑われないで済んだ。後々までそのような遺恨が続くのはよくあることである。それに、相手にはこれだけの規模の婚姻儀礼を実行する能力もないとも思ったし、それに対して自分たちが立派に婚姻儀礼をやったのけたことにD家の人々は満足だった。

その代わり、本来ならば女の子側がすべきことを全部こちらがすることになった。本来だったら女の子側の家族である向こうが婚姻儀礼の費用を全部払うはずだし、たとえ今回のように男の子側の村に呼んだとしても、向こうからお金を受け取ることもできたはずだった²⁴¹。ガネーシュは「向こうはこちらの弱みを知っていた」と言う。それは、何がどうであれ、たとえどんなものであれ、婚姻儀礼をするということだった。それはここ4、5年の間、ガネーシュとカジョールの頭にあったたった1つのことであつた。長男のアーカースが結婚して以来、プラーンを行ったことで家族の状態としては浄化されたはずだが、実際に弟の1人が結婚してはじめて、本当に以前の状態に回復できると信じていたのだ。ディスコはなく、段取りも悪く、相手への不信感も残る、なんともひどい婚姻儀礼ではあったが、少なくとも婚姻儀礼は行われ、喧嘩は起こらず、そして何よりも望んだ嫁が来た、他のことは忘れろ、と互いに言い聞かせあうように言う。

「嫁が来た、他のことは忘れろ」という言葉は、今回の婚姻儀礼の総括のようにして語られる。一つ一つの不始末や批判が挙げられたのち、「でも少なくとも嫁が来た……」となるわけである。このことは、嫁がいるというその存在を記憶し、批判や不満などは忘れようという決意を表していると考えられる²⁴²。

²⁴⁰ ダヘージは婚家のものとなるから、嫁たちには自分が持ってきたダヘージをめぐる攻防のエピソードの1つや2つはあるものである。カジョールは嫁入り道具を入れてきた長持を夫の兄の妻に欲されたが、夫が無視するようになってくれたおかげで守れた。ヴィッディーはスハーグラートのために実家の父が持たせてくれたベッドだった。夫の妹の結婚で流用しようとする姑に抵抗したという話を今でも語る。

²⁴¹ 婚姻儀礼でかかった費用の概算については、付録11参照。

²⁴² ただし、争点になったのを見ると、その不満も思い出してしまうという、ものが思い出しの装置になっているということは指摘できる。これから壁際に据え付けられた1台のミシンを見るたびに、もらったはずのもう1台のミシンの行方を考えずにはいられないだ

それは、原因となる行為があつて結果が生じた、という単線的な因果関係ではなく、もしくは結果を見て遡及的に原因を特定あるいは言いつくろうのでもなく、最も重要な結果に言及し、そこに導いた過去に起こった出来事や関わった人を良くも悪くもそのまま受け入れようとする態度である。

そしてまたニートゥの家族は、これから家族に生まれてくる子供たちの母方親族となっていくのだ。今回のリティクの結婚話を持ってきてくれたのは、リティク自身の母方親族である母方オバの夫（MZH）だった。しかも彼らは、アーカースの異ジャージーティ結婚後、真っ先に縁を切ると言ってきた人たちなのだ。けれども今回の婚姻儀礼で最も関係が強化されたのも彼ら母方親族だった。最初の縁談、そしてオーリーとパッキヤート以来、彼らはずっと参加し続け家族とともにあり続けていた。そしてニートゥの家族たちが今後、この家族にとって姻族となっていく。

姻族間の金銭のやり取りは婚姻儀礼の場だけで終わる一時的なものではない。それは娘の一生の間、さらには娘の子供の世代にまで引き継がれるものなので、まだ損失の回収の機会は残っていると見える。第3章でも詳しく述べたように、ニートゥの両親や兄弟と、D家の関係は、これからもずっと与え手（giver）と受け手（taker）の関係であり、その逆にはならないのだ。

そしてその新しい姻族との関係では、ニートゥがその要となる。ニートゥ個人の性格や賢明さが、姻族とのつながりも左右していく。

ニートゥが実家に帰るビダーイの日、ニートゥがその兄弟姉妹たちと車に乗って去っていき、D家の人々がほっと一息ついたとき、その日ニートゥの実家から兄弟たちが持ってきた品物をカジョールがチェックした。姑のカジョールのためには、サリー、腕輪、足指輪、メイクボックスがあった。メイクボックスには女性が身を飾る細々としたものが一式入っていた。カジョールによれば、これらの品物は、実は婚姻儀礼の際に新郎の母のために新婦の実家から届いていなければならないものだった。カジョールは、ビダーイの菓子作りの準備中、近所の女性たちやニートゥ本人の前で、姑である自分のためにニートゥの家族は何もくれなかったと言っていた。それを聞いていたニートゥがその後実家に電話して、姑への贈り物を持ってきてくれるよう頼んだのだと思われる。私もそのように感じたし、カジョールもまたそのように推測した。

「なぜみんなの前で文句を言ったのか」と聞くガネーシュに、「何をもらったのか聞かれたら答えるのは当然でしょう」とカジョールが答えた。カジョールがとった態度はガネーシュが指摘したようにやや性格の悪いものだった。しかし第三者に聞かれたことに対して何もくれなかったという事実を答えただけ、という言い訳により、ぎりぎりのところで嫁の目の前で彼女の家族への明確な攻撃とはならず済んでいる。一方、ニートゥは賢明にも、姑による自分の家族がとった態度への言及（実際は明らかに非難であるが）に対して、その場で反論したり言い訳したりすることなく、ただ黙って下を向きながら聞いておろう。

り、一人になった時に実家に電話して姑への贈り物を用意させた²⁴³。結果カジョールは満足し、少なくとも一つの不満の種は解消された。このように、これからもニートゥが怒りをあらわにすることなく賢く行動していくことによって、ニートゥへの評価も上がっていき、家族内での存在感も増していくだろう。さらに、新しい嫁である彼女自身が婚家の家族の悪い部分を直していくことが求められていくのである。そして、彼女は実際にそれを始めていた。例えば直情型の夫をいさめる賢い妻、怠け癖のある義妹を諭す真面目な義姉、不誠実な実家とそれに怒る婚家をつなぐ誠実な嫁といった役割を、さっそくニートゥはこなしていくのだった。

本章では、婚姻儀礼の過程を見てきた。婚姻儀礼の場は過去に結ばれた婚姻関係によってつながる親戚たちがそれぞれの役割を果たしながら、新しい婚姻関係が結ばれる場を支えていた。その儀礼の場での役割は、親族名称に応じた立場によって規則的に定まっているため、もし数が足りなかったり不在だったりしたら、それが明らかに示されてしまう。D家には、異ジャーティ結婚だけではないさまざまな問題があったことが、言及されないまでも可視化された。一方新しく嫁と築く関係では、慣習的方法に則って落ち度のないように、注意深く諸儀礼が行われた。さらに儀礼においてだけではなく、その後共に時間を過ごすことによって、新しい家族は互いを知っていった。また、婚家からのいくつかの矯正の要求や、実家と婚家との間の確執などを、花嫁のニートゥは適切に賢く捌いていた。彼女は十分に、つながりの結節点としての能力を示した。それらは長兄の異ジャーティ結婚の結果と対比をなし、そこからの回復を鮮やかに描き出し、家族に未来への希望を再び与えたのである。

²⁴³ 彼女個人の携帯電話を持っていたことが、功を奏した。新しい嫁が持ってきた携帯電話を夫や姑に取り上げられることもあるという (Doron 2012)。



写真 5-1 オーリー
オーリーでの、男の子側から女の子側への贈与。



写真 5-2 メールバツパ

婚姻儀礼のために新しく借りた家に一時的に作られた祭壇。上に貼られているのがメールバツパがいる赤い布。下に置かれているのはチュイマーティーでとってきた土。まだ竈を作る前。



写真 5-3 チュイマーティーで取ってきた土で竈や皿作り

チュイマーティーで取ってきた土と、畑の土を混ぜて、竈や皿などを作るFBWのアニータ。



写真 5-4 マンダップ

マンダップ。周りをテントハウスから借りたテントで覆って日陰を作っている。カターでプージャをしている新郎新婦（右）とグルマハラージ（中央）。女性や子供たちが何となくうろうろしていて、眺めたり用事があれば手伝ったりしている。



写真 5-5 メール作り

メール作り。中央の籠に入っているのが揚げあがったメール。その左の一斗缶に突き刺してあるのが、マンダップの立ち上げのとき最初に父系リネージの男性成員が刺した中心の木の枝。一緒に一途缶に入った黄色い木製のものが、マルワーと呼ばれるもの。



写真 5-6、写真 5-7 マリッジハウスのステージ

マリッジハウスに、設けられたジェイマラー用のステージ。ステージの前には椅子が並べられ、招待客がまるで劇の観客のように座る。右の写真の赤い椅子と机は、食事用。



写真 5-8 ムーンディカーイー

ムーンディカーイーで花嫁側親族の女性が花嫁の顔を輪っか型の菓子をを通してパルダーの下から見る。

夫婦が白い布でつながっているということ、新婚の花嫁のしるしであるショールを羽織っているということも、確認できる。



写真 5-9 メール・メ・パトナー

村の寺院の門扉に、花嫁の家から来たターメリックを溶かした水で、手形をつける。調査地の結婚シーズンは決まっているので、別の先着の新郎新婦の手形がいくつもついている。



写真 5-10 ゲーム

スハーグラート（結婚初夜）の前のゲーム。左上が新郎、下が新婦、右の赤いセーターを着ているのが、2人を盛り上げる MBW。

第6章 結論—姿をあらわす家族

6.1 はじめに

本論文は、現代インドに生きる人々がどのように婚姻を結び家族を作っていくかという問題を、異ジャーティ結婚を事例に、ある一つの家族の人々が関係を断ち結ぶ方法を手がかりにして、論じてきた。

第1章では、ジャーティとは異なる論理でつながる人の集団であるサマージと家族について説明し、本論文の視座を示した。第2章では、調査地および調査対象となる家族のこれまでの軌跡、そしてそこに含まれる個人の持つ資本について説明した。第3章では、結婚相手を選ぶその過程に注目し、多様な「同じ」と「違う」、「良い」と「悪い」を手がかりに、つながりを結ぼうとしたり、断とうとする人々の姿を描いた。第4章では、異ジャーティ結婚の事例を、その恋愛期間から家族による受け入れと拒絶までを含めて、特にサマージとのつながりを中心に取り上げた。第5章では、同じ家族に起きた同ジャーティ結婚の事例を、特に姻族関係や親族の役割に応じたつながり方に注目して記述した。それらのつながりはいずれも、その結果が明らかにならないものまで含めて書いてきた。

最終章となる本章では、その中で、家族に焦点を当てることで光をあてることができた点を確認しつつ、最初の問題に答えていきたい。

6.2 結婚する相手を選ぶ、つながりの断ち結び

婚姻相手を選ぶ過程において家族に焦点を当てたことによって、何が明らかになっただろうか。まず、従来の研究では婚姻相手探しにおける婚姻規範や占星術、ダウリの交渉以外の過程に関してはほぼ等閑視されてきたが(カパディア 1969、Harlan and Courtright 1995、Sharma 2011)、本論文では特にその過程を隣接性と類似性に基づくつながりに注目して描き出した。家族に注目したことにより、婚姻相手探しは実際に相手を訪ね歩くところから始まるのではなく、家族の運営、息子と娘と嫁の関係、建物としての家、親の老後の計画など、様々な要因が関わって決まっていくということが明らかになった。さらに、婚姻相手を選ぶということは自分たち家族も相手から選ばれる対象となることを意味する。つまり婚姻相手選択の過程を視野を拡げて描くということは、調査地の人々の社会上昇の営み、

そして自らの思い描く自己の実現の努力までもを描き出すことにつながる。また、従来の婚姻研究では、婚姻規則やジャーティなどの括りの論理による人の集団を前提として論じられる傾向にあった (Fruzzetti 1994) 一方、異ジャーティ結婚を中心的に扱った研究ではそれに伴うロマンチック・ラブや都市的な価値観が強調されてきた (樋口 2012)。しかし家族という視点を導入したことにより、括りの論理に基づくつながりと、戦略や愛情に基づくつながり、双方の重要性を等しく観察することが可能となった。それらは排他的に存在するものではなく、相反するものでもなく、たとえ一見矛盾するようでも、どちらも大切なつながりとして人々に結ばれているのである。

第 3 章後半では、婚姻相手として誰とつながるかを模索する人々の姿を描いた。同ジャーティ内の、同サマージ内の、同ランクの家族の間で、経済資本や文化資本、社会関係資本の差異をめぐる競争的な婚姻相手探しが行われていた。「ハマーラージャエサー」つまり我々のようかどうか、ということ巡って、他の家族を観察する視点がそこにはあった。もちろん婚姻相手として見る相手は個人であるし、第 2 章で述べたように家族内の個人間の差異もある。しかし家族の成員それぞれが持つ資本も当人の資本として数えられ、大事な判断材料として確認される。また家族内の個人の自己実現も家族全体の助けを借りて達成されており、それがまた互いの結婚相手としての評価を高める結果につながるという家族内の個人の相互作用がある。

それら戦略的な選択に加えて、禁止されなおつながり続ける、またはつながらなくてはいけないのに忌避する、規則に反し、しかも客観的なメリットもない、それでもなお人を行為させる愛情と嫌悪の情がある。第 3 章ではまた、婚姻相手探しにおいて、規則、戦略に加え、愛情によって娘を良い男性と結婚させようとし、愛されている自覚がある娘もそれを期待する、という事例を記述した。特に女の子の場合、親が決めた結婚相手が彼女の人生を大きく左右する。メール、父系リネージの考え方で言えば、娘は結婚後は別の家族の人間となり、実際に数々の儀礼でも娘は父系リネージの一員には基本的には含まれない。それでも人々は、娘が生む子供が美しい顔になるように、娘がレンガ造りの部屋で寝られるように苦心する。娘の結婚相手はもちろん後々利を得る為に戦略的に選ばれることも多い。またカンニャーダーンが功德を積む行為であるとも言われている。娘が裕福な家族と結婚することが、実家のステータスも上げるだろう。娘の婚姻相手選択はそのような基準から描かれてきたといえるだろう (Pocock 1954, Madan 1975, Sharma 1984)。そして、そこに介在する愛情といえば、家族の名誉に反する、娘自身が自分の恋人に対して抱くものが注目されてきた (Chowdhry 2009)。しかし本論文で描いてきたように、バルサが自分は家族から愛されているのでたくさんダヘージをつけられて良い家族の男性と結婚できると信じているという事例や、またナミータの親が彼女の素行に愛想を尽かし結婚相手探しを諦めていた事例を見ると、子供の婚姻相手探しの過程には、家族の当人への愛情が大きく関わっていることがわかる。それは息子に対しても同じである。カジョールはハリーとリティクの嫁に関して、ハリーよりもリティクにより条件の良い嫁が来てほしいと願っており、

実際に嫁候補が現れればその条件によってハリーカリティックに振り分けようとしていた。なぜならリティックは「愛する息子」だがハリーは「不良な甥」であり、2人の生活習慣や学歴も異なるからである。父系リネージの考え方で言えば、2人とも同じカテゴリーに属する息子である。しかし愛情と嫌悪の情によって2人は区別されており、実際に花嫁を選ぶ際の考えに影響を与えていた。

ここまではまだ、規則を守り、利益も加味しながらの愛情の発露であったが、しかし第3章の最後で取り上げたD家の事例においては、愛情を追い求めてイトコのハリーは宗教の異なる恋人を作り、末娘のバルサは異ジャーティの恋人を作り、三男のアトルは真実の愛を捜し求めて、結婚しなければならないというサマージや家族の要請にもかかわらず独身を宣言する。しかしそれでも、彼らは家族とのつながりを決定的に切るようなことにはならないように、との注意を払って行動している。例えばハリーにはガールフレンドがいることは明らかであるが、一緒に暮らすことの多い三男のアトルと私以外には彼女の話はせず、まるでガールフレンドなどいないかのように振舞っている。2人の関係がサマージに公に明らかにされる婚姻儀礼も行っていない。バルサも恋人との結婚を夢見るが、できれば親に紹介し認めてもらう形での結婚の可能性を探ろうとし、あるいはすぐ上の兄弟の結婚に与える影響も考慮しようとする。アトルも自分はババになると言って独身を宣言するが、常に冗談だと思われるような口ぶりで喋る。それに呼応して、両親も本気にはとらないという態度を見せる。そして異ジャーティ結婚をしたアーカースもまた、結婚しているのかしていないのかわざと曖昧な状況を作り出そうとしていた。それらの一見不可解な行為も、家族という視点を用いることで理解できる。

恋をした相手と親の了承も得ての祝福される結婚であるラブ・アレンジ結婚 (love-arranged marriage) や (Uberoi 2006, Doron 2012)、親と子供たちが一緒に子供の結婚相手を選ぶという結婚である友愛結婚 (Companionate Marriage) などの概念は (Fuller and Narasimhan 2008)、現代インドの人々にとっての理想的な結婚相手の選び方を表しているといえるだろう。すなわち、個人の幸せと家族の幸せが一致して結婚相手を選ばれ、そして結婚するということである。これらの概念があらわす状況は、現在の調査地の人々にとっては今すぐ現実的に達成可能なものではない。かといって、それらの可能性が全くないわけでもない。その狭間で、人々が将来的に達成される可能性を想像することができるようになった、そのような現代インドの生の一側面を、本論文は描き出した。

以上をまとめると、サマージとの良好な関係、サマージ内での競争、家族内の誰にどの程度の人をとという愛情、そして恋人と家族の双方への愛情、それらすべてを大事なものとしながら、それらを求めてつながりを断ち結ぶという方法で婚姻相手を探し、選んでいるといえる。

6.3 家族を作る、つながりの断ち結び

婚姻を結ぶ相手を選んだ後は、どのように家族となっていくのか。それを、父系リネージや世帯に還元せず、つながりの断ち結びに注目することによって、何が明らかになったのか。また家族に注目することによって、異ジャーティ結婚の研究にどのような視点を導入することができたのか。まずそれは、境界を超えて結びつきうる、そして境界の内部で切り離しうる、そのつながり方である。これは、誕生や結婚などで家族の成員となることが完成するわけではないということを示している。出自・婚姻による成員権はもちろん非常に重要であるが、その立場は常に揺らいでいるし、積極的な壁の建設、あるいは効果的かつ日常的でありふれた無関心という関係の断絶の方法 (Edwards and Strathern 2000:159) によって、つながりを停止させられうるし、再び紡ぎなおすこともできる (アーカースやナミータ、ハリーの事例)。また逆に、積極的に関係を持つことによって、あるいはやはりこれも強力な方法であるが、一緒に住み、同じ物を食べ、隣接と類似に基づくつながりを日々紡いでいくことによって、他の地方の人でも親密なつながりを結んでいくことができる (ベンガル人一家や私の事例)。そのような小さな事例を、本論文では積み上げてきたつもりである。

ところで本論文の中心章である第 4 章で示されたのは、そのつながり方が矛盾してしまう事例であった。つまり、ナミータとアーカースを規則においては切り離さなければならないが、戦略、そして愛情的にはつながりたいという状況である。しかも、そのような矛盾した状況もまた一定ではなく、時と共に揺らいでいく。「つながりたい」や「つながれそう」は、次の日には「つながりたくない」「つながるのは不可能だ」に変わっていく。異ジャーティ結婚をした長男アーカースは D 家の長男であり、結婚前までは、調査地のヒンドゥーの考え方では疑いなく家族の成員だったが、しかし異ジャーティ結婚をしたことにより、「切り離さなければならない」という問題に直面した。その切り離しの方法はわからなかったが、少なくとも切り離さなければならないということは意識された。それは、その妻を通して、また異ジャーティ結婚という行為を通して、彼に悪い規範が付着してしまったからであり、家族全体を低い地位に引きずり込む悪い性質が彼にくっついてしまったからである。その悪い性質が家族全体に影響を及ぼさないように、彼は家族の外に出されなければならないと言えなかった。人類学的に言うならば、サブスタンス・コードの経路を断たなければならないと言えなかったとも言え換えることもできる (Marriott 1976)。アーカースとナミータの結婚は、まずそもそもの婚姻自体が拒否されようとしていた。婚姻を拒否することによって、ナミータが低ジャーティであることによって持っていた不浄性、そして D 家全体を引っばって引きずり込むような地位の低下を拒否しようとした。また、弟や妹たちは彼女を親切だと捉えていた一方で、両親にとって彼女の過去に関する噂はよくないものだった。しかし徐々に、異ジャーティ結婚の成立が周囲に明らかにされていった。だが、異ジャーティの女性と婚姻関係にあるというつながりは明らかになったにしても、同時に D 家は、ナミ

一タとつながってはいない、あるいはつながらないという意思をサマージに対して示し続けなければならなかった。

しかし問題はそこにとどまらなかった。リティクの問題が発生した時にアトルがアーカースを頼ったように、またはリティクが勉強を教えてもらいにアーカースの家へ通っていたように、アーカースのリーダーシップや人間関係や知恵は断続的に利用され続けた。そしてアーカースの資本を部分的に利用しようとしたのと同様に、ナミータの切り離しもまた、部分的にしようとしていたようである。ナミータのある部分、つまり彼女の持つお金と学歴は魅力的だった。また当初はナミータたちにお土産などを渡していたことから、嫌悪の情までは抱いてはいなかったようである。こうして、ナミータとの断続的なつながりも強弱を伴って維持されていたのである。2人は「家族から出」されたが、チョーティーのムンダン儀礼はD家が行い、ダディーの葬送儀礼には3人は参加せず、リティクの婚姻儀礼にも参加せず、しかし婚姻儀礼の参加者はアーカースの家を訪ね、そして今、病気のアーカースの治療に関する相談をしている。アーカースたちが家族なのかどうかはここ数年の間ずっと揺らぎ続け、言行は矛盾し続け、これからもし続けていくのだろうか。これらもまた、ジャーティと婚姻規範を基準にただけでは捉えることのできない価値である。

このことはつまり、現代インドにおけるより「良い」結婚は、ジャーティの論理の中には存在しない価値を必要とするという、根本的な矛盾を示していると指摘できる。婚姻規範に則った結婚がこうした矛盾あるいは限界を持っているとすれば、このような現代社会の主要な価値を取り込みうる異ジャーティ結婚には、現代インドにおける社会上昇の成功のチャンスがあるのではないだろうか。つまり、家族という視点、そしてその家族が時間の経過の中で揺れ動くものだという視点は、異ジャーティ結婚のもつ潜在的な可能性をあぶりだしたといえる。家族はその外部とのつながりの断ち結びを通して、未来へと進む推進力を得る。その細かなつながりの切断と結び合わせはまた、家族の状態を良くも悪くも変えうる。そこには未来のイメージが歴史の中で変わっていき、主要な価値の重要度と序列が歴史の中で変わっていくという背景があり、そしてその中で、家族は再生産されていくのである。

以上を踏まえて、最初の問題に答えていく。現代インドにおいて、人々がどのように婚姻を結び、家族を作っていくのか。調査地の人々は、家族がより良くなるような結婚相手を選ぶ。ただし現代インドにおいて何が良いかは一様ではないというのは、本論文で繰り返し見てきたとおりである。家族となつてからも日々の行為により、家族を維持し続ける。家族の境界は一定ではなく、つながりの断ち結びによって変わるのである。

本論文は、意図的にD家のような問題の多い家族を対象としたように見えるかもしれない。また、また、母方の出身村に住んでいたり、妻方親族と親しかったり、所在を転々としていたりすることなどから、D家が一般的な家族ではないように見えるかもしれない。しかし、確かにD家の姿は現代インドの人々の生き方を表している、とここで主張したい。ダダ(FF)のA村への移住には、兄と世帯を分け、より大きな村へ移住しようとするとい

う動機が考えられる。ガネーシュの B 村への移住も同じ動機によるといえる。より良い生活を求めて移住を厭わない人々の生は第 2 章第 2 節で検討したとおりである。A 村の家の元の持ち主からダディー (FM) たち夫婦への相続も、娘への愛情という観点から理解できる。ダディーは、身寄りのいなかった元の持ち主の男性に、娘同然に可愛がられていたのである。D 家は父方の親族よりも母方の親族と親しいように見えるが、M 村に住む父系リネージであるメールの成員である子供たちのチャチャ (FFBS) たちと決して疎遠ではない。例えば共同で土地を買う話などは、子供たちのモーター (MZH) たちとは決してしない。メールの結びつきはいまだに強い。ただしオーリーやパッキヤートなどの諸儀礼への参加には、牛や山羊を飼っており家族の人数が少ない彼らは、その生活スタイルが違うため、なかなか呼ぶことができない。

アーカースとナミータの異ジャーティ結婚もまた、単なる例外でも、ましてやその失敗事例でもない。インドの家族は今や、異ジャーティや遠方の人そして外国人までも最も親密な人間としてその内部に加える可能性があるほどに、開かれたものなのである。ロハールはロハールと結婚するのが当たり前だと語っていた幼いバルサが、ブラフマンの恋人との結婚の現実的な可能性を想像するようになったのが象徴的であろう。

本論文は、家族という視点を導入することにより、多様なつながり方や価値観を同等に見ることができるようになり、それによって、それらが矛盾しつつも一致するようにと願う、あるいは一致する未来が想像可能になった人々の姿を描いてきたのである。

参考文献

【日本語】

浅野宜之

2011「インドにおける障害者と雇用法制」小林昌之編『開発途上国の障害者雇用—雇用法制と就労実態』調査研究報告書、81-93、アジア経済研究所

岩谷彩子

2009『夢とミメシスの人類学—インドを生き抜く商業移動民ヴァギリ』明石書店

ヴェルス、ジュール

2001『八十日間世界一周』鈴木啓二訳、岩波書店

岡橋秀典

2009「躍進するインドの光と影—経済自由化後の動向をめぐって—」『立命館地理学』21:43-57

岡光信子

2011「学校教育」山下博司・岡光信子編『インドを知る事典』、359-365、東京堂出版

落合淳隆

1964「インド憲法における後進階級の保護規定について」『早稲田法学会誌』14:33-56

小原優貴

2008「インドの教育における留保制度の現状と課題」『京都大学大学院教育学研究科紀要』54:345-358

カパディア、K・M

1969『インドの婚姻と家族』山折哲雄訳、未来社 (Kapadia, K. M., 1958, *Marriage and Family in India*, New York: Indian Branch, Oxford University Press.)

古賀勝郎・高橋明 編

2006『ヒンディー語=日本語辞典』大修館書店

小谷汪之

1994「近代におけるカースト制の変容」『西欧近代との出会い—カースト制度と被差別民第2巻』、17-34、小谷汪之編、明石書店

1996『不可触民とカースト制度の歴史』明石書店

小牧幸代

1997「北インド・ムスリム社会の婚姻儀礼と贈与交換—ウツタル・プラデーシュ州 C 町のサイフィー・ビラーダリーの事例から」『アジア・アフリカ言語文化研究』54:195-214.

佐藤隆広

2004「インドにおける若年層の失業問題」『経済学雑誌』105 (1):70-101.

清水聡

2009「インドの経済成長—長期的な課題と短期見通し」『環太平洋ビジネス情報 RIM』9 (33):44-84

清水徹朗

2006「インドにおける経済・貿易自由化とその影響—グローバルゼーションとインド」『農林金融』2006 (8) 29-40

杉本星子

2006『「女神の村」の民族誌—現代インドの文化資本としての家族・カースト・宗教』風響社

鈴木晋介

2013『つながりのジャーティヤ—スリランカの民族とカースト』法蔵館

高谷紀夫・沼崎一郎

2012「序論」『つながりの文化人類学』、9-31、高谷紀夫・沼崎一郎編、東北大学出版会

デュモン、ルイ

2001『ホモ・ヒエラルキクス—カースト体系とその意味』田中雅一・渡辺公三訳、みすず書房

常田夕美子

2011『ポストコロニアルを生きる—現代インド女性の行為主体性』世界思想社

二階堂有子

2009「グローバル化とインドの経済自由化」『ICES Working Paper』147:1-28

西村祐子

1994「投資としての花嫁持参財—南インド・ナガラッタール・カーストの婚姻」『民族学研究』59 (1):28-53

2005「インドにおける「ダウリ禍」考—婚姻法・財産権およびカースト内婚の視点から」『駒澤大学外国語部研究紀要』34 (1):387-409

信田敏宏、小池誠

2013「生をつなぐ家—過去から未来へ」『生をつなぐ家—親族研究の新たな地平』、1-19、小池誠・信田敏宏編、風響社

速水洋子

2009『差異とつながりの民族誌—北タイ山地カレン社会の民族とジェンダー』世

界思想社

樋口里華

2012「なぜ、その人と結婚するのか—インド都市部における配偶者選択の変化」『九州国際大学国際関係学論集』7 (2):27-50.

ブルデュー、ピエール

2007『結婚戦略—家族と階級の再生産』丸山茂訳、藤原書店

宮崎広和

2009『希望という方法』以文社

八木裕子

1991「儀礼・職能カースト・女性—北インド農村における通過儀礼と吉・凶の観念」『民族学研究』56 (2):181-208.

山崎利男

1994「ヒンドゥー法におけるカースト慣習」『西欧近代との出会い—カースト制度と被差別民第2巻』、37-85、小谷汪之編、明石書店

山下博司

2011a「ヒンドゥー教」山下博司・岡光信子編『インドを知る事典』、23-57、東京堂出版

2011b「スィク教」山下博司・岡光信子編『インドを知る事典』、77-78、東京堂出版

渡瀬信之訳

1991『サンスクリット原典全訳—マヌ法典』中公文庫

【英語】

Bamford, Sandra and James Leach

2009 Pedigrees of Knowledge: Anthropology and Genealogical Method. In *Kinship and Beyond: The Genealogical Model Reconsidered*. Sandra Bamford and James Leach (eds.). 1-23. New York: Berghahn Books.

Béteille, André

1971 *Caste, Class, and Power: Changing Patterns of Stratification in a Tanjore Village*. Berkeley: University of California Press.

1992 Caste and Family: In Representations of Indian Society. *Anthropology Today* 8

(1):13-18

Carsten, Janet

2000 Introduction: Cultures of Relatedness. In *Cultures of Relatedness: New Approaches to the Study of Kinship*. Janet Carsten (ed.). 1-36. Cambridge: Cambridge University Press.

Chakraborti, Haripada

1999 *Hindu Intercaste Marriage in India: Ancient and Modern*. Delhi: Sharada Publishing House.

Chauhan, Chetan

2010 'Don't call them Bimaru states now', Hindustan Times, New Delhi, (<http://www.hindustantimes.com/newdelhi/don-t-call-them-bimaru-states-now/article1-574379.aspx>, 2015年7月13日閱覽) Updated: Jul 19, 2010 01:47.

Chatterjee, Partha

1993 *The Nations and Its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories*. Princeton: Princeton University Press.

Chowdhry, Prem

2004 Private Lives, State Intervention: Cases of Runaway Marriage in Rural North India. *Modern Asian Studies* 38 (1):55-84.

2009 *Contentious Marriages, Eloping Couples: Gender, Caste, and Patriarchy in Northern India*. New Delhi: Oxford University Press.

Corwin, Lauren A.

1977 Caste, Class and the Love-Marriage: Social Change in India. *Journal of Marriage and Family* 39 (4):823-831.

Crooke, William

1999 (1896) *The Tribes and Castes of the North-Western Provinces and Oudh*. Vol.3. New Delhi: Asian Educational Services.

Dhingra, I. C.

2010. *Indian Economic Development*. New Delhi: Sultan Chand & Sons.

Doron, Assa

2012 Mobile Persons: Cell phones, Gender and the Self in North India. *Asia Pacific Journal of Anthropology* 13 (5):414-433.

Edwards, Jeanette and Marilyn Strathern

2000 Including Our Own. In *Cultures of Relatedness: New Approaches to the Study of Kinship*. Janet Carsten (ed.). 149-166. Cambridge: Cambridge University Press.

Freed, Ruth S. and Stanley A. Freed

1993 *Ghosts: Life and Death in North India*. Seattle: University of Washington Press.

Fruzzetti, Lina M.

- 1994 *The Gift of a Virgin: Women, Marriage, and Ritual in a Bengali Society*. Delhi: Oxford University Press.
- Fuller, C. J. and Haripriya Narasimhan
2008. Companionate Marriage in India: the Changing Marriage System in a Middleclass Brahman Subcaste. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 14 (4):736-754.
- Gillespie, Susan D.
2000 Beyond Kinship: An Introduction. In *Beyond Kinship: Social and Material Reproduction in House Societies*. Rosemary A Joyce and Susan D. Gillespie (eds.). 1-21. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Gold, Ann Grodzins
1988 *Fruitful Journeys: The Ways of Rajasthani Pilgrims*. Illinois: Waveland Press, Inc.
- Gupta, Swarupa
2006 Notions of Nationhood in Bengal: Perspectives on *Samaj*, 1867-1995. *Modern Asian Studies* 40 (2):273-302.
- Harlan, Lindsey and Paul B. Courtright
1995 Introduction: On Hindu Marriage and Its Margins, In *From the Margins of Hindu Marriage: Essays on Gender, Religion, and Culture*, Lindsey Harlan and Paul B. Courtright (eds.). 1-18. New York: Oxford University Press.
- Jain, Ravindra K.
1979. Kinship, Territory and Property in Pre-British Bundelkhand. *Economic and Political Weekly* 14 (22):946-950.
- Jauregui, Beatrice and Tara McGuinness
2003 Inter-Community Marriage and Social Change in Contemporary India: Hybridity, Selectivity and Transnational Flows. *South Asia: Journal of South Asian Studies* 26 (1):71-85.
- Kalpagam, U.
2008 Marriage Norms, Choice and Aspirations of Rural Women. *Economic and Political Weekly* 43 (21):53-63.
- Kapadia, K.
1997 Gender Relations, the Organization of Agricultural and Non-Farm Employment and Modes of Labour Protest in These Sectors. In 『ジェンダーと「第三世界の女性たち」』 33-51. 内山田康編、財団法人国際開発高等教育機構
- Kaur, R.
2004 Across-Region Marriages: Poverty, Female Migration and the Sex Ratio. *Economic and Political Weekly* 39 (25): 2595-2603.
- Kawadia, Ganesh and Sheena Sara Philips

2014. Shedding the BIMARU tag: Madhya Pradesh, Bihar and Rajasthan. *Economic & Political Weekly* 49 (31)
- Lambert, Helen
- 2000 Sentiment and Substances in North Indian forms of Relatedness. In *Cultures of Relatedness: New Approaches to the Study of Kinship*. Janet Carsten (ed.). 73-89. Cambridge: Cambridge University Press.
- Madan, Triloki N.
- 1975 Structural Implications of Marriage in North India: Wife-givers and Wife-takers among the Pandits of Kashmir. In *Contributions to Indian sociology* 9 (2):217-243.
- Marriott, McKim
- 1976 Hindu Transactions: Diversity Without Dualism. In *Transaction and Meaning: Directions in the Anthropology of Exchange and Symbolic Behavior*. Bruce Kapferer (ed.). 109-142. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.
- Miller, Eric J.
- 1954 Caste and Territory in Malabar. *American Anthropologist* 56 (3):410-420.
- Nicholas, Ralph W.
- 1995 The Effectiveness of the Hindu Sacrament (*Samskāra*): Caste, Marriage, and Divorce in Bengali Culture. In *From the Margins of Hindu Marriage: Essays on Gender, Religion, and Culture*. Lindsey Harlan and Paul B. Courtright (eds). 137-159. New York: Oxford University Press.
- Parry, Jonathan P.
- 2001 Ankalu's Errant Wife: Sex, Marriage and Industry in Contemporary Chhattisgarh. *Modern Asian Studies* 35 (4):783-820.
- Pocock, D. F.
- 1954 The Hypergamy of the Patidars. In *Professor Ghurye Felicitation Volume*. K. M. Kapadia (ed.). 195-204. Bombay: Popular Book Depot.
- Raheja, Gloria Goodwin
- 1988 *The Poison in the Gift: Ritual, Prestation, and the Dominant Caste in a North Indian Village*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Searle-Chatterjee, Mary and Ursula Sharma
- 1994 Introduction. In *Contextualizing Caste*. Mary Searle-Chatterjee and Ursula Sharma (eds.). 1-24. Oxford: Blackwell Publishers.
- Sharma, Amit Kumar
- 2011 *Symbols of Kinship in a North Indian Village*. Saarbrücken: LAP LAMBERT Academic Publishing.
- Sharma, Ursula

1984 Dowry in North India: Its Consequences for Women. In *Women and Property: Women as Property*. Renee Hirschon (ed.). 62-74. London: Croom Helm.

Srinivas, Mysore Narasimhachar

1966 *Social Change in Modern India*. Berkeley: University of California Press.

1976 *The Remembered Village*. Berkeley: University of California Press.

Tenhunen, Sirpa

1999 Urban hierarchies in Flux: Arranged Intercaste Marriages in Calcutta. In *Changing Patterns of Kinship and Family in India: proceedings from an international symposium to celebrate India's 50 years of independence at the University of Helsinki, 6th May 1998*. Asko Parpola and Sirpa Tenhunen (eds.). Helsinki: Finnish Oriental Society.

Trawick, Margaret

1992 *Notes on Love in a Tamil Family*. Berkeley: University of California Press.

Uberoi, Patricia

2006 *Freedom and Destiny: Gender, Family, and Popular Culture in India*. New Delhi: Oxford University Press.

【関連法規】

障害者(機会均等、権利保護および完全参加)法 Persons with Disabilities (Equal Opportunities, Protection of Rights and Full Participation) Act – 1995 (Act No.1 of 1996, 1st January 1996)

<http://dredf.org/legal-advocacy/international-disability-rights/international-laws/india-persons-with-disabilities-act/> (最終アクセス 2015/07/29)

ダウリ禁止法 The Dowry Prohibition Act – 1961 (Act No.28 of 1961, 20th May 1961)

<http://wcd.nic.in/dowryprohibitionact.htm> (最終アクセス 2013/09/10)

ヒन्दウー婚姻法 The Hindu Marriage Act – 1955 (Act No.25 of 1955, 18th May 1955)

<http://indiankanoon.org/doc/590166/> (最終アクセス 2013/08/30)

特別婚姻法 The Special Marriage Act – 1954 (Act No.43 of 1954, 9th October 1954)

<http://www.legalserviceindia.com/helpline/marriage.htm> (最終アクセス 2013/08/30)

【ホームページ】

census2011

<http://www.census2011.co.in/> (最終アクセス 2015 年 11 月 25 日)

Lohars. Org

<http://www.lohars.org/> (最終アクセス 2015 年 10 月 20 日)

People Groups of India

<http://www.peoplegroupsindia.com/profiles/kalwar/> (最終アクセス 2015 年 10 月 20 日)

Vishwakarma (Caste)

<https://www.facebook.com/VishwakarmanGoldsmith> (最終アクセス 2015 年 10 月 20 日)

Vishwakarma Mahasabha

<http://www.vishwakarmamahasabha.com/inner-page.html> (最終アクセス 2015 年 10 月 20 日)

Vishwakarma Samaj

<http://www.vishwakarmasamaja.com/aboutus.html> (最終アクセス 2015 年 10 月 20 日)

付録1 A村にある学校（6年生以上のもの）

公／私	学年	備考
私	6～12	
私	1～10	
私	UKG～10	ミッションスクール
私	1～10	
公	6～12	
公	6～12	
公	6～10	
公	6～12	
公	1～12	
公	BA、MA	
公	教師養成	
公	ポリテクニク	
公	ITI	
公	会計	

※すべてヒンディー語メディアム Hindi medium
 （聞き取りをもとに筆者作成）

付録2 婚姻相手候補を見に行く：ラヴィの事例

女の子側が訪ねてくる

ラヴィは20歳くらいの、野菜作りジャーティのクスワーハー (*kuśvāhā*) の男の子である。レンガとコンクリートの建物を建てる熟練職人の父、野菜売りの母、学生の妹の、4人家族の長男である。彼自身は石工の職人でもあり、野菜売りもする。明るくて面白くて、彼の周りには笑いが絶えない。よく噛み煙草を嗜んでいるので誤解されやすいが、実は酒も吸うほうの煙草もやらない、意外とまじめな男の子だ。

ある日ラヴィを見に、同じジャーティの女の子の父が来た。A村に嫁に来た、女の子の姉を通じての紹介だ。その話は瞬く間に近所中に広まり、みんなラヴィに会うたびににやついている。まだ訪問者が帰る前に私の耳にも入っていた。教えてくれたガネーシュは、きっと数日以内にラヴィの父が女の子の家を訪問するだろうと言った。私は一緒に連れて行ってくれるようラヴィに頼んだ。ラヴィにはちゃんと女の子の写真を撮ってくるようにと頼まれた。

女の子の家へ行く

数日後、いよいよ女の子を見に行くことになった。運転手つきでチャーターした車に、集まった人々が乗り込む。そのとき、ガネーシュが、学校に行っているラヴィの妹を連れてくるようにといった。ラヴィの母と合う嫁がどんな女の子が一番わかるのは妹だろうから、ということだった。すぐに皆が賛同し、ラヴィがバイクで学校まで妹を迎えに行く。早退して帰ってきた妹は、制服のまま家にも寄らずに車に乗り込んだ。女の子を見に行ったのは、以下の成員である。

1. 父
2. 妹
3. MB
4. MB
5. MB
6. 同じジャーティの人←仲介人
7. 女の子の姉（同じ村に住んでいる）
8. 7の夫
9. 近所の人
10. 近所の人（ラヴィと同世代の友人）
11. ガネーシュ
12. 私
13. 運転手

ラヴィの父と妹の他に、3、4、5がラヴィのママ、つまりMBである。ラヴィの母の弟が

1人と、イトコ兄弟が2人。6、7、8が両家の間にたつ同じジャーティの人。9、10、11、12が近所の人、特に10はラヴィと同世代の男の子で、他の人には聞きにくいような女の子の印象をラヴィに伝える役として行くことになったのだろう。11は私の付き添いでもあるが、人と話すのが得意で押しの強い性格でもあるところが交渉ごとには頼りになる。

女の子の家でのもてなし

出発は午前11時半ごろである。女の子の村は、A村から車で1時間ほどの場所にある。たどり着いた家は、大家族が住む大きな家だった。家族が仲良く一緒に暮らしているのは印象が良い。家の外は牛糞と土で葺き清められ、座るためのプラスチックの椅子や紐で編まれた簡易ベッドが並べられている。私たちが座ると、まず女の子の父がやってきて、私たち全員の足を触って挨拶をした。水を持ってきて全員に振る舞い、噛みタバコ、噛みタバコに混ぜる石灰のペースト、一緒に噛むビンロウジュの葉、安い葉巻タバコ、少し高価な紙巻タバコ、マッチを、お盆に載せて持ってきた。男性たちはそれぞれに好みのものをとる。私とラヴィの妹は、くっついて座りながらそれを見ている。

次に女の子のチャチャ（FB）が来て、やはり私たち全員の足を触って挨拶をした。そしてチャイ、ビスケット、塩味のスナック、水を持ってきて振る舞う。それを食べながら、学校に行っているという女の子の帰りを待つ。しばらくすると私と妹は家の中に招き入れられた。中では食事作りの真っ最中で、女性たちが大人数で料理をしていた。A村から一緒に来た女の子の姉も、来ていたよそゆきのサリーを脱ぎ、誰かから借りたのか、普段着のサリーを来て料理に加わっている。プーリー（*pūrī*、揚げパン）とサブジ（*sabji*、野菜や肉を使ったスパイシーな料理）、漬物という、客が来た時の定番の料理ができあがる。別の部屋に通されたらしい男性たちのためにプレートに盛られた食事が運ばれていく。私と妹には、その台所の部屋で給仕された。

女の子を見る

ご飯を食べている途中、女の子とその姉妹たちが学校から帰ってきた。さっそく台所横の部屋に入って、皆で着替えを始めた。さんざん時間をかけておめかしが終わった時、間に立って紹介をした男性が入ってきて、女の子はシンプルな格好をしたほうがよいというアドバイスをした。結局女の子は再び制服を着て、A村から来た男性たちに水を持って行かされた。その後戻ってきて、また着替えをする。

私と妹は、他の姉妹たちに誘われてテレビの置いてある部屋へ行き、お喋りをしながらドラマを見ていた。しかし会話が弾まない。妹は飽きてしまい、結局2人で外へ行き座っていた。嫁候補の女の子が来て、私と妹と一緒に座る。妹も女の子も、ほとんど喋らない。私が質問し、女の子がポツリポツリと答える。女の子がどこかへ行き、私と妹はぶらぶらしながら時を過ごす。

その間に別の部屋では、女の子に対して男性たちが色々と質問していたらしい。そのう

ち私と妹が呼ばれた。行ってみると、牛が繋がれた広い中庭で、女の子がプラスチックの椅子に座っている。その周りをぐるりと男性たちが取り囲んでいる。女の子の膝には菓子の箱と、101 ルピーが置かれている。私が呼ばれたのは、女の子の写真をデジタルカメラで撮るためだった。笑ってと声をかけたが、彼女は笑わない。彼女は笑わないよと、ラヴィの友人の男の子も言う。

帰り際に、再び私と妹が台所の部屋に呼ばれた。彼女たちのカメラつき携帯電話で、女の子と妹と私の写真を撮る。さらに私と妹は年配の女性から足を触る挨拶をされ、11 ルピーずつを渡された。また1時間かけて帰ってきた。A村に着いたのは午後6時だった。

報告、その後

親戚たちはさっそく家へ入りラヴィの母親に報告する。ガネーシュと私は、そのまま自分たちの家に帰る。しばらくするとラヴィが友人と一緒にやってきて、私のカメラで女の子の顔を確認する。感想は特に述べない。ラヴィの親戚がガネーシュを呼びにやってくる。ラヴィの母親が、ガネーシュが受けた、女の子とその家族と家に対する印象を聞きたいという。

女の子の父は、オーリーを急かしていた。帰り際にもう、オーリーはいつできるかと仲介役の人に聞いていた。ラヴィの父は返事を延ばした。相手は少ないお金での結婚を望んでいると、感じられた。何よりも、向こうはラヴィを見に来た時、ラヴィに何も贈らなかった。向こうの家にはたくさん娘がいて、早く安く結婚させたいのだろうという印象を受けた。ラヴィを特別に気に入って望んでいるという風には見えなかった。

見に行った女の子はそんなに美人ではなかった。太っていたし、ちょっと老けていた。まあラヴィもそんなに美男子というわけではないが、17、8歳ということだがまだ9年生で、そして、もっと勉強を続けることを望んでいた。

ラヴィの母は1人息子のために、良い条件の女の子と盛大な婚姻儀礼を挙げたいと望んでいる。そして、もう1人嫁候補がいた。ラヴィの母が野菜を仕入れに行っている先の娘で、彼女の母が勤めを持っているほか、携帯電話の電波塔に土地を貸していて、それだけで月7,000ルピーの収入がある。ラヴィも相手の女の子を知っていて、気に入っているらしい。彼らがラヴィを見に来てくれることになっている。

結局、私がラヴィのために女の子を見に行ったこの結婚話は、破談になった。

付録3 独身であることについて

本論文で述べてきたのは、婚姻が自明視され重要視されている調査地の状況であった。子供を結婚させることは親や親族のつとめであり、そのために家族や親戚は奔走する。子供が生まれたときから親は子供の結婚のタイミング、結婚相手のこと、その出費のことを考え続け話し合い続けながら生きてきており、実際にその準備を長い時間をかけて行っている。それにもかかわらず、もちろん調査地にも、結婚しなかった男女はいる。ここでは、調査地で独身であることの意味を例示する。

結婚できなかった男性たち

結婚させる過程が男女で異なるため、結婚しなかった事情も男女では異なっている。男性の場合、自分から結婚相手を探すことはできず、女の子側の申し込みを待たなければならない。それゆえ、仕事をしていなかったり評判が悪かったり、何か足りないところがあると、望んでも結婚できないことがある。

以下の3つの事例は、調査地で私のごく身近にいた、3人の世俗に生きる未婚の年配男性の、結婚できなかった事情である。

事例：独身男性の事情

- ① あるブラフマンの男性は、地域でも有名な裕福な家の長男だった。両親は結婚させようとしていたし、たくさん申し込みは来ていた。しかしあるとき弟が殺され、その復讐として彼は相手を殺した。その後5年間の逃亡の末逮捕され、5年間牢屋にいた間に、結婚適齢期を逃した。
- ② あるブラフマンの男性はやはり裕福な家の息子だったが、両親が早くに亡くなり、兄が彼の結婚のために努力をせず、また彼自身体も弱かったので、申し込みが来ず、結婚適齢期を逃した。
- ③ ある低ジャーティの男性は一家の長男だったが、酒を飲んでほっつき歩いていたために、申し込みが来なかった。

これらの3つの事例からわかることは、その男性に何か不足があるか、男性の家族や親族が結婚させる努力を怠るか、適齢期が過ぎるか、という3つの条件のうちのどれか、または複数が重なると、男性は結婚できない可能性が高いということである。

事実、現在適齢期を迎えている若い男の子の婚姻に関する噂話でも、この3点の条件に言及してあの人は結婚できなそうだ、などと語られることがある。男の子の場合は女の子

側の家族に訪ねて来てもらわなければ話が始まらないので、生活態度を改め、しっかり仕事をし、皆に丁寧な口の聞き方をし、周囲の評判を上げることを心がけなければならないという。

結婚しなかった女性たち

女性の場合、両親が愛情を持っていれば、何とかしていかなる方法をとっても、どんな相手でも、それが娘の幸せだと信じれば、婚姻相手を見つける努力をするという。例えば前項の男性たちのような歳をとった人とでも結婚させる。しかし逆に、よほど素行が悪くて両親に見捨てられれば、自力で結婚する努力をするしかない。自分の代わりに探し訪ねてくれる人がいないと、向こうから来てくれることはないからである。

以下の事例は、2012年当時28歳の男の子に、今までの人生で出会った中で結婚していない女性は何人いるかを聞いたところ、少し考えて5人の女性を挙げてくれたものである。私自身は、フィールドワーク中に親しくなった人の中で、未婚の女性には会わなかった。

事例：独身女性の事情

- ① 大学時代に一人の男の子と恋に落ち、双方の両親に伝えたが、ジャーティの違いにより反対された。相手の男の子は別の女性と結婚したが、彼女は一生結婚しないと宣言し、周囲のプレッシャーにも負けず30代半ばまで独身である。職あり。
- ② 兄弟がおらず、たった一人の姉は結婚して家を出ていた。結婚話はあったが、結婚後、彼女の両親と一緒に住むという条件が通らずに、結婚を諦めて親の世話をすることを決意した。姉の息子と住み、部屋貸しと父親が生前作ったジェネラルストアの経営によって生計をたてている。
- ③ 公立学校の教師だが、同時に出家して寺院で暮らしている。
- ④ 事例③の女性の友人。保険会社に勤め、親と暮らしているが、寺院に多く住む。結婚しない宣言をし、もし強制したら毒を飲んで自殺するといっている。
- ⑤ 事例を語ってくれた男の子はあまり親しくないのですが、おそらく過去に愛した人がいたのだと思う、という。

結婚できない男性たちは、本人や家族に足りないところがあるために結婚できないことが多いが、女性たちは結婚できなかったというよりはしなかった人が多いようである。しかしこれらの事例で結婚しないことを選べたのは、職を持っている女性が多い。つまり、

少なくとも彼女たちは扶養関係からは自由であると言える。事例③や④の女性などは、半分出家のような状態になっていることが、結婚しない理由として語られている。やはり神に帰依することは、普通の結婚をする人生とは別の生き方をする理由となりうるのだろう。しかしそれも完全に受け入れられた考えではないようだ。事例④の女性はそれでも結婚のプレッシャーを受けている。しかし彼女たちは職を持ち、給料を得た上で独身を貫いており、独立した身を盾に、結婚しないという選択を可能にしている。

結婚しない女性たちに関して、事例を語ってくれた男の子の叔父にも質問したが、男の子とその叔父の、彼女たちへの評価はかなり違うものだった。叔父は、最近の積極的に恋愛をするようなふしだらで親にも見捨てられた女の子が、それでも賢く自分の力で結婚して不幸せな結果になっている、という一連のイメージを持っている。その一方で、男の子は結婚しない女性たちに対して一般化して否定的なイメージは持っていない。それは「真実の愛」を貫いた結果であると考えられているからである。しかし実際はこの叔父のように、結婚しない女性に対して、道徳的に否定的に見る視線があることは間違いない。

未婚の彼女たちに結婚するようにとのプレッシャーがあるということは、逆に言えば、女性の場合、望みさえすればどんな悪い条件の相手であったとしても結婚できるということだろう。まずインドの男女の人口比は女性のほうが少ない。また結婚しなかった男性たちに比べ、女性たちの数は少ない。そして結婚相手を積極的に探しに行き自身を売り込むことができるのは女性の側なのである。それゆえ、もし女の子本人に結婚の意思がありさえすれば、相手の条件さえ問わなければ結婚できるといえる。

それでも結婚させる方法

女の子を結婚させるには、結婚相手に求める条件を大幅に下げるという方法があった。では、男の子を結婚させるためにはどのような方法があるのか。誰からも申し込みが来ないような男の子たちをそれでも結婚させたい場合、遠く離れた地域から女の子をお金を払って連れてくるという方法がある²⁴⁴。調査地の村でよく挙げられる地名は、オディチャー州である。オディチャーの貧しい家庭から女の子を紹介する斡旋ルートがあるというが、その存在は確かめられなかった。しかしオディチャーがどこにあるかも知らない調査地の人々にも、そこはとても貧しい地域であり、それゆえ娘を売らなければならないのだというイメージが存在する。

また MP 州南東部の地域からも、女の子たちが結婚するためにやってくるという。これは一人、車の運転手をしてきた男の子が、実際にその婚姻儀礼に運転手として参加したとい

²⁴⁴ 調査地のヒンドゥーは、結婚に際して、持参財（ダヘージ）の形で女の子側がお金を払う。一部トライブの間では男の子側が女の子側にお金を払う習慣があるが、それは一般的なカーストヒンドゥーの間での方法ではない。また、通常婚姻儀礼は、男の子側が女の子側の家へ行き、女の子の家で儀礼が行われ、妻を連れて男の子は家へ帰ってくる。男の子の家に女の子が来て、そこで婚姻儀礼が行われるのもまた、通常とは逆のやり方である。

う話を聞いた。そのように女の子を連れてきて結婚させるという話は「女の子をお金で買ってくる」と侮蔑的に表現されるが、実際に婚姻儀礼を見た彼が言うには、少なくともその婚姻では、男の子側が支払ったお金で女の子の家族は女の子のために装身具を買って与え、自分たちのためにお金は残していなかったという。

お金を払って女の子に嫁に来てもらうという話は調査地では決して珍しくはないが、できれば選びたくない方法である。金銭的に不利益になるだけでなく、イメージも悪い。しかし積極的にそのような選択をしなくても、それは起こることもある。

以下に、ある兄弟がお金を渡して女の子が妻としてやってきた事例を記す。2012年に、この兄弟のイトコ（FBS）から聞いた話である。なおこの事例は、上記の2つの地域とは関係ない。

事例：お金を払って妻が来た

13年前、当時50歳と43歳の未婚の兄弟が住んでいた。両親は既に亡くなっていた。近くの村から、一組の夫婦が、妻の妹ラクシュミ、当時14、5歳を連れて、彼らの家へやってきた。兄は10,000ルピーを夫婦に渡し、ラクシュミを引き取った。夫婦はその後姿を消し、現在まで誰もその行方を知らない。

事情はこうだ。ラクシュミの村は兄弟の村から約300km離れたところにある。ラクシュミの両親が夜、森へ薪を採りに行って不在だったとき、義兄が突然やってきて、姉の具合が悪いので急いで来いと言った。近所の人に不在の両親への伝言を頼み、ラクシュミは義兄についていった。しかし義兄は、自分の村にラクシュミを連れて行かず、数日間別の場所にラクシュミを隠した。その間に兄弟の兄と義兄の間で話し合いが行われ、10,000ルピーで女の子を渡すという話がまとまった。兄は弟と結婚させるためにお金を渡しラクシュミを家へおいた。母が死んで以来、この家族には女性がいなかったが、実際のところ家族のために女性が1人は必要だと考えたからである。

これは明らかに犯罪に関わった行為である。すぐにサマージでの話し合いが開かれた。親戚と、村の様々なジャーティの人々が集まり、この婚姻の是非について話し合いをし、結果、良しとした。というよりも良しとせざるを得なかった。なぜならば、ラクシュミと引き換えにもうお金は渡してしまったし、姉夫婦は誘拐するようにラクシュミを連れてきたため警察に捜索届けが出ているであろうから、誰も彼女を両親のところに連れて帰ることはできなかったし、当の2人は姿を消していたし、何よりもラクシュミは同じジャーティの女の子だったからである。周囲の人々は警察沙汰になることを恐れ、弟とラクシュミの結婚を了承した。

そこで、普通に兄弟の村で婚姻儀礼が行われた。カンニャーダーン（処女の贈与）は、村のターコル（クシャトリヤ）が行った。ラクシュミの両親も兄弟も、誰も今ラクシュミがどこで何をしているか知らない。ラクシュミにも、もう二度と自分の

村へ行き家族に会う気持ちはない。

ラクシュミには現在11～2歳と5～6歳の2人の娘がいる。彼女は、私が彼女の結婚の事情を知っていることを知らない。私は前から彼女のことをチャチー（FBW）と呼んでおり、私は彼女の類別的姪（HBD）であり、彼女の夫は確かに私の父親世代であるが、実は私とラクシュミは、ほぼ同年だったのだ。前に彼女に、人生で楽しかった思い出を尋ねたことがある。そのとき彼女は、お金を貯めて近所の女性たちとブンドルカンド地方の聖地に巡礼旅行に行ったことを挙げた。彼女はこの村でしっかりと関係を築いている。

この事例のポイントは、通常あるように女の子側が男の子側にお金や贈り物を渡すのは逆に、男の子側がお金を払って結婚する方法もあるということである。結婚相手に求める条件の総合評価の中で、お金は男女のもつ条件に基づいた総合得点の調整役のような存在だった。つまり、条件が良い男の子とつり合わせて結婚させるために、条件が足りない娘にその分のお金をダヘージとしてつける、というイメージである。それが、男の子の条件があまりにも低いために状況が逆転すると、今度は男の子側がお金をつけなければ男女のつり合いがとれなくなるのだろう。仕組みとしてはそうなるのは当然なのかもしれない。

このことは、通常とは逆のやり方であるだけでなく、「女の子を金で買う」という表現に表れているように、軽蔑すべきやり方でもある。どことなく犯罪の匂いもするようだ。この方法の結婚でもう一つ逆なのが、男の子の家で婚姻儀礼を行うということである。しかしこれは、安く婚姻儀礼を上げるための一つの方法として認められてもいる。カンニャーダーンを父親ではない人が行うことも珍しくはない。となるとここで違和感があるのは、やはり男の子側がお金を払って女の子が嫁に来る、ということである。

しかし、お金を払って来てもらった嫁たちは、その後の生活において軽蔑され区別され続けるわけではない。ラクシュミも、普通のヒンドゥー既婚女性として近所の人や親戚とも交流を持っている。そもそも夫となる男の子の家族が、嫁が来ないよりはお金を払ってでも貧しい家族の女の子に来てもらったほうがよいという判断をしているわけである。つまりこれは決して公には語られない方法である。決まりとしてはない。実際に行われる前は、一般化されてこういう方法がある、相手がない時はこうやってよいなどと語られることすらないが、しかし実践においては存在する方法である。それは、起こってから（もしくは起こりつつあるときに）、個別的に可とされる方法である。むしろ重要なのは、サマージの承認を得るということと、婚姻儀礼を行うということであると考えられる。

この事例においても、重要なのはサマージの決定であった。ここでは、親戚、ジャーティ、地域という、三種類の集団に属する人々が話し合いに参加した。そして結婚を許可する決め手となったのは、ラクシュミが兄弟と同じジャーティだということであった。

ここで一つの疑問は、ラクシュミがなぜ、自分の村に帰って両親や家族に会うことを拒むのか、ということである。本人にも、家に帰らないのかと聞いてみたが、「帰らないの」

と笑いながら言うばかりだった。その理由は、すごく遠いから、ということだった。おそらく彼女は、かつてサマージの人々がそうだったように、警察沙汰になることを恐れているのだろう。警察沙汰になった時に逮捕されたり罰金を取られたり面倒なことになるのは、自分の夫と義理の兄なのである。現在のラクシュミの家族の生活は、彼らにかかっている。生活が壊され、娘たちの人生も悲しいものになってしまうかもしれない。そういった可能性を避けるためには、危険は冒さないほうがよいとラクシュミは考えているのだろう。

ラクシュミは、他の女の子たちよりも少し早く、少し唐突に結婚し、他の人より少し徹底的に実家との交流がない——ただそれだけのことなのかもしれない。10代前半の結婚も、いきなりの結婚も、他に例がないわけではない。そして女性たちは、婚姻儀礼の後は夫の家族の一員として死ぬまで生きていくことになる。ラクシュミの婚姻生活は、前項で述べた独身者たちに比べれば「普通の」人生に近いのかもしれない。

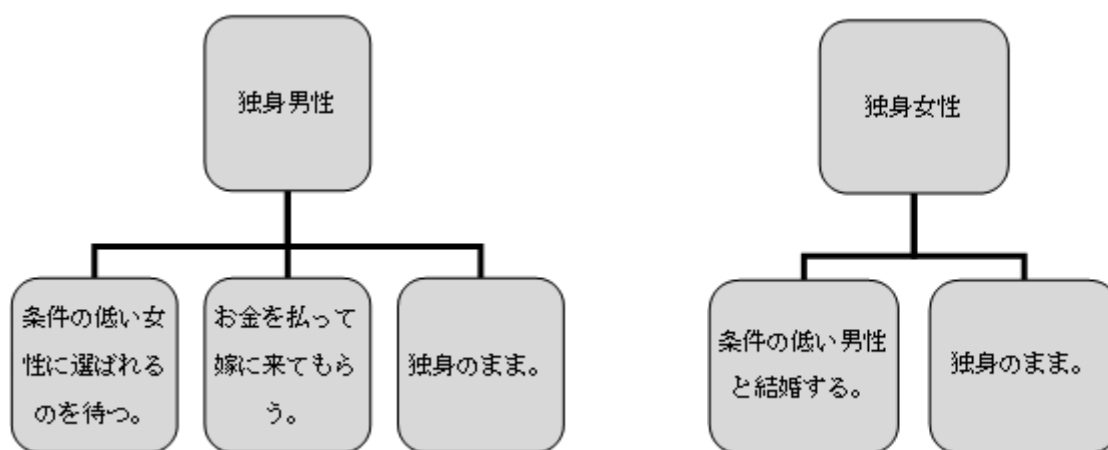


図. 独身の男女が辿る方法
(聞き取りをもとに筆者作成)

付録4 バーグヴァトプラーンの日程

2012年1月

- 12日(木) B村からグルマハラージが来てプーミプージャ、敷地内の下足が禁止に。
- 16日(月) ステージに飾る、儀礼の内容を大書した大きな幕の注文。
- 18日(水) ガスコンロ、カーペット、大きい2つのスピーカーが来る。
- 19日(木) 家の瓦を全部敷きなおし。
儀礼をする場所の掃除。
麦のより分け。
- 20日(金) カーペット、看板の幕、ベッドカバー、黄色の旗、竹の竿、水のヒーター。
電話でオーディオの注文。
中庭を牛糞で葺く、壁の汚いところと木を石灰で塗る。
麦を洗って乾かす。
テントを張る人が見に来る。
- 21日(土) 招待状を手渡しするためにアトルとアシスが出かける。
壁塗り続き。
- 22日(日) 朝から大掃除。
プージャ用品、生活用品のリストを作って買い物。
マイク、スピーカー等セッティング。
半分テントを張る。
アニータ (FFBSW)、娘を連れて到着
水を溜めるタンクを借りる。
夜、ナイの女性を呼んで、明日の朝隣近所に呼びかけるよう指示をする。
- 23日(月) マンゴーの枝の飾り作り。テント張り。敷物、飾りつけ。
ヴィッディー (FBD) が子供たちを連れて到着。
初日。マハーカーレシュワル寺院から自宅までの行列。
- 24日(火)
- 25日(水) クリシュナ誕生日
- 26日(木)
- 27日(金) ルクミニ結婚式
- 28日(土) バサントパンチュミー、スダマチャリトラ
- 29日(日) 護摩行。会食。招待客が次々に押し寄せる。
- 30日(月) 最終日。自宅から池までの行列。
- 31日(火) 皆帰る。

付録5 マリッジハウスのサービス内容

花婿行列用	ピックアップトラックディスコ ロードライト 太鼓2人 馬1頭
マリッジハウス用	フロアディスコ 花首飾り マリッジハウス使用料 人件費(料理、掃除)
食事	昼食50人分 会食300人分 朝食 チャイ
計 42,500 ルピー	

(聞き取りをもとに筆者作成)

付録6 ハルドールの物語

ハルドールはオルチャ（Orcha、ブンデルカンド地方北部の都市）の王の弟だった。王弟のハルドールは、バビー（eBW）である王妃を母と思って慕っていた。しかし王の廷臣が、王妃がハルドールに恋をしていると王に告げ口をした。

それを聞いた王は王妃に、ハルドールに毒を盛れと命じた。王妃はハルドールに、これは毒ですと伝えながら毒を与えた。ハルドールはその毒入りの食物を喜んで食べ、死んだ。

ハルドールの姉のクンジャ（*kunjā*）は、バビーが弟に毒を盛ったのを知って悲しんだ。クンジャは娘の婚姻儀礼のときに、死んだハルドールを、「あなたのバンジー（ZD）の婚姻儀礼に必ず来てください」と招待した。

そんなある晩、オルチャのバニヤ（*baniyā*、商人）の夢に、王宮にハルドールの宝があることが告げられた。宝を見つけたバニヤは、「これはハルドールが婚姻儀礼をする娘にあげたものです」と言って持ってきた。

それを聞いた娘の花婿が「ハルドールの姿を見せてくれ。見せてくれるまで、花婿行列の人々は食事をしない」と言った。花婿行列の人々が食事をしてくれないことは、花嫁の家族にとっては大変な恥である。

するとハルドールママ（MB）の声がして、「私は死んでいて体は見せられないが、一つの手を見せ、その手であなたに食べさせます。なのでどうか食事をしてください」と言った。さらに続けてその声は、「ブンデルカンドで、私ハルドールを婚姻儀礼に呼んだら必ず来るよ」と言った。

ハルドールは、ブンデルカンドの全女性の兄弟であり、すべての子供たちのママ（MB）なのである。それゆえブンデルカンドのすべての村には、ハルドールの像があり、婚姻儀礼の前には母の実家の村で、あなたの姉妹の子供の婚姻儀礼に来てくださいとハルドールを招待するのである。

（ガネーシュの語りを元に筆者収録）

付録 7 婚姻儀礼での仕事

ジャーティ名	仕事内容	仕事をした人	備考	イナーム <i>inām</i> ²⁴⁵
バライー <i>barhāī</i>	マンダップ作り	B 村の友人		500 ルピー+サリー1
ディーマル <i>dhīmar</i>	(水汲み)、食器洗い	B 村の		1500 ルピー+サリー1
クムハール <i>kumhār</i>	土器	B 村の	A 村の友人のクムハールが電車で運んでくると言ったが、割れ物なのであきらめた。	500 ルピー+サリー1
ロハール <i>luhār</i> ²⁴⁶	(カンカン)	既製品	既製品を買って用意してあったが、招待客のロハールが持ってきてくれた。	101 ルピー+5 つの食器
ナイ <i>nāī</i>	招待、補助的作業	A 村、B 村の	A 村のナイに頼んでいたが、1 日しかこられないというので、B 村で慌てて探した。当日には両方来た。	1100 ルピー+サリー1、女の子側のナイに 1200 ルピー+サリー1
パンディット <i>paṇḍit</i>	儀礼執行	B 村のグルマハラージ		男の子側と女の子側それぞれに 1200 ルピーずつ
ディーマル、カーチャー <i>dhīmar kāchī</i> ²⁴⁷	(料理)	マリッジハウスのセット		
バソール <i>basor</i>	(外の掃除)	マリッジハウスのセット		
ダルジー <i>darjī</i> ²⁴⁸	(服)	既製品		
マーリー <i>mālī</i> ²⁴⁹	花、フルマラー	マリッジハウスのセット、B 村の	マリッジハウスのセット、しかし手違いがあったので、B 村で慌てて探した。	
バソール <i>basor</i>	太鼓打ち	B 村の		1100 ルピー+サリー1

²⁴⁵ 仕事の対価として与える報酬。

²⁴⁶ 鉄鍛冶をおもな生業としてきたジャーティ。

²⁴⁷ 野菜の栽培や販売をおもな生業としてきたジャーティ。

²⁴⁸ 裁縫をおもな生業としてきたジャーティ。

²⁴⁹ 主として庭師の仕事をしてきたジャーティ。

カーチー <i>kāchī</i>	マルワーイー <i>maṛvāī</i> ²⁵⁰	B 村の		551 ルピー+サリー1
----------------------	--	------	--	--------------

(聞き取りをもとに筆者作成)

²⁵⁰ マンダップを作るときにその中心に立てる装飾した木の杭。

付録 8 チェラーオでの花婿の家族から花嫁への贈り物

花嫁の装身具	134,000 ルピー	(34,000 ルピー分は母の装身具を売って相殺)
花嫁のサリー	12,000 ルピー	
スーツケース	2,000 ルピー	
メイク用品	約 500 ルピー	
合計	約 148,500 ルピー	

(聞き取りをもとに筆者作成)

付録9 バチャン

7つの誓約、女性から男性に

1	ああ、ご主人様。宗教行為をするときは、私を伴ってください。そうすれば私はあなたの半身となります。
2	祖先、および家の神を崇拝してください。そうすれば私はあなたのものになります。
3	ワンスの人間、および動物を大切に生育してください。
4	財産を増やす行為をするときは、私に意見を聞いてください。誰かを家に泊める時は、私に聞いてください。
5	寺院、庭園、井戸など、あなたが作ったものの管理をしてください。
6	どこかへ行くにしても、何かを売り買いするにしても、私に聞いてください。
7	あなたに欲求があっても、別の女の子を見ず、触らず、何もしないでください。
●	私が何か罪を犯したときは、実家の人や友人など誰かの前ではなく、2人きりのときに言うなり打つなりしてください。
●	1年に1回のラクシャバンダンの日だけ、夫に尋ねなくても兄弟のところへ行くことができる。

5つの誓約、男性から女性に

1	庭園、果樹園に行くときは、私に聞いてから、もしくは家族の誰かを連れて行くように。
2	ナシャ(<i>naśā</i> 、酒やマリファナなどの酩酊)をする人のいるところには行かないように。
3	実家に行く時は、呼ばれてから行くように。
4	もしあなたが私の言葉を守るなら、私はあなたの7つの制約を守ります。
5	貞操を守るように。
●	秘密をもつな、全部伝えるように。
●	私に嘘をつかないように。
●	私の宗教的行為を常に助けるように。
●	私の両親の世話をするように。
●	私の稼ぎから少しずつ貯めて、私の悪い時期にそれで助けるように。

(聞き取りをもとに筆者作成)

※ 数字がついたバチャンは、紙に書いてもらったもの、黒丸は、色々な人にバチャンの内容を聞いた時に挙げられたものである。

付録 10 ムーンディカーイーで花嫁が受け取ったもの

1	MZDH	足首輪
2	MZDH	足指輪
3	MZDH	
4	MZH	
5	MZH	足指輪
6	MFBDH	
7	FZ	足指輪
8	MBDH	キーホルダー
9	FMZDHB	
10	MB	宝石？
11	MB	金の鼻ピアス
12	MZH	足首輪
13	MZDHF	足首輪
14	パンディット	
15	FBDH	足指輪
16	父の友人	足指輪
17	MZHB	キーホルダー

(聞き取りをもとに筆者作成)

※ 品物の記入がない人は現金を渡した。11 の鼻ピアス以外、すべて銀製品。

付録 11 婚姻費用総計（概算）

バラート、マリッジハウス、50 人分の昼食、300 人分の食事、朝食	42,500 ルピー
マリッジハウスでの追加料理	1,630 ルピー
マリッジハウスに持ち込んだ野菜	6,390 ルピー
マリッジハウスに持ち込んだ乳製品	8,800 ルピー
製粉所(小麦や香辛料を挽いてもらった)	335 ルピー
花火(花婿行列の道中に使ったもの、人件費込み)	3,200 ルピー
テントハウス(布団 20、敷物 3、テント 1、椅子 10、ガス台 1)	3,190 ルピー
家の荷物(宿泊客のための食事、チャイ、おやつ、煙草、石鹼、洗剤、整髪油、その他必需品)	30,733 ルピー
家に飾ったライト	800 ルピー
イナム(仕事の対価として与える報酬)	8,952 ルピー
ティーカー儀礼のために、パンディットに揃えるよう言われた品物	2,500 ルピー
家の賃料(扉をつけてあげたことにより、大部分が相殺)	500 ルピー
ガス、シリンダー	6,500 ルピー
写真、ビデオ、カメラマン(友人に頼んだため割引料金)	10,000 ルピー
衣装代、贈り物	約 130,000 ルピー
ティーカーの日、マンダップの下で花婿側が使ったお金	約 9,300 ルピー
	合計約 265,300 ルピー

(聞き取りをもとに筆者作成)

以上、残ったレシートから計算できたのは、265,330 ルピーである。

その中には車のガソリン代は含まれていない。

他にネーグとして帰宅する親戚たちに数十ルピーずつをそれぞれ渡した。

当人たちの感覚では、300,000 から 350,000 ルピーくらいを使ったと言っている。